鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　13

平成８年度発掘調査報告

（第１分冊）

平成９年３月

鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群

下馬周辺遺跡

序　　文

鎌倉市教育委員会
教育長　米　倉　雄二郎

市街地の都市化・再開発が急速に進む近年、鎌倉の街は古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に対して影響のある工事も多くなっています。このため、本市では昭和59年度から、個人専用住宅等については、国・県の補助を受け教育委員会が直接発掘調査を行うようにしてきました。

郷土の文化財を守るということは、現在に生きる国民の責務といわれていますが、本市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に、市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様のご理解とご協力をお願い申しあげる次第です。また、工事計画の策定に当たっては、できるだけ早い時期から当委員会との協議を行い、文化財保護の方策をつめていって頂きたいと思います。

本書は平成８年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅・店舗併用住宅等に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするために少しでも役立つことを祈念するとともに、調査の実施に際してお世話になった調査員・事業者・工事関係者をはじめ多くの方々に、心からお礼申しあげます。

例　言

1　本書は平成８年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（２分冊）である。
2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び目次のとおりである。
3　現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
4　出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
5　各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総　目　次

（第１分冊）

序文……Ⅲ
例言……Ⅳ
平成８年度調査の概観……Ⅸ

１　天神山城（No. 384）山崎字宮廻760番地点
第一章　遺跡の概観 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 5
第二章　調査概略 …… 7
第１節　調査に至る経緯 …… 7
第２節　方眼設定方法…… 7
第３節　調査経緯 …… 9
第４節　堆積土層 …… 9
第三章　検出遺構と出土遺物 ……13
第１節　近世 ……13
第２節　中世 ……16
第３節　平安時代 ……23
第４節　古墳時代前期 ……26
第５節　その他の出土遺物 ……28
第四章　まとめ ……32
２　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）御成町788番３外地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……53
第二章　調査の概要 ……56
１．調査の経過 ……56
２．調査方法 ……56
３．測量軸の設定 ……56
第三章　検出遺構と出土遺物 ……59
１．層序と生活面 ……59
２．出土遺物の概要 ……59
３．一面の遺構と遺物 ……60
４．二面の遺構と遺物 ……62
５．三面の遺構と遺物 ……74
第四章　まとめ ……79

3　極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目320番１地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……102
第二章　基本層序 ……102
第三章　検出遺構・遺物 ……104
第四章　まとめ ……111
4　台山遺跡（No.29）台字西ノ台1627番地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……126
第二章　調査の経過と堆積土層 ……128
第三章　検出された遺構と出土遺物 ……130
第四章　まとめ ……133
5　材木座町屋遺跡（No.261）材木座三丁目364番１外地点
第一章　調査地点概観 ……145
１．位置と地勢 ……145
２．歴史的環境 ……147
第二章　調査の概略 ……149
１．調査にいたる経緯 ……149
２．方眼設定方法 ……149
３　調査の概要と経過 ……150
第三章　調査結果 ……151
第１節　概要 ……151
１．層序と遺構面の概略 ……151
２．出土遺物の概要 ……151
第２節　検出遺構と出土遺物 ……151
１．井戸 ……151
２．竪穴建物 ……151
３．礫集中部 ……156
４．方形土壙 ……156
５．土壙 ……156
６．柱穴様小落ち込み ……166
７．包含層その他からの出土遺物 ……168
第四章　まとめ ……184
6　永福寺跡（No.61）二階堂字獅子舞603番１地点
第一章　調査の経過 ……204
第１節　遺跡の位置と歴史的環境 ……204
第２節　調査地の設定 ……206
第３節　層序 ……206
第二章　検出された遺構 ……206
第１面 ……206
第２面 ……207

第３面 ……207
第三章　出土した遺物 ……211
第１面 ……211
第２面 ……211
第３面 ……211
第四章　まとめ ……217

（第２分冊）

7　極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目355番３地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 6
第二章　検出遺構・出土遺物 …… 9
第三章　調査所見 ……11
8　建長寺旧境内遺跡（No.397）山ノ内字白黒小路1489番１外地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……22
第二章　調査の経過 ……25
第三章　検出された遺構と遺物 ……26
第１節　試掘出土遺物 ……26
第２節　１．２次掘り下げ時出土遺物 ……26
第３節　１面検出の遺構と出土遺物 ……29
第４節　１面包含層出土遺物 ……33
第５節　２面検出の遺構と出土遺物 ……34
第６節　２面上包含層出土遺物 ……39
第７節　トレンチ調査 ……40
第四章　まとめ ……52
9　十二所稲荷小路遺跡（No.321）十二所字宇佐小路740番２外地点
第一章　地理的・歴史的環境 ……64
第二章　調査の概要 ……65
第三章　検出遺構 ……66
第四章　出土遺物 ……68
第五章　まとめ ……70
10　若宮大路周辺遺跡群（No.242）由比ガ浜一丁目118番７地点
第一章　遺跡の歴史・地理的環境 ……87
第二章　調査の経過と基本層序 ……89
Ⅰ　調査の経過 ……89
Ⅱ　基本層序 ……90
第三章　検出した遺構と出土した遺物 ……92
Ⅰ　方形竪穴建築址 ……92

Ⅱ　大形土壙状　遺構……97
Ⅲ　土壙　……101
Ⅳ　井戸址　……110
Ⅴ　遺物包含層中出土遺物（中世）　……110
Ⅵ　遺物包含層中出土遺物（近・現代）　……113
Ⅶ　中世基盤層直上出土遺物　……113
Ⅷ　表採遺物　……113
Ⅸ　自然遺物　……114
第四章　まとめ　……115
11　下馬周辺遺跡（No.200）由比ガ浜二丁目107番１地点
第一章　環境と立地　……145
Ⅰ　歴史的環境　……145
Ⅱ　地理的環境　……147
第二章　調査の概要　……149
Ⅰ　調査の経緯と経過　……149
Ⅱ　調査の方法　……149
Ⅲ　調査結果の概要　……150
Ⅳ　堆積土層　……150
第三章　検出された遺構と遺物　……152
・１面の遺構と遺物　……152
・２面の遺構と遺物　……154
・３面の遺構と遺物　……158
・土壙40構造部材計測表について　……166
・他遺構外等出土遺物　……174
第四章　まとめ　……179
附　編　下馬周辺遺跡の花粉化石　……180
12　宇津宮辻子幕府跡（No.239）小町二丁目361番１地点
第一章　調査地点概観　……214
位置　……214
歴史的環境について　……214
宇津宮辻子幕府跡の調査事例　……215
第二章　調査の概要　……217
調査経過とグリット設定　……217
調査概要　……217
第三章　検出した遺構・遺物　……224
第四章　まとめ　……237
附　編　宇津宮辻子幕府跡の花粉化石　……240

平成８年度調査の概観

平成８年度の緊急調査実施件数は前年度からの継続を含め、19件で、対象面積は1,252.93㎡であった。前年度の13件、1,099㎡と比較し件数、面積ともに増加しており、いわゆるバブル経済崩壊後では、件数、面積とも最も多いものであった。

調査原因の内訳は、専用住宅建設と店舗併用住宅に関するものが各７件で調査原因の過半を占め、他には診療所併用住宅及び専用住宅に係る車庫造成が各２件、共同住宅併用個人住宅が１件であった。

専用住宅に関するもののうち、土地の有効利用を図るため地下室を設置しようとするものが３件、耐震性を考慮して地盤改良を行おうとするものが３件あり、このような調査原因による発掘調査は今後も増加していくものと予測される。

本年度は若宮大路周辺の調査例が多く、大路の東側で３ヶ所、西側で２ヶ所の調査が実施された。いずれも大路の側溝及びその周辺の遺構が検出され、大路・側溝の構造、及び大路周辺の都市像の把握に寄与する多くの資料が得られた。特に後述４の北条時房・顕時邸跡で発見された大路と直行する道路と側溝に架かる橋の発見は注目されるものである。また、11の北条小町邸跡からは若宮大路側溝造営に係る木簡も出土している。他に円覚寺旧境内遺跡において同寺の創建に合わせ前面の河川の付け替えが行われたことが判明したこと、大倉幕府周辺遺跡群において弥生時代の大規模な集落址が確認されたことなどが本年度の特記事項としてあげられる。以下各地点の調査に至る経過と調査成果の概要を紹介する。

１　名越ヶ谷遺跡（No. 231）

名越大谷の中央部、花ヶ谷東側の山裾に位置する。調査地は逆さ川の南岸、川から３ｍ程高い平地で、調査地前面で大谷に入ってきた道が釈迦堂切通（トンネル）に向かう道と谷奥から名越切通に向かう道とに分岐している。平成７年９月、自己用住宅に係る車庫造成の事前相談があり、掘削深度が深いため試掘調査を実施したところ、地表下80cm以下に地業層が確認された。このため、事業者と協議し、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成８年２月15日から７月１日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、工事掘削深度までの深さに13世紀末から14世紀中頃にかけて８面におよぶ生活面が確認され、掘立柱建物、板壁掘立柱建物、井戸などが検出された。なお、第８面の下にも包含層があることが確認されたが、工事による掘削が及ばないため、調査の対象外とした。

２　宇津宮辻子幕府跡（No. 239）

若宮大路の東側、二ノ鳥居から180ｍほど鶴岡八幡宮寄りに位置する。平成７年２月診療所併用住宅建築の事前相談があり、鉄筋コンクリート造５階建てのクイ基礎の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下75cm以下に遺構面が確認された。これにより工事の実施による遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、事業計画が整った後、自己用住宅区域を対象として平成８年３月18日から４月９日にかけて発掘調査を実施した。

調査地は水田耕作による削平を受けて遺存状態は良好ではなかったが、13世紀から14世紀にかけての若宮大路東側側溝とそれに伴う塀跡、土壙などが検出された。

3　米町遺跡（No. 245）

鎌倉中心部の平地の南寄り、大町四ツ角の南側、逆さ川の南岸の砂丘の北側斜面に位置する。平成７年11月に自己用店舗併用住宅の事前相談があり、掘削深度が深いため試掘調査を実施したところ、地表下30cm以下に遺構面が確認された。このため、事業者と協議したが設計変更等が不可能であり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、事業計画が整った後、平成８年３月19日から７月１日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、方形竪穴建築址、板壁掘立柱建物、井戸、据え甕遺構等が検出された。このうち２棟の方形竪穴建築址の床面からは銭がまとまって出土しており、本遺跡の性格を暗示するものかもしれないと考えられる。

4　北条時房・顕時邸跡（No. 278）

若宮大路の西側、鶴岡八幡宮から南に約200ｍの位置に所在する。平成７年３月に店舗併用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であり、隣地の発掘調査の結果から工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として、平成８年４月15日から７月22日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、中世若宮大路の西側側溝が検出され、３回の造り直しが確認された。また、大路と直行する土丹敷きの道路が検出され、道路が側溝と接続する部分に側溝に架かる橋脚の礎板が発見されている。さらに、この道路と側溝に沿ってＬ字状に並ぶ塀の柱穴が、また、その塀に囲まれた敷地に掘立柱建物跡が検出されている。中世遺構面の下に平安時代中期の生活面が確認され、溝や柱穴が検出されているが、若宮大路とは全く方位が異なっていた。

5　北条小町邸跡（No. 282）

若宮大路の東側、鶴岡八幡宮から南に約150ｍの位置に所在する。平成７年12月に店舗併用住宅の事前相談があり、基礎掘削が深いところから、隣地の発掘調査の結果により工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し文化財保護法の手続きを経て、自己用区域を対象として、平成８年４月22日から５月14日までの間発掘調査を実施した。

調査により、近世若宮大路とその側溝及び中世若宮大路東側側溝等が検出されている。中世の側溝は何回かの造り直しが認められ、その変遷が把握できるものである。また、基礎掘削より下は遺跡が残されるため、調査の対象外とした。

6　佐助ヶ谷遺跡（No. 203）

鎌倉駅の西方、佐助ヶ谷の開口部に位置する。平成７年12月に専用住宅建設の事前相談があり、地下室を作る設計であるため、本来であれば試掘調査を実施して協議するところであるが、後述８の事前相談に伴う試掘調査を西隣地で実施しており、その結果地表下70cm以下に遺構面が確認されていたので、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し、文化財保護法の手続きを行い、平成８年５月20日から８月５日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀中頃から15世紀前半にかけて５期にわたる生活面が確認され、井戸、溝、柱

穴などが検出されている。井戸からは人の頭蓋骨が発見された。西隣の調査地と比べ遺構の密度が低く、明確な建物の跡も検出されなかったことから、隣地で検出された建物の裏手の部分と考えられる。

7　円覚寺旧境内遺跡（No. 434）

円覚寺門前の北側、小袋谷川の東に位置する。平成８年２月に専用住宅の事前相談があり、地盤改良のクイ基礎計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下60cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成８年５月24日から７月13日まで発掘調査を実施した。

調査により、円覚寺創建以前の埋没河川と創建後から14世紀前半にかけての生活面が検出された。このことから、円覚寺創建に伴い小袋谷川の流れが改修されたことが確認された。また、創建後から14世紀前半にかけての生活面から検出された掘立柱建物は瓦や磚を礎板に転用しており、雑舎等円覚寺に関連した遺構と考えられる。

8　佐助ヶ谷遺跡（No. 203）

前述６の調査地の西隣に位置する。平成７年11月に専用住宅建設の事前相談があり、地下室を作る設計であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺構面が確認され、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整った後、平成８年６月10日から８月５日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀中頃から15世紀前半にかけて６期にわたる生活面が確認された。掘立柱建物・板囲い建物等多くの遺構が検出され、かなりの規模を持つ屋敷、もしくは寺院の一部ではないかと考えられる。出土遺物も多く、６の調査地の遺物と接合できるものもあり、両者が同一の遺跡であることを物語っている。

9　極楽寺旧境内遺跡（No. 291）

江ノ電極楽寺駅から西南方向約300ｍの月影ヶ谷に位置する。平成７年10月に専用住宅建設の事前相談があり、地下室を作る設計であったため試掘調査を実施したところ、地表下110cm以下に遺構面が確認された。事業者と協議したところ、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整った後、平成８年６月17日から８月６日までの間発掘調査を実施した。

調査により、14世紀中頃から15世紀代にかけて３時期の土丹地業面を確認し、礎石建物、掘立柱建物等を検出した。

10　大倉幕府周辺遺跡群（No. 49）

大倉幕府の前面、金沢道の南側の滑川北岸段丘上に位置する。平成８年１月に共同住宅併用個人専用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺構面が確認された。事業者と協議したところ、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、自己

用区域を対象として、平成８年８月１日から12月５日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、中世金沢道に沿った屋敷地が確認され、金沢道と道の南側側溝及び掘立柱建物、溝、柵列、井戸等が検出された。また、中世遺構面の下には弥生時代中期から後期にかけての集落があり、竪穴住居址13軒が検出されている。

11　北条小町邸跡（No.282）

若宮大路の東側、鶴岡八幡宮から南に約170ｍの位置に所在する。平成７年12月に店舗併用住宅の事前相談があった。クイ基礎の計画であり、隣地の発掘調査の結果により工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整った後、自己用区域を対象として、平成８年８月12日から10月11日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、鎌倉時代前期の若宮大路と平行する溝、鎌倉時代中期から後期の数時期の若宮大路東側の側溝が良好な状態で検出され、大路及び側溝の構造と変遷が把握された。また、大路側溝からは普請に伴い幕府が御家人たちに課役したことを示す木簡も出土している。

12　横小路周辺遺跡（No. 259）

岐れ道の東、滑川の北岸に位置する。平成８年６月に専用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下60cm以下に埋蔵文化財が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであったため、文化財保護法の手続きを行い、平成８年９月６日から９月20日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の生活面が確認されたが、遺構は希薄で、滑川に向かって下がる傾斜地であったことが判明した。

13　長谷小路周辺遺跡（No. 236）

江ノ電由比ガ浜駅の北側に位置する。当該地は平成２年度に開発計画に基づき発掘調査が実施されているが、事業が中断し、平成８年９月に新事業者による診療所併用住宅建築の事前相談があった。クイ基礎の計画であり、前回の調査の範囲外に及ぶものであったので、その部分については遺構の損傷が避けられず、文化財保護法の手続きを行い、自己用区域を対象として、平成８年10月28日から11月19日までの間発掘調査を実施した。

調査は前回調査の範囲外４ヶ所に分かれ、いずれも小面積であった。発見された中世の遺構は前回の調査でその一部が検出されていた方形竪穴建築址、道路、溝等の続きであった。一方、中世遺構面の下からは前回確認できなかった古代の竪穴住居址が確認された。

14　円覚寺門前遺跡（No. 287）

北鎌倉駅の北西側約150ｍ、小袋谷川沿いの西側に位置する。平成８年８月に専用住宅の事前相談があり、地盤改良のクイ基礎計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下100cm以下に埋蔵文化財が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成８年11月６日から11月29日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の遺跡は攪乱が多く、若干の土壙と一部包含層を確認したにとどまった。また、下層の調査により、前面の小袋谷川が中世以前はもっと西側を流れており、弥生時代以降に流れを変え、現在の位置になったことが、出土遺物及び土層観察の結果判明した。

15　明王院門前遺跡（No. 440）

市域の東部、十二所の六浦道の南側に位置する。平成８年７月、自己用住宅に係る車庫造成の事前相談があり、掘削深度が深いため試掘調査を実施したところ、地表下50cm以下に遺構面が確認された。このため、事業者と協議し、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、事業者の準備が整った後、平成８年11月28日から９年１月10日まで発掘調査を実施した。

調査対象地は狭小であったが、工事掘削深度までの深さに13世紀末から14世紀にかけて造成された数枚の地業面が確認され、それに伴う掘立柱建物跡やかわらけ溜まりが検出された。なお、工事掘削深度以下にも包含層が続くことが確認されたが、工事による掘削が及ばないため、調査の対象外とした。

16　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

鎌倉市街地の中心部小町二丁目の扇ガ谷川の東に面して位置する。平成８年６月に店舗併用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下120cm以下に埋蔵文化財が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、事業者の準備が整った後、自己用区域を対象として、平成８年12月21日から９年１月27日までの間発掘調査を実施した。

調査対象地は狭小であったが、14世紀代の生活面を確認し、柱穴列や土壙が検出されている。

17　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

鎌倉駅の西隣、若宮大路を中心として大きく広がる当該遺跡の西端近くに位置する。平成８年11月に店舗併用住宅の事前相談があり、地下室を設置する計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下80cm以下に遺構面が確認された。このため、事業者と協議したところ、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として平成９年３月10日から発掘調査に着手した。

18　北条時房・顕時邸跡（No. 278）

若宮大路の西側、鶴岡八幡宮から南に約220mの位置に所在する。平成８年１月に店舗併用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であり、隣地の発掘調査の結果から工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として平成９年３月12日から発掘調査に着手した。

19　宝蓮寺跡（No. 374）

鎌倉駅の西方、佐助ヶ谷の奥の一支谷に位置する。平成８年12月に専用住宅建設の事前相談があり、地盤改良のクイ基礎計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成９年３月17日から発掘調査に着手した。

平成８年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
1	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目1736番２外	個人専用住宅（車庫造成）	都市	182.00㎡	H8.02.15 ～07.01
2	宇津宮辻子幕府跡 (No.239)	小町二丁目361番１外	診療所併用住宅	官衙	31.00㎡	H8.03.18 ～04.09
3	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目391番１	店舗併用住宅	都市	140.00㎡	H8.03.19 ～07.01
4	北条時房・顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目272番	店舗併用住宅	城館	110.00㎡	H8.04.15 ～07.22
5	北条小町邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目370番１	店舗併用住宅	城館	68.00㎡	H8.04.22 ～05.14
6	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目450番24	個人専用住宅	都市	80.06㎡	H8.05.20 ～08.05
7	円覚寺旧境内遺跡 (No.434)	山ノ内字瑞鹿山509番１の一部	個人専用住宅	社寺	59.52㎡	H8.05.24 ～07.13
8	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目450番25、27	個人専用住宅	都市	61.56㎡	H8.06.10 ～08.05
9	極楽寺旧境内遺跡 (No.291)	極楽寺三丁目348番２	個人専用住宅	社寺	30.45㎡	H8.06.17 ～08.06
10	大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)	雪ノ下四丁目620番５	共同住宅併用個人専用住宅	都市	126.29㎡	H8.08.01 ～12.05
11	北条小町邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目369番１	店舗併用住宅	城館	45.43㎡	H8.08.12 ～10.11

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
12	横小路周辺遺跡 (No.259)	雪ノ下五丁目557番1	個人専用住宅 (二世帯)	都市	18.00㎡	H8.09.06 ～09.20
13	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比ガ浜三丁目228番2の 一部外2	診療所併用 住宅	都市	11.45㎡	H8.10.28 ～11.19
14	円覚寺門前遺跡 (No.287)	山ノ内字藤源治951番2	個人専用住宅	都市	63.62㎡	H8.11.06 ～11.29
15	明王院門前遺跡 (No.440)	十二所字積善952番6	個人専用住宅 (車庫造成)	都市	12.00㎡	H8.11.28 ～9.01.10
16	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目28番3、5	店舗併用住宅	都市	9.13㎡	H8.12.21 ～9.01.27
17	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	御成町123番5	店舗併用住宅	都市	46.40㎡	H9.03.10 ～05.20
18	北条時房・顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目273番イ	店舗併用住宅	城館	94.82㎡	H9.03.12 ～06.19
19	宝蓮寺跡 (No.374)	佐助二丁目897番11	個人専用住宅	社寺	63.20㎡	H9.03.17 ～04.30

本誌所収の平成７年度調査地点一覧

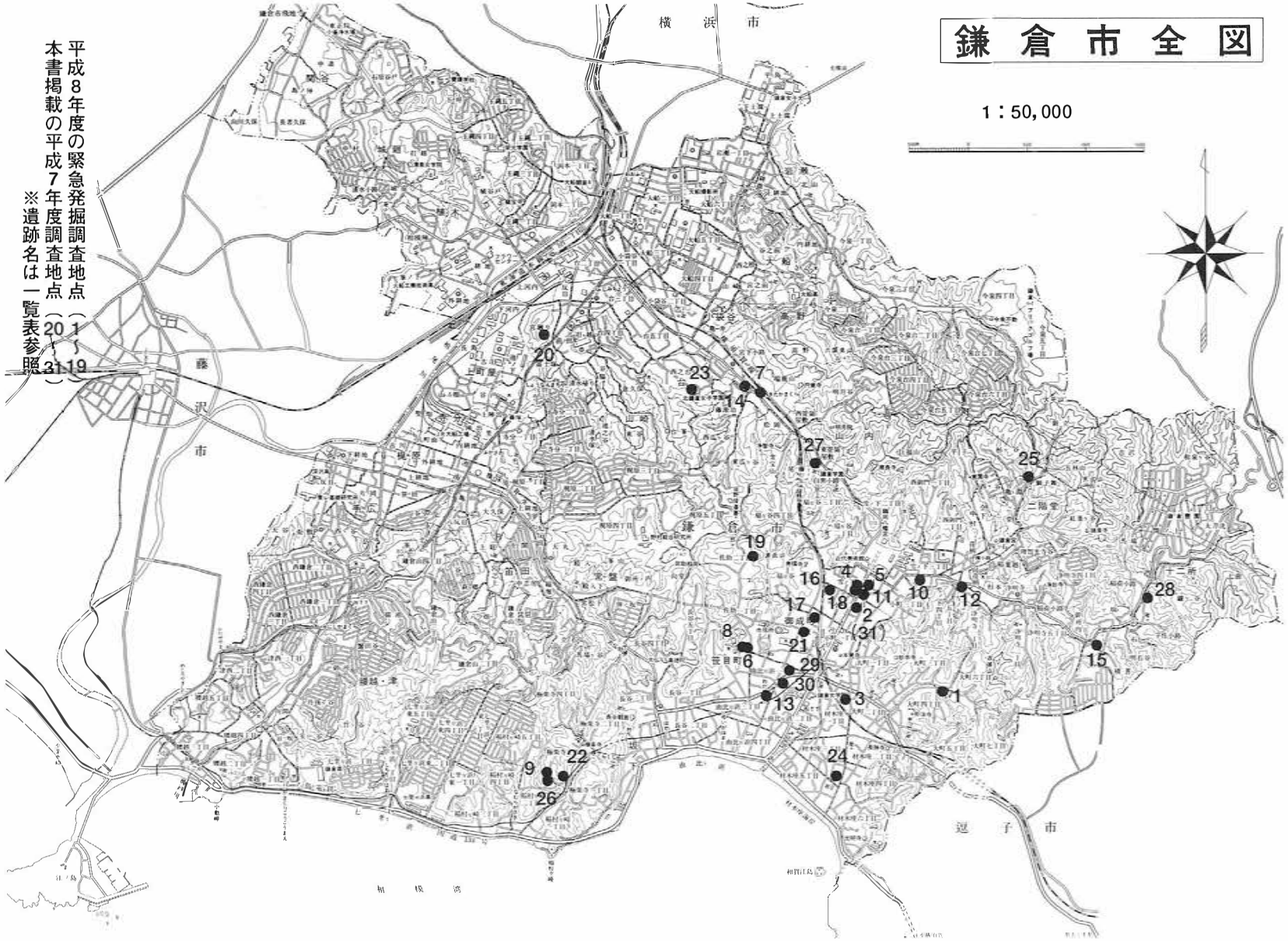
（調査実施順）

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
20	天神山城 (No.384)	山崎字宮廻760番	集合住宅 （専用住宅）	城郭 散布地	120㎡	H7.02.13 ～08.31
21	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	御成町788番３外	店舗併用住宅	都市	68㎡	H7.03.09 ～04.15
22	極楽寺旧境内遺跡 (No.291)	極楽寺三丁目320番１	個人専用住宅	社寺	100㎡	H7.06.12 ～06.30
23	台山遺跡 (No.29)	台字西ノ台1627番	個人専用住宅 （車庫造成）	集落跡	56㎡	H7.06.19 ～07.06
24	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座三丁目364番１外	個人専用住宅	都市	100㎡	H7.06.19 ～07.29
25	永福寺跡 (No.61)	二階堂字獅子舞603番１	宅地造成・ 個人専用住宅	社寺	128㎡	H7.07.07 ～09.22
26	極楽寺旧境内遺跡 (No.291)	極楽寺三丁目355番３	個人専用住宅 （車庫造成）	社寺	30㎡	H7.07.19 ～08.02
27	建長寺旧境内遺跡 (No.397)	山ノ内字白黒小路1489番１外	個人専用住宅	社寺	107㎡	H7.07.20 ～09.13
28	十二所稲荷小路遺跡 (No.321)	十二所字宇佐小路740番２外	個人専用住宅	都市	54㎡	H7.08.04 ～08.26
29	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	由比ガ浜一丁目118番７	個人専用住宅 （車庫造成）	都市	15㎡	H7.12.18 ～12.29
30	下馬周辺遺跡 (No.200)	由比ガ浜二丁目107番１	店舗併用住宅	都市	40㎡	H7.12.11 ～8.1.14
31 ※	宇津宮辻子幕府跡 (No.239)	小町二丁目361番１	診療所併用 住宅	官衙	30㎡	H8.03.18 ～04.09

※は８年度に調査が継続した地点

鎌倉市全図

1：50,000



平成8年度の緊急発掘調査地点（1～19）
本書掲載の平成7年度調査地点（20～31）
※遺跡名は一覧表参照

天神山城（てんじんやまじょう）（No. 384）

山崎字宮廻760番地点

例　　言

1．本報は鎌倉市山崎字宮廻760番における埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる自己用住宅部分の報告である。

2．発掘調査は共同住宅建設に伴う原因者負担事業分と並行して行われた。遺跡の全発掘調査期間は平成７年１月６日から平成８年２月５日までであり、国庫補助事業分は平成７年２月13日から８月31日まで行われた。

3．本報告は全調査面積2180㎡のうち、国庫補助事業分に関わる120㎡分の調査報告である。そのためこれに含まれる遺構、遺物については記載したが、国庫調査区外になる部分の整理作業はまだ途上である。そのため全調査面積分の報告書作成の際には今回掲載した出土遺物以外に同一遺構において実測遺物の数量が増すであろうことをお断りしておく。

4．国庫調査区は二分されるため、北側のものをＡ区、東側のものをＢ区と称する。

5．発掘調査団の構成は以下のとおりである。

調査担当者　田代郁夫

調　査　員　松山敬一朗　浜野洋一　土屋浩美

調査補助員　渡辺王夫　高橋健一郎　岩崎卓治　本田礼　橋本勝正　小川婦美子　小針恵子　小屋抄子　島雄幸　高山章子　武田典子　水戸裕子　上田求実　森かお里　犬塚知孝

調査協力　杉沢　博　安田ヒデ　青木綾子　稲山千恵子　荒井ソノ　石井ちず子　岩田節子　蒲谷由利子　成田サキ　根本公　安田信男　川村四志男　福本寿夫　管野五郎　鈴木英次　安藤種夫　赤木泰彦　出川清次　沼上三代治　吉本脩三　藤枝政義　岸親男　池田義春　田口豊　村田浩通

6．本書の第２章２節を浜野洋一が執筆し、その他の項の執筆および編集作業を松山敬一朗が行った。遺物実測、トレース、図版作成を松山敬一朗、深尾義子、早野慈子、鈴木瑩美、佐藤節子、小屋抄子、笠原さやかが行った。

7．中世遺構全景写真は木村美代治（鎌倉考古学研究所）がリモコン式高所撮影装置を用いて撮影した。その他の遺構写真は松山敬一朗が撮影した。遺物写真の撮影は上田求実が行った。

8．発掘調査及び報告書作成に際しては下記の方々よりご教示、ご協力を賜った。記して深く感謝致します。

上田薫（神奈川県教育委員会）、大上周三、服部実喜、高村公之（かながわ考古学財団）、松尾宣方、玉林美男、永井正憲、小林康幸（鎌倉市教育委員会）、大三輪龍彦（鶴見大学教授）、手塚直樹、河野真知郎、斉木秀夫、宮田　真、宗臺秀明、大河内勉、福田　誠、原　廣志、木村美代治、宗臺富貴子、菊川英政、汐見一夫（鎌倉考古学研究所）、桜井準也（慶応義塾大学助教授）、岡本直久、河合君近（瀬戸市埋蔵文化財センター）、荒川正夫（早稲田大学本庄考古学資料館）、中三川昇（横須賀市教育委員会）、大塚真弘（横須賀市人文博物館）、佐藤仁彦（逗子市教育委員会）、鎌倉市高齢者事業団、藤和不動産、大成建設、都実業、湘和総合開発

火山灰分析及び地形、地質についてのご教示を上本進二（県立旭高校）にいただいた。

現地発掘調査、整理作業に関して沢田大多郎（日本大学講師）に多大のご協力をいただいた。

目　　次

第一章　遺跡の概観……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5

第二章　調査概略……7
　第１節　調査に至る経緯……7
　第２節　方眼設定方法……7
　第３節　調査経過……9
　第４節　堆積土層……9

第三章　検出遺構と出土遺物……13
　第１節　近世……13
　第２節　中世……16
　第３節　平安時代……23
　第４節　古墳時代前期……26
　第５節　その他の出土遺物……28

第四章　まとめ……32

挿　図　目　次

図１　遺跡位置図……6
図２　調査地点と周辺遺跡……7
図３　地理的位置図……8
図４　堆積土層……10
図５　調査区全測図……11
図６　近世遺構配置図……13
図７　水田址および６号溝状遺構……14
図８　５号溝状遺構……15
図９　炭焼窯……15
図10　中世遺構配置図……16
図11　池状遺構……18
図12　池状遺構（等高線配置図）……19
図13　池状遺構出土遺物……20
図14　７号・８号溝状遺構および
　　１号・２号道路状遺構……21
図15　８号溝状遺構出土遺物……21
図16　地業面および１号掘立柱建物址……22
図17　１号土坑……22
図18　平安時代および古墳時代前期遺構配置図……23
図19　16号・17号溝状遺構、同出土遺物……24
図20　18号溝状遺構……25
図21　216号土坑、同出土遺物……25
図22　１号土器溜り出土遺物……26
図23　２号土器溜り……26
図24　２号土器溜り出土遺物……27
図25　215号土坑……27
図26　３号土器溜り……28
図27　３号土器溜り出土遺物……29
図28　その他の出土遺物……30
図29　瓦……31

表　目　次

表１　１号道路状遺構周辺ピット観察表……21
表２　１号掘立柱建物址柱穴観察表……22
表３　出土遺物観察表……33

図　版　目　次

図版１　１．調査前状況　　２．堆積土層（水田址・池状遺構）
　　３．Ａ区・Ｂ区近世全景……39
図版２　１．５号溝状遺構　２．炭焼窯　３．炭焼窯煙道部……40
図版３　１．Ａ区・Ｂ区中世全景　２．池状遺構……41
図版４　１．池状遺構　２．１号掘立柱建物址……42
図版５　１．Ａ区・Ｂ区古代全景　２．16、17号溝状遺構……43
図版６　１．２号土器溜り　　２．216号土坑　３．３号土器溜り……44
図版７　出土遺物　池状遺構・８、16、17号溝状遺構・216号土坑……45
図版８　出土遺物　１、２、３号土器溜り……46
図版９　出土遺物　その他の出土遺物・瓦……47

第一章　遺跡の概観

第１節　地理的環境

天神山城遺跡は鎌倉市山崎字宮廻760番に所在する。本遺跡は鎌倉市の北西部にあたり、ＪＲ大船駅から南西へ約1.5kmの地点にある。三浦半島の付け根部分にあたる鎌倉市域には半島から続く広範囲な、侵食の進んだ丘陵地帯が占めており、低地部は旧市街地を流れる滑川流域と、市北西部を流れる柏尾川流域にほぼ限定される。遺跡は丘陵地帯の北西先端部、標高約63ｍの天神山の南東部にあたる。この天神山は現在は市道及び京浜急行モノレールにより分断されているため独立した丘陵のように見え、柏尾川左岸に広がる沖積地に突き出る形となっている。調査地点から柏尾川までは約500ｍの距離にある。天神山の東側には幅、奥行きともに約300ｍの比較的大きな谷戸が形成されており、調査地点はこの谷戸の南西隅の幅約80ｍ、奥行き120ｍの小支谷に立地している。正確には調査地点はこの小支谷内の東側半分とその前面部の一部である。調査区は南北に標高約30ｍの尾根、西側に天神山東側斜面に三方を囲まれる形となっている。

調査地点の標高は、沖積地から連なっている東端で約13ｍ、西端で約17.5ｍを測る。

第２節　歴史的環境

遺跡は遺物散布地として早くから周知されている。『鎌倉市史』考古編によれば天神山山上で縄文時代早期の遺物が採集されている。また天神山の北東山裾では古墳時代後期の祭祀関連と考えられる多量の遺物が採集されている(1)。周辺にも幾つかの遺跡が存在しているが、その大部分は天神山の南東側一帯に広がる丘陵地帯のものである。遺跡の南側の富士塚一帯は、縄文時代の集落が存在したと言われ、この南側で現在調査中の寺分富士塚遺跡でも山上から縄文時代の土器片が検出されている。そして時代は下るが、遺跡の南東約400ｍには山崎横穴墓群、約600ｍの地点には垣根谷横穴墓群が存在し、遺跡から約1.5km東の台峰一帯にも同時期の集落が存在していたようである(2)。遺跡周辺での発掘調査事例は殆ど行われていなかったが、近年になって数箇所で発掘調査が行われている。『倉久保遺跡』は遺跡の南東約400ｍの地点で、奈良時代前半の住居址１軒と古墳時代前期の住居址５軒が検出された(3)。『水道山遺跡』は遺跡から東へ約800ｍの丘陵上にあり、ここでは平安時代後期の住居址12軒が検出された。前述した台峰地区でも４箇所の調査が行われており、弥生時代から平安時代に及ぶ住居址が検出されている。なお、天神山の南西側山裾部でも調査が行われているが、少量の土師器片が検出されたにとどまり、遺構は検出されていない(4)。

調査区南隣の小支谷には14世紀中葉に開かれたとされる宝積寺という禅宗寺院が存在したと言われている。天神山の山上にある北野天神社はかっての宝積寺の鎮守であったとも言われており、境内には応永12年銘の宝篋印塔が遺存している。

(1)菊川英政「天神山採集の古墳時代後期土器」『鎌倉考古』No.33　1995.

(2)「台山藤源治遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』１，４，８　1985，1988，1992

(3)「倉久保遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12　1995.

(4)「山崎天神山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10　1993.

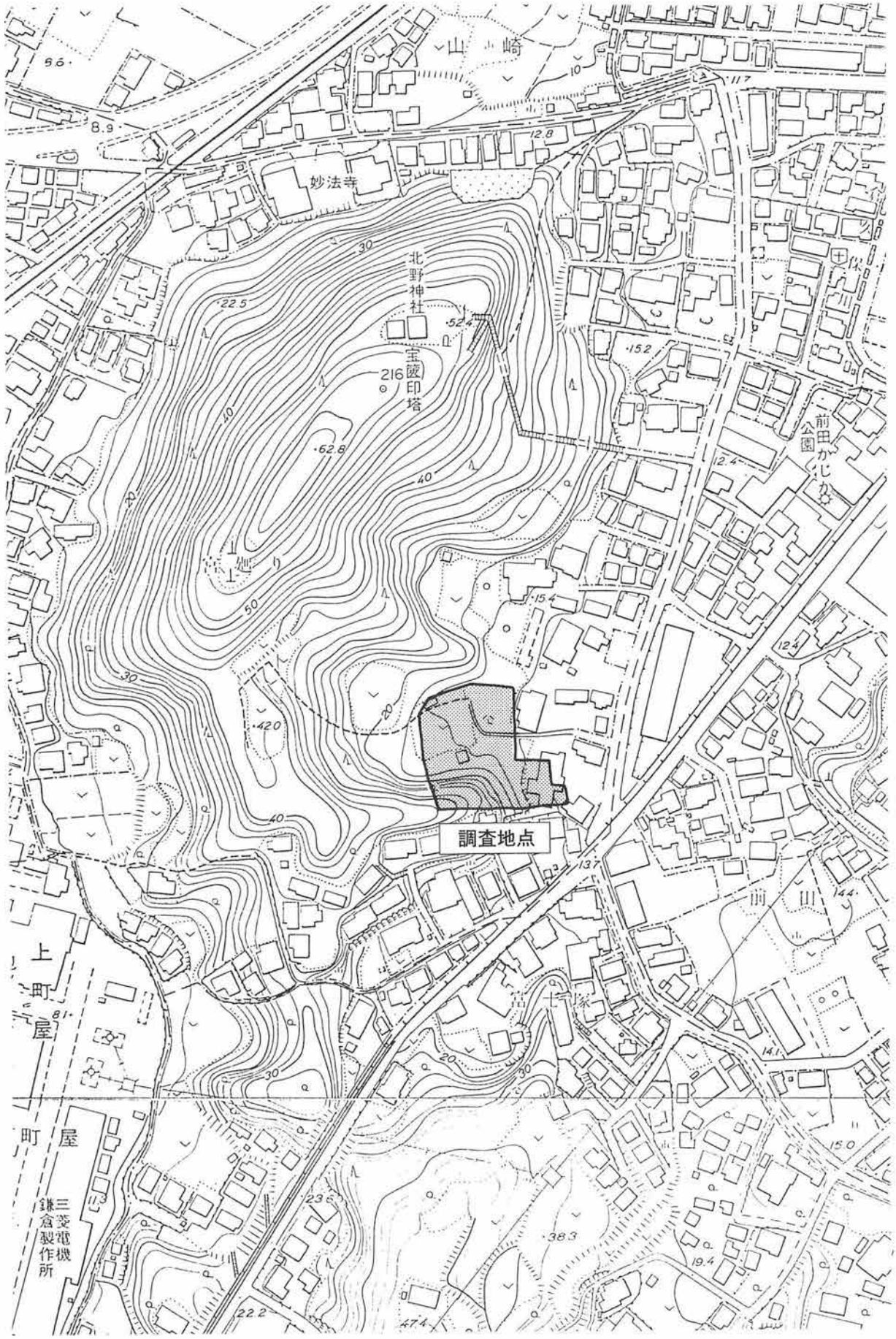


図1　遺跡位置図（1：2500）

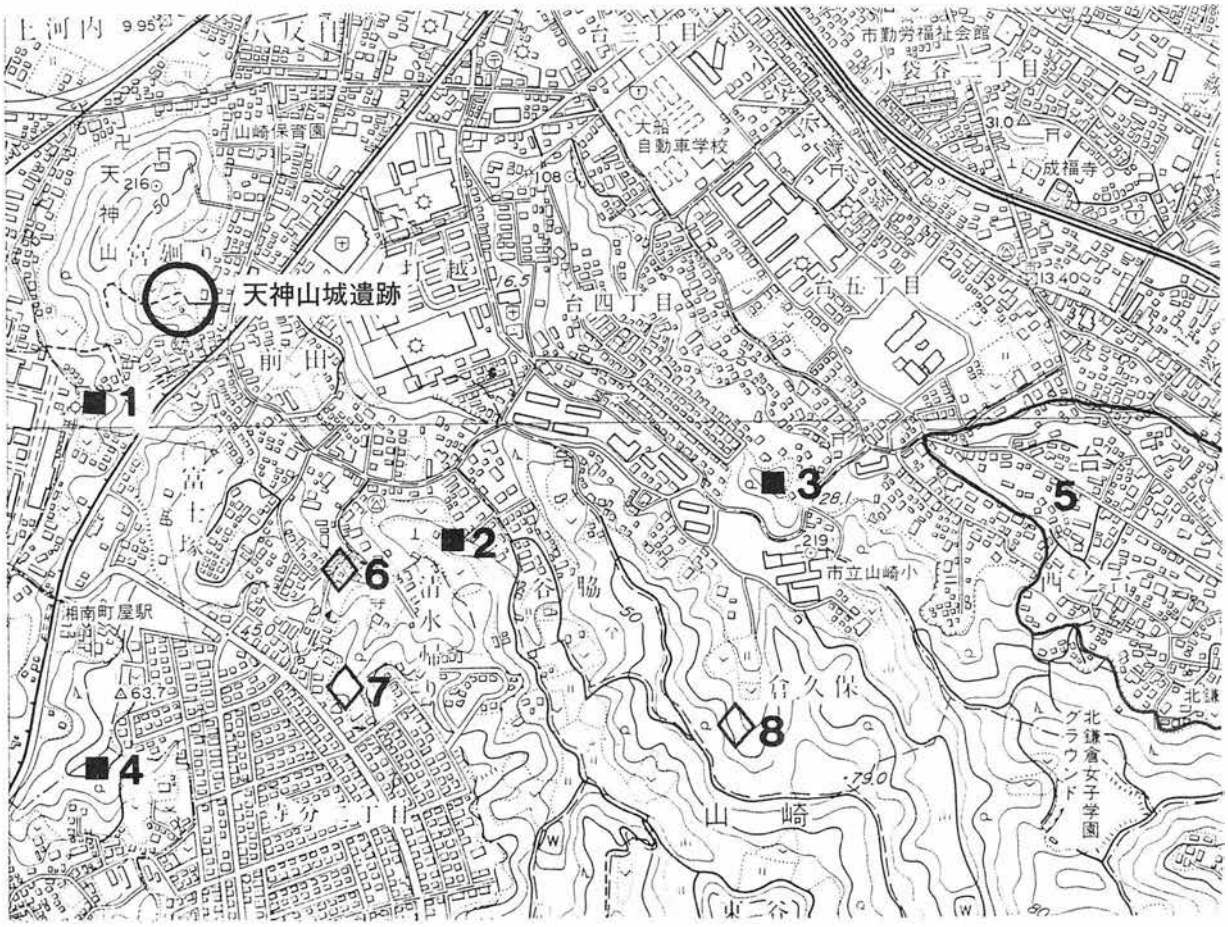


図２　調査地点と周辺遺跡（１：20000）

１．山崎天神山遺跡(1993年調査) ２．倉久保遺跡(1994年調査) ３．水道山遺跡(1995年調査) ４．寺分富士塚遺跡(1996年調査)
５．台山藤源治遺跡(1985, 1988, 1992年調査) ６．山崎横穴墓群　７．垣根谷横穴群　８．倉久保横穴群

第二章　調査概略

第１節　調査に至る経緯

平成５年９月、共同住宅建設等を含めた開発申請に伴う事前相談があり、このため鎌倉市教育委員会が試掘調査を実施した。この結果表土下約60cmに遺物包含層、その下層に中世期の溝状遺構を始めとする遺構の存在を確認した。事業者と鎌倉市の協議を経て、平成７年１月６日より平成８年２月５日まで発掘調査が実施された。調査面積は2180㎡であるが、これには自己用住宅部分約120㎡が含まれており、この部分は国庫補助事業分として平成７年２月13日より８月31日まで調査が行われた。

第２節　方眼設定方法（図３）

調査区の形状に照らして全域に４ｍメッシュを設定した。当調査地点において、地理学的な位置データを明確にするためにトラバース測量による基準点移動作業を行い、調査区のほぼ中央に位置する［Ｉ－６グリッド］杭に国土座標地、及び地理学的緯度経度の算出を試みている。成果は以下のとおりである。

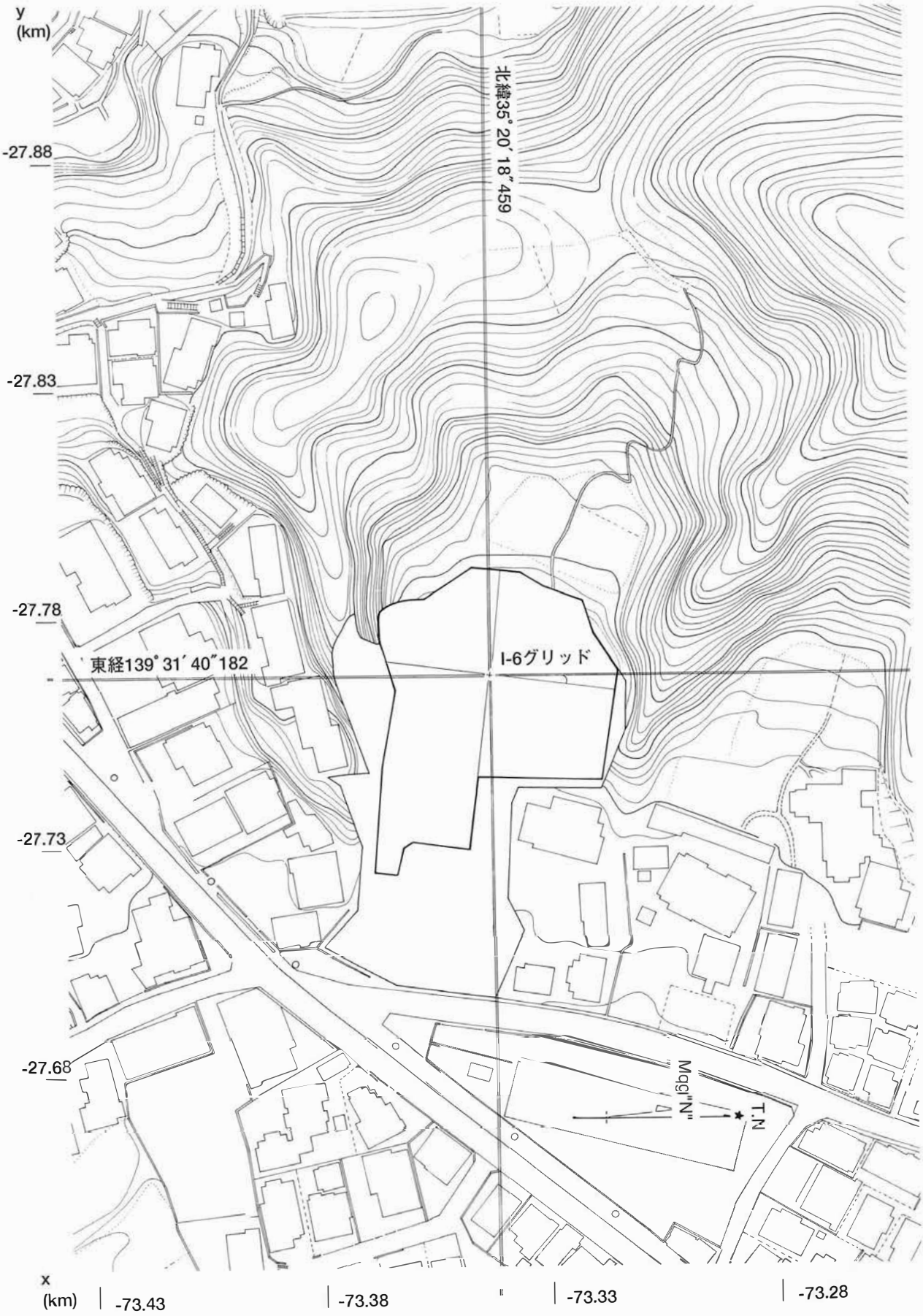


図３　地理的位置図（１：12000）

国土座標地（第９座標系）　X－70448.061　　Y－35380.541

地理学的緯経度　　北緯35度21分51秒503　東経139度26分38秒205

また、６ラインの子午線偏角差は、ライン北向延長線が、真北より６度42分61東偏する。これらの成果については図３にもまとめられているので、併せて参照してしただきたい。

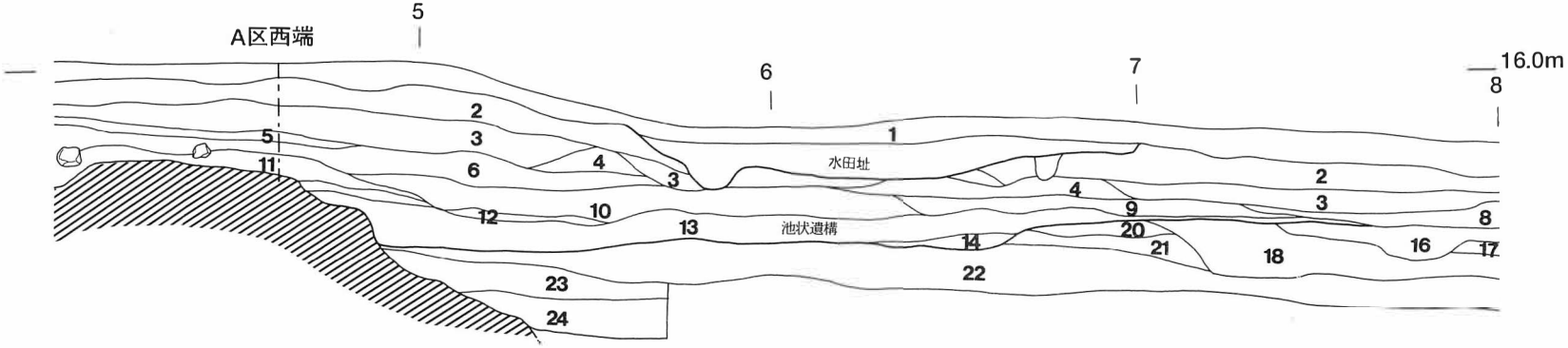
第３節　調査経過

発掘調査は基本的に原因者負担分と国庫補助事業分が平行して行われた。原因者負担分は平成７年１月６日より開始し、国庫分は２月13日より行われた。調査は重機および人力による表土の掘削から開始し、順次近世遺構面、中世遺構面、古代遺構面の検出作業を行った。国庫事業分は平成７年８月31日に、原因者分は平成８年２月５日に調査が終了した。以下に両者を合わせた検出した遺構を時代別に列挙する。

近代	礎石建物址１棟、室状遺構１基、溝状遺構５条等
近世	溝状遺構４条、水田址、炭焼き窯１基、ピット約20基
中世戦国期	やぐら１基、井戸址１基、溝状遺構５条、掘立柱建物址１棟
中世初頭	池状遺構、溝状遺構３条、掘立柱建物址１棟、道路状遺構、地業面、土坑15基
平安時代後期	溝条遺構４条、遺物集中箇所２基
平安時代中期	竪穴住居址６軒、建物址１棟、井戸址１基、土坑・ピット40基、遺物集中箇所２基
奈良時代前半	竪穴住居址４軒、遺物集中箇所１基
古墳時代後期	竪穴住居址２軒
古墳時代前期	竪穴住居址５軒、土坑約20基、遺物集中箇所３基

第４節　堆積土層（図４　図版１）

本調査区は小支谷に立地している故に堆積土層には小支谷奥側と南北の尾根からの土砂の流入と流失を繰り返した形跡が多く見られる。また開口部側は沖積地に連なるため粘性の強い土壌となっている。よって本調査区の堆積土層は一様に述べられるものではない。Ａ区、Ｂ区では褐色土で構成される近世層、茶褐色土の中世層、粘性の強い青味を帯びた黒色土の古代層に大別される。これらの土層は東側に向かって緩やかに傾斜しているが、中世前半の段階ではこの軟弱な地盤を補強し、また水平に保つ地業面の形成が見られる。古代黒色粘質土の下には青緑砂層が50cm程堆積している。これは谷戸奥側では赤褐色を呈しており、酸化の度合いによる色調の違いと見られる。これらの砂層は谷戸中央部程厚く堆積している。本層の形成時期は弥生時代後半と考えられる。



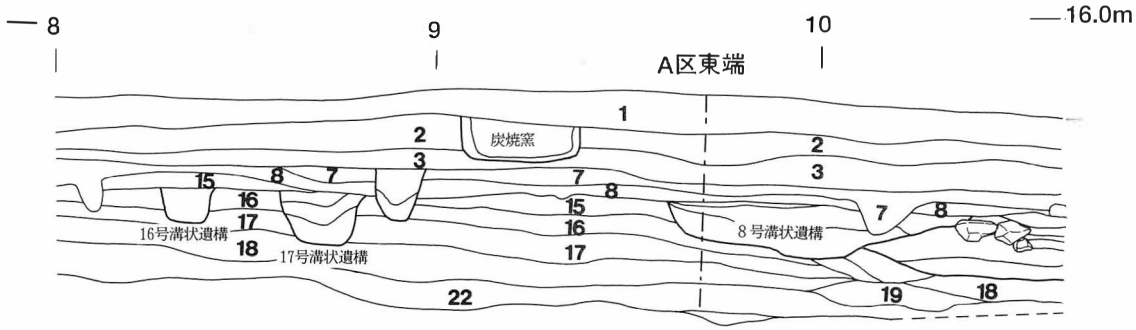


図4　堆積土層

土層説明

1．表土
2．褐色土　締まりに欠ける。泥岩粒を含む。
3．褐色土　色調やや明るい。
4．暗茶褐色土　泥岩粒多く含む。やや粘性を持つ。
5．暗茶褐色土　4層に類似するが、泥岩粒が増す。
6．暗茶褐色土　拳大の泥岩塊を含む。
7．茶褐色土　泥岩粒を含む。やや粘性を持つ。
8．灰茶褐色土　泥岩粒を多く含む。
9．茶褐色土　7層に類似するが、締まり強く、部分的に鉄分の硬化が見られる。
10．暗茶褐色土　6層に人頭大の泥岩塊を含む。粘性増す。
11．暗茶褐色土　ほぼ5層に同じ。
12．黄褐色土　細かい泥岩粒を多量に含む。
13．黒色土　締まりに欠け、水気を帯びる。部分的に泥岩塊、砂粒を含む。
14．黒色土　13層に砂粒を多量に含む。
15．暗褐色土　泥岩粒を含む。少量の灰、炭化物を混入。
16．暗褐色土　15層に類似するが、締まりやや増す。
17．暗褐色土　酸化により赤化した鉄分を多量に含む。締まりにやや欠ける。
18．暗褐色土　17層に全体に砂粒を含む。やや青味が増す。
19．暗褐色土　酸化鉄分をより多く含む。
20．黒色土　酸化鉄分を多く含む。泥岩粒を多く含む。
21．黒色土　20層に類似するが、締まり増す。
22．暗褐色土　酸化鉄分減る。粘性強い。
23．青緑砂　泥岩粒と砂の混合層。
24．暗青灰色土　全体に砂を含む。粘性強い。腐食植物痕が少量見られる。

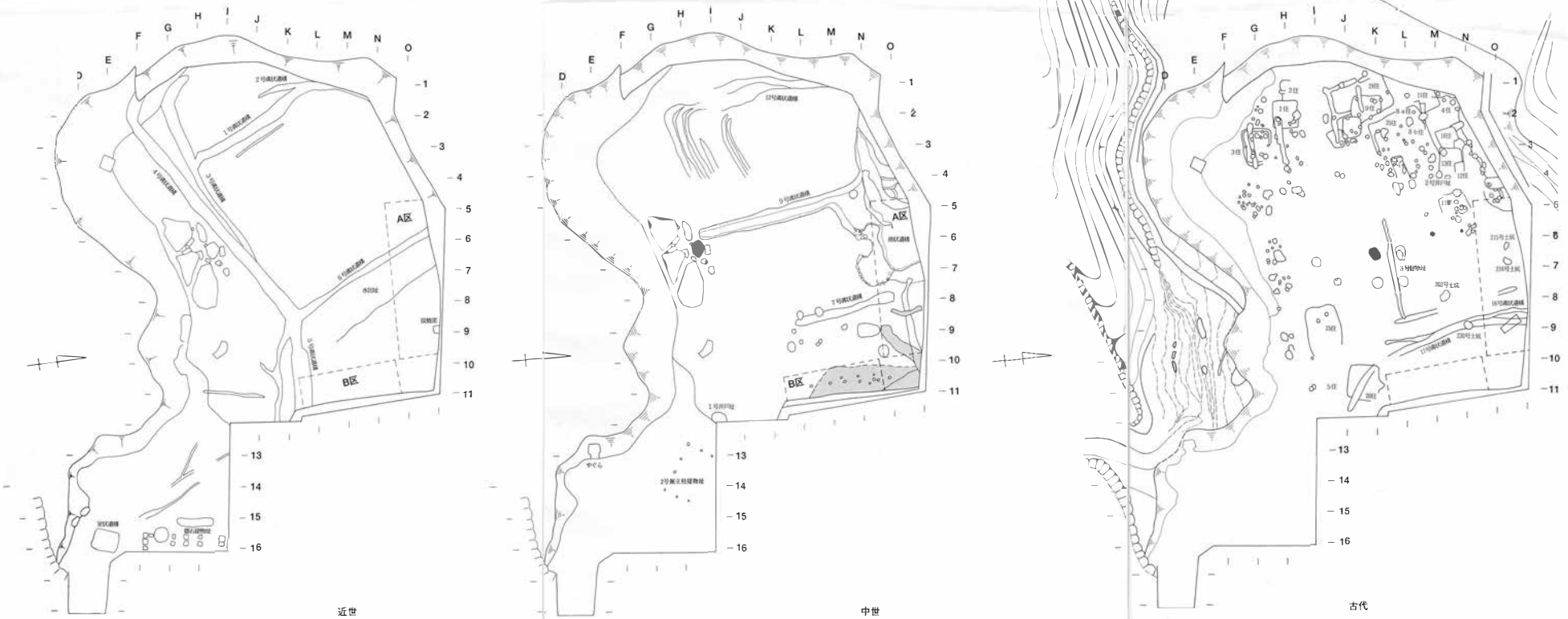


図5　調査区全測図

第三章　検出遺構と出土遺物

第１節　近世

A区で検出された遺構は水田址、６号溝状遺構、炭焼窯、B区で検出されたものは５号溝状遺構である。

水田址（図７　図版１）

L～O－６～10グリッドで検出された。A区に北側の約1/3が含まれる。A区内での規模は幅約4.7m

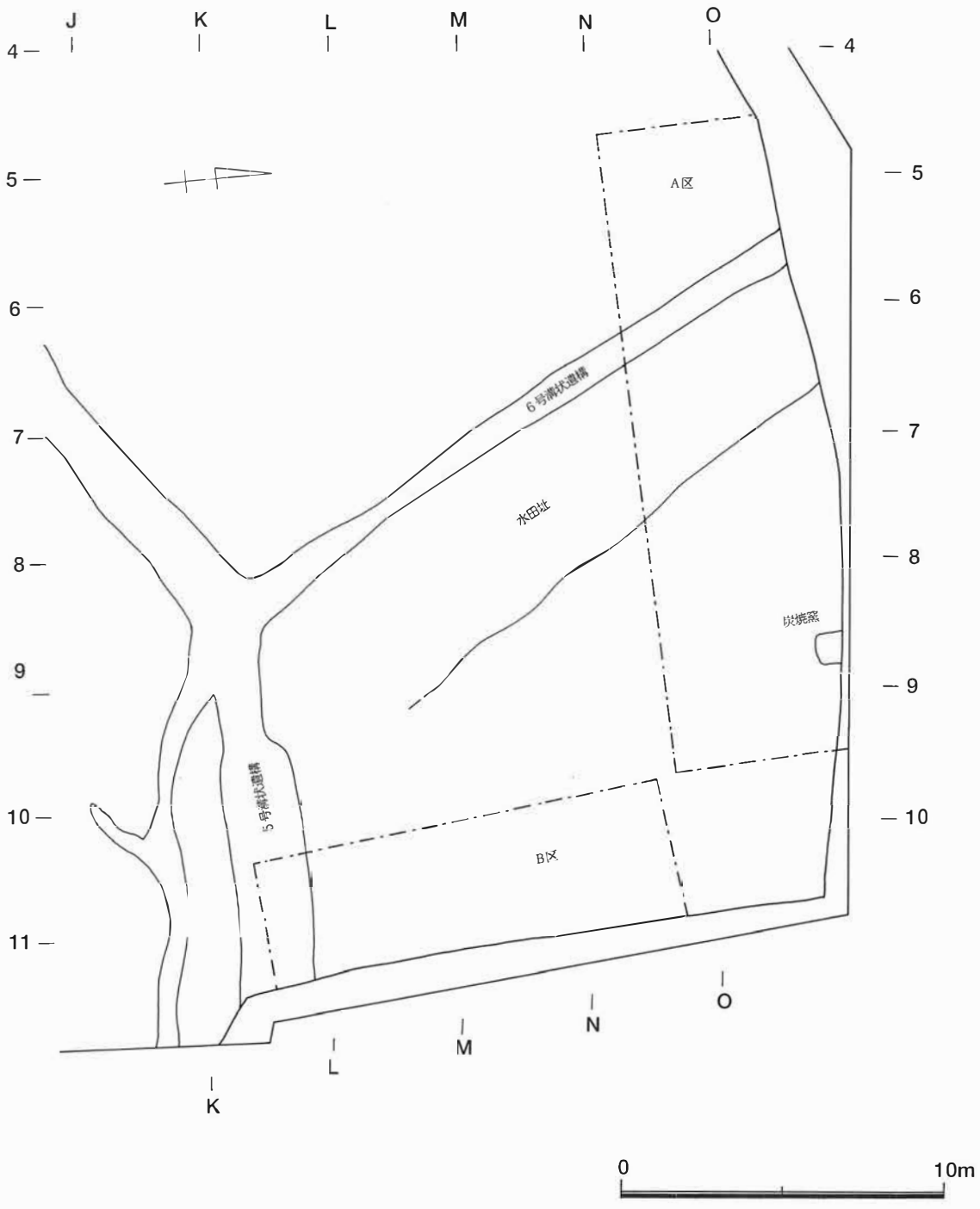


図６　近世遺構配置図

から4.9m、深さは最大42cmであり、帯状の落ち込みとして検出された。5号溝状遺構が重複している水田址西側では約40cm程度の深度を持つが、東側は10～20cm程度であり、東側の方が浅くなっている。標高は水田址底面で約14.2mである。覆土は締まりに欠ける褐色土である。本址の底面は多少の凹凸はあるが、基本的には平坦で、南に向かって緩やかに傾斜している。走行方位はN－25°－Wを示す。

前述したようにこの遺構の覆土は締まりに欠ける褐色土で、水田址の覆土とは考えにくいものであった。しかしこの帯状の浅い落ち込みを水田址と名称しているのは、施主の家に残る江戸時代末期と考えられる、この小支谷の地割りを記した古絵図に基づいてのことである。この古絵図には3号、4号、5号溝状遺構、水田址と見られるラインが描かれており、特にこの帯状の部分には水田と記してある。この古絵図とこれら近世遺構の配置、位置関係がほぼ等しいことから、この帯状の落ち込みに対して水田址という名称を与えている。ただこの遺構が実際に水田として機能していたのかは疑わしいところである。おそらく一時的に水田として利用された時があったとしても、大部分は小支谷内部での排水目的に利用されていたと思われる。

遺物の大半が混入した土師器、須恵器細片である。A区外では18～19世紀代の陶磁器が検出されているが、水田址底面直上からはガラス等の近代遺物も検出されている。構築時期については古絵図に記されていることから近世末期としておく。

5号溝状遺構（図8　図版2）

J～K－9～12グリッドで検出した。B区に東端の一部のみ含まれる。この5号溝状遺構は3号、4号溝状遺構の交点から東に向かい、調査区外へ延びていく。走行方位はN－5°－Eを示す。遺構の規

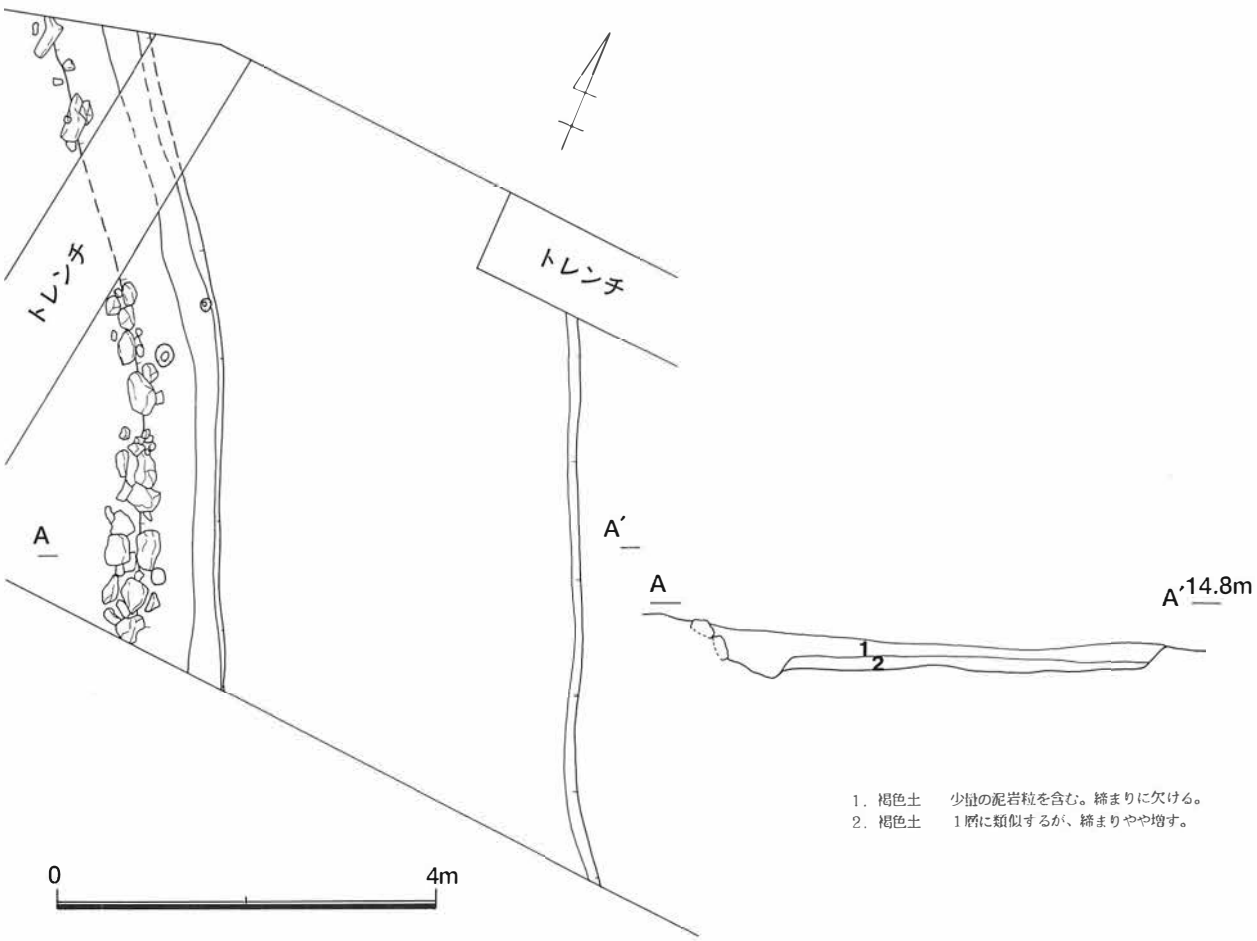


図7　水田址および6号溝状遺構

模は東端部で幅約240cm、深さ10～15cmで、また南壁寄りには幅約15cm、深さ約20cmの狭い溝が重複している。これらいずれの溝状遺構も締まりに欠ける褐色土を覆土としており、ほぼ同時期の所産であると考えられる。

B区内での出土遺物は混入した微細な土師器片のみである。層位、覆土から考えて近世末期～近代のものであると見られる。

6号溝状遺構（図7）

K～O－6～9グリッドに位置し、北側の1/3がA区に含まれる。水田址の西壁際を北西から南東方向に走っている。規模はA区内で幅約90cm、下場は約20～30cmである。走行方位はほぼ水田址と同じでN－25°－Wを示す。覆土は締まりに欠ける褐色土で水田址のものとほぼ同じである。本址の西壁上場部分には泥岩片が据え置かれている。また本址内にピットが2個あり、このようなピットはA区外にも多数見られることから、柵列等の存在が伺える。

A区内での出土遺物は混入した土師器片のみであった。層位、覆土から水田址等とほぼ同時期の所産と見られる。

炭焼窯（図9　図版2）

A区、O－9グリッドで検出した。遺構の一部が調査区外へ延びるため、全容は不明である。検出した範囲での規模は南壁は140cmで、東壁は116cm、西壁は135cm残存している。深さは最大で42cm、底面はほぼ平坦である。南壁には径15cm程の貫通した穴が開けられており、煙道と思われる。遺構の壁面は真っ黒に炭化している。覆土は褐色土を基本とし、多量の焼土ブロック、炭化物を含んでいる。遺構の周囲50～250cmには薄い焼土が広がっているが、これは実際の近世遺構確認面よりは約30cm上層である。遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、層位から判断すると近世末期～明治時代のものであろう。

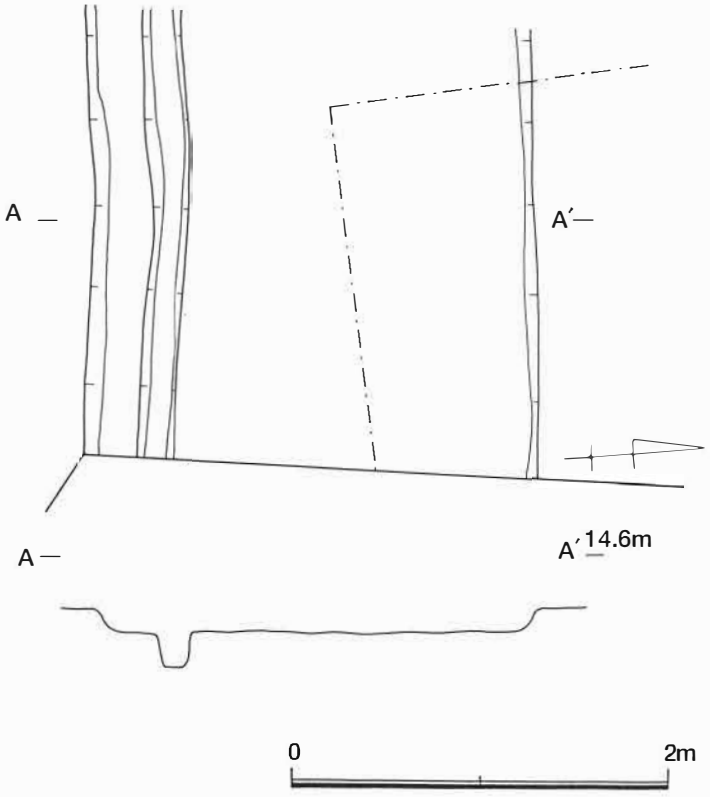
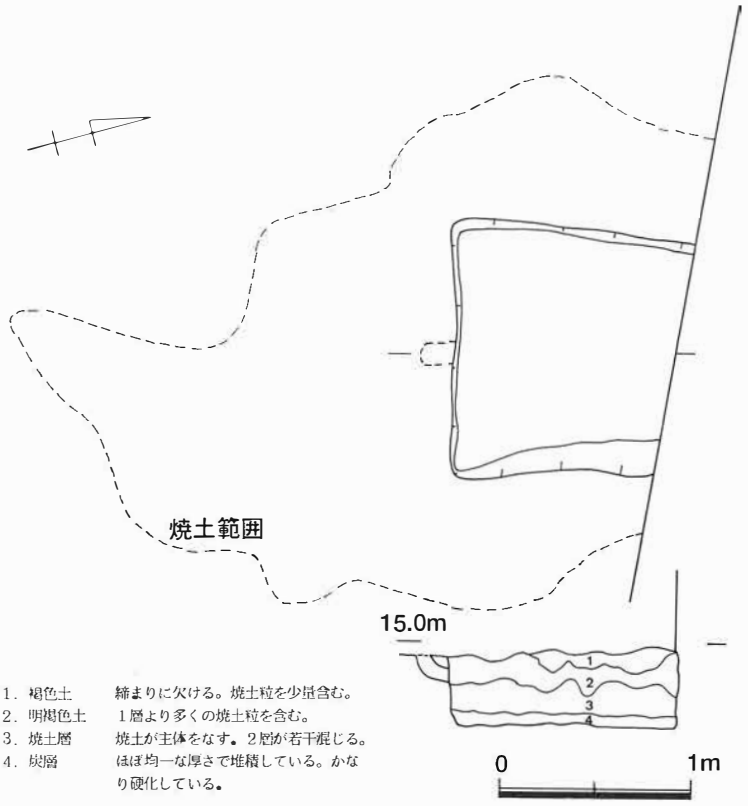


図8　5号溝状遺構



1．褐色土　締まりに欠ける。焼土粒を少量含む。
2．明褐色土　1層より多くの焼土粒を含む。
3．焼土層　焼土が主体をなす。2層が若干混じる。
4．炭層　ほぼ均一な厚さで堆積している。かなり硬化している。

図9　炭焼窯

第２節　中世

Ａ区で検出された遺構は池状遺構、７号溝状遺構、８号溝状遺構、１号道路状遺構、２号道路状遺構、１号土坑であり、Ｂ区で検出された遺構は１号掘立柱建物址、地業面である。

池状遺構（図11、12、13　図版３、４、７）

Ｍ～Ｏ－５～８グリッドにおいて検出した。Ａ区にはその半分以上が含まれる。検出された範囲での規模は南北に最大9.8m、東西に最大14mで、池状遺構はさらに調査区外へ延びていくと見られる。

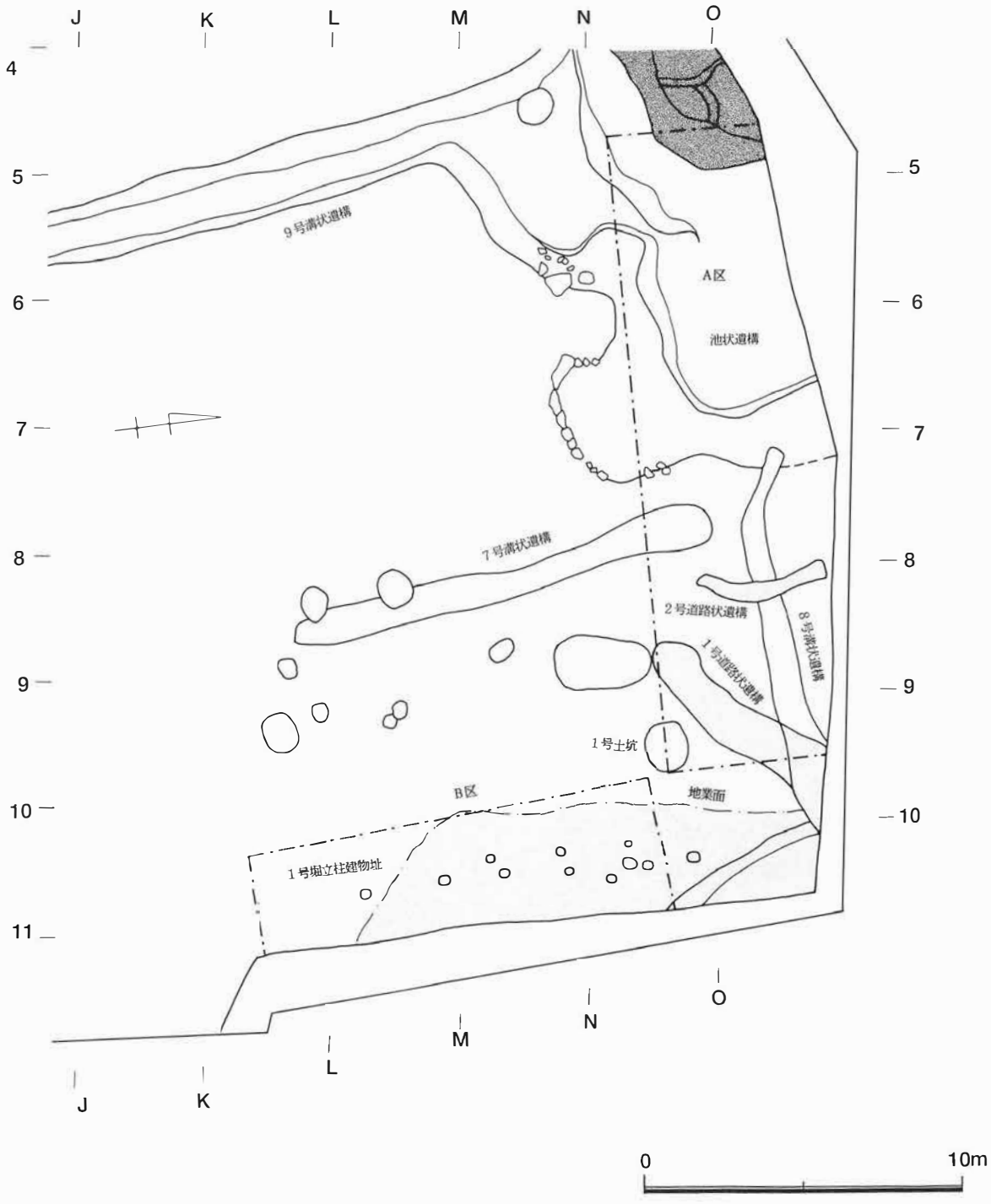


図10　中世遺構配置図

全体の形状は瓢箪形を呈すると考えられる。東側汀線部分の一部は中世後半以降に削平を受けているため良好に残存していない（図面上では推定されるラインを点線により書き加えている）。深さは最大で52cmを測るが、壁の立ち上がりは全体に緩やかである。なお池状遺構の北西隅では北側丘陵の裾部分の岩盤が露出している。池状遺構はその西端で9号溝状遺構と重複している。また露出している岩盤に沿うような形で幅最大2m30cm、長さ約5m、深さ最大50cmの沢状の遺構が検出されており、その延長と考えられる浅い落ち込みが池状遺構の西側で幅約1m50cm～2m、長さ7mに渡って検出されている。池状遺構の南西部には泥岩片により縁どられた径4～5mの一段浅い落ち込みが検出されており、この部分の深さは約20cmである。池状遺構の覆土は締まりに欠け、水気を帯びた黒色土で、全体に30cm以上堆積している。部分的に薄い砂層が認められる。また丘陵裾側では覆土中に人頭大の多量の泥岩塊が落ち込んでいた。

遺物はかわらけ、国産陶器、貿易陶磁器等が出土しているが、量は少ない。完形のかわらけが若干みられるが、いずれも単体で投げ込まれるような形で出土している。1から11は池状遺構覆土中から、12から17までは底部から、18から20までは南東部の浅い窪地から出土したものである。1は山茶碗系のこね鉢で、器壁内面は摩耗している。2、3は口径12～14cm代の大きい部類の手捏かわらけ、4～7は口径8.5～9.0cmにまとまる、やや小ぶりの手捏かわらけ、8は口径12.2cmでロクロ成形、9～11はやや小ぶりのロクロ成型のかわらけである。12は青磁小壺の口縁部～頚部の破片で、器面内外面には淡灰緑色の釉が施釉されているが、口唇部のみ露胎している。13は褐釉小壺と見られる胴部片で、胎土は緻密で、粘性があるものである。14～15は手捏かわらけ、16～17はロクロ成形のかわらけである。18～20はいずれも手捏かわらけである。

これらの遺物は多少時期的なずれを持つものもあるが、おおまかには13世紀前半代の様相を呈している。

7号溝状遺構（図14　図版3）

A区、N－8グリッドで検出した。北端部のみA区に含まれ、溝全体はここから南に延びていく。A区での規模は、幅約1m20cm、深さ約15cmで、N－8グリッドほぼ中央で立ち上がっている。覆土はやや粘性を帯びた茶褐色土で、拳大の泥岩塊を少量含んでいた。

出土遺物は混入した微細な土師器、須恵器のみである。

8号溝状遺構（図14、15　図版3、7）

A区、O－8～11グリッドで検出された。O－8グリッドで池状遺構の東側汀線部分から始まり、調査区北東コーナーにまで延びている。規模は西側先端で幅45～60cm、深さ10cm、A区東端部では幅130cm、深さ55cmで、東側に向かうほど規模が大きくなっている。断面形状は緩いV字形である。覆土は締まりに欠ける茶褐色土で、一部には上層に灰、炭化物の層が見られた。

出土遺物は混入した土師器、須恵器の細片が大半であり、実測できたのは1点のみであった。1はロクロ成形のかわらけで、覆土最上層からの出土である。このかわらけは15世紀代のものと見られるが、覆土最上層の出土であり、本址の構築時期に伴うものではないと見られる。本址はその位置から判断して池状遺構からの排水目的を果たしているように思われるが、その時期的関係については現時点では不明瞭である。

1号道路状遺構（図14　図版3　表1）

A区、N～O－9～10グリッドにおいて検出した。西側先端部の極一部と東端部はA区外となっている。O－9グリッドにおいて8号溝状遺構と重複し、この上に構築されている。幅は1.3～1.5mであり、

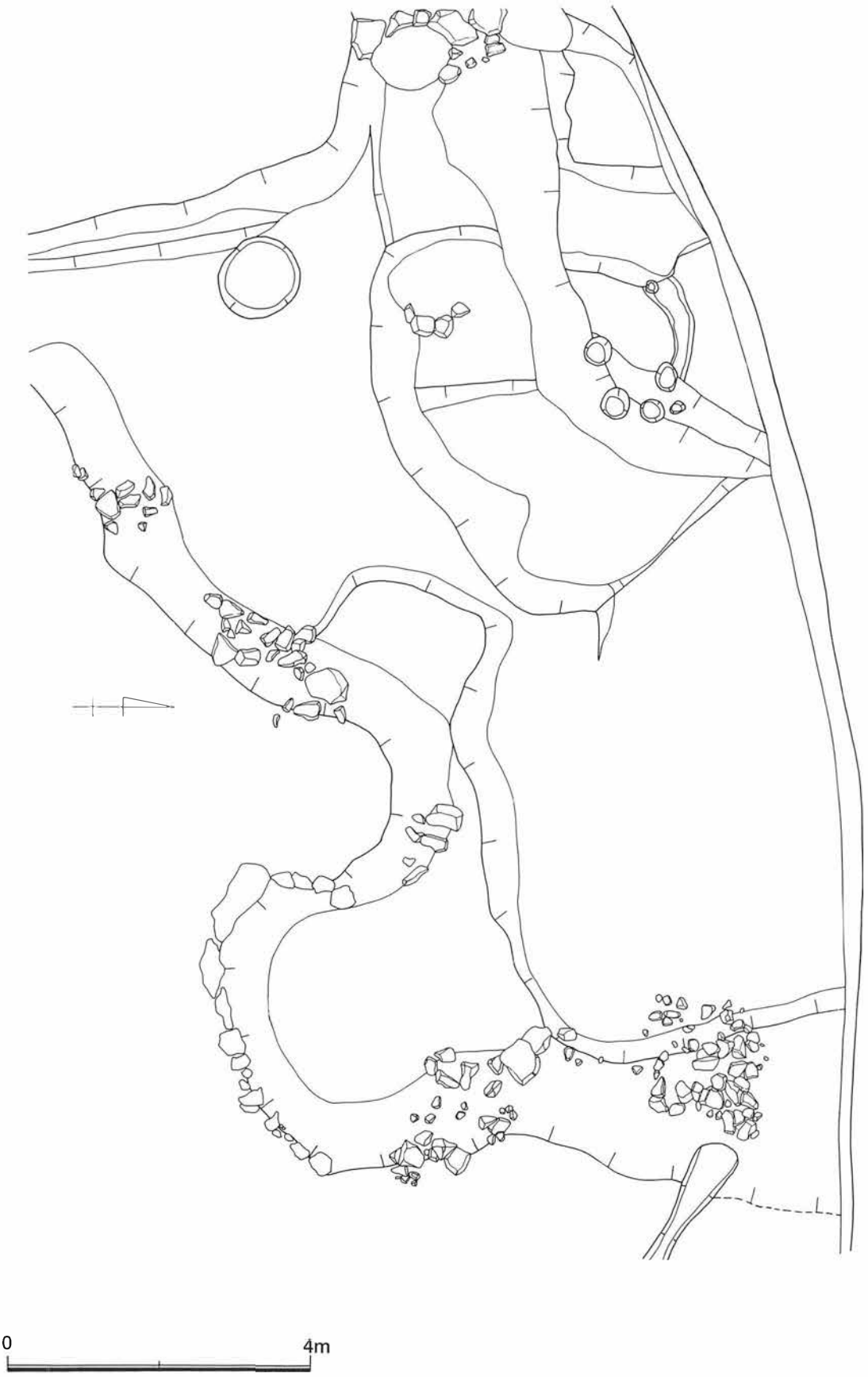


図11　池状遺構

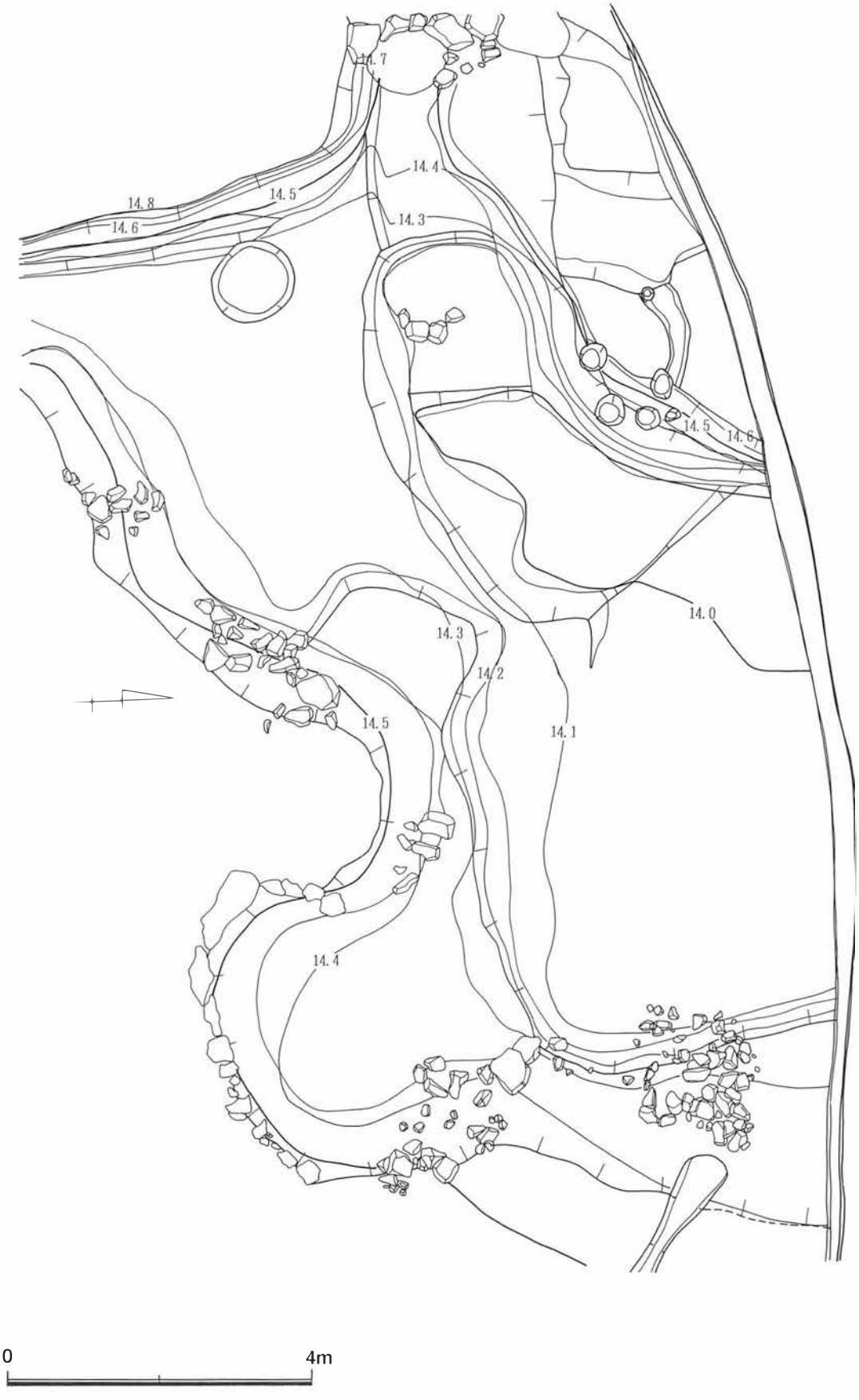


図12　池状遺構（等高線配置図）

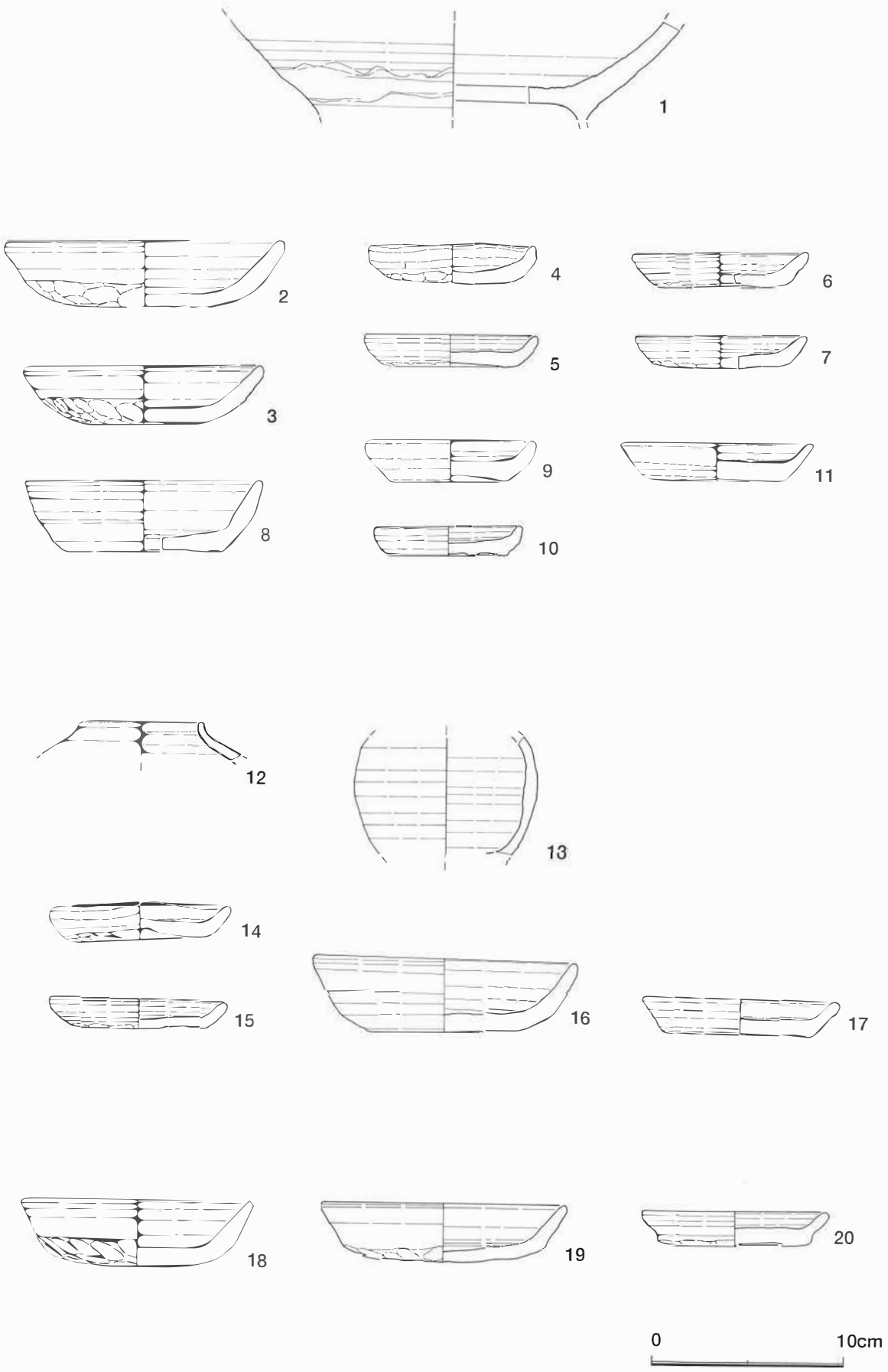


図13　池状遺構出土遺物

表1　1号道路状遺構周辺ピット観察表

No.	長軸	短軸	深さ	覆　　土
16	28	26	16	茶褐色土　泥岩粒を含む
17	25	19	13	〃
18	40	15	8	〃
19	20	19	11	〃
20	30	18	28	〃
21	46	42	18	〃
22	40	35	16	〃
23	45	36	36	〃

版築の厚さは5～10cmである。走行方位はN－32°－Eを示す。版築は軟質な泥岩で構築されており、全体の締まりはあまり強固ではない。また本址上には幾つかのピットがあるが、その性格は不明である。

本址上での出土遺物はいずれも微細なものであり、図示し得る遺物はない。

2号道路状遺構（図14　図版3）

A区、N～O－9グリッドにおいて検出した。規模は幅50～70cm、長さ4.3mで、緩やかに湾曲して南北方向に走っている。版築は拳大の泥岩を基本に構成されており、1号道路状遺構よりは強固に造られている。8号溝状遺構をまたいで構築されている。

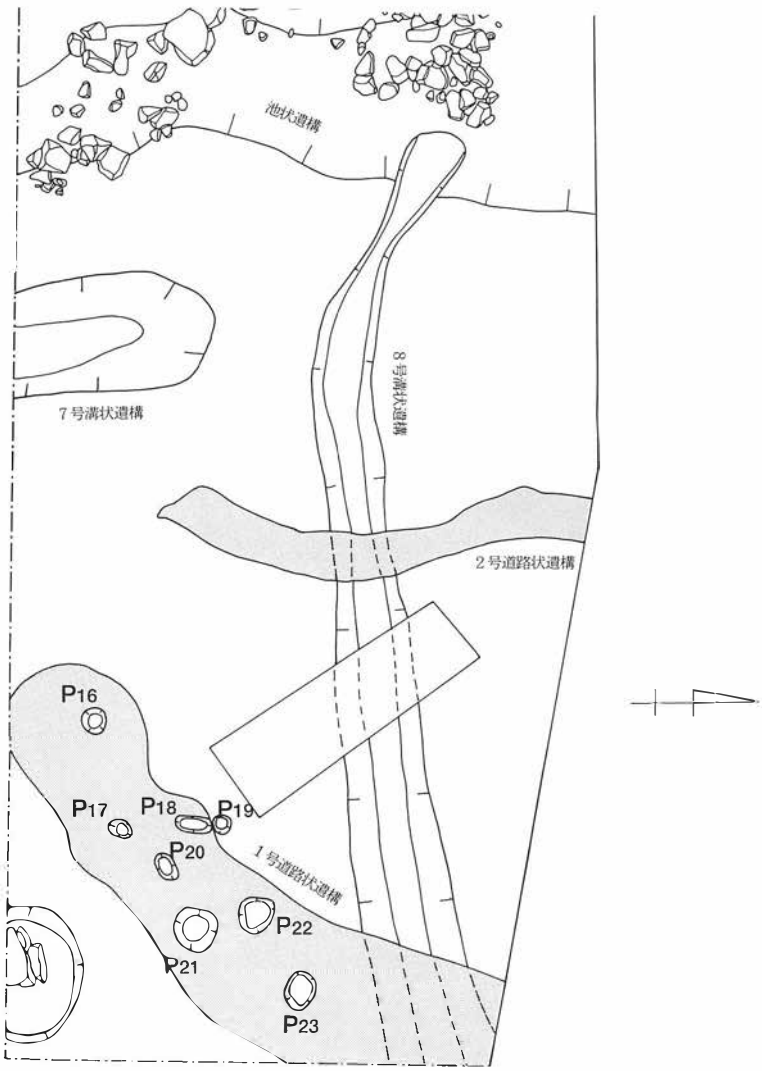


図14　7号・8号溝状遺構および1号・2号道路状遺構

地業面（図16）

B区、L～O－10～11グリッドにおいて検出した。B区の約2/3を占め、調査区東壁4m前後に沿って広がっている。7号溝状遺構、1号道路状遺構との関係は調査区北東コーナーにある掘り込み遺構のため不明瞭であるが、ほぼ同時期のものであると思われる。この地業面は鎌倉市旧市街地の発掘調査で一般的に検出される泥岩を大量に使用した地業とは異なり、微小な泥岩粒子を含む、やや締まりの強い茶褐色土で構成されている。B区周辺では古代までは東側に緩やかに傾斜する地形であったのが、この地業により水平に保つ造成を行っていることが伺える。

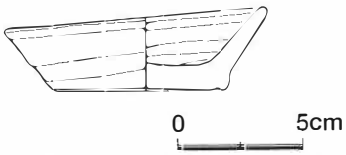


図15　8号溝状遺構出土遺物

面直上の図示し得る良好な遺物はなかったが、その構築時期は池状遺構が機能をしなくなった段階、13世紀後半から14世紀ではないかと見ている。

1号掘立柱建物址（図17　図版4　表2）

B区、K～N－11グリッドで検出した。大半が地業面上に位置する。P4からP11まで（P6のみはずれる）と、P12からP14までの二列が検出され、P12～P14はその位置、柱穴規模からP4～P11の柱穴列の庇ないし縁側とみられる。それぞれの芯間距離はP4～P5が54cm、P5～P7が200cm、P7～P8が196cm、P8～P9が188cm、P9～P10が206cm、P10からP11までが190cmを測る。またP

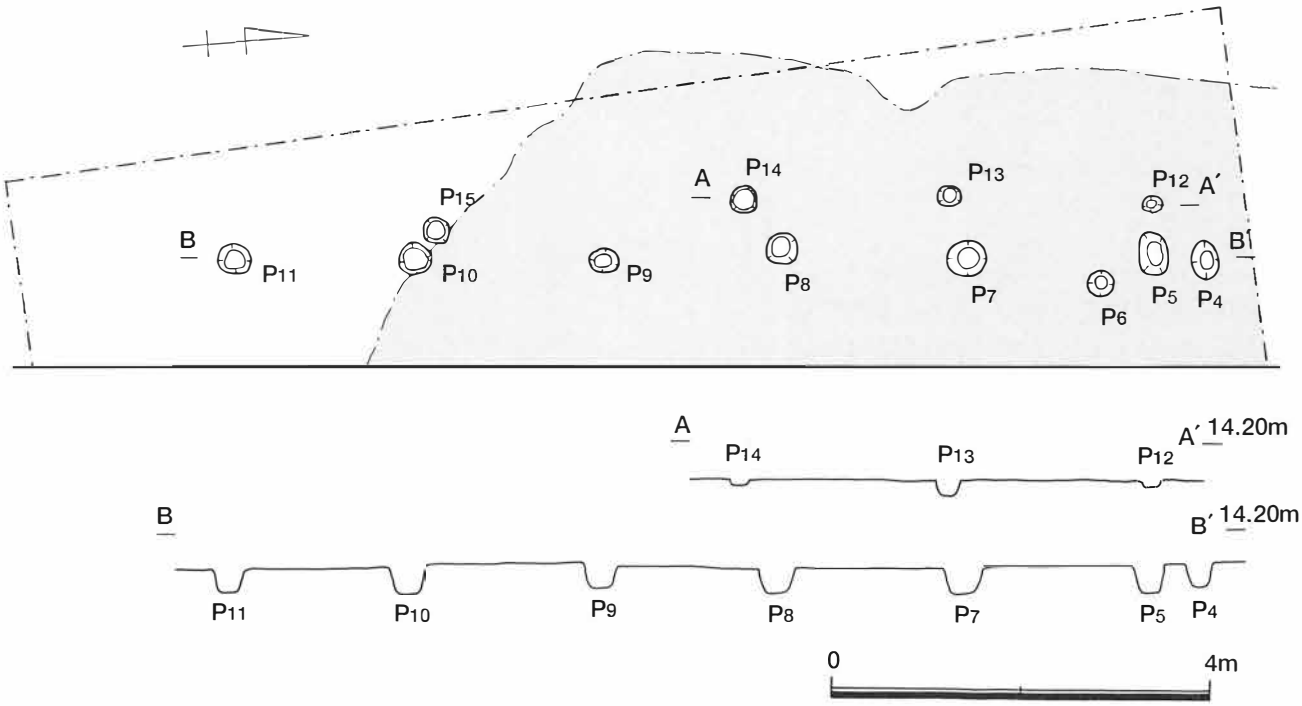


図16　地業面および１号掘立柱建物址

12からＰ13までが215cm、Ｐ13からＰ14までが222cmを測る。Ｐ４～Ｐ11までの柱穴はいずれも径38cm前後、深さ30cm前後のものであり、覆土も泥岩粒を含む茶褐色土で統一されている。Ｐ12～Ｐ14も同様で径20cm前後、深さはＰ13のみ20cmであるが、他は10cm前後の浅いものである。覆土はＰ４～Ｐ11と同じものである。

出土遺物は微細な土師器片が少量あるのみである。

１号土坑（図17）

Ａ区、Ｎ－10グリッドにおいて検出した。ちょうど半分がＡ区に含まれる。規模は南北に138cm、東西に148cmで、やや形の崩れた円形を呈している。深さは最大22cmである。覆土は泥岩粒子、炭化物粒を含む茶褐色土である。土坑の底部には数個の泥岩塊があるが、いずれも投げ込まれたものであろう。

遺物は青磁、かわらけ等が少量出土しているが、いずれも微細なもので図示し得るものはなかった。

表２　１号掘立柱建物址柱穴観察表

No.	長軸	短軸	深さ	覆土
4	41	28	25	茶褐色土　泥岩粒を含む
5	44	30	30	〃
6	28	27	24	〃
7	41	39	28	〃
8	33	30	26	〃
9	31	25	26	〃
10	35	33	27	〃
11	35	31	24	〃
12	20	15	7	〃
13	25	22	17	〃
14	28	26	6	〃
15	28	25	20	〃

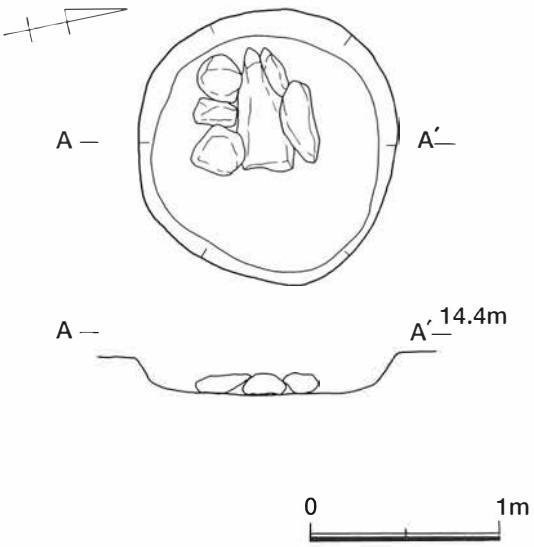


図17　１号土坑

第３節　平安時代

Ａ区において検出した遺構は16号・17号・18号溝状遺構、216号土坑、１号土器溜りで、Ｂ区において検出した遺構は２号土器溜りである。

16号溝状遺構（図19　図版５、７）

Ｍ～Ｏ－９グリッドに位置し、Ａ区にその大半が含まれる。17号溝状遺構のすぐ西側を流れており、Ｎ－９グリッドにおいてこれと重複している。また１号土器溜りを切っている。Ａ区内での本址の規模は幅40～55cm、深さ最大40cmである。走行方位はＮ－５°－Ｗを示している。覆土はほぼ同一層で締ま

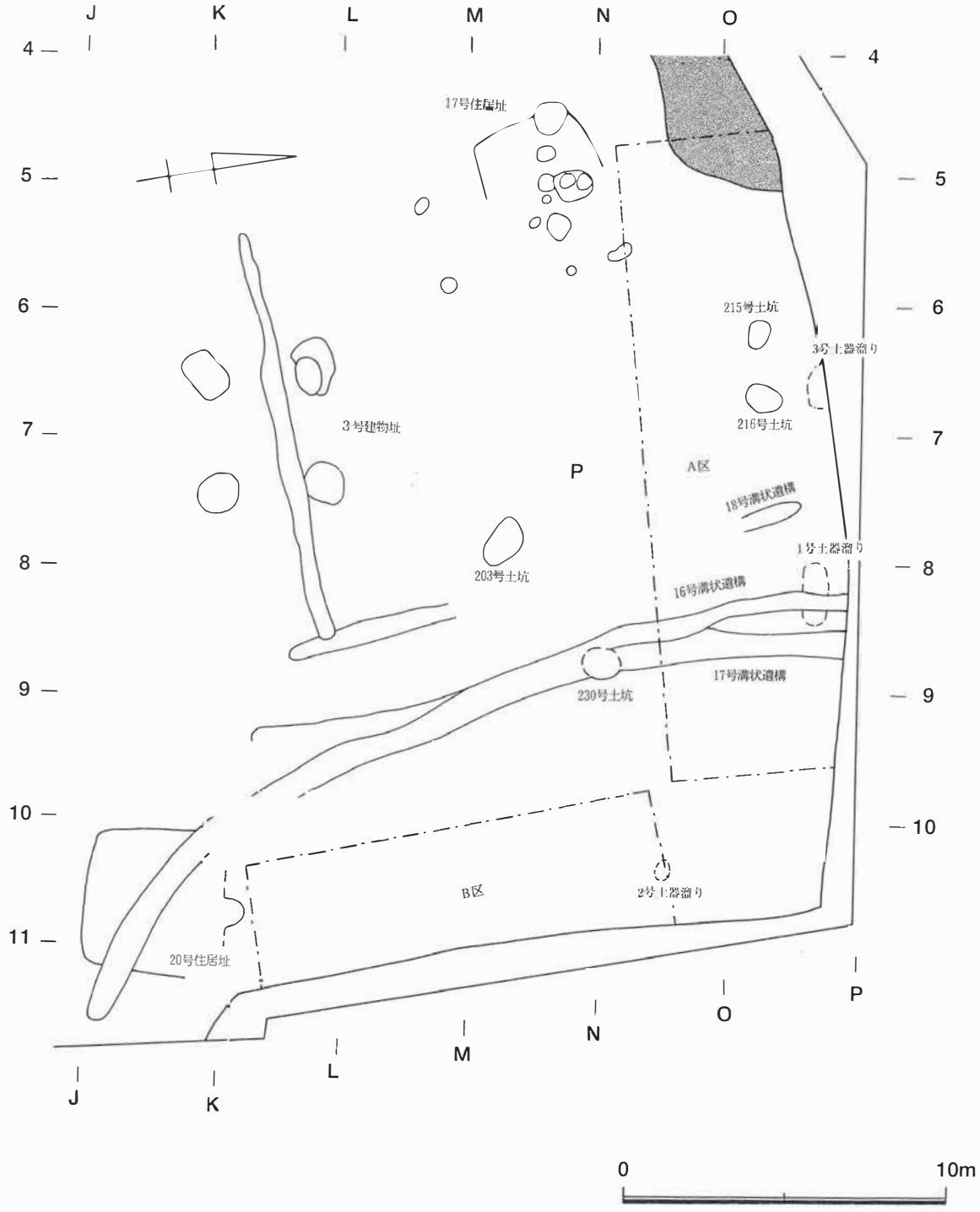


図18　平安時代および古墳時代前期遺構配置図

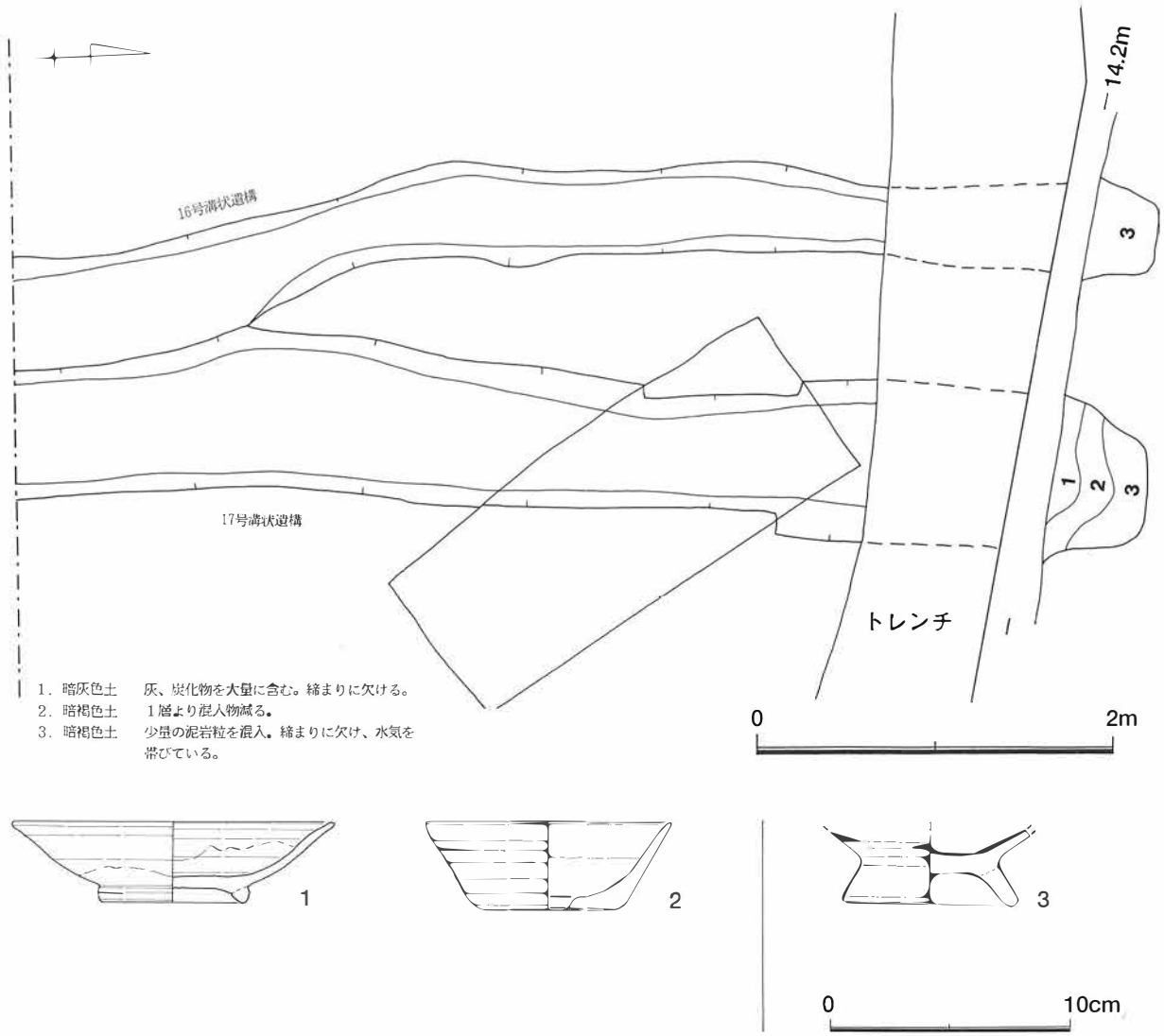


図19　16号・17号溝状遺構、同出土遺物

りに欠け、水気を帯びた暗褐色粘質土である。16号・17号溝状遺構はＮ－９グリッドにおいて交わった後、Ｌ－10グリッドで再び分岐するが、西側の溝状遺構が16号溝状遺構に対応するかは不明である。

出土遺物は微細な土師器片が大半である。１は灰釉皿で全体の約1/3が残存している。口径は13.8cm底径は6.0cmで、体部内外面に漬け掛けにより施釉される。重ね焼きで、ヘラケズリ調整は行われていない。折戸53窯式期のものと考えられる。２はロクロ成型の土師器坏である。全体の約1/3が残存している。回転糸切り後無調整で、色調は暗橙褐色を呈している。本址の時期を示す遺物の量が少ないため、構築時期は不明瞭であるが、11世紀代かと思われる。

17号溝状遺構（図19　図版５、７）

Ｊ～Ｏ－９～12グリッドに位置する。Ａ区にその北端部がかかっている。本址は調査区東側を湾曲しながら流れており、230号土坑、20号住居址を切っている。Ａ区での本址の規模は幅75～88cm、深さ最大52cmで、16号溝状遺構より一回り大きい（一部を試掘坑により破壊されている）。走行方位はＮ－３°－Ｅを示し、Ｎ－９グリッドにおいて16号溝状遺構と重複している。基本となる覆土は16号溝状遺構と同じで、締まりに欠け、水気を帯びた暗褐色粘質土であるが、一部にはその上層に灰層が検出されている。

出土遺物の多くが混入した土師器片である。図示し得たのは1点のみである。3は土師器高台付坏の底部である。底径は7.4cmを示す。底部は回転糸切り後、高台部を貼り付けている。色調は橙褐色である。

本址の構築時期は出土遺物が少ないために不明瞭であるが、10世紀前半代と考えられる230号土坑を切っていること、10世紀中葉と考えられる20号住居址を切っていることなどから10世紀後半～11世紀代と思われる。

18号溝状遺構（図20）

A区、O－8グリッドで検出した。規模は幅約35cm、深さ最大15cmで、北側は緩やかに立ち上がって消滅し、215cmの長さが検出された。走行方位はN－14°－Wを示す。この南側は検出されなかったが、約10m離れたK～L－10グリッドで走行方位をほぼ同じくする溝状遺構が検出されており、本址はこれに対応すると見られる。覆土は締まりにかけ、水気を帯びた暗褐色粘質土である。出土遺物は微細な土師器片のみであり、図示し得る遺物はない。

本址の構築時期は16号、17号溝状遺構とほぼ同じ、11世紀代が考えられる。

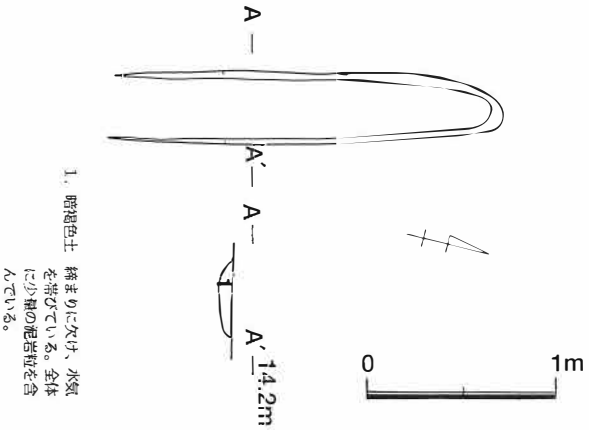


図20　18号溝状遺構

216号土坑（図21　図版6、7）

A区、O－7グリッドで検出した。南北に116cm、東西に70cmを測り、隅円長方形を呈している。深さは最大で32cmで、北側へ緩やかに傾斜している。覆土は締まりに欠ける暗褐色土である。

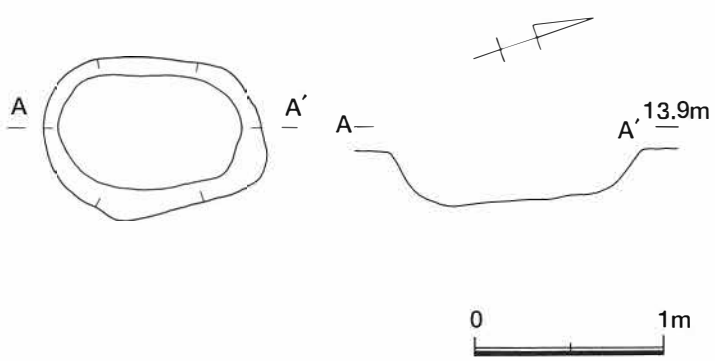
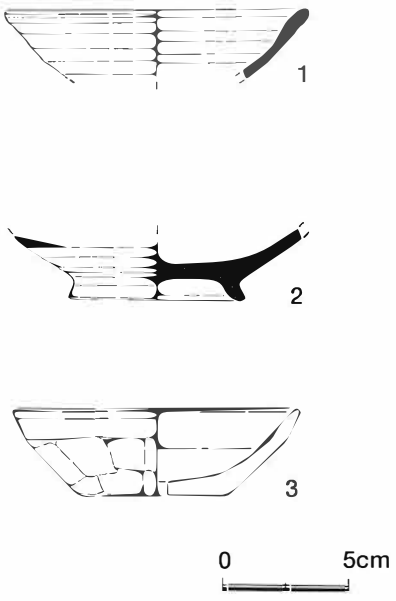


図21　216号土坑、同出土遺物



灰釉、須恵器、土師器等の破片が出土しているが、細片が多く実測できたものは少ない。1は須恵器坏で、口縁部～体部の一部のみ残存していた。口径は12.0cmを示す。口唇部が肥厚している。2は須恵器高台付碗の底部から体部の一部である。底径は6.8cmを測る。底部は回転糸切り後、高台部を貼り付けている。3は土師器坏である。口縁部から底部の約1/6が残存している。口径12.7cm、底径5.6cm、器高3.5cmを示す。体部には二段のヘラケズリがなされている。

これらの遺物から本址の構築時期は10世紀前半代が考えられる。

1号土器溜り（図22　図版8）

A区、●－9グリッドで検出した。遺物は東西に長い約2㎡の中から散在して検出された。16号溝状遺構に分布のほぼ中央を切られている。遺物は破片が多いが、完形の状態で出土したものもある。

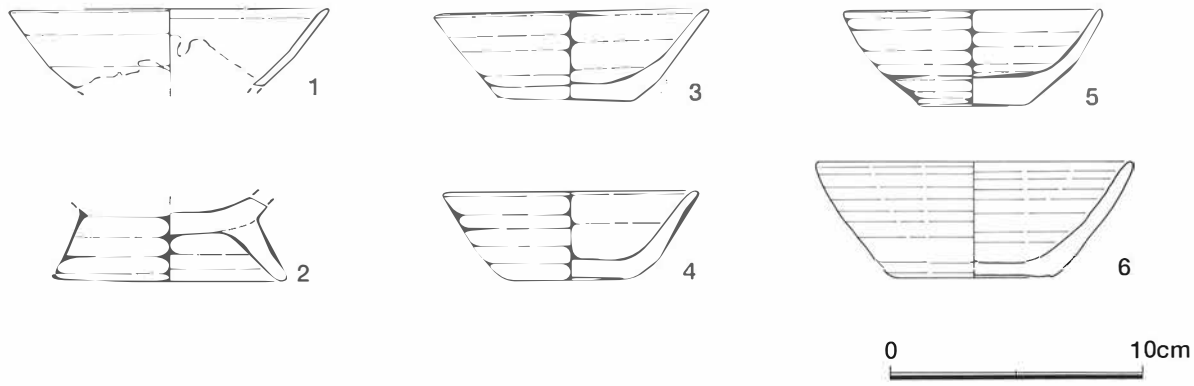


図22　1号土器溜り出土遺物

1は灰釉碗である。口縁部から体部の約1/6が残存していた。口縁部から体部の上半に漬け掛けが施されている。2は土師器高台付碗の底部である。底径は9.4cmを測る。碗部内底面および高台部外面の一部がススけている。3～6はロクロ成形の土師器坏である。3から5はほぼ同様の法量を持つが、5は底部がやや突出している。3、4は多量のススが付着し、またタール状の物質の付着も見られる。6はひとまわり法量が大きい。これらの遺物は11世紀代の様相を呈している。

2号土器溜り（図23、24　図版6、8）

B区、N－11グリッドで検出した。一部はB区外へ延びている。約1㎡のせまい範囲に須恵器碗、坏、土師器坏、甕の破片が集中して出土していた。

1は須恵器碗である。口縁部から体部の約1/8が残存している。口径は17.0cmを測る。2は須恵器碗である。口縁部から底部の約1/4が残存している。口径15.3cm、底径6.4cm、器高5.5cmを測る。口縁部がやや外反する。3は須恵器坏である。口縁部から体部の約1/6が残存している。口径は12.2cmを測る。口縁部は外反し、肥厚している。4は須恵器高台付皿である。全体の約1/2が残存している。口径13.6cm、底径5.8cm、器高2.8cmを測る。口縁部が強く外反し、高台はハの字状に開く。5はロクロ成形の土師器坏である。底部のみほぼ完存している。底径は7.0cmを測る。底部は回転糸切り後、無調整である。色調は橙褐色を呈している。6、7は土師器坏である。6は全体の約3/4が残存している。口径は13.1cm、底径は6.9cm、器高は3.8cmを測る。体部は二段のヘラケズリである。7は全体の約1/4が残存している。口径は11.8cm、底径は6.5cm、器高は3.8cmを測る。体部下半にはヘラケズリが一段施され、体部中位には指頭調整を残している。8は須恵器長頸壷である。体部から底部の約半分が残存している。底径は8.9cmを測る。体部の下半にはヘラケズリが施されている。9は土師器甕である。全体の約1/3が残存している。体部外面はナデ調整、体部内面は指頭調整ないしハケ目調整後ナデ調整を施している。口縁部内外面は横ナデ調整である。

これらの遺物からは若干の時期的なずれが見れるが、須恵器碗、高台付皿などから10世紀前半代の年代が考えられる。

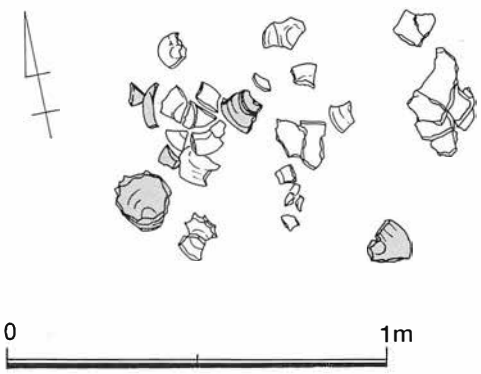


図23　2号土器溜り

第4節　古墳時代前期

215号土坑（図25）

A区、O－7グリッドで検出した。216号土坑の約1m西側に位置する。規模は南北に82cm、東西に80cmを示し、不整形である。下場も不整形で、北側には径約20cmのピット状のも

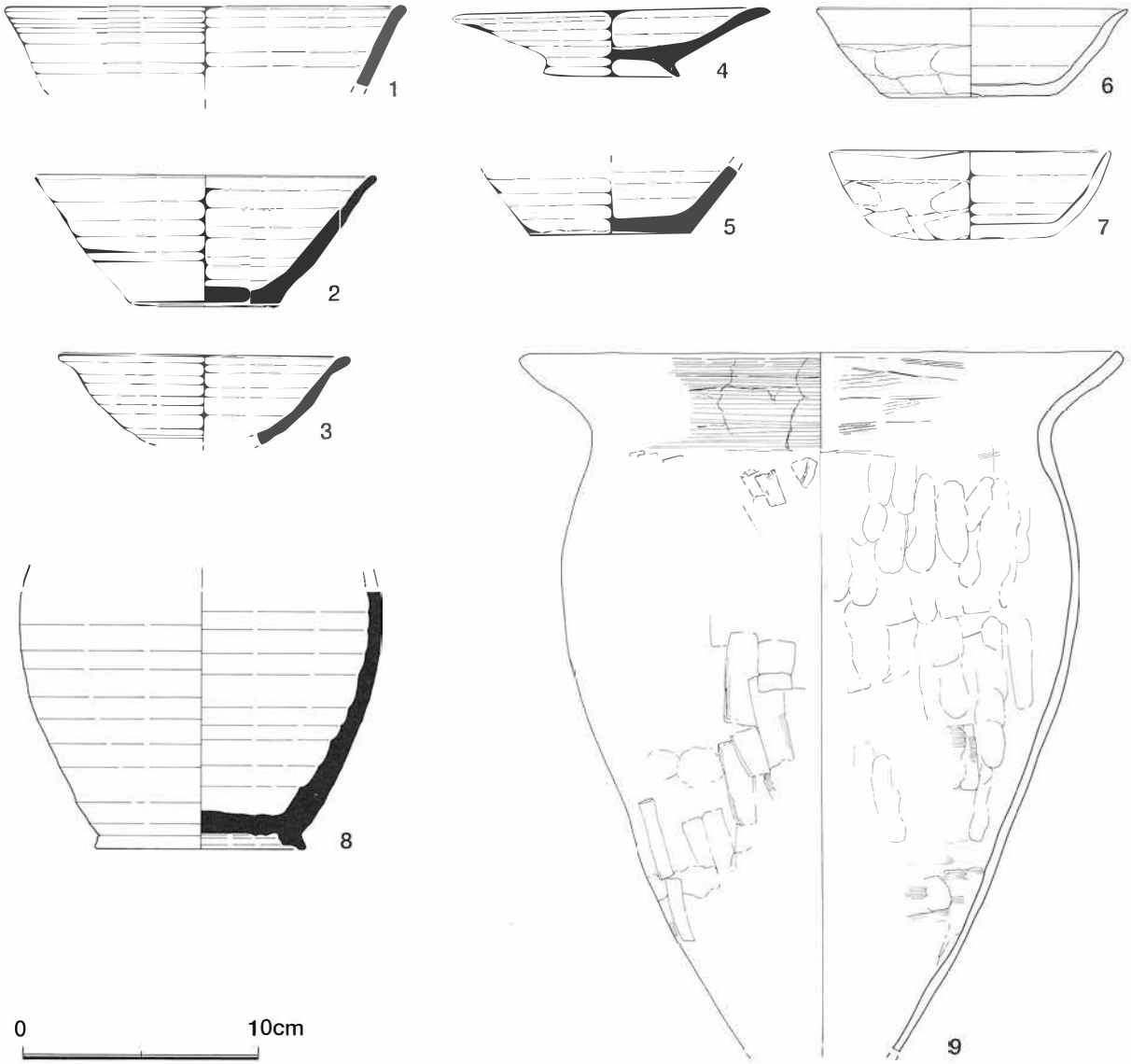


図24　2号土器溜り出土遺物

のが見られる。覆土は締まりに欠ける暗青灰色土である。

出土遺物がないため本址の詳細な構築時期は不明であるが、覆土から類推すると古墳時代前期が考えられる。

3号土器溜り（図26、27　図版6、8）

A区、O－7グリッドで検出した。一部が調査区外へ延びると見られる。土器は約2㎡の狭い範囲で出土している。ただ甕2、3とその他の遺物は若干間をおいている。広口壷6、7、小型鉢8のみ完形品である。

1はS字状口縁台付甕である。破砕した状況で出土したが、ほぼ完形に復元された。体部上半は斜方向のハケ目、体部下半は上半とは逆方向のハケ目が施されている。口縁部径は17.5cm、胴部最大径23.0cm、器高27.2cmを測る。2は甕形土器である。全体の約1/2が残存しているが、頸部は遺存していない。胴部最大径は24.4cmを測る。体部外面にはヘラミガキ、体部内面下半はハケ調整、上半はヘラナデ調整

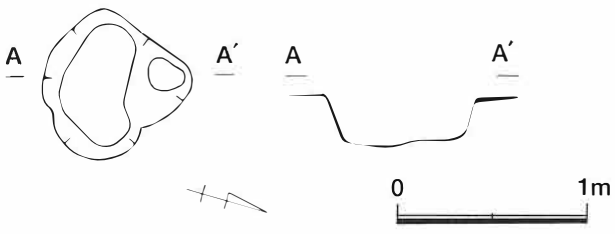


図25　215号土坑

である。３は甕形土器である。全体の約1/3が残存している。胴部最大径は19.9cmを測る。体部外面上半はハケ調整、下半には叩きを施していると見られる。体部内面はヘラナデ調整である。４は甑であると思われる。全体の2/3が残存している。底部には径1.5cmの穿穴がある。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。５は手捏土器である。全体の3/4が残存している。体部内外面は指頭により調整されている。６、７は小型広口壷である。両方とも体部外面はハケ調整後、指頭調整を施している。いずれも体部の一部が二次焼成によりススけている。８は小型鉢である。完形品である。体部の調整にはハケ、指頭調整が施されている。

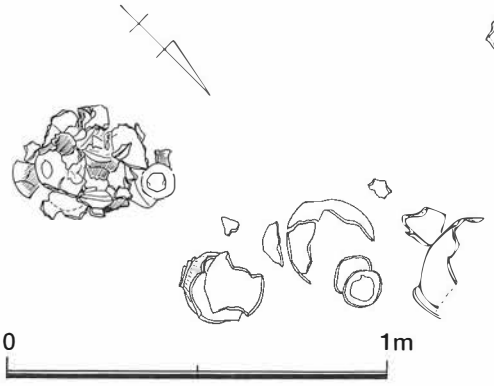


図26　３号土器溜り

これらの遺物は古墳時代前期のものであろう。

第５節　その他の出土遺物（図28　図版９）

ここで取り上げる遺物は包含層中及び遺構出土遺物の中で明らかに混入と見られるものについてとりあげた。

１は同安窯系青磁小皿である。Ｂ区中世地業面下の包含層出土である。釉薬は暗緑色で、貫入目立つ。胎土は緻密で、灰色。２は同安窯系青磁小皿である。Ｂ区地業面上の包含層の出土である。釉薬は淡緑色で、貫入目立つ。胎土はやや気孔が多く、灰白色である。３は青白磁碗である。Ｂ区地業面上包含層出土である。釉薬は淡水青色で、貫入やや目立つ。胎土は灰白色で、結晶状である。４は白磁玉縁碗である。Ｂ区地業面下包含層の出土である。釉薬は淡灰白色で、体部外面に小孔多い。胎土は白色で、緻密である。５は砥石、仕上げ砥で、石材は硬質砂粒凝灰岩である。Ｂ区地業面上包含層出土である。両端は欠損している。使用による摩耗が激しい。６は土師器高台付坏である。Ｂ区地業面下包含層出土である。坏部はロクロ成型で、底部にハの字に開く厚みのある高台を貼り付けている。焼成は比較的良好で、暗橙褐色である。胎土には白色針状物質が少量含まれる。12世紀代のものと考えられる。７は須恵器坏である。池状遺構の覆土中出土である。Ｇ25窯式期のものと考えられる。８は土師器甕である。Ａ区、Ｏ－７グリッド出土である。全体の約1/2が残存している。体部外面の口縁部際は横方向、これより下は縦方向のハケ調整、内面はヘラナデ調整で、口縁部は横ナデである。胎土には粗砂粒が多量に含まれる。色調は口縁部及び体部上半は暗黄褐色であるが、体部下半は灰茶褐色で、体部内面はススけている。９は土師器甕底部片である。８の周辺で出土し、同一個体と見られる。成形、胎土、色調はほぼ８に同じであるが、底部外面は木葉痕が残り、橙褐色である。

瓦（図29　図版９）

本遺跡では多量の古代平瓦、丸瓦片が出土している。平瓦は凸面縄目叩きで凹面に布目圧痕を、丸瓦は凸面はナデ調整、凹面は布目痕を持つものが大半である。その出土状況は散漫ではあるが、調査区全域の近世、中世および古代末期の包含層、遺構から出土しており、その総数は破片点数で200点を越すと見られる。遺構から出土したものは少ないが、現在の所見では230号土坑におけるＧ５窯式古段階の須恵器碗との共伴が最も時期的に逆上れるものであり、これらの瓦が使用された時期は10世紀前半段階と考えている。

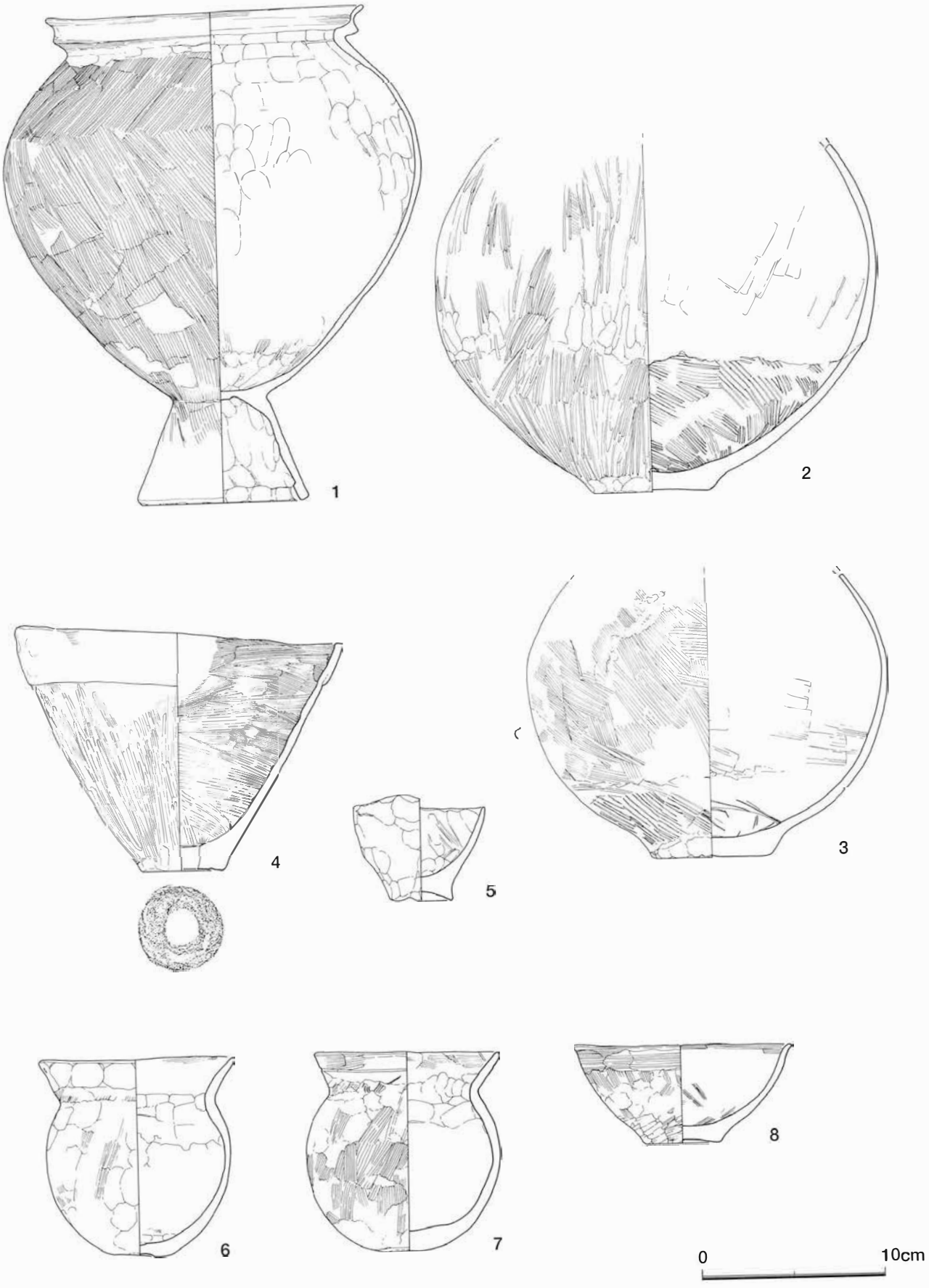


図27　3号土器溜り出土遺物

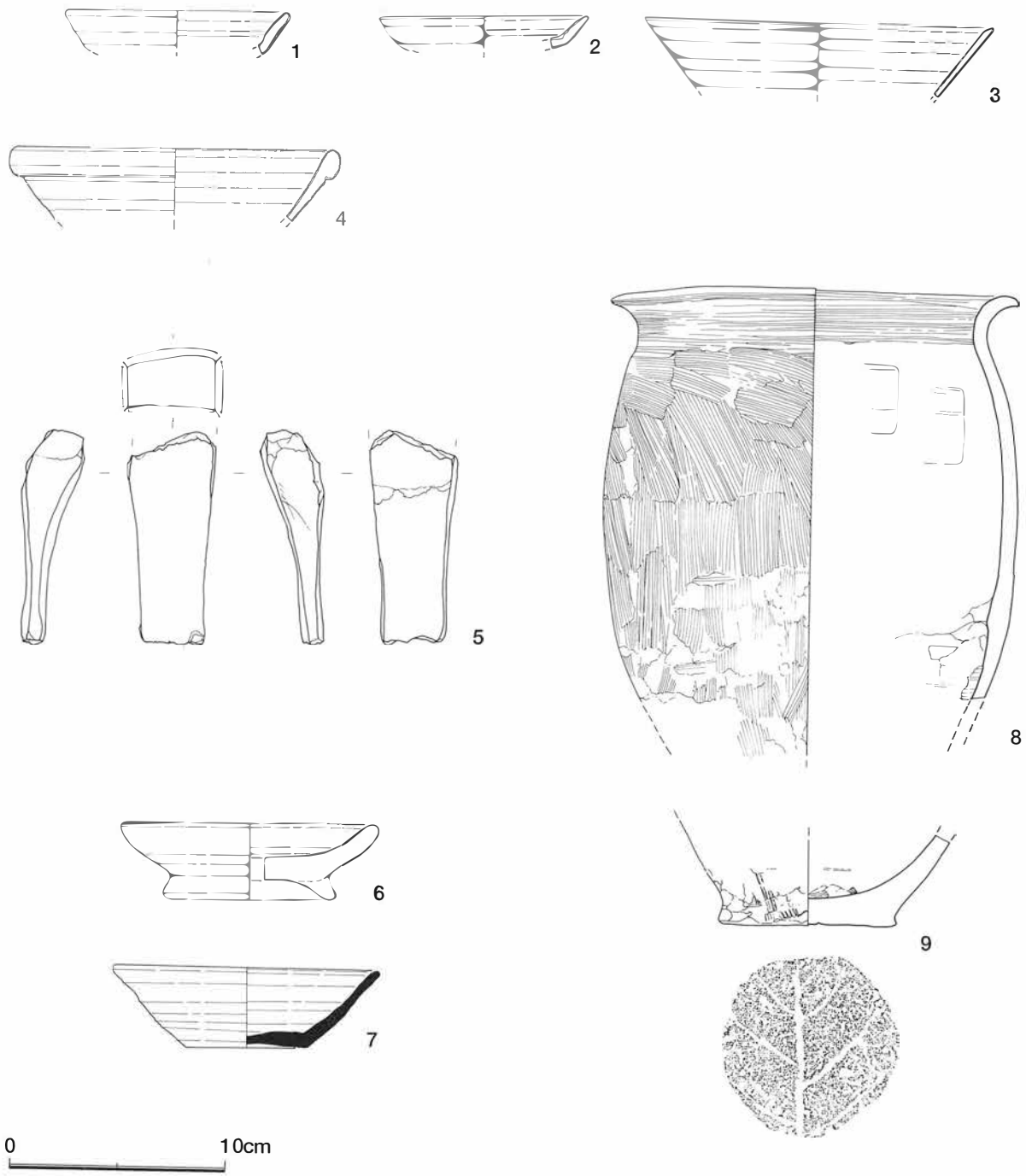


図28　その他の出土遺物（１）

１から４は丸瓦、５は平瓦である。１は17号溝状遺構覆土中からの出土である。胎土は灰白色で、焼成はやや軟質である。２は池状遺構覆土中からの出土である。胎土は灰色で、砂粒を多く含み、焼成はやや硬質である。３はＡ区古代末包含層中からの出土である。胎土は灰色で、焼成は硬質である。凸面の一部には自然釉が見られる。４はＢ区中世包含層中からの出土である。胎土は灰褐色で、焼成はやや硬質である。凸面には二条の沈線がある。５は池状遺構覆土中出土である。胎土は灰褐色で、砂粒を多く含む。焼成はやや硬質である。

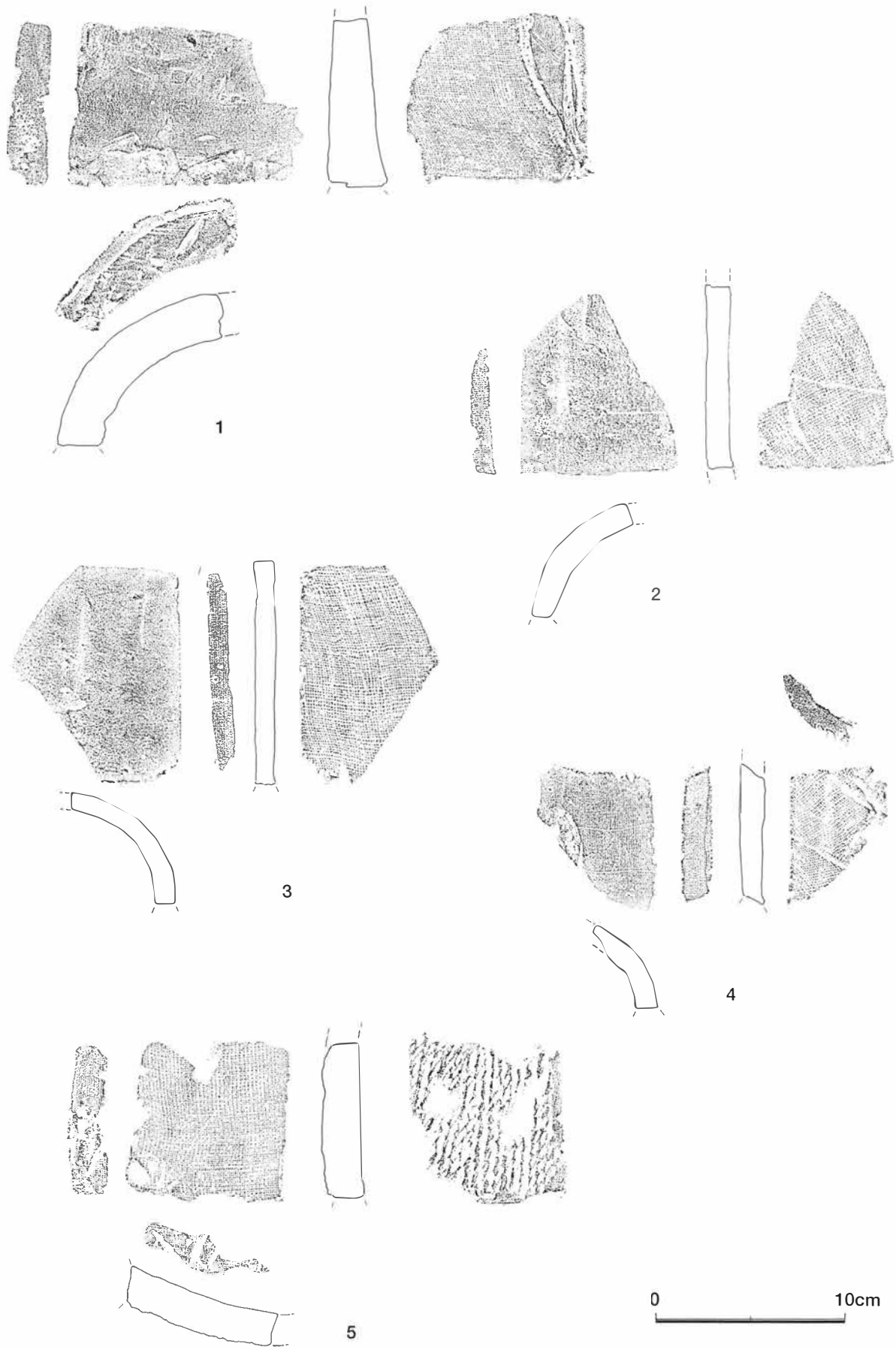


図29　瓦

第四章　まとめ

今回の報告は2180㎡の調査区の内、国庫補助事業分にあたる120㎡分の調査結果である。そのためこの報告は極めて限定的、断片的なものとならざるをえなかった。よってここでは今回の報告により得られた成果にプラスして、国庫調査区以外での明らかになっている事を添え、天神山城遺跡の概要を簡略に述べることとする。

本遺跡では縄文早期爪形文土器片や弥生中期の土器片等が検出されているが、確実に人間の生活の痕跡を見いだせるのは古墳時代前期からである。住居址は山裾近くに構築され、また遺物を意図的に集積させたと見られる土器溜りが3箇所検出されている。この中には北陸系の装飾器台等が含まれるものがあり、祭祀的な意味合いを持つものもあると考えられる。次に生活空間として利用されるのは古墳時代後期になってからである。本期に位置付けられる竪穴住居址は2軒のみであるが、包含層中からは遺物が多数出土しており、また天神山北東裾では祭祀遺構が検出されていることから(1)、当該期には天神山一帯に集落が形成されていたことが伺える。

奈良時代、8世紀前半の竪穴住居址4軒が検出されている。1号住居址からはほぼ完形の円面硯、土師器蓋等が検出されている。平安時代、9世紀末から10世紀前半においては1間×1間であるが、径約40㎝の柱を使用した3号建物址、縦板組の構造で黒漆塗りの小箱を検出した2号井戸址などが検出され、また包含層中から多量の瓦が出土したことなどからは寺院址等の存在を強く匂わせる。続く11世紀代と考えられる溝状遺構群は小支谷内部を区分けするように走っており、周辺に何らかの施設が存在したことを類推させる。

中世前半には池状遺構、地業面、1号掘立柱建物址等が構築される。しかしこの池状遺構は比較的短期間でその機能を失い、9号溝状遺構は池状遺構に重複しながら構築されている。池状遺構、9号溝状遺構の遺物はあまり時期差を持たず、13世紀前半代のものと見らる。地業面、1号掘立柱建物址の形成も9号溝状遺構と同時期ないしそれにやや遅れる時期のものであると考えられる。このような短期間での遺跡の変容が何に起因するのかは今後の検討課題である。また調査区は宝積寺谷に隣接し、これに関連した中世後半の遺構の検出が期待されたが、やぐら以外には特にそれと強く結び付けられるものは検出されなかった。しかし調査区外となっている小支谷最奥部にはやぐらと見られる埋没した岩穴が2、3確認できることからこの部分に寺院址に関連した遺構が存在する可能性がある。

近世から近代の時期には谷戸部は耕作地に利用され、開口部側が居住空間としての機能を果たしていたようである。5・6号溝を始めとして検出した多くの溝が谷戸の排水目的に利用され、水田址も実際にはこれと同じような機能をしていたのであろう。土地所有者の西山家には江戸時代末期のものと見られる古絵図が残されており、検出された遺構と古絵図に記された地割はほぼ位置関係を等しくするものであった。これら遺構には近世後半のものも含まれるので、近世後半の地割が近代にまで踏襲されていたことが伺える。

このように天神山城遺跡を概観した時、特に平安時代から中世前半にかけては一般集落とは異なる様相を呈していることが分かる。これらの時期の遺構群が果たして連続性を持つのであるのかどうかは今後の重要な検討課題である。

（1）　第1章註1参照。

表3　出土遺物観察表

池状遺構出土遺物　　法量の単位はcmである。（　　）内は復元数値

	器　種	観　察　内　容
1	山茶碗系捏鉢	覆土中出土　**残存率**　底部の一部　せいけい　ロクロ成形　**胎土**　長石多量に含む　**色調**　灰褐色
2	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径(14.4)cm　底径(6.8)cm　器高3.5cm　**残存率**　底部～体部の1/8　せいけい　手捏　口縁部内外面ナデ　体部外面指頭調整　内底面横ナデ　**胎土**　白色針状物質　**焼成**　良好　**色調**　橙褐色
3	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径(12.2)cm　底径(6.0)cm　器高3.5cm　**残存率**　底部～体部の1/4　せいけい　手捏　口縁部内外面ナデ　体部外面指頭調整　内底面横ナデ　**胎土**　白色針状物質　雲母　**焼成**　良好　**色調**　暗褐色
4	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径8.5cm　底径6.0cm　器高2.0cm　**残存率**　完形　せいけい　手捏　口縁部内外面ナデ　底部外面指頭調整　**胎土**　白色針状物質少量　**焼成**　やや良　**色調**　橙褐色
5	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径(8.9)cm　底径(6.6)cm　器高1.7cm　**残存率**　全体の約1/2　せいけい　手捏　口縁部内外面ナデ　底部外面指頭調整　**胎土**　長石　雲母少量　**焼成**　良好　**色調**　橙褐色
6	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径(9.0)cm　底径(6.4)cm　器高1.8cm　**残存率**　全体の約1/3　せいけい　手捏　口縁部内外面ナデ　底部外面指頭調整　**胎土**　長石　雲母　白色針状物質少量　**焼成**　良好　**色調**　明橙褐色
7	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径(8.6)cm　底径(6.0)cm　器高1.8cm　**残存率**　全体の約1/4　せいけい　口縁部内外面ナデ　底部外面指頭調整　**胎土**　長石　雲母少量　**焼成**　やや良　**色調**　橙褐色
8	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径(12.2)cm　底径(8.2)cm　器高3.7cm　**残存率**　全体の約1/3　せいけい　ロクロ成形　内外面回転ナデ底部内面一部横ナデ　**胎土**　細砂多量　雲母多　**焼成**　やや良　**色調**　暗黄褐色
9	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径(8.6)cm　底径(6.1)cm　器高2.2cm　**残存率**　全体の約4/5　せいけい　ロクロ成形　内外面回転ナデ　**胎土**　泥岩粒多雲母　長石　少量　**焼成**　やや不良　**色調**　暗黄褐色、橙褐色
10	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径7.6cm　底径6.1cm　器高1.5cm　**残存率**　全体の約3/4　せいけい　ロクロ成形　内外面回転ナデ　底部スノコ状圧痕　**胎土**　細砂　泥岩粒多　白色針状物質　雲母少量・**焼成**　やや不良　**色調**　暗橙褐色
11	かわらけ	覆土中出土　**法量**　口径9.8cm　底径6.6cm　器高2.0cm　**残存率**　ほぼ完形　せいけい　ロクロ成形　内外面回転ナデ　底部スノコ状圧痕　**胎土**　長石　雲母少量　**焼成**　やや良　**色調**　橙褐色
12	青磁小壺	底部出土　**法量**　口径(6.4)cm　**残存率**　口縁部～頚部の一部　**施釉範囲**　口唇部のみ露胎　内外面淡灰緑色釉　**胎土**　灰褐色　緻密　**焼成**　やや良
13	褐釉小壺	底部出土　**法量**　胴部最大径(9.6)cm　**残存率**　体部の約1/5　**施釉範囲**　残存部には殆どなし　**胎土**　灰褐色　緻密　**焼成**　良好
14	かわらけ	底部出土　**法量**　口径9.2cm　底径6.8cm　器高2.0cm　**残存率**　完形　せいけい　口縁部内外面ナデ　体部下半～底部指頭調整　**胎土**　雲母　白色針状物質少量　**焼成**　良好　**色調**　淡褐色
15	かわらけ	底部出土　**法量**　口径9.1cm　底径6.7cm　器高1.5cm　**残存率**　完形　せいけい　口縁部内外面ナデ　底部外面指頭調整　**胎土**　雲母　長石少量　**焼成**　やや良　**色調**　淡褐色
16	かわらけ	底部出土　**法量**　口径13.6　底径7.5cm　器高3.9cm　**残存率**　ほぼ完形　せいけい　ロクロ成形　内外面回転ナデ　底部内面一部横ナデ　**胎土**　泥岩粒多　長石　雲母少量　**焼成**　やや良　**色調**　淡褐色
17	かわらけ	底部出土　**法量**　口径(10.0)cm　底径(7.3)cm　器高1.9cm　**残存率**　全体の約1/2　せいけい　ロクロ成形　内外面回転ナデ　底部内面中央部のみ横ナデ　**胎土**　泥岩粒多　白色針状物質　長石　雲母少量　**焼成**　やや不良　**色調**　淡褐色

18	かわらけ	南東部落ち込み **法量** 口径(11.8)cm 底径(6.1)cm 器高3.5cm **残存率** 全体の約1/2 せいけい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 底部内面無調整 **胎土** 雲母やや多 白色針状物質 長石 **焼成** やや良 **色調** 橙褐色
19	かわらけ	南東部落ち込み **法量** 口径(12.6) 底径(6.8)cm 器高3.0cm **残存率** 全体の約1/5 せいけい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 **胎土** 長石 白色針状物質少量 **焼成** やや良 **色調** 淡褐色
20	かわらけ	南東部落ち込み **法量** 口径(9.5)cm 底径(7.3)cm 器高1.8cm **残存率** 全体の約1/3 せいけい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 **胎土** 雲母 長石少量 **焼成** やや良 **色調** 橙褐色

8号溝状遺構出土遺物

1	かわらけ	覆土最上層 **法量** 口径10.2cm 底径6.7cm 器高3.2cm **残存率** ほぼ完形 せいけい ロクロ成形 内外面回転ナデ **胎土** 長石 雲母 白色針状物質やや多 **焼成** やや不良 **色調** 暗橙褐色

16号溝状遺構出土遺物

1	灰釉皿	覆土中 **法量** 口径(13.8)cm 底径6.0cm 器高3.4cm **残存率** 全体の約1/3 せいけい ロクロ成形 高台部貼り付け **施釉範囲** 口縁部内外面、漬け掛け **胎土** 長石、雲母を少量 **色調** 灰白色
2	土師器坏	覆土中 **法量** 口径(10.4)cm 底径(5.6)cm 器高3.7cm **残存率** 口縁部～体部の1/3 せいけい ロクロ成形 底部回転糸切り無調整 **胎土** 長石、雲母やや多い **焼成** 普通 **色調** 暗橙褐色

17号溝状遺構出土遺物

3	土師器高台付坏	覆土中 **法量** 底径7.4cm **残存率** 底部のみ せいけい 回転糸切り後、高台部貼り付け、回転ナデ **胎土** 長石少量 **焼成** 良好 **色調** 橙褐色

216号土坑出土遺物

1	須恵器坏	覆土中 **法量** 口径(12.0)cm **残存率** 口縁部～体部の約1/8 せいけい ロクロ成形 **胎土** 長石 雲母少量 **焼成** やや不良 **色調** 灰白色
2	須恵器碗	覆土中 **法量** 底径6.8cm **残存率** 体部下半～底部の約1/8 せいけい ロクロ成形 底部は回転糸切り後、高台部貼り付け **胎土** 長石 **焼成** 普通 **色調** 灰色
3	土師器坏	覆土中 **法量** 口径(12.7)cm 底径(5.6)cm 器高3.5cm **残存率** 全体の約1/6 せいけい 口縁部横ナデ 体部二段ヘラケズリ 底部ヘラケズリ **胎土** 雲母多量 石英 赤色スコリア少量 **焼成** 良好 **色調** 暗橙褐色 口縁部外面一部ススける

1号土器溜り出土遺物

1	灰釉碗	**法量** 口径(12.8)cm **残存率** 口縁部～体部の約1/6 せいけい ロクロ成形 **施釉範囲** 口縁部～体部上半 漬けがけ **胎土** 長石 **焼成** 良好 **色調** 灰白色
2	土師器高台付碗	**法量** 底径9.4cm **残存率** 底部のみ完存 せいけい 高台部貼り付け後、ナデ **胎土** 雲母 赤色スコリアを含み、白色針状物質を少量含む **焼成** 良好 **色調** 橙褐色を基調とするが、椀部内底面および高台部外面の一部がススける
3	土師器坏	**法量** 口径10.9cm 底径5.4cm 器高3.5cm **残存率** ほぼ完形 せいけい ロクロ成形 底部回転糸切り無調整 **胎土** 雲母、長石少量 白色針状物質極少量 **焼成** やや不良 **色調** 暗橙褐色を基調とするが、体部内外面共にすすけている
4	土師器坏	**法量** 口径(10.4)cm 底径4.2cm 器高3.9cm **残存率** 全体の1/4 せいけい ロクロ成形 底部回転糸切り無調整 **胎土** 長石多く含み、赤色スコリア少量 **焼成** 良好 **色調** 橙褐色

5	土師器坏	**法量** 口径10.2cm 底径5.0cm 器高3.5cm **残存率** 完形 **せいけい** ロクロ成形 底部回転糸切り無調整 **胎土** 長石少量 **焼成** 普通 **色調** 灰黄褐色を基調とするが、内外面、底部の大半がススけており、タール状物質の付着が見られる
6	土師器坏	**法量** 口径(12.6)cm 底径(6.0)cm 器高4.6cm **残存率** 全体の1/4 **せいけい** ロクロ成形 底部回転糸切り後、ナデ消しか **胎土** 長石、赤色スコリア多く含み、白色針状物質極少量含む **焼成** やや良 **色調** 暗橙褐色

2号土器溜り出土遺物

1	須恵器碗	**法量** 口径(17.0)cm **残存率** 口縁部～体部の約1/8 **せいけい** ロクロ成形 **胎土** 長石 **焼成** 普通 **色調** 灰白
2	須恵器碗	**法量** 口径(15.3)cm 底径(6.4)cm 器高5.5cm **残存率** 全体の約1/4 **せいけい** ロクロ成形 **胎土** 長石多 雲母少量 **焼成** 良好 **色調** 灰褐色
3	須恵器坏	**法量** 口径(12.2)cm **残存率** 口縁部～体部の1/6 **せいけい** ロクロ成形 **胎土** 長石多 **焼成**やや不良 **色調** 灰褐色（体部下半はやや橙色味を帯びている）
4	須恵器高台付皿	**法量** 口径13.6cm 底径5.8cm 器高2.8cm **残存率** 全体の1/2 **せいけい** ロクロ成形、高台部貼り付け **胎土** 長石多 **焼成** 良好 **色調** 灰褐色
5	土師器坏	**法量** 底径7.0cm **残存率** 底部と体部下半の一部 **せいけい** ロクロ成形 底部回転糸切り無調整 **胎土** 赤色スコリア多 長石、雲母 **焼成** 良好 **色調** 橙褐色
6	土師器坏	**法量** 口径13.1cm 底径6.8cm 器高3.8cm **残存率** 体部の一部を欠損 **せいけい** 口縁部横ナデ 体部二段ヘラケズリ 底部ヘラケズリ **胎土** 雲母やや多、長石 **焼成** 良好 **色調** 淡橙褐色
7	土師器坏	**法量** 口径(10.6)cm 底径7.2cm 器高3.7cm **残存率** 全体の1/4 **せいけい** 口縁部横ナデ 体部横方向一段のヘラケズリ 体部中位に指頭圧痕残す **胎土** 赤色スコリア多 長石、雲母少 **焼成** 良好 **色調** 橙褐色
8	須恵器長頸壷	**法量** 底径8.9cm **残存率** 底部から体部の1/3 **せいけい** ロクロ成形、体部下半ヘラケズリ **胎土** 長石多 **焼成** 良好 **色調** 灰褐色
9	土師器甕	**法量** 口縁部最大径25.2cm 胴部最大径22.2cm **残存率** 全体の1/3 **せいけい** 口縁部横ナデ 体部外面ハケ調整後、ナデ 体部内面ハケ調整後、指頭ないしナデ調整 **胎土** 雲母やや多 細砂やや多 **焼成** やや良 **色調** 暗橙褐色（体部下半はススけている）

3号土器溜り出土遺物

1	S字状口縁台付甕	**法量** 口縁部最大径17.5cm 胴部最大径23.0cm 脚台部径8.8cm 脚台部高5.6cm 器高27.2cm **せいけい** 外面：口縁部横ナデ 体部上半分左傾斜にハケ 体部下半右傾斜のハケ 脚台部接合部付近やや斜方向のハケ 脚台部ナデ 内面：体部、脚部とも指頭調整 一部横方向のヘラナデ **胎土** 雲母、長石多量 **焼成** 良好 **色調** 暗褐色 脚台部は淡褐色
2	土師器甕	**法量** 胴部最大径24.4cm 底径6.2cm **残存率** 体部中位～底部の1/2 **せいけい** 外面：体部やや斜方向のハケ後、縦方向の細いヘラナデをほぼ全面に底部ヘラナデ 内面：体部上半横方向のヘラナデ 体部下半～底部同心円状のハケ **胎土** 長石、雲母、赤色スコリア **焼成** 良好 **色調** 橙褐色（底部～体部下半の一部にスス付着）
3	土師器甕	**法量** 胴部最大径19.9cm 底径5.9cm **残存率** 体部上半～底部の1/3 **せいけい** 外面：体部上半斜方向ハケ 体部下半斜方向にやや粗いハケ 内面：体部横方向のヘラナデ 底部 同心円状幅約1.5cmのヘラナデ **胎土** 粗砂粒やや多く含む 長石、雲母少量 **焼成** 普通 **色調** 橙褐色 一部淡褐色（体部の一部にスス付着）
4	土師器甑	**法量** 口径17.9cm 底径4.6cm 器高13.6cm **残存率** 口縁部一部欠損 **せいけい** 外面：口縁部横方向にハケ後、指頭調整 体部縦方向にハケ後、縦方向にヘラミガキ 底部穿穴後、指ナデ後、一部ヘラミガキ 内面：体部下半～底部横方向にハケ、口縁部～体部上半横方向にハケ→体部下半一部に横方向ヘラミガキ **胎土** 長石、雲母、赤色スコリア、白色針状物質 **焼成** 良好 **色調** 淡褐色 **備考** 底部に径約1.5cmの穿穴あり
5	手捏土器	**法量** 口径7.2cm 底径3.3cm 器高5.8cm **残存率** 全体の3/4 **せいけい** 外面：指頭調整、口縁部一部横ナデ 内面：口縁部～体部指頭調整 **胎土** 赤色スコリア、雲母多量 石英、白色針状物質少量 **焼成** 普通 **色調** 暗橙褐色 **備考** 底部外面にはつまみ出した高台部を造る

6	土師器広口壷	**法量** 口縁部径10.7cm 胴部最大径10.3cm 底部径3.1cm 器高10.8cm **残存率** 完形 **せいけい** 外面：口縁部縦方向のハケ後、指頭調整体部縦方向のハケ後、指頭調整 内面：口縁部横方向にハケ後、指頭調整 **胎土** 長石、雲母含む 白色針状物質少量 **焼成** 普通 **色調** 暗橙褐色（底部から口縁部の一部スス付着）
7	土師器広口壷	**法量** 口縁部径10.0cm 胴部最大径10.7cm 底部径2.0cm 器高11.1cm **残存率** 完形 **せいけい** 外面：口縁部縦方向のハケ後、指頭調整、一部横ナデ 体部斜方向のハケ後、指頭調整 内面：口縁部横方向にハケ後、指頭調整 **胎土** 長石、雲母含む 白色針状物質少量 **焼成** 普通 **色調** 暗橙褐色および灰褐色（体部～口縁部の一部にスス付着）
8	土師器鉢	**法量** 口径11.9cm 底径4.1cm 器高5.5cm **残存率** 完形 **せいけい** 外面：体部縦方向にハケ、一部指おさえ 口縁部横ナデ 底部際斜方向のヘラケズリ 内面：口縁部～体部横方向のハケ後、ナデ **胎土** 長石、赤色スコリア、雲母含む 白色針状物質少量 **焼成** やや良 **色調** 淡褐色

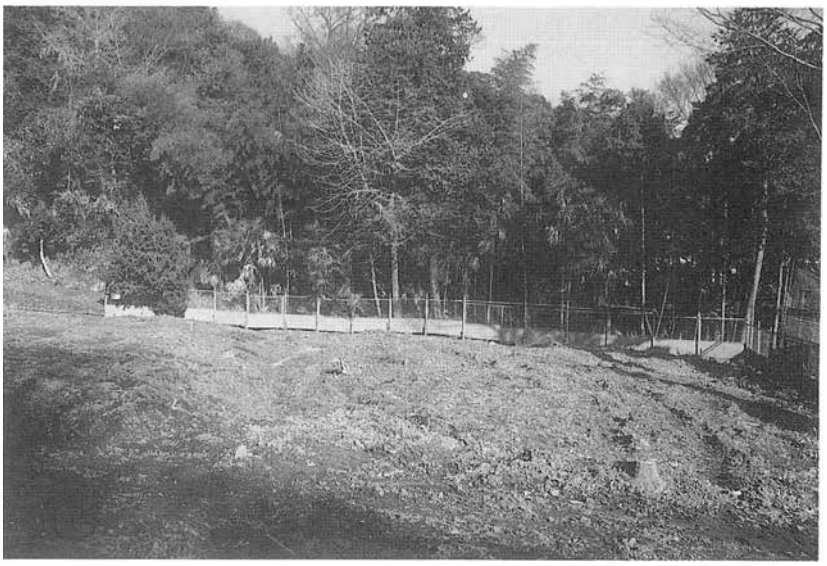
その他の出土遺物

1	同安窯系青磁小皿	B区地業面下包含層 **法量** 口径(10.2)cm **残存率** 口縁部極一部 **施釉範囲** 全面 釉薬は淡緑色 貫入やや多い **胎土** 灰白色 気泡少ない **焼成** やや良
2	同安窯系青磁小皿	B区地業面上包含層 **法量** 口径(9.7)cm **残存率** 口縁部極一部 **施釉範囲** 全面 釉薬は暗緑色 外面に貫入やや目立つ **胎土** 灰色 **焼成** やや良
3	青白磁碗	B区地業面上包含層 **法量** 口径(16.3)cm **残存率** 口縁部～体部の一部 **施釉範囲** 全面 釉薬は淡水青色 貫入やや多い **胎土** 灰白色 **焼成** 良好
4	白磁玉縁碗	B区地業面下包含層 **法量** (14.7)cm **残存率** 口縁部の一部 **施釉範囲** 全面 釉薬は淡灰白色 **胎土** 白色 緻密 **焼成** 良好
5	砥石	B区地業面上包含層 **法量** 全長9.9cm 幅4.1cm 厚さ3.0cm **残存率** 両端部欠損 **備考** 仕上砥 硬質砂粒凝灰岩
6	土師器高台付坏	**法量** 口径(12.0)cm 底径(7.6)cm 器高3.6cm **残存率** 全体の1/3 **せいけい** ロクロ成形 高台部貼り付け **胎土** 長石、雲母少量 白色針状物質極少量 **焼成** やや良 **色調** 暗橙褐色
7	須恵器坏	池状遺構覆土中 **法量** 口径(12.3)cm 底径5.6cm 器高3.8cm **残存率** 全体の1/2 **せいけい** ロクロ成形 **胎土** 長石、雲母 **焼成** やや良 **色調** 灰褐色
8	土師器長胴甕	国庫A区古代包含層 **法量** 口縁部径19.2cm 胴部最大径19.5cm **残存率** 口縁部～体部下半の約1/2 **せいけい** 外面：体部縦方向にハケ後、上位には横方向ハケ 口縁部横ナデ 内面：縦方向ヘラナデ後、指頭調整 口縁部横ナデ **胎土** 粗砂粒多 長石、雲母、白色針状物質少量 **焼成** やや不良 **色調** 灰茶褐色（体部内外面全体に薄いスス付着 一部赤変）
9	土師器甕	国庫A区古代包含層 **法量** 底部径7.9cm **残存率** 底部のみ完存、体部一部 **せいけい** 外面：体部縦方向にハケ 底部木葉痕内面：ヘラナデ **胎土** 粗い砂粒多く含む 長石、雲母含む 白色針状物質極少量 **焼成** やや不良 **色調** 灰茶褐色（内面全体にスス付着） **備考** 8とおそらく同一個体

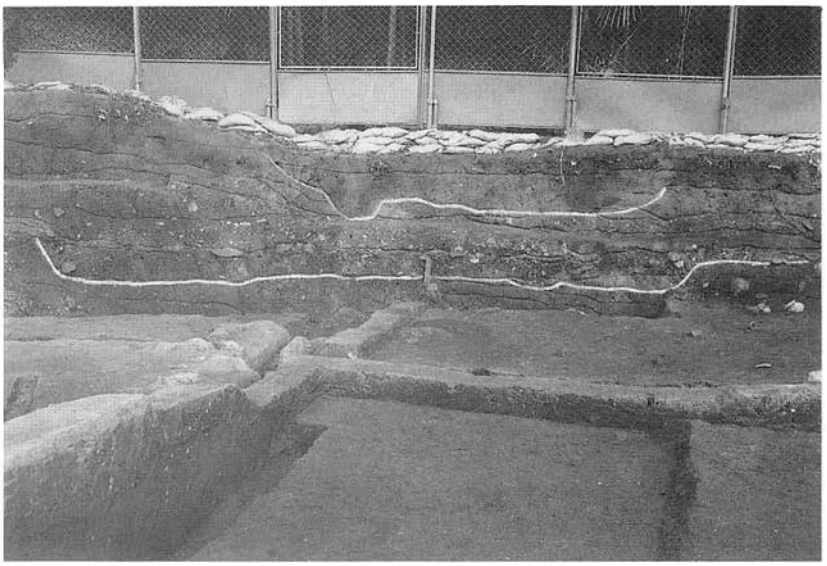
瓦

1	丸瓦	17号溝状遺構覆土中 厚さ2.5cm 凹面 布目 凸面 ナデ **胎土** 灰白色 **焼成** 良好
2	丸瓦	池状遺構覆土中 厚さ1.4cm 凹面 布目 凸面 ナデ **胎土** 灰色 **焼成** やや軟質
3	丸瓦	A区古代末包含層 厚さ1.2cm 凹面 布目 凸面 ナデ **胎土** 灰色 **焼成** 良好 凸面の一部に釉
4	丸瓦	B区中世包含層 厚さ1.3cm 凹面 布面 凸面 ナデ **胎土** 灰褐色 **焼成** やや良好
5	平瓦	池状遺構覆土中 厚さ1.9cm 凹面 布目 凸面 縄目 **胎土** 灰褐色 **焼成** やや良好

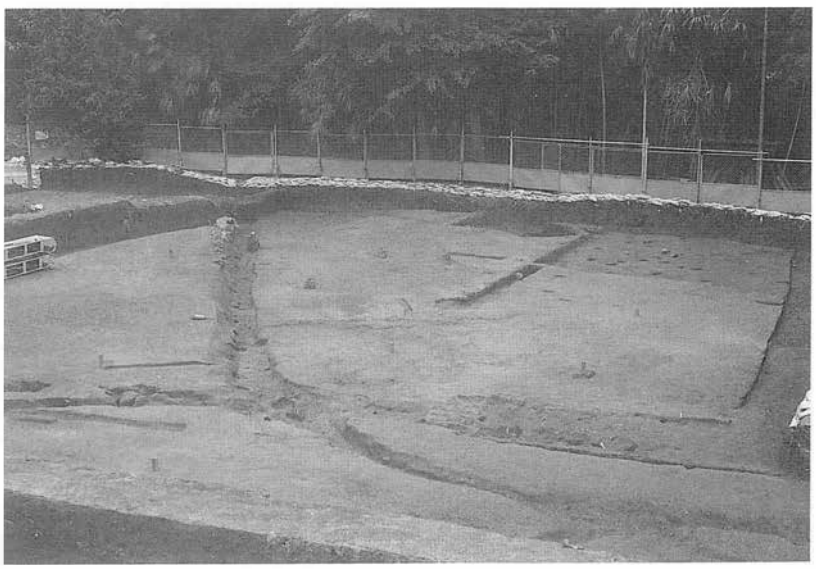
写　真　図　版



◀1. 調査前状況



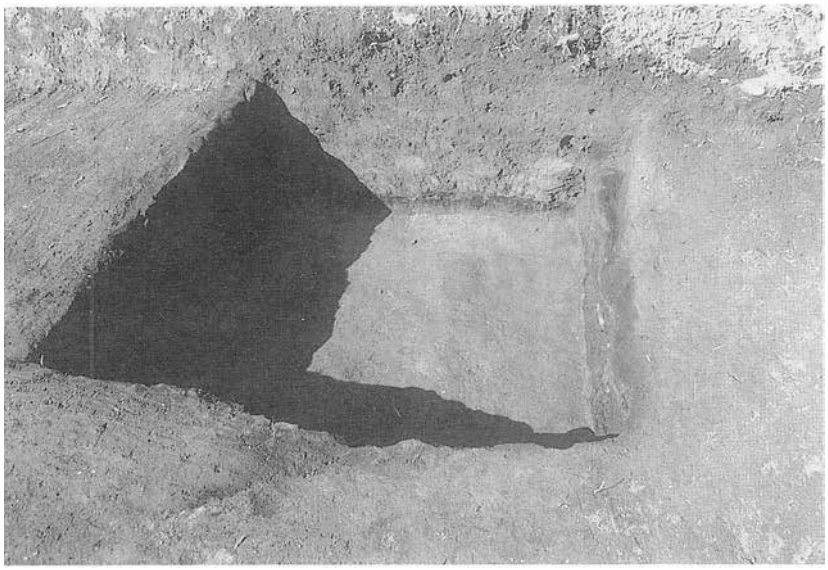
▶2. 堆積土層（水田址・池状遺構）



◀3. A区・B区近世全景

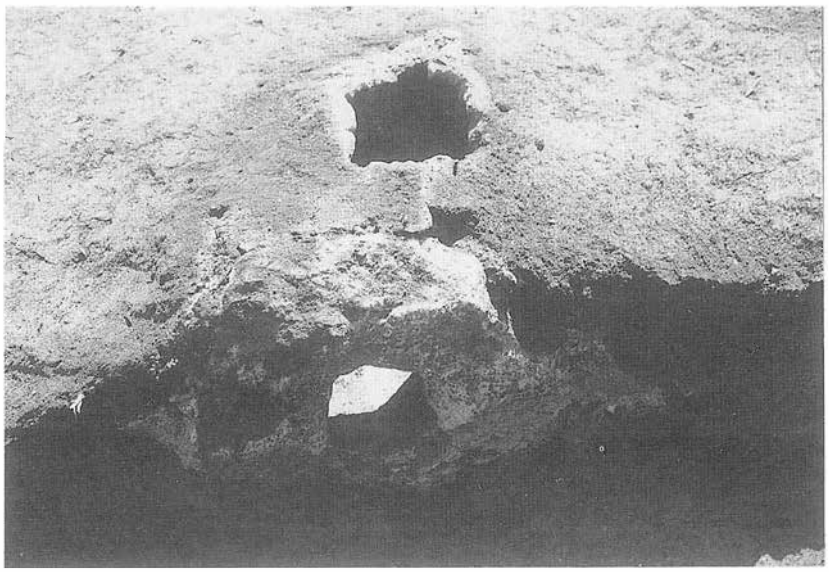
図版2

▶1. 5号溝状遺構

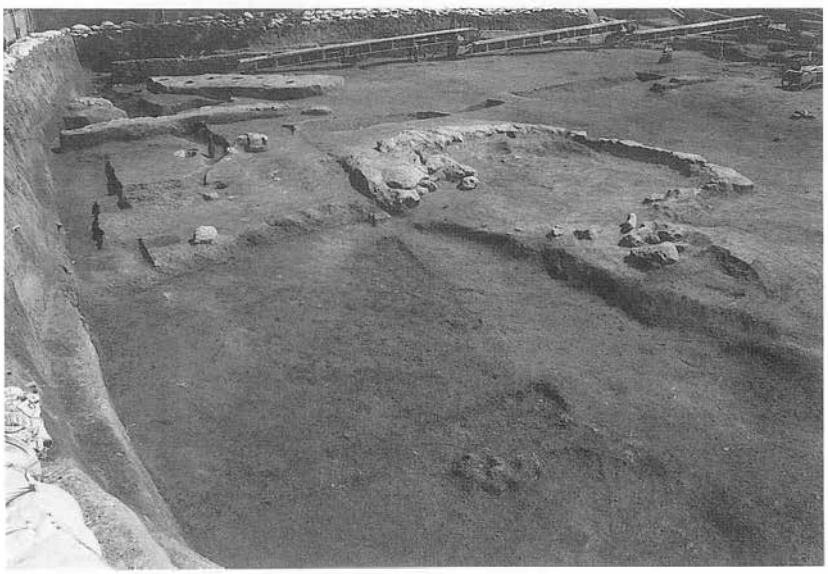


◀2. 炭焼窯

▶3. 炭焼窯煙道部



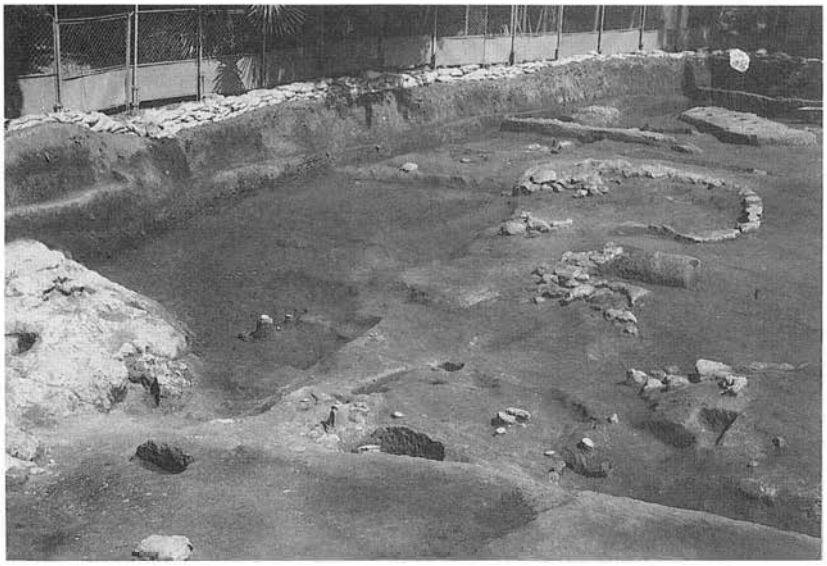
▲1. A区・B区　中世全景



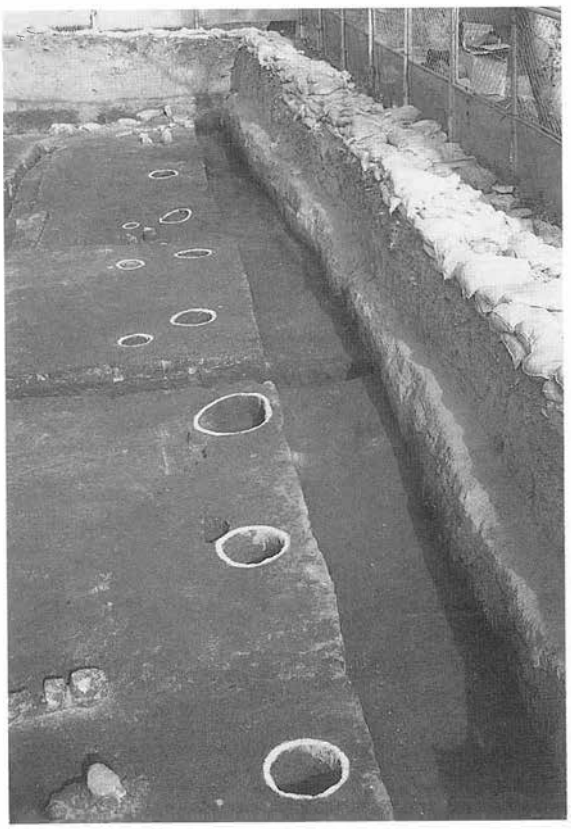
◀2. 池状遺構

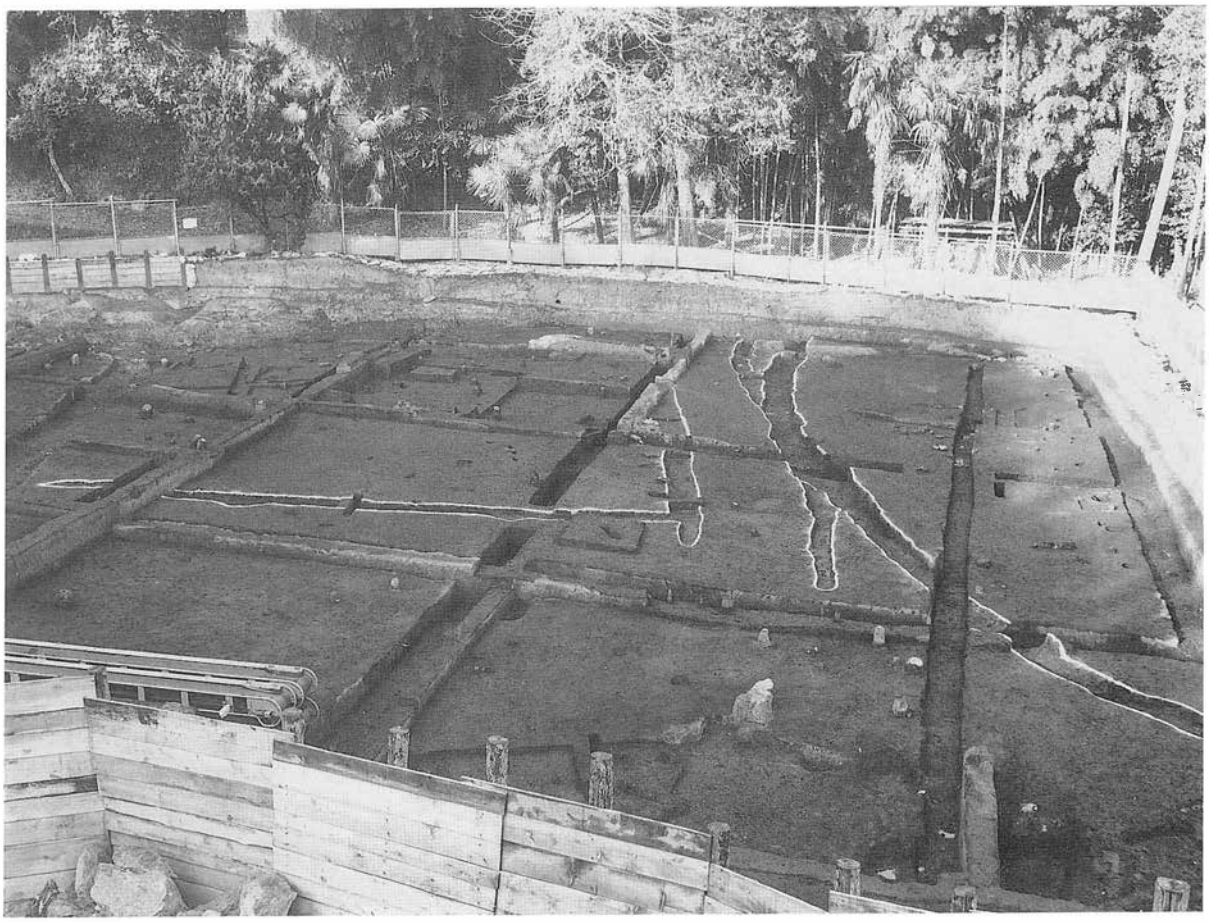
図版4

▶1. 池状遺構



▶2. 1号掘立柱建物址



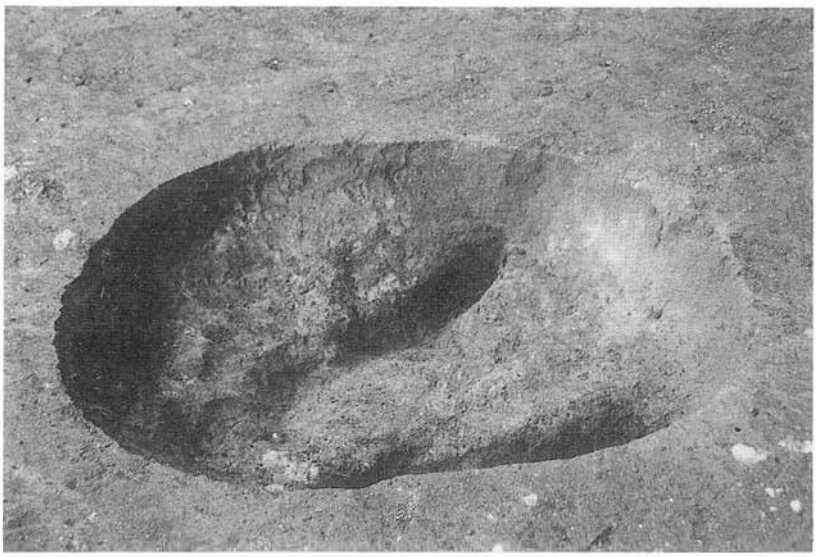


▲1. A区・B区　古代全景

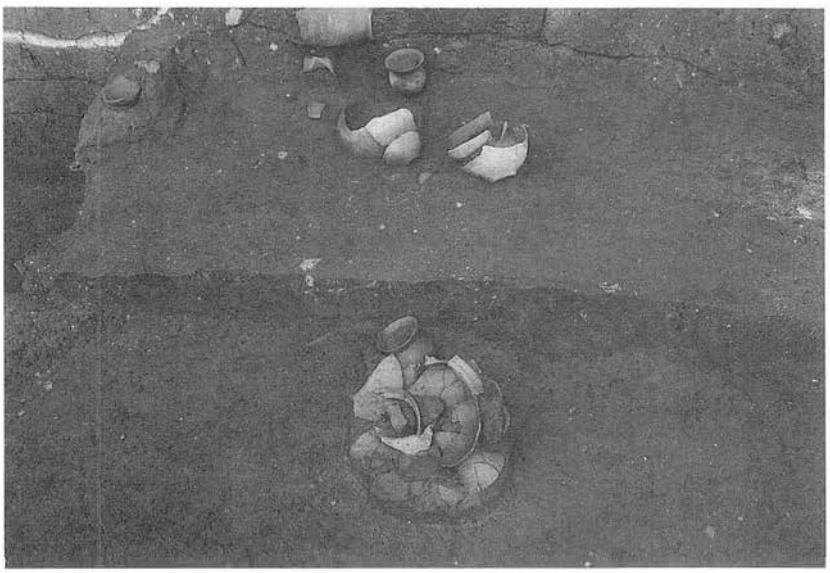
◀2. 16・17号溝状遺構

図版6

◀1. 2号土器溜り

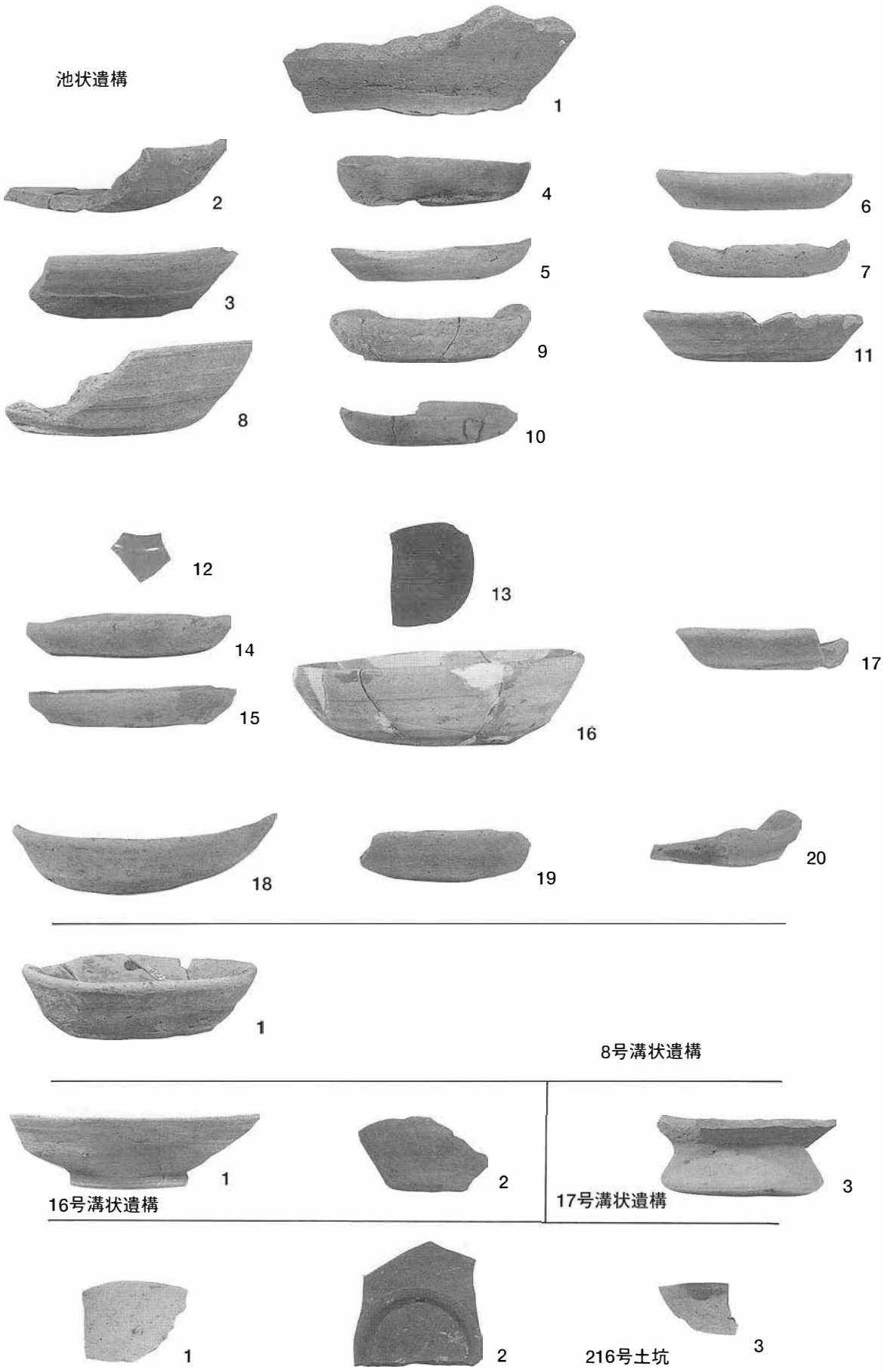


▶2. 216号土坑



◀3. 3号土器溜り

池状遺構



1

8号溝状遺構

1

16号溝状遺構

2

3

17号溝状遺構

1

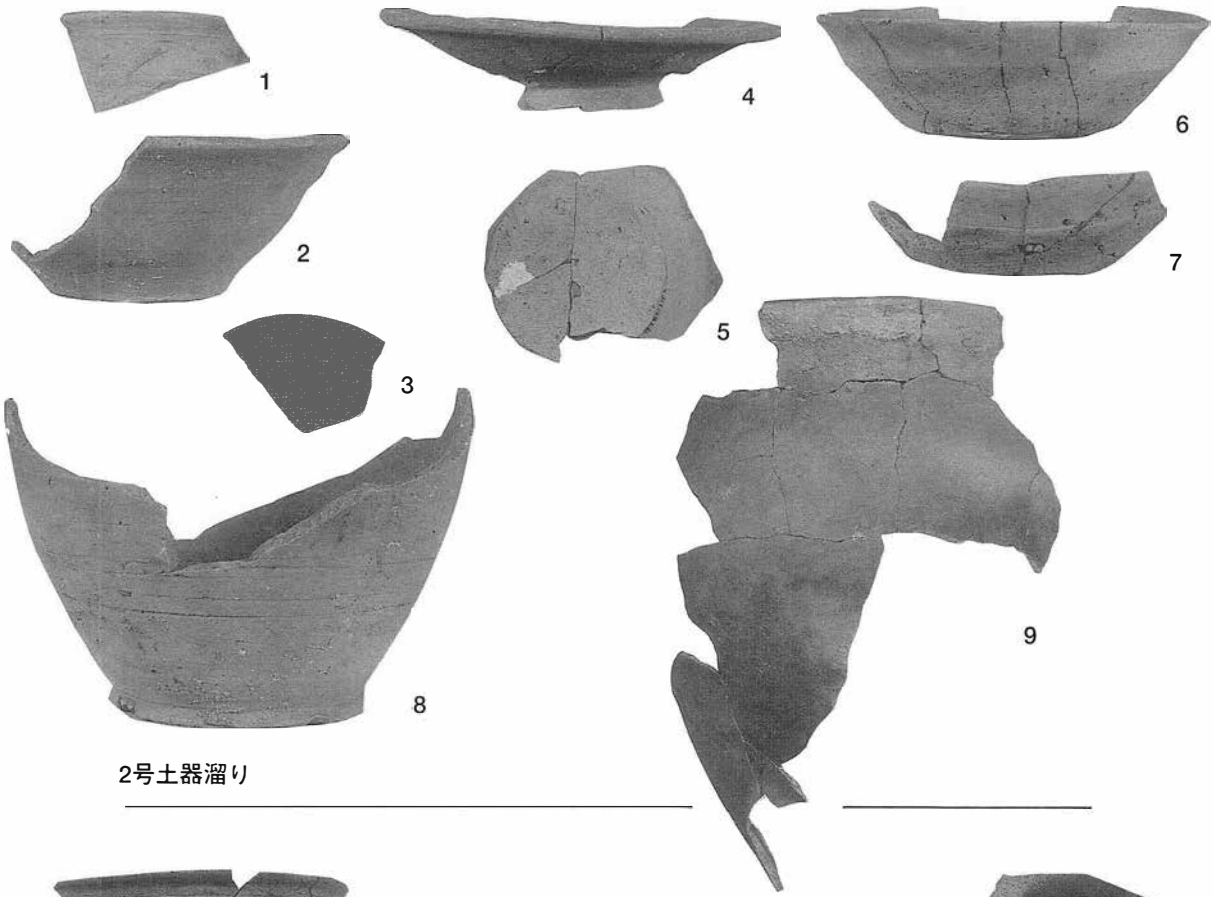
2

3

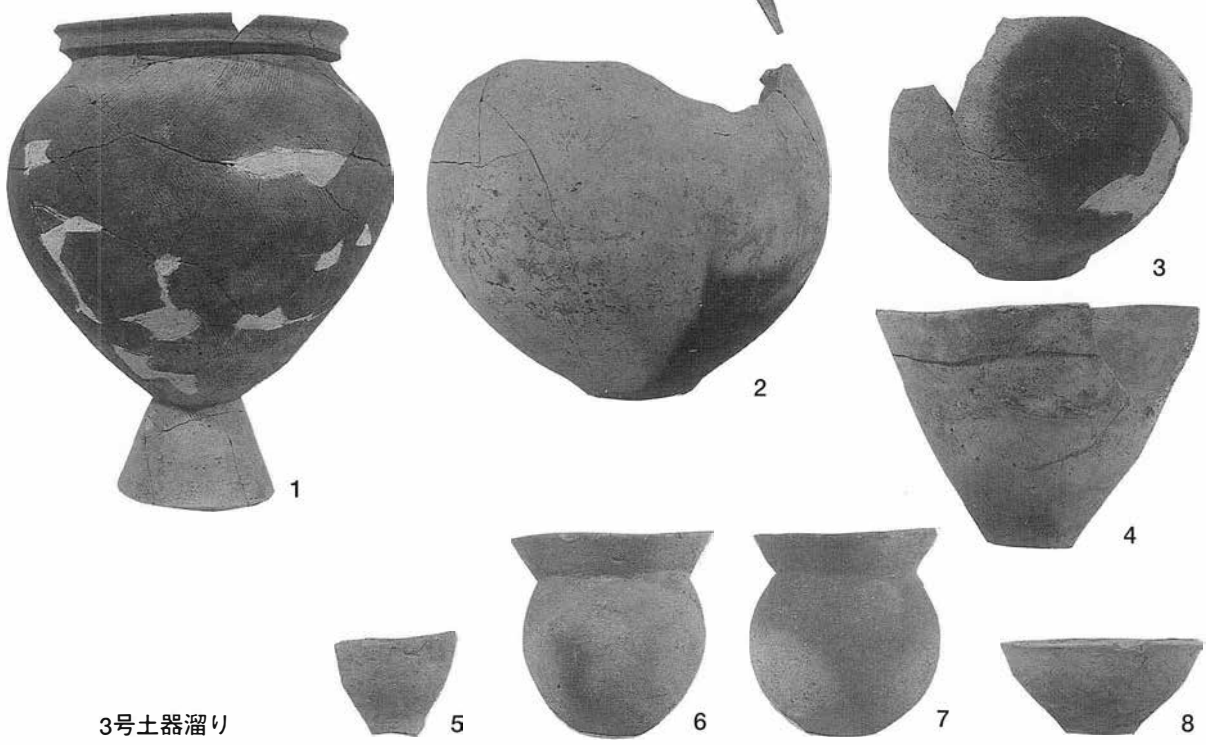
216号土坑

図版8

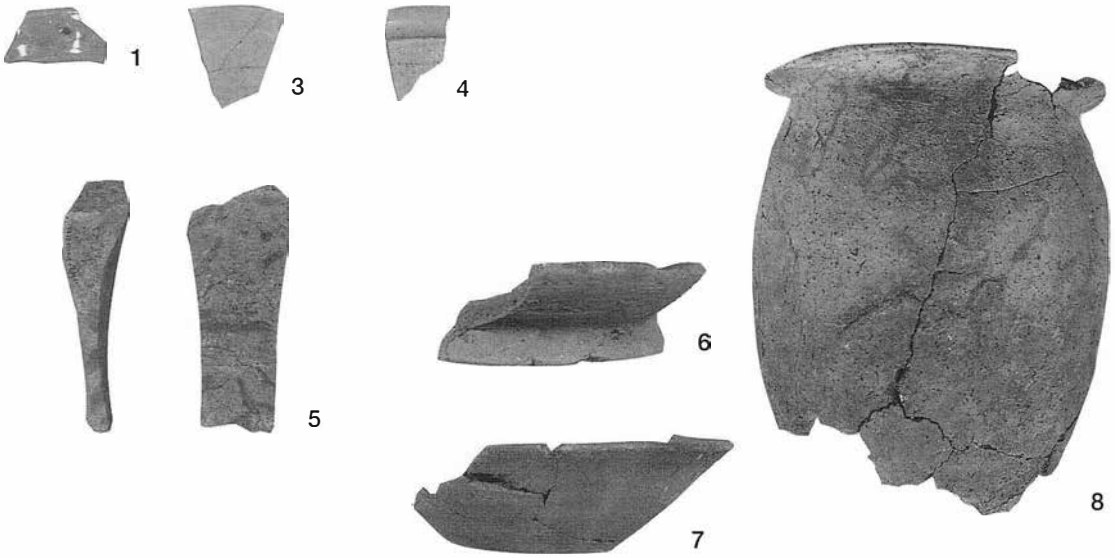
1号土器溜り



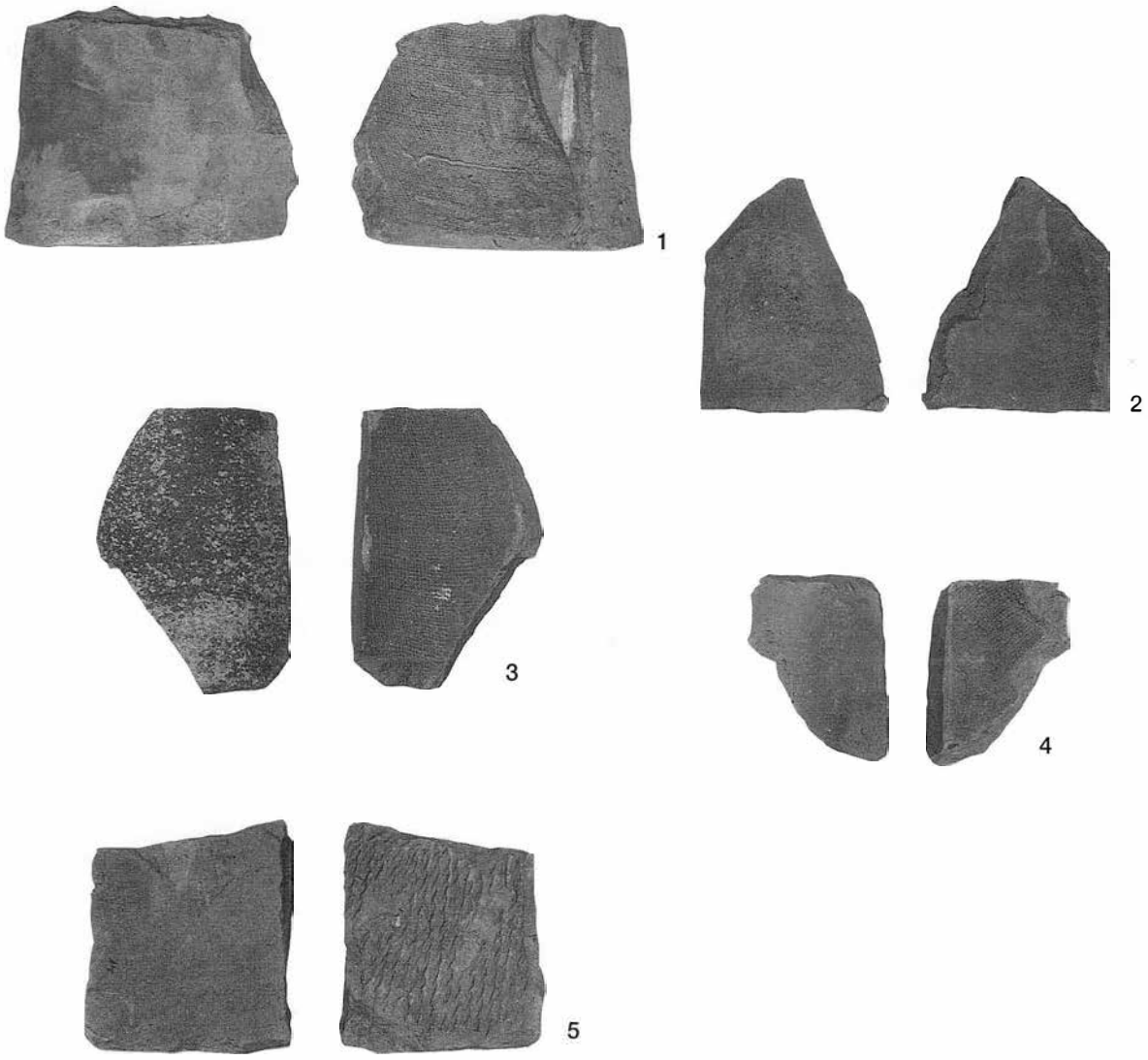
2号土器溜り



3号土器溜り



その他の出土遺物



瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成7年度発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	松山敬一朗
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
てんじんやまじょういせき 天神山城遺跡	神奈川県鎌倉市 山崎字宮廻760番外	204	384	35度 21分 51秒	139度 26分 38秒	19950213 ～ 19950831	120	自己用住宅併用共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天神山城遺跡	集落址	古墳時代前期 古墳時代後期 平安時代 鎌倉時代 戦国時代 近世	竪穴住居址 25軒 掘建柱建物 3棟 井戸址 2基 池状遺構 溝状遺構 18条 土坑 約100	土師器・須恵器 灰釉緑釉 中国産陶磁器 国産陶磁器 木製品・石製品	平安時代の寺院址と思われる施設 13世紀前半の池状遺構

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

わかみやおおじしゅうへんいせきぐん

御成町788番３外地点

例　言

1．本報は鎌倉市御成町788番３外地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は店舗併用住宅の建設に伴い、国庫補助事業と原因者負担事業とが並行して行なわれたが、本報には国庫補助事業分の調査成果を納めた。

3．国庫補助事業分の調査は、1995年３月９日～４月15日までの間、調査面積約68㎡を対象として鎌倉市教育委員会が実施した。

4．現地での調査体制は以下の通り。

主任調査員　菊川英政（鎌倉考古学研究所）
調　査　員　石丸運人
調査補助員　秋山哲雄・田畑衣理・丹　行正・山本直孝
協力機関名　㈳鎌倉市シルバー人材センター
㈱清興建設
空中　写真　㈱シン技術コンサル

5．本報作成は以下の分担で行なった。

遺構版作成　菊川
遺物　実測　及川加代子・太田美知子・兼行恍枝・坂倉美恵子・丹　行正・山上玉恵・渡部律子
遺物版作成　兼行
遺物　写真　兼行
写真版作成　兼行
原稿　執筆　兼行（第三章の遺物項すべて）
菊川（第一～四章）
編　　集　菊川

6．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境……53
第二章　調査の概要……56
1．調査の経過……56
2．調査方法……56
3．測量軸の設定……56
第三章　検出遺構と出土遺物……59
1．層序と生活面……59
2．出土遺物の概要……59
3．一面の遺構と遺物……60
4．二面の遺構と遺物……62
5．三面の遺構と遺物……74
第四章　まとめ……79
※　報告書抄録……95

挿　図　目　次

図1　遺跡範囲と調査地点……54
図2　調査地点周辺の遺跡……55
図3　グリッド設定図……56
図4　調査区設定図……57
図5　土層堆積図……58
図6　石組溝……60
図7　石組溝出土遺物……61
図8　一面上包含層出土遺物……61
図9　馬下顎骨……62
図10　二面遺構全体図……63
図11　道路遺構出土遺物……64
図12　木組溝……65
図13　木組溝出土遺物（1）……66
図14　木組溝出土遺物（2）……67
図15　木組遺構1……69
図16　木組遺構1出土遺物……69
図17　木組遺構2……70
図18　木組遺構2出土遺物（1）……70
図19　木組遺構2出土遺物（2）……71
図20　木組遺構3……72

図21　三面遺構全体図……73
図22　方形竪穴１……75
図23　方形竪穴１出土遺物（１）……76
図24　方形竪穴１出土遺物（２）……77
図25　方形竪穴１出土遺物（３）……78

図　版　目　次

図版１　調査地点全景（空中撮影）……83
図版２　石組溝……84
図版３　道路遺構、版築状態、馬下顎骨……85
図版４　木組溝、木組の状態……86
図版５　木組遺構１、木組遺構２……87
図版６　木組遺構２（部分）、木組遺構３……88
図版７　方形竪穴１、張り出し部遺物出土状態……89
図版８　方形竪穴１（部分）……90
図版９　出土遺物（１）……91
図版10　出土遺物（２）……92
図版11　出土遺物（３）……93
図版12　出土遺物（４）……94

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群（No.242）は鎌倉旧市街地のほぼ中央に位置し、鶴岡八幡宮から由比ケ浜に至る現在の若宮大路を中軸としてその東西両側に広がっている。神奈川県遺跡台帳には鶴岡八幡宮社頭にある北条時房・顕時邸跡（No.278）、北条小町邸跡（No.282）、宇津宮辻子幕府跡（No.239）を除いて北辺とし、宝戒寺裏から滑川沿いに南下し夷堂橋を渡って大町四つ角（米町辻）に至る線を東辺、寿福寺門前から今小路沿いに南下して六地蔵交差点（塔ノ辻）に至る線を西辺とし、東辺と西辺を結ぶ国道134号線（大町大路）を南辺とした遺跡範囲が設定されている。（図１参照）

本遺跡が立地する鎌倉中央部の地勢を見ると、遺跡東辺を流れる滑川の右岸には段丘が発達し、若宮大路の東側一帯からＪＲ鎌倉駅周辺に標高７～９ｍ前後の微高地を形成している。若宮大路の西側では、北西及び西方の谷奥からそれぞれ流れ出る扇ケ谷川と左助川の流域で標高７～８ｍを測るが、中世初期には標高4.5～6.5ｍの低地（註１）であったことが確認され、扇ケ谷川の旧流路もより南方へ延びて、ＪＲ線と若宮大路が交差する辺りで滑川に合流していたと考えられている。現在の標高はＪＲ線ガード下で約3.50ｍと最も低い数値である。また、遺跡の南辺を限る国道134号線以南には砂丘が広がり、砂丘頂部は若宮大路一の鳥居辺りで標高10ｍ前後を測って西方へ続いている。この砂丘の北限は遺跡範囲の南西部におよび、御成小学校内の調査（註２）でも確認されている。

さて、本調査地点は若宮大路周辺遺跡群の西辺（今小路）に接し、地勢上では砂丘北限から低地へと移行する辺りの旧扇ケ谷川右岸にあたる。この付近にはかつて「諏訪池」と呼ばれる小さな池があり、傍らに「諏訪神社」が祀られていたという。鎌倉市役所が現在地へ移転したのは昭和45年、それに先立ち諏訪神社は市役所北側の山裾へ遷座し、池も埋め立てられて市役所駐車場となった。御成隧道が完成したのは昭和37年とやや古いが、丁度この頃を境に調査地点周辺は大きく変貌したものと思われる。

池の名称にも冠された「諏訪」は、諏訪氏の屋敷があったとの伝承に由来する。江戸時代の地誌『新編鎌倉志』（貞享二年／1685年刊）には「諏訪屋敷ハ千葉屋敷ノ東南ノ畠ヲ云フ」とあり、「千葉屋敷ハ天狗堂ノ東ノ畠ヲ云フ」とある。これだけでは二つの屋敷がどこにあったかよく判らないが、天保三年（1832年）に描かれた「扇ケ谷村絵図」(註３）に「千葉地」「天狗堂崎」の名が見える。「天狗堂崎」は現在の御成小学校背後に延びた細い尾根の先端部、「千葉地」は調査地点の北西部、山裾に近い一帯を指していたらしい。これはあくまでも近世における伝承地であり、中世史料や発掘調査によって裏付けられた訳ではない。むしろ『吾妻鏡』には千葉氏が成胤、胤綱と代々甘縄に居宅を構えており、諏訪盛重は八幡宮社頭に推定される北条泰時の小町亭南角に宅のあったことを記している。また、諏訪六郎左衛門入道は扇ケ谷（「金沢文庫古文書」）、諏訪刑部左衛門入道は山ノ内（「毛利家文書」）に起居していたことも判っている（註４）が、調査地点に直接関わる記事は見出すことができない。

それでは発掘調査から何が判ったのか、周辺部の遺跡を概観しておきたい。（図２参照）

千葉地遺跡（地点２）；1980年調査、現在はスーパー紀ノ國屋。13世紀中頃～14世紀後半にかかる５枚の生活面が確認され、道路遺構、基壇状遺構、方形竪穴建築址、掘立柱建物、溝、井戸、などが検出された。特に、両側に溝を伴う道路遺構は幅約５ｍと広く東西に延び、その北側では道路に直交する溝によって区画が形成されていた。出土遺物の様相から武家屋敷あるいは寺院の一画と考えられている。

千葉地東遺跡（地点３）；1984年調査、現在は神奈川県企業庁水道局。13世紀初頭～15世紀中頃にかかる９枚の生活面が確認され、道路遺構、基壇状遺構、方形竪穴建築址、掘立柱建物、礎石建物、溝、井

戸、埋没河川が検出された他、８世紀前半の竪穴住居址も見つかっている。埋没河川は幅４ｍ前後を測り、調査区中央を北東から南西に横切る。時期によって流路は多少変化するが、古代～室町時代前半までは継続していたらしい。道路遺構は現在の今小路と並行するように調査区西端で検出された。道路幅は2.7～4.4m前後である。

諏訪東遺跡（地点４）；1981年調査、現在は富士銀行。13世紀後半～15世紀前半。基壇状遺構、方形竪穴建築址、溝、井戸、土壙が検出され、溝による方形の区画は東西10m×南北9.5m、約100㎡程の規模を持つ。調査区西端で河川護岸と思われる石組みも確認された。

今小路西遺跡（地点５）；1984～1992年調査、御成小学校。８世紀前半～10世紀代の鎌倉郡衙の発見と13世紀前葉～15世紀後半の遺構群は全国的に注目をあびた。特に、中世３・４面とした時期には御成山東麓に二つの大きな武家屋敷が並び、屋敷地周囲は道路に接して溝や板塀で区画された庶民居住区が広がっていた。屋敷の主人は北条得宗家あるいはその周辺で実権を握る者と推定されるが、年代観と併せて異論もある。（註５）

註１；中世基盤層の標高から算出。因に、図２地点２は約4.7m、地点５は5.8～6.5mである。

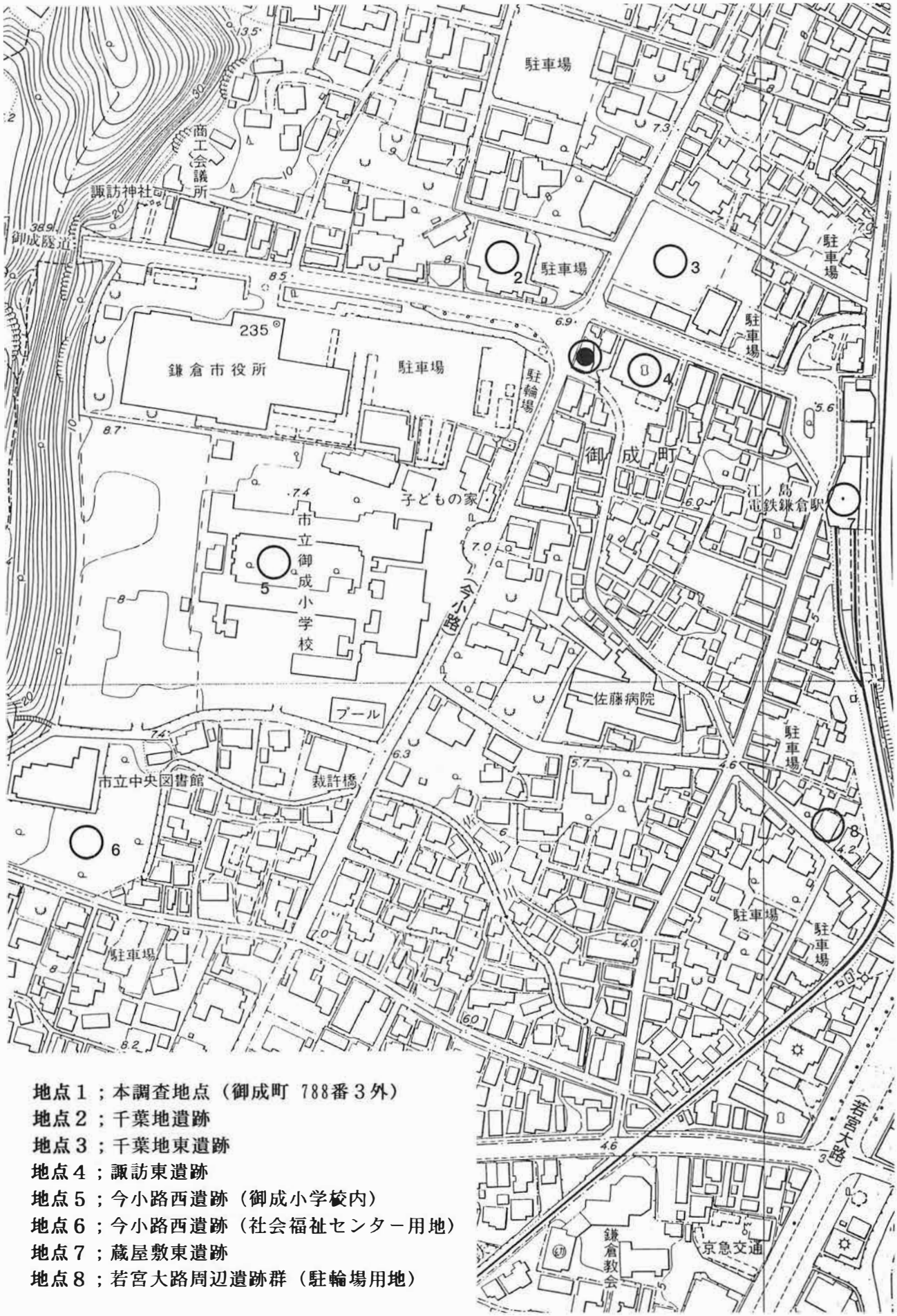
註２；『今小路西遺跡（御成小学校内）第５次発掘調査概報』　鎌倉市教育委員会　1993年

註３；『鎌倉の古絵図Ⅱ』鎌倉国宝館図録第十六集　鎌倉国宝館　1993年

註４；「第十二章、鎌倉市街の人的構成」『鎌倉市史・総説編』　吉川弘文館　1972年

註５；馬淵和雄「今小路西遺跡（御成小学校内）の再検討」『鎌倉』第77号　鎌倉文化研究会　1995年

図１　遺跡範囲と調査地点（１／5000）



地点１；本調査地点（御成町 788番３外）
地点２；千葉地遺跡
地点３；千葉地東遺跡
地点４；諏訪東遺跡
地点５；今小路西遺跡（御成小学校内）
地点６；今小路西遺跡（社会福祉センター用地）
地点７；蔵屋敷東遺跡
地点８；若宮大路周辺遺跡群（駐輪場用地）

図２　調査地点周辺の遺跡（１／2500）

第二章　調査の概要

1．調査の経過

1994年９月、自己用店舗併用住宅建設に伴う事前相談を受けて、鎌倉市教育委員会による試掘調査が実施された。その結果、発掘調査の必要性が確認されたが、当該地が車道に近接した地点であるため、安全面を考慮して杭打箇所を先行調査し、杭工事終了後に残余の区域を継続調査することにした。

先行調査は1995年１月９日から３日間の日程で実施され、建築基礎杭の集中する１箇所の他に２箇所が選ばれた。西南角隅の調査壙では近現代井戸と大形遺構の一部、東側調査壙では道路遺構、北側調査壙では近現代井戸と杭列等を検出できたが、狭い面積であるため平面的な調査より、地山までの層序、生活面の対比に主眼が置かれた。

本格的な発掘調査は1995年３月９日から開始された。排土置場を確保する必要上、調査区を二分してⅠ、Ⅱ区（図４）とし、南側のⅠ区から調査を行なった。Ⅰ区の調査は４月15日に終了し、引き続きⅡ区の調査に移行した。すべての作業が終了したのは５月２日である。日曜、祭日を除いたこの間の実働日数は45日を数えるが、次々と検出される遺構の計測に追われて調査にゆとりなく、雨天でも休むことはできなかった。

2．調査方法

Ⅰ区およびⅡ区では、先行調査の結果に従って地表下65cmまでの近現代整地層を重機で除去した後、手掘りで調査を進めた。その際、遺構の切り合い関係と堆積土層の状態を把握するため、調査区の西側と南側に土層観察用のベルトを設定した。なお、自然地形が傾斜し深くなることが予想された東側は、隣地境界壁を保護するため余裕を持たせざるを得ず、実質的な調査範囲は周縁に打ち込まれた建築基礎杭の内側に限られた。ただし、調査区東側では道路遺構の全容を確認する必要があり、二面調査段階には調査区東壁際まで掘り下げることにした。Ⅰ区の調査対象面積は約68㎡、Ⅱ区の調査対象面積は約38㎡を測る。

3．測量軸の設定

調査に使用した測量軸は、調査区形状に沿うように今小路側の一辺を基準にした。方眼は２ｍ単位に設定し、南北軸には南からＡ～Ｈまでのアルファベット、東西軸には西から１～７までの算用数字を付した。方眼目の南西角にあたる測量杭Ａ１と鎌倉市が設置した４級基準点との位置関係は図３に示した通りである。

４級基準点Ｒ－076の国土座標値は（ｘ－75843.788　Ｙ－25599.120）、Ｒ－077の国土座標値は（ｘ－75855.881　Ｙ－25577.753）、南北の測量軸は磁北から約23.5度東に傾いている。

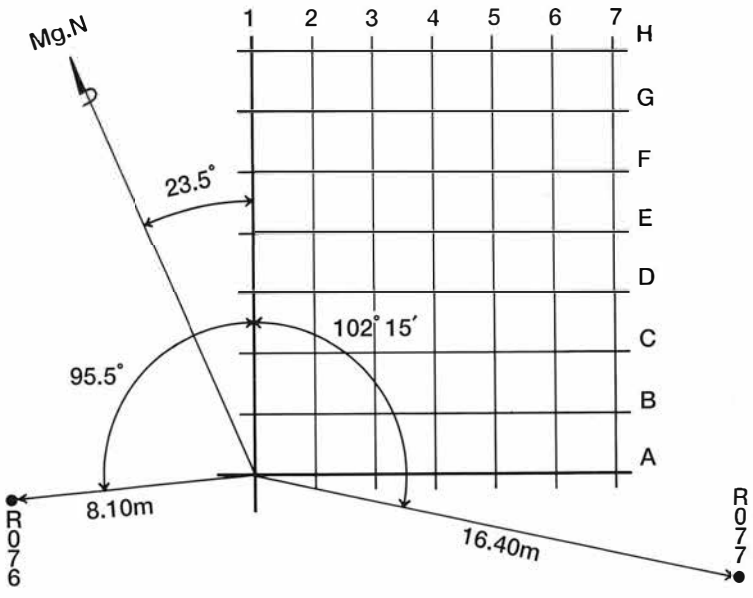


図３　グリッド設定図

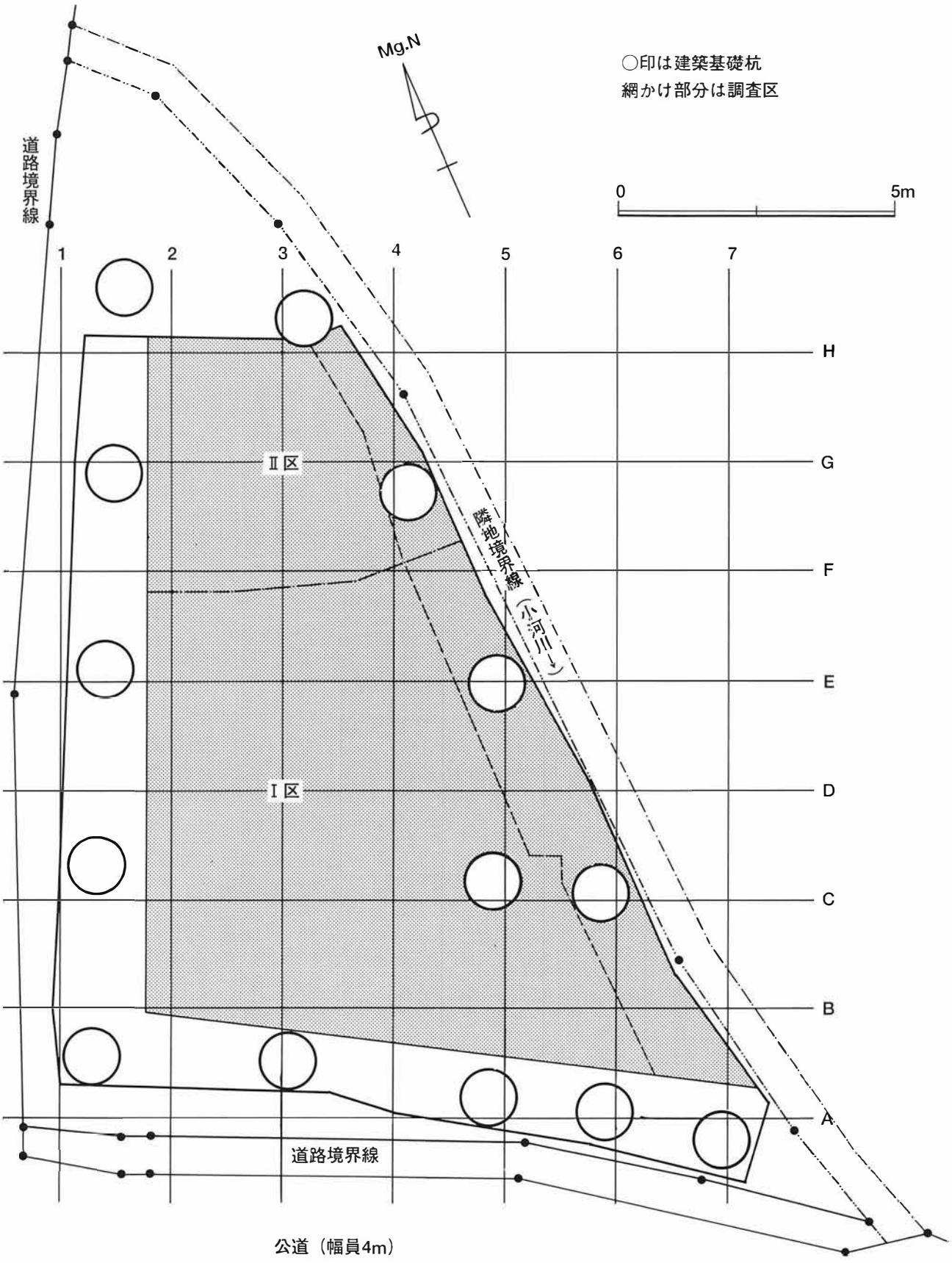
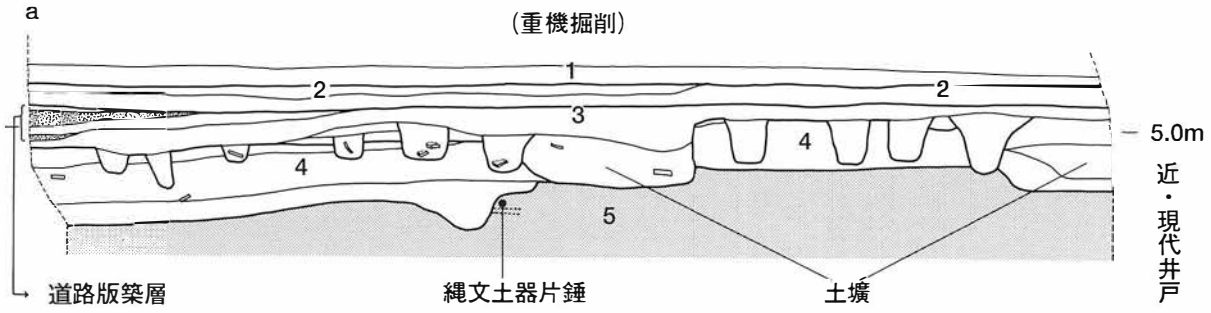
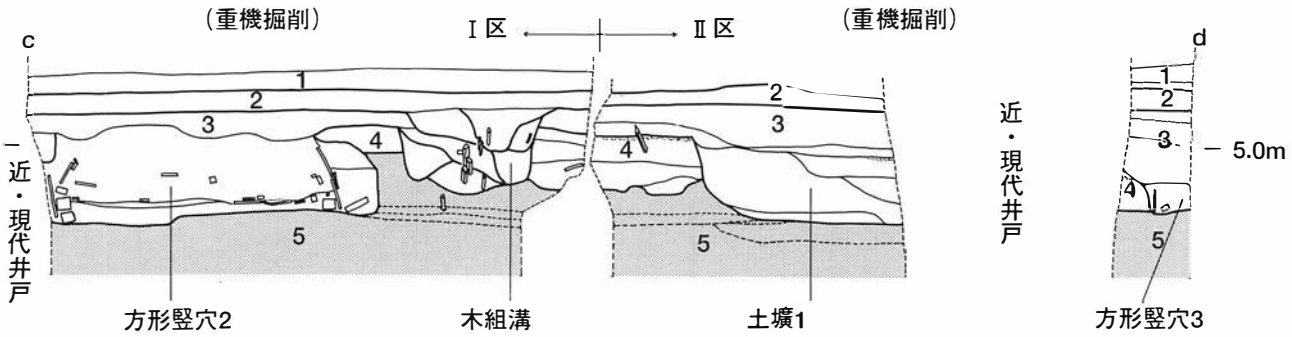


図4　調査区設定図（1／100）

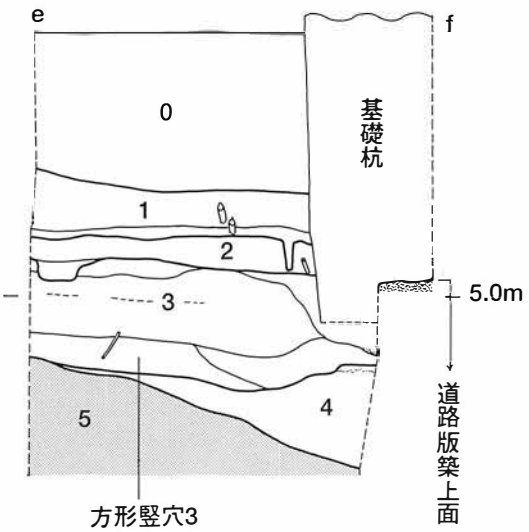
〈Ⅰ区南壁〉



〈Ⅰ・Ⅱ区西壁〉



〈Ⅱ区北壁〉



《土層説明》

0；破砕泥岩層。大形の泥岩塊を主体とする現代整地層。

1；灰色粘土層。下部に宝永火山灰を少量混入し軟質。上下に分層できるが明瞭でない。近世以降の水田および床土か。

2；灰色粘土層。砂粒・貝殻粒を微量含み締まりあり。分層可能な部分もあるが大きな差はない。（一面／石組溝）

3；暗茶褐色砂質土層。泥岩小塊・貝殻粒・炭化物粒・かわらけ片を多量に含み締まりなし。調査区北側で厚く堆積し、数層に分層可能。（二面／道路遺構、木組溝、木組遺構など）

4；暗褐色粘土層。漸移的に変化し締まり強い。上面が硬化し薄い炭層の確認できた部分もある。層中に礎板と思われる板材を混入する。（三面／方形竪穴、木組溝、柱穴など）

5；青灰色砂層。粒子の粗密で細分可能な中世基盤層。（四面／柱穴状土壙、埋没河川）

※　Ⅰ区西壁の南端部分は崩落し、計測不能。

〈Ⅰ区中央・東西断面〉

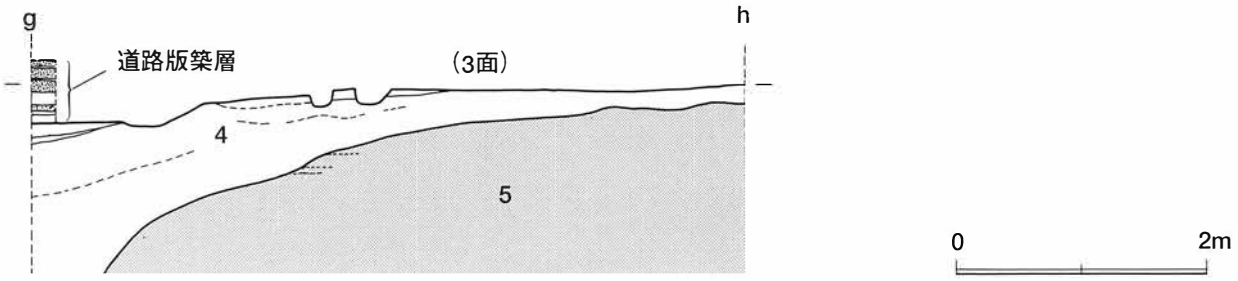


図5　土層堆積図（1／60）

第三章　検出遺構と出土遺物

本地点で検出された遺構は、層位と切り合い関係からみておよそ４時期に区分できるが、掘り過ぎ、掘り足りないといった事態は常にあり、同一面で検出した遺構がすべて同一時期であるとは限らない。

一面～四面までの内、単独の遺構しかない一面を除き全体図を作成し各遺構の説明を行なうが、まず、生活面に対応する土層の説明と出土遺物の概略について述べておきたい。

１．層序と生活面

本地点の地表下には、大形の破砕泥岩による整地層（０層）が１ｍ前後の厚さで堆積している。この層は細分できず、付近一帯が一時期に埋め立てられたことを示している。おそらく、明治から昭和にかけての大規模な地行と思われるが、その時期を特定することはできなかった。

１、２層は水田床土と思われる灰色粘土層。１層下部には宝永四年（1707年）に降下した富士火山灰が混入しており、分層の目安とした。天保三年（1832年）「扇ケ谷村絵図」では、調査地点周辺に「田畑」と記してあり、中世以後の長期間を水田として利用していたことが判る。２層は１層に比べて締まりが強く、上面で小規模な石組溝が検出された。出土遺物からみて中世最後の生活面であり、一面として調査した。

３層は泥岩片、貝殻粒、かわらけ片等を多量に含む砂質土層。締まり弱く、単なる遺物包含層と考えていたが、道路遺構や木組遺構などが検出されたことから二面として調査した。層厚10～20cmと薄いため、精査段階で大部分を掘り過ぎている。

４層は暗褐色粘土層。締まり強く中世基盤層と間違え易い。古代遺物に混じってかわらけ皿が出土しており、中世初期～前期にかけて堆積した土層と思われる。東側旧河川に向かって厚く堆積するが、同層中の変化は漸移的であり分層不可能。上面で方形竪穴や柱穴等を検出し、三面として調査した。

５層は青灰色砂層。海岸砂丘の北端部にあたる。上面はほぼ平坦となるが、東側は旧河川に向かって大きく落ち込んでいる。大形で深い柱穴状の土壙を検出し、四面として調査した。古代末～中世初頭の生活面と思われる。なお、砂層中の粗い砂礫部分（標高4.40ｍ）からは、縄文中期末～後期初頭の土器片錘が出土している。

２．出土遺物の概要

遺物総量は整理箱（内法；33.5×53.5×14.5cm）にして45箱分が出土した。その内訳は以下の通り。

土器；かわらけ皿が最も多く、他に土鍋・手焙りの破片が数点出土した。

陶器；常滑甕の破片が大部分を占める。瀬戸では卸し皿の小片、捏ね鉢は山茶碗窯の製品が多い。

磁器；青磁では碗・皿、白磁では皿、青白磁では合子・壺が出土したが、全体量はわずかである。

金属製品；錆化せず原形を保つ。銅銭・角釘の他に、刀子・鉄皿・飾り金具様の製品がある。

骨製品；賽子・笄が出土した。

石製品；砥石・硯の破片が出土した。

木製品；箸・杓子・曲げ物桶・下駄・板草履・独楽・人形・漆椀・漆皿の他に、礎板・杭・板等の建築材が出土し、多彩な内容を持つ。

貝・骨；食物残滓としてハマグリ・アワビ・サザエ・トコブシ・アカニシの他に、クルミ（モモ？）の種子が出土した。鳥獣骨は未鑑定。

その他；縄文土器（土器片錘）・土師器（坏、甕）・須恵器（蓋、甕）・瓦が出土した。

3．一面の遺構と遺物

石組溝（図６）；Ⅱ区東壁際で検出された南北方向の溝である。上面幅約45cm、底面幅約25cm、深さ約25cmを測り、断面は逆台形を呈している。溝の西側は破砕した大形の泥岩や凝灰岩を置いて護岸し、溝壁の一部としても利用している。一方、溝の東側は板材をあてて護岸したようで、内壁沿いに約60cm間隔で打たれた杭痕が３箇所確認された。本址に伴う杭はこの３本だけで、西側一帯に打たれた杭はすべて後世の丸杭である。

溝内部には灰色粘土層が堆積する。小礫、砂粒をわずかに混入し、上下に分層できるが大差はない。なお、覆土上層からは一括投棄された状態でかわらけ皿９点が出土し、溝の南端近くからは骨製の賽子や手焙り片が見つかっている。

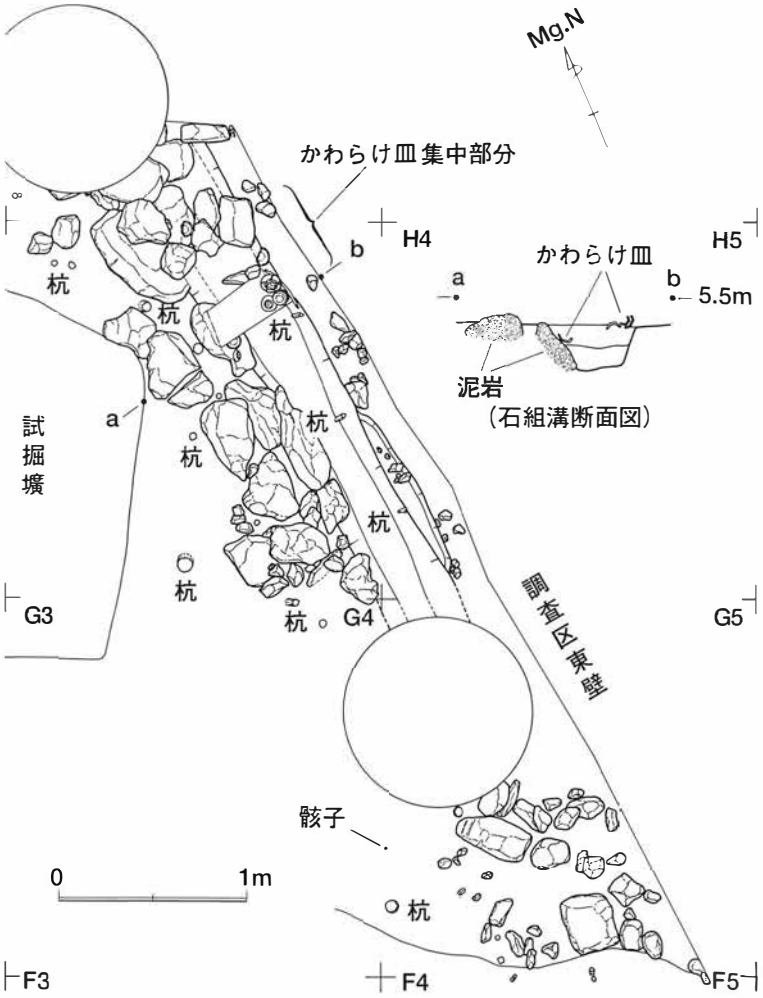


図６　石組溝（１／40）

石組溝出土遺物（図７）

１～４は溝の平面精査中に出土したかわらけ小皿。一面上に堆積する灰色粘土層（近世）下部の遺物である。器壁薄く、胎土は緻密で肌色を呈し、白色針状物質を含まない。いずれも糸切り底。１は略完形、３を除いて口縁部に煤が付着している。

５～13は溝内に一括投棄された状態で出土したかわらけ小皿。すべて同一型式である。器壁厚く外反し、内底部にはナデがない。胎土は砂粒が多く、総じて粗い。すべて糸切り底である。５～７、12、はほぼ完形であり、他は2/3以上残存。７は灯明皿として使用されている。

14は備前擂り鉢。溝内から出土した。

15は瓦質手焙り。口縁部内面から体部外面上位にヘラミガキ調整を施す。胎土は灰白色を呈し砂粒、石粒を多量に含む。溝の南端近くで出土。

16は賽子。獣骨を加工したもの。1.2×1.3×1.4cmの直方体。瓦質手焙りとともに、溝の南端近くで出土した。

一面上包含層出土遺物（図８）

一面精査中に出土した遺物である。確実に一面に伴うものは、20、24～26だけと思われる。

17～21はかわらけ皿。すべて底面は回転糸切り。20は略完形。橙色の胎土を持ち、器壁厚く外反し、内底部にはナデがない。一面石組溝出土のかわらけ皿と同型式。

22は常滑甕。23は常滑捏ね鉢である。いずれも小片。

24～26は備前擂り鉢。26は内面に七条１単位の櫛目を施す。

27～32は山茶碗窯系。27～31は捏ね鉢。27は比較的精製された胎土を持ち、体部外面下位にヘラケズ

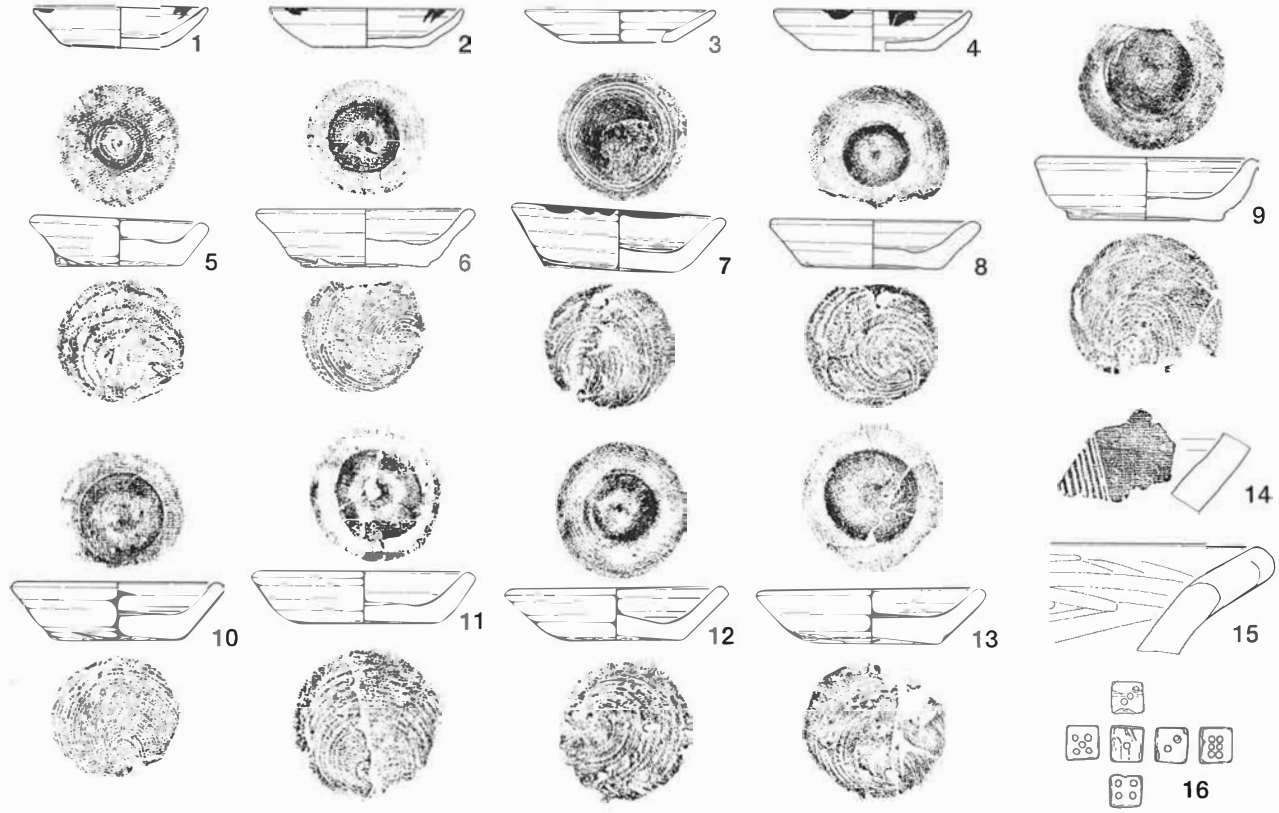


図 7　石組溝出土遺物

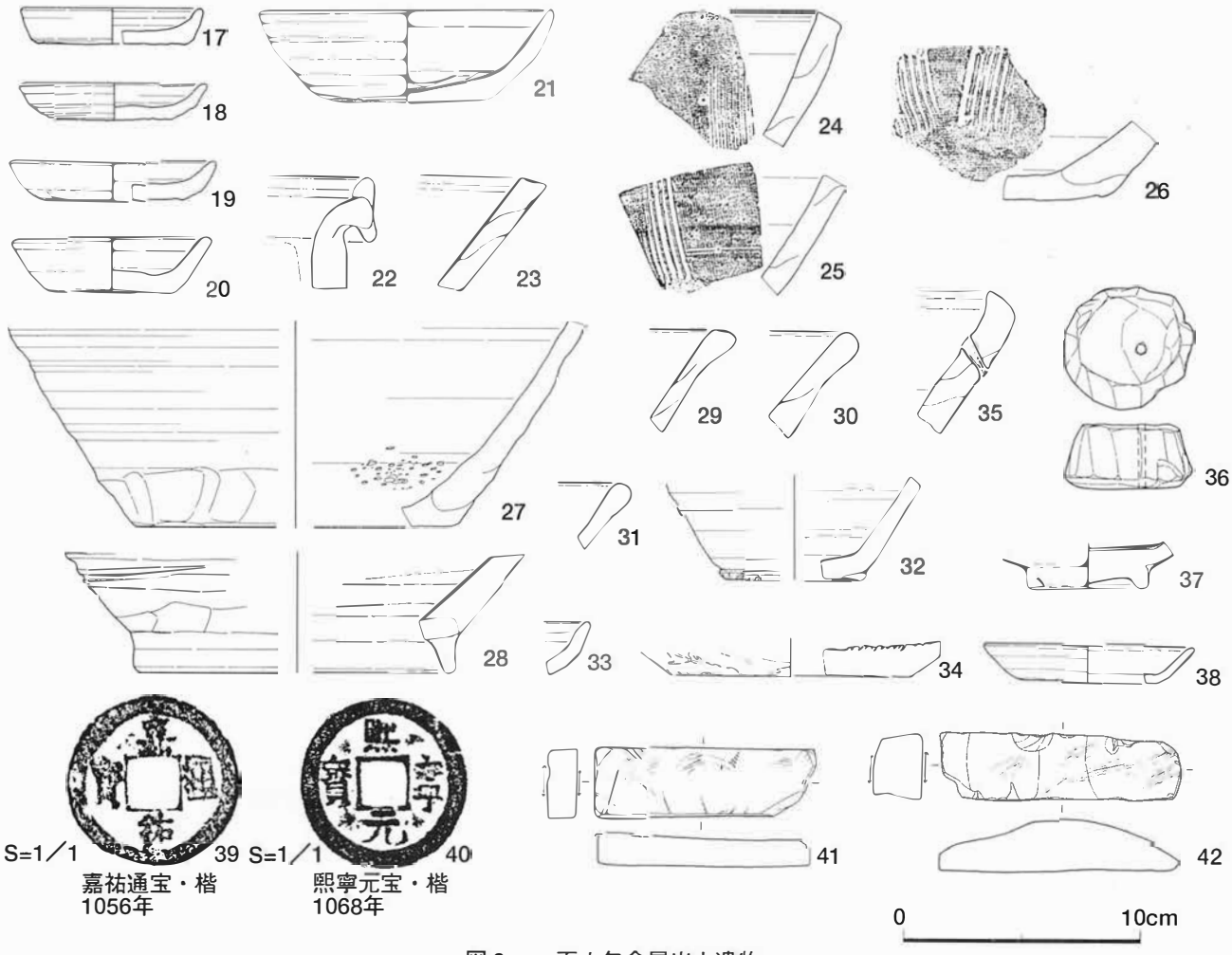


図 8　一面上包含層出土遺物

リ調整を施す。高台欠落後も使用されており、よく使い込まれて内面は磨耗。32は碗。

33、34は瀬戸。33は灰釉の皿である。胎土は灰褐色を呈し、微砂粒を含む。釉調は、オリーブ色に藍と白濁した緑が重なり合う。34は卸し皿。胎土は黄灰色を呈し精良。釉薬は刷毛塗り。外底面は回転糸切りである。

35は瓦質手焙り。胎土は暗橙色を呈し、砂粒を含む。口縁部下の穿孔が残存。

36は土師質手焙りの脚。側面はヘラナデ整形、中心をはずれた位置に直径約3㎜の穿孔が残る。

37、38は舶載磁器。37は竜泉窯青磁碗の高台部。38は白磁口兀皿で、口唇部にスス付着。

39、40は銭。39は嘉祐通宝。40は熙寧元宝。

41、42は砥石。41は京都府鳴滝産の仕上げ砥。橙白色を呈し、砥面は2面。42は群馬県上野産の中砥。緑灰色の凝灰岩で、砥面は1面。

4．二面の遺構と遺物

二面は締まりの弱い生活面であり、精査中にかなり掘り過ぎたため、下層の遺構が混在している可能性が強い。道路遺構、木組溝、木組遺構1は確実に二面の遺構と考えられるが、前二者は既に三面の時に構築されていたことが、土層観察結果から確認された。

道路遺構（図10）

調査区の東半部で検出された。主軸方位は南北を示すが、道路縁辺の形状を観察すると必ずしも直線的ではなく、旧河川の流路沿いに敷設された道路と推定される。確認できた道路幅は最大で約3.20m、上面の標高は5.20～5.10mを測り平坦であるが、東側に向かってわずかに傾斜している。

道路は破砕した泥岩と砂を交互に版築して作られている。部分的な補修を繰り返してかなりの厚みを持ち、Ⅰ区南壁近くで3枚、同中央部では4枚の泥岩版築層を確認し、間層を含めた全体の厚みは東側部分で30～40cmを測る。

三面に伴う道路は検出していないが、Ⅰ区南壁土層図で見る限り、約1m程東寄りに敷設されていたようである。この最下の道路直下からは馬の右下顎骨が潰れて出土した。本来は三面の遺構に属すが、道路に関わるものと考えて扱うことにした。（図9）

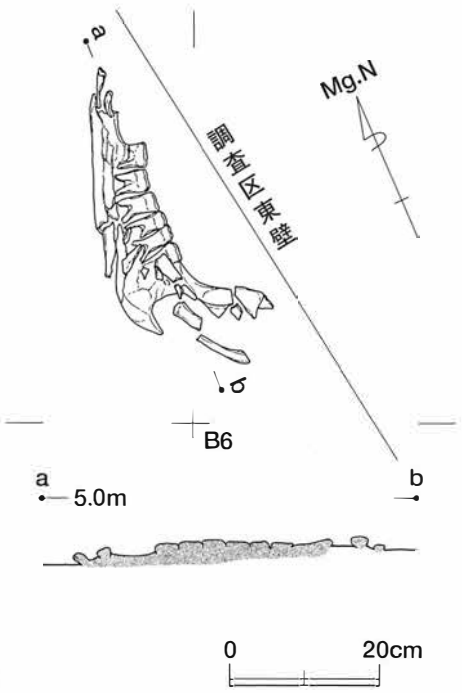


図9　馬下顎骨（1／10）

道路遺構出土遺物（図11）

道路最上面（43～47）、版築中（48～54）、道路最下面（55）の遺物を区別して取り上げた。いずれも小片である。

43はかわらけ小皿。胎土は淡灰橙色を呈し、赤色小粒を混入。

44は常滑甕。

45は磨り常滑。甕の体部転用品である。

46は山茶碗窯系捏ね鉢。

47は銭。聖宋元宝。

48、49はかわらけ皿。49は灯明皿として使用されている。

50、51は山茶碗窯系捏ね鉢。50は口縁部内面に自然釉。

52は瓦質手焙り。

53は舶載磁器。青白磁の壺か香炉と思われる。

54は鉄製品。角釘である。

55は山茶碗窯系捏ね鉢。内面は摩耗し火を受けた痕跡がある。高台欠落後も使用されている。

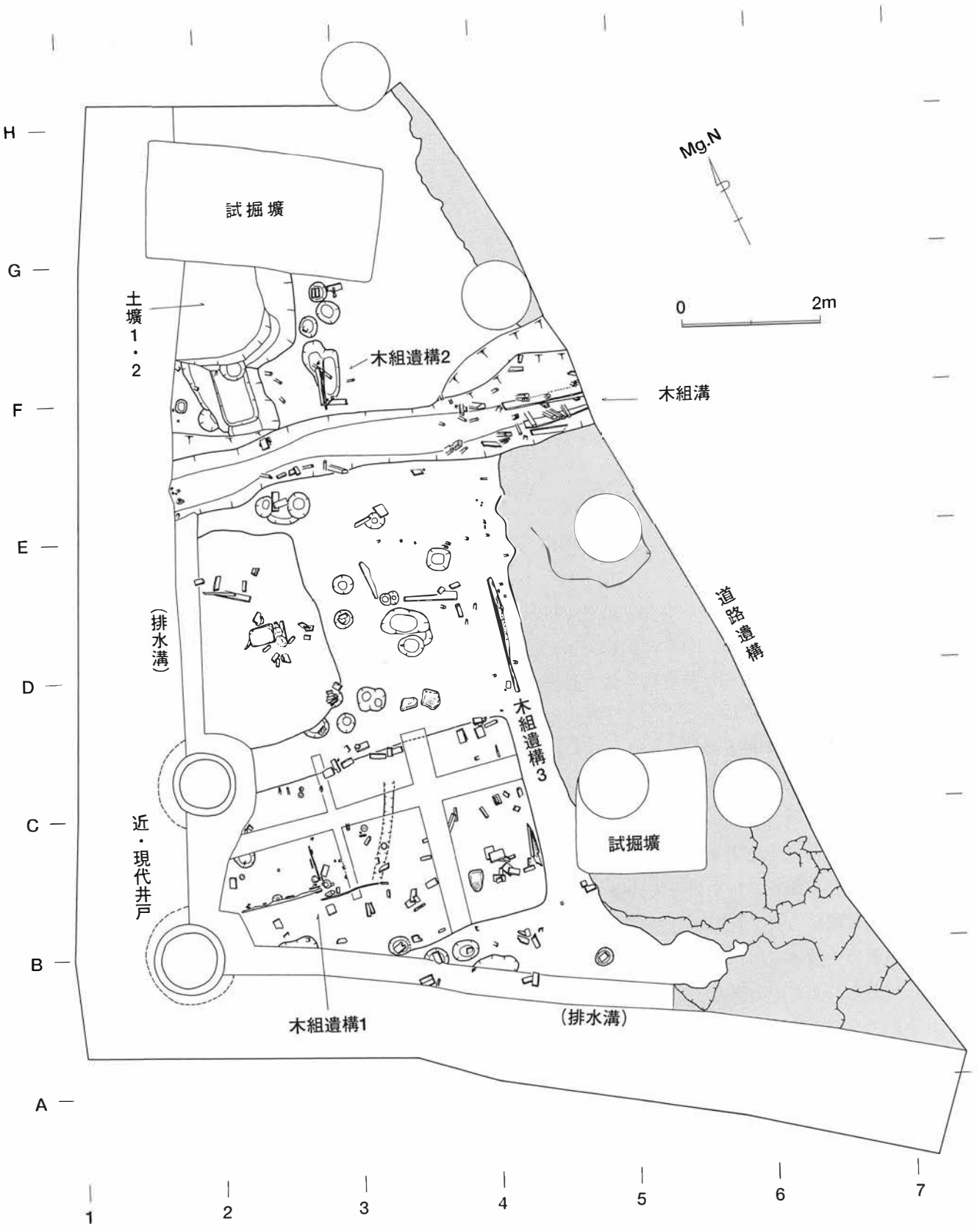


図10　二面遺構全体図（1／80）

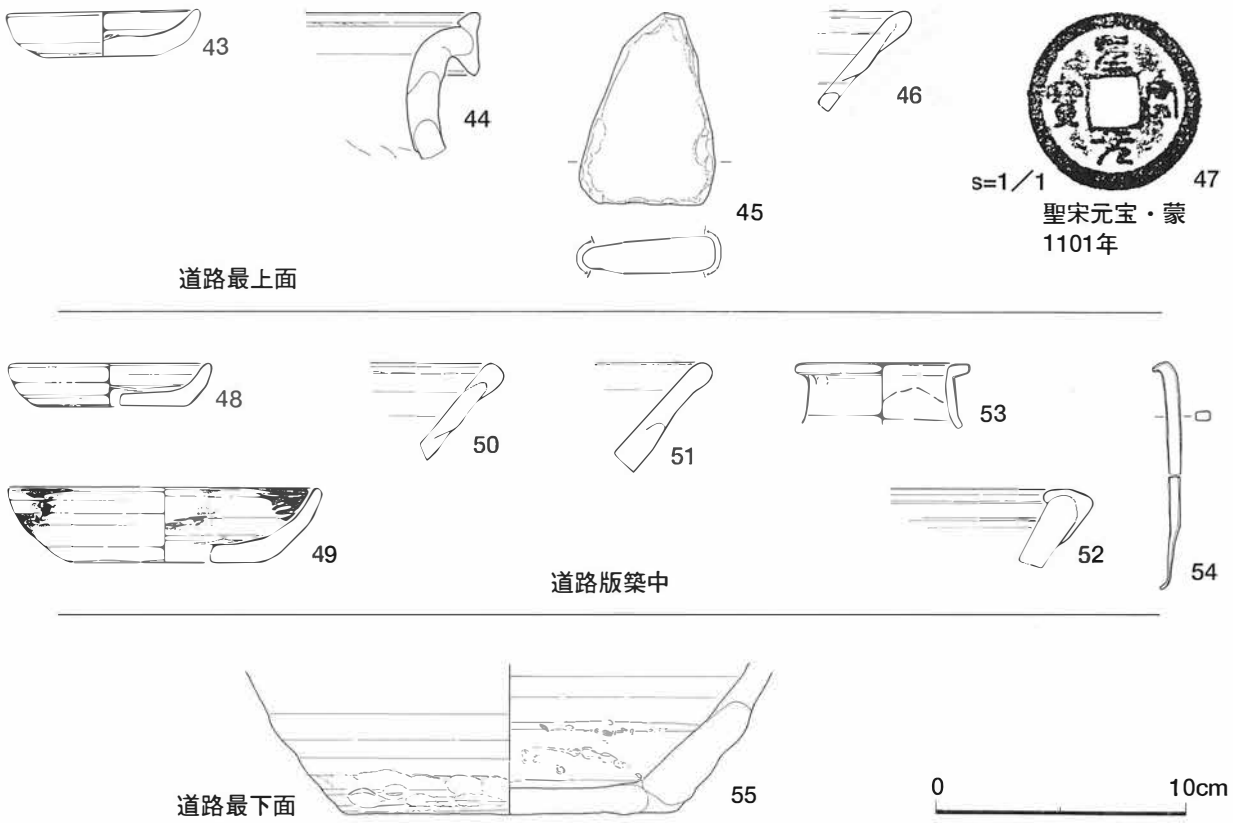


図11　道路遺構出土遺物

木組溝（図12）

Ⅰ区とⅡ区の境界で検出された。運悪く排水溝を掘った位置が本址にあたり、馬力ある作業員によって多くの杭が抜かれてしまった。旧状を留めるのは溝の東端部分だけである。

溝は上幅約80cm、底部は杭を打ち込み側板で土留めをしているため、幅約30cmの狭い溝となる。また、三面から二面までの間に少なくとも２回の浚渫を行なうが、主軸に変化なく東西方向を向いている。

溝内に残る杭は多種多様で統一性は見られない。組み合う杭の並びも現状からは不明であるが、約50～60cm間隔で打たれた部分も確認できた。杭の中にはかなり太い角材を使用したものやホゾを持つもの、先端部に火を受け焦げているものがある。

溝の覆土は砂質土を主体とするが、掘り方まで同時に発掘したため、溝の形状や構造だけでなく遺物も新旧混在しており、杭や横板の計測値も不十分である。残念ながら、溝があったという事実しか判らず、調査に携わる者全員の注意と反省を促したい。

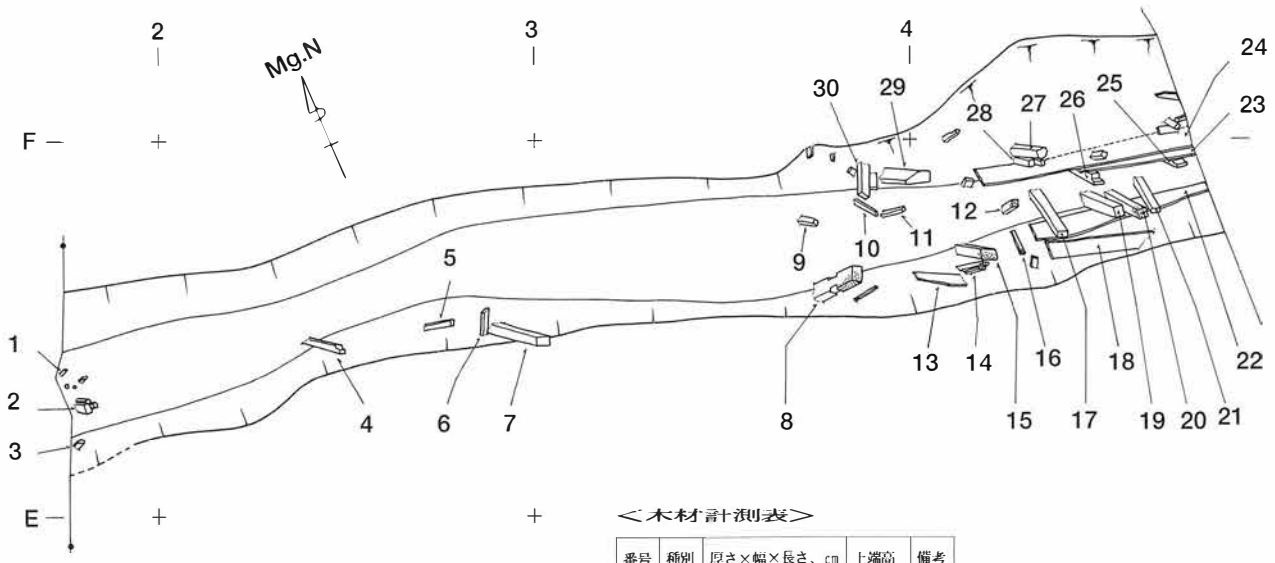
木組溝出土遺物（図13、14）

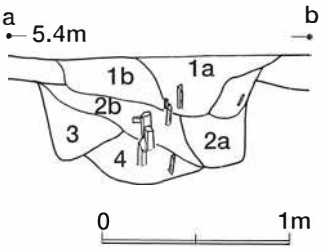
三面から二面までの溝覆土と掘り方の遺物が混在している。図示した以外に獣（鳥、魚）骨・貝殻が出土した。

56～62は糸きり底のかわらけ皿。58の口唇部の穿孔は調査時に受けたものかもしれない。62は完形、胎土は橙色を呈し、赤色小粒が混入している。

63～66は常滑捏ね鉢。63は長石、石英粒を含み褐色を呈する胎土を持つ。内面には自然釉。注口が完全に残る。65は底部である。胎土は明褐色を呈し、長石、石英粒を多量に含む。内底面を成形した際の指頭痕がくっきりと残る。中央部は磨耗が著しい。

67～68は山茶碗窯系捏ね鉢。68は胎土に小石粒を多量に含み、体部外面下位はヘラケズリ調整。内底面はよく使い込まれて磨滅しており、内外面ともに火を受けた痕跡がある。





＜土層概説＞

1a；灰褐色砂質土。
1b；灰褐色砂質土。
2a；茶褐色土。
2b；茶褐色土。
3；灰褐色土。
4；灰褐色砂質土。

＜木材計測表＞

番号	種別	厚さ×幅×長さ、cm	上端高	備考	番号	種別	厚さ×幅×長さ、cm	上端高	備考
1	杭	1.0× 3.0×(13.0)	4.65m		16	杭	2.0× 3.5×(55.0)	4.77 m	焦げ
2	杭	4.5× 4.5×(15.0)	5.00		17	杭	3.0× 6.5×(49.0)	4.60	
3	杭	3.0× 3.0×(9.0)	4.62		18	板材	1.0× 9.0×(56.0)	4.64	
4	杭	3.5× 3.5×(49.0)	4.84	ホゾ	19	杭	5.0× 6.0×(40.0)	4.54	
5	杭	3.5× 3.5×(42.0)	4.90		20	杭	5.0× 6.5×(53.0)	4.70	焦げ
6	杭	2.5× 3.5×(14.5)	4.72		21	杭	5.0× 6.0×(40.0)	4.51	
7	杭	8.5×10.5×(67.0)	5.20		22	板材	1.5×26.0×(106.0)	4.58	
8	杭	5.0× 8.0×(56.0)	4.27	焦げ	23	板材	1.0× 4.0×(63.0)	4.50	
9	杭	2.0× 4.0×(28.0)	4.52		24	板材	1.0×22.0×(124.0)	4.56	
10	杭	3.0× 3.0×(29.0)	4.55		25	杭	5.5× 8.5×(34.0)	4.56	ホゾ
11	杭	3.0× 3.0×(29.0)	4.51		26	杭	6.0× 9.5×(40.0)	4.55	ホゾ
12	杭	4.0× 5.0×(21.0)	4.53	焦げ	27	杭	4.0× 6.0×(30.0)	4.62	
13	板材	0.3× 6.5×(28.0)	4.62		28	杭	6.0× 7.0×(29.0)	4.62	
14	杭	3.0× 4.0×(33.0)	4.80	焦げ	29	杭	7.0× 9.5×(43.0)	4.81	
15	杭	8.0×11.0×(52.0)	4.70	焦げ	30	杭	3.0× 6.0×(13.0)	4.62	

図12　木組溝（1／40）

69は伊勢型土鍋。口縁部外面は火を受けてスス付着。

70は黒縁瓦器碗。胎土は灰白色を呈し、口縁部外面が黒灰色。

71は瓦質手焙り。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面には指頭痕が残る。貫通穿孔は2か所残る。

72～78は舶載陶磁器。72～74は竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗である。72は単弁。73、74は複弁で、74は焼成が悪く失透している。75は竜泉窯青磁合子の身。形状八角形の腰部には陽刻の唐草文を配し、高台畳付および受け部は露胎。76は同安窯系の皿。77は白磁印花文碗。口唇部は露胎で、内面に陽刻花卉文を配す。78は褐釉壺の底部。

79～85は釘。79は両頭の釘か。

86、87は銭。86は咸平元宝。87は治平元宝。

88～90は石製品。88は硯。黒色粘板岩製。裏側の硯面は破損した後に再加工されたもの。表裏面とも墨痕が残る。89は砥石。石材不明、中砥と思われる。片面に火を受け黒く変色している。砥面は1面。90は碁石か。頁岩の小礫。加工はされていない。

91は骨製品。笄。獣骨（四肢骨）を加工したもので、一端を尖らせ、他方には切り込みを作る。完形品である。

92～114は木製品。92は漆椀。黒漆地に朱漆で亀甲・菊花の印判文を捺す。93は人形。体部は五角柱状、顔は面取成形。目鼻の表現はない。柾目取り。94は曲物の底。直径38cm前後を測る。柾目取り。95は板杓子。表裏面ともに先端部が焦げている。板目取り。96は独楽。円盤状の本体部中心には、先端を尖らせた心棒を差し込む。97はヘラ状木製品。98～100は不明。一端を尖らせた棒状の製品。101～111は箸または箸状木製品。112～114は箸の未製品か。

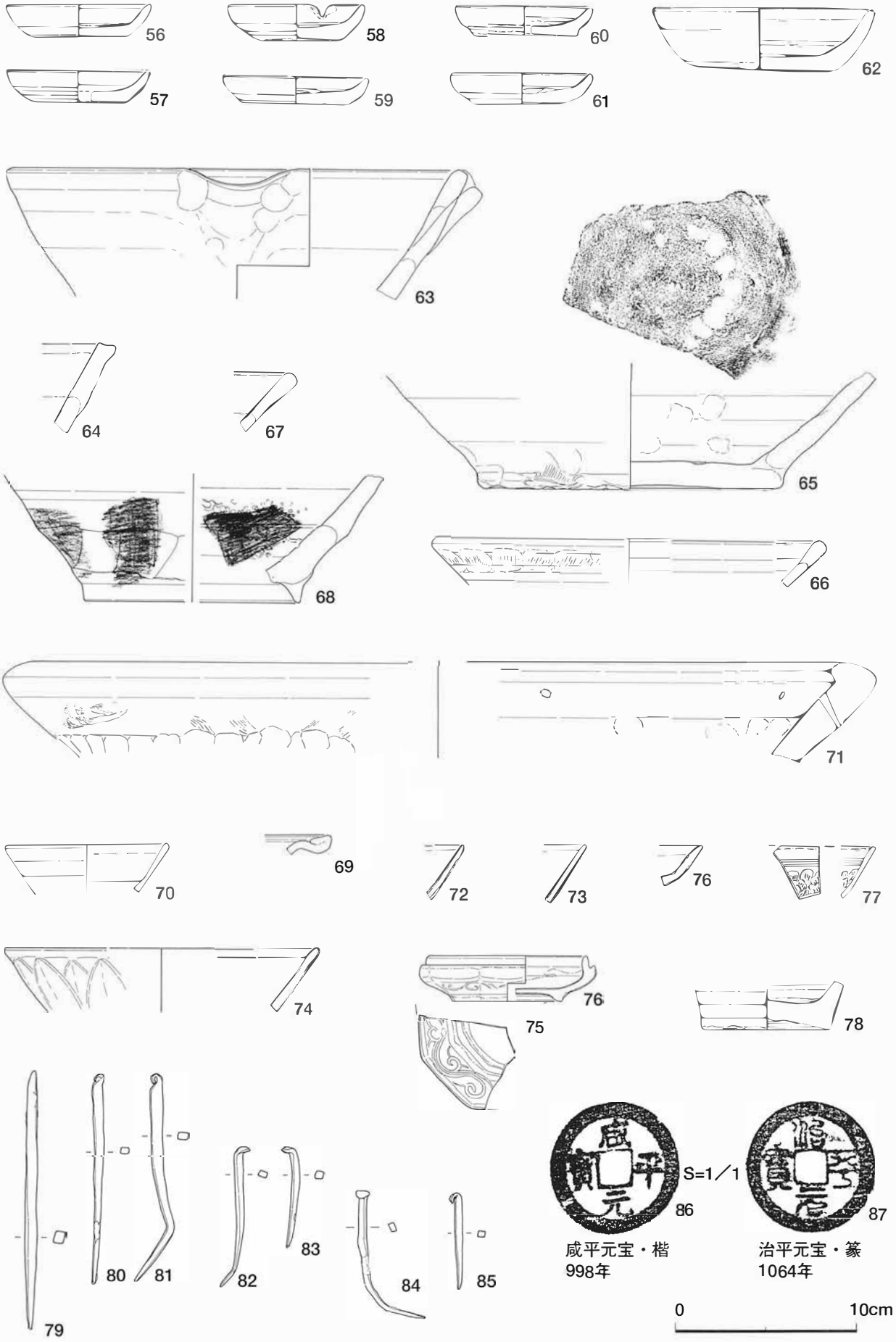


図13　木組溝出土遺物（１）

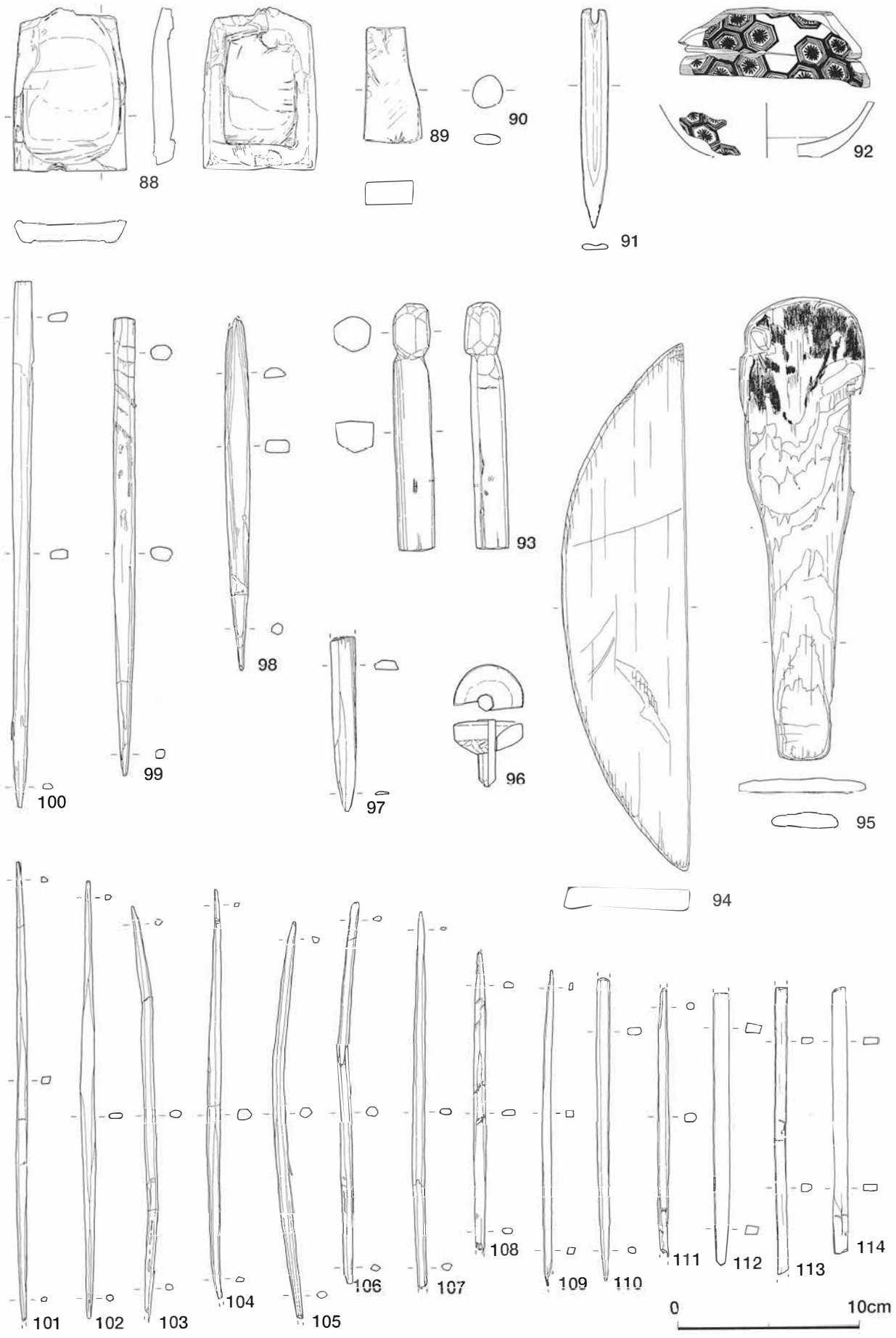


図14　木組溝出土遺物（２）

木組遺構１（図15）

Ⅰ区南西部、方形竪穴１の覆土上部で確認された。精査段階において薄い板材の痕跡がＴ字形に確認されたため、土層観察堤を残しながら周辺部を掘り下げた。板材は厚さ0.5～0.7cmと２cmの２種類があり、幅は残りの良い部分で14cm、長さは118cm、90cm、50cmを測る。建物の一部、間仕切り状の遺構と考えられる。この種の遺構は市内でも検出例が増えつつあるが、構造的には不明な点が多く、柱を立てた後に板材の両側を土で埋めていた例もある。本址では板材の下端を床面と考えて精査した結果、標高5.0～5.1ｍの高さでかわらけ皿と礎板に使用された可能性のある板材を検出できた。遺物の出土状態から見て、間仕切り板材の北側に東西に並ぶ二つの室があったものと推定される。建物全体の規模等については後章に譲ることにしたい。

なお、図中の鉄皿（ｋ）は本址を切る浅い溝状遺構から出土したもので、溝は幅約10cm、深さ約３cmの断面Ｕ字形を呈し、溝内には砂が堆積していた。溝の性格については不明。

木組遺構１出土遺物（図16）

115は内折型のかわらけ小皿。口径4.1cm、底径3.9cm、器高0.6cmを測る。糸きり底。胎土に赤色粒が混入している。

116は竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗。単弁。蓮弁は細く、小ぶりである。117は竜泉窯青磁の無文折縁鉢。釉薬が厚く、失透している。

118は銭。政和通宝。

119は砥石。熊本県天草産の中砥で、砥面は一面。

120～126はかわらけ皿。完形もしくは略完形の皿で、すべて糸切り底である。120は図15－ｂに対応し、以下121はａ、122はｃ、123はｇ、124はｈ、125はｉ、126はｊに対応する。120、121、123、126は胎土に白色針状物質を多量に含む。

127は鉄皿。器壁が1.0～1.5㎜と薄い半球形の皿である。口唇の一部を欠損するがほぼ完形。図15－ｋに対応する。

木組遺構２（図17）

Ⅱ区で検出された。二面精査段階で西側のＬ字形木組部分が確認され、その後道路遺構下で残りの板材を検出した。板材の状態から見て同一遺構の可能性が高く、図17には両者を合成して図示することにした。三面の遺構と思われるが、二面で一部が確認できたことを考慮してここで扱う。

Ｌ字形の木組部分は、板材の東側を杭で固定し、北端に打たれた杭のすぐ横には箸状木製品の集積箇所が見られた。また、東部の板材はその北側を泥岩で埋めて固定している。このことからすると、板材が重なって検出された東側に幅約１ｍ、長さ2.35ｍ以上の細長い室を想定できるが、床面となる三面自体が傾斜している点に疑問が残る。建物の一部と思われるが、規模、構造ともに不明である。

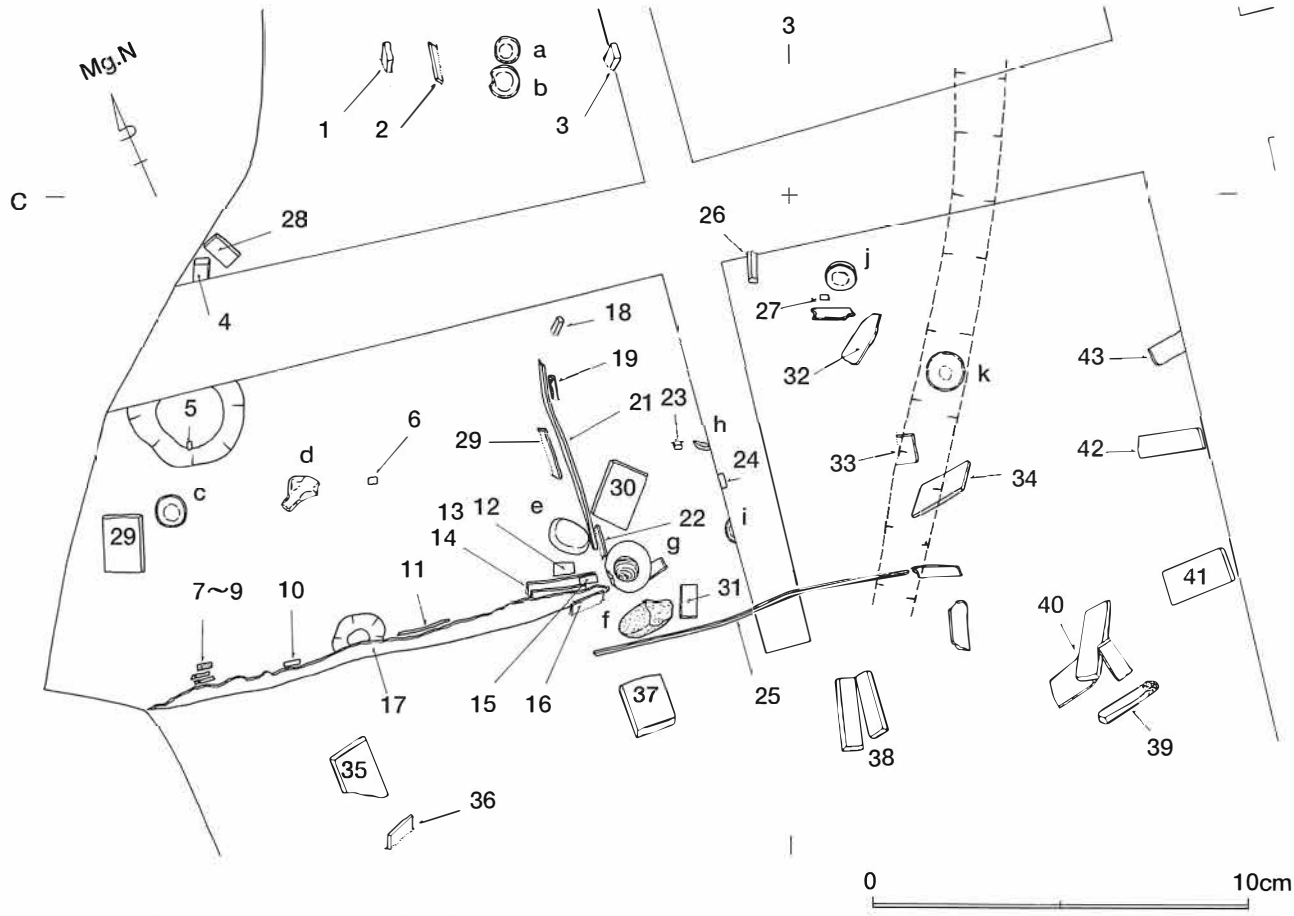
木組遺構２出土遺物（図18、19）

128～131はかわらけ皿。いずれも糸きり底である。

132は常滑甕の底部。外面下位はタテのヘラナデ、内面は指頭押さえで整形。内底に自然釉の痕跡が残る。

133、134は常滑捏ね鉢。133は比較的良く精製された胎土を持ち、外面下位はヘケズリ調整。高台は欠落している。134は口縁部の小片。胎土に長石、赤色小粒を含む。

135は山茶碗窯系捏ね鉢。胎土は大小の長石粒を多量に含む。体部外面下位はヘラケズリ調整、高台は貼り付けである。



＜遺物出土状態＞

番号	種別	出土高	備考
a	かわらけ(小)	5.09m	表
b	かわらけ(小)	5.09	表
c	かわらけ(小)	5.09	表
d	礫片	5.02	
e	礫	5.13	
f	礫	5.13	焦げ
g	かわらけ(大)	5.07	裏
h	かわらけ(小)	5.07	斜位
i	かわらけ(小)	5.00	表
j	かわらけ(小)	5.07	斜位
k	鉄皿	5.01	溝内

＜木材計測表＞

番号	種別	厚さ×幅×長さ、cm	上端高	備考
1	杭	2.5× 5.0×(14.0)	5.18m	
2	板材	1.0× 8.0×(5.0)	5.09	縦板
3	杭	2.0× 3.0×(11.0)	5.14	
4	杭	2.0× 5.0×(7.0)	5.13	
5	杭		5.01	痕跡
6	杭		5.02	痕跡
7	杭	3.0× 4.0× 8.0	5.10	焦げ
8	杭	2.0× 5.0×(11.0)	5.10	
9	板材	0.2× 5.0×(6.0)	5.10	縦板
10	杭	1.0× 3.0×(6.5)	5.07	
11	板材		5.08	痕跡
12	杭	3.0× 4.5×(12.0)	5.14	
13	板材	0.5× 7.0×(10.0)	5.10	縦板
14	板材	0.5× 7.0×(10.0)	5.10	縦板
15	杭	2.0× 5.0×(10.0)	5.14	
16	板材	1.0×10.0×(12.0)	5.13m	縦板
17	板材	0.5× 8.0×118.0	5.14	壁板?
18	杭	1.5× 2.0×(10.0)	5.09	
19	杭	1.0× 4.5× 6.0	5.12	焦げ
20	板材	1.0×13.0× 9.0	5.12	縦板
21	板材	2.0× 4.0× 50.0	5.12	壁板?
22	板材	1.0× 7.5×(9.0)	5.12	縦板
23	杭	1.0× 1.5×(5.0)	5.07	
24	杭	1.0× 3.0×(8.0)	5.10	
25	板材	0.7×14.0× 90.0	5.12	壁板?
26	杭	2.0× 2.5×(21.0)	5.13	
27	杭	1.0× 2.0× 12.0	5.06	
28	板材	3.0× 7.0× 10.0	5.09	礎板
29	板材	2.0× 9.0× 15.0	4.98	礎板
30	板材	1.0×10.0× 18.0	5.04	礎板
31	板材	1.0× 5.0× 12.0	5.02m	礎板
32	板材	1.0× 6.0× 15.0	5.08	斜位
33	板材	1.5× 9.0×(7.0)	5.04	
34	板材	2.0× 9.0× 18.0	5.05	斜位
35	板材	3.0× 9.0× 15.0	5.09	斜位
36	板材	2.5× 7.0×(3.5)	5.05	縦板
37	板材	3.0×12.0× 15.0	5.08	礎板
38	板材	1.6× 5.0× 20.0	5.14	礎板
	板材	2.0× 5.0× 20.0	5.14	礎板
39	杭	3.0× 4.0× 15.0	5.01	焦げ
40	板材	2.0× 5.0× 14.0	5.04	礎板
	板材	2.0× 6.0× 21.0	4.98	礎板
	板材	4.5× 8.0×(13.0)	4.88	礎板
41	板材	2.0× 9.0× 18.0	4.91	礎板
42	板材	0.3× 6.0× 21.0	4.93	
43	板材	0.3× 5.0× (7.0)	4.85	

図15　木組遺構1（1／20）

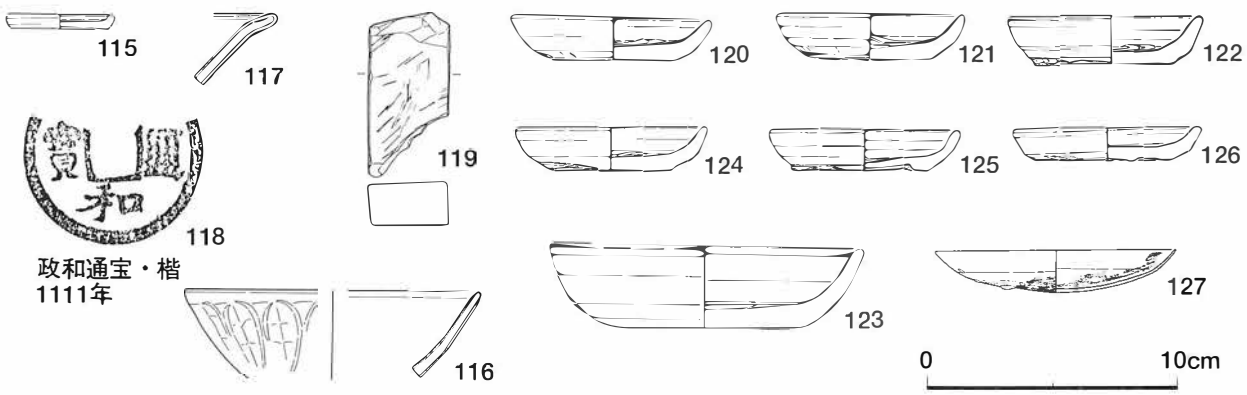
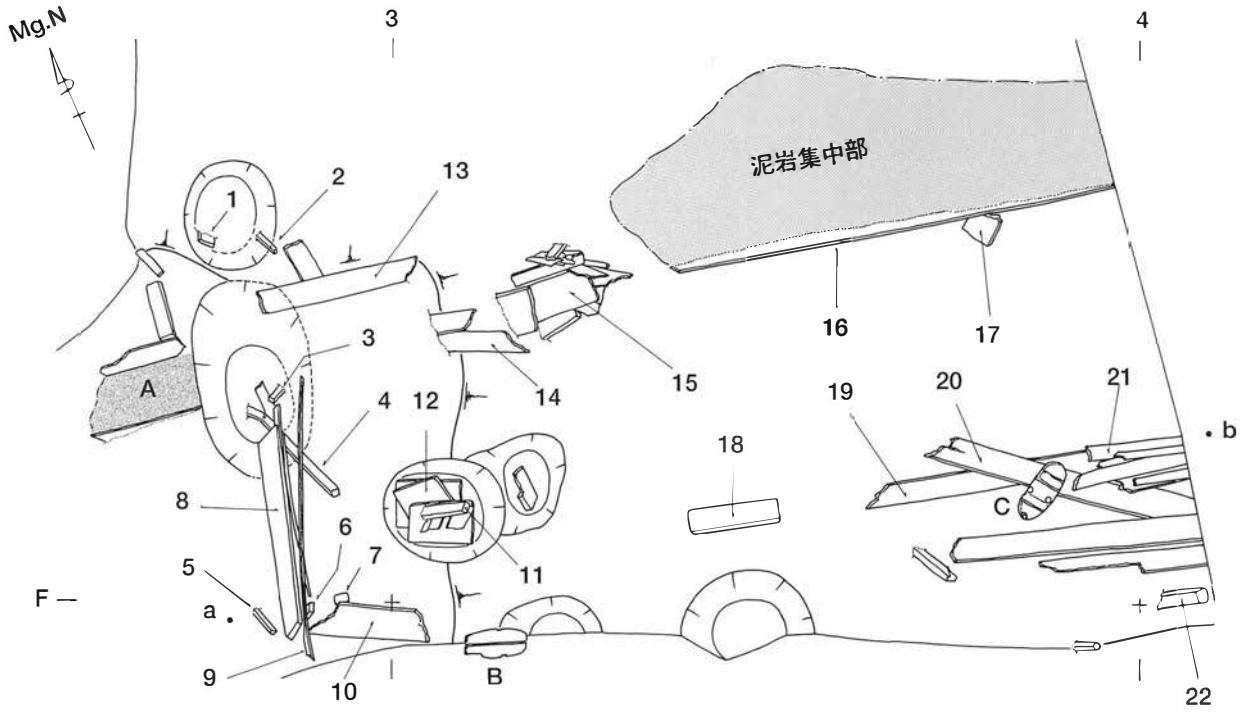
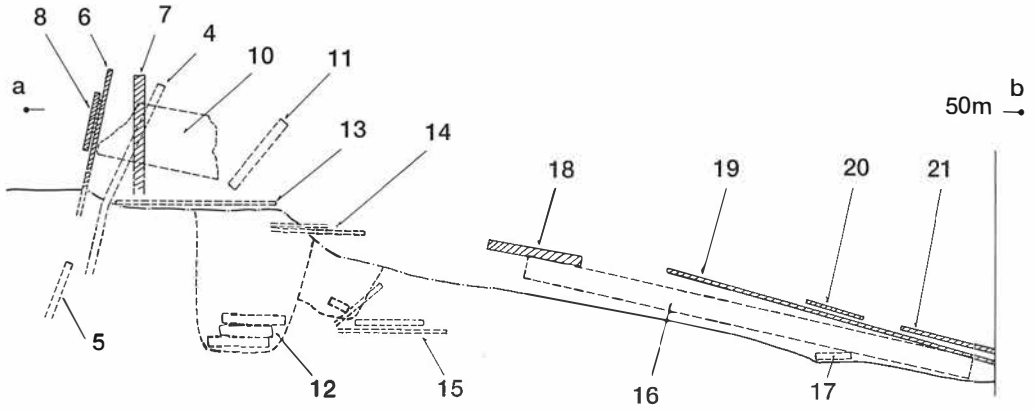


図16　木組遺構1出土遺物



▶東西西方向断面模式図



0 1m

＜遺物出土状態＞

番号	種別	出土高	備考
A	笮	4.77m	集積
B	板草履	4.68	
C	下駄	4.47	

＜木材計測表＞

番号	種別	厚さ×幅×長さ、cm	上端高	備考
1	板材	0.5× 5.0×(14.5)	4.94m	縦板
2	杭	1.5× 3.0×(10.0)	4.75	
3	杭	1.5× 2.0× 23.0	4.92	
4	杭	2.0× 3.0×(56.0)	5.07	
5	杭	1.5× 3.0×(10.5)	4.58	
6	杭	1.5× 3.0×(27.0)	5.12	
7	杭	1.5× 3.0×(25.0)	5.09	
8	板材	2.0×16.5× 55.0	5.04	壁板?
9	板材	0.3× 6.5× 76.0	5.02	
10	板材	1.0×19.0× 38.0	5.01	壁板?
11	杭	3.5× 3.5× 19.0	4.97	
12	板材	2.0× 2.5× 18.0	4.46	礎板
		3.0×12.0× 15.0	4.44	
		2.5×13.0× 17.5	4.40	
13	板材	1.0× 6.5× 43.5	4.75	
14	板材	1.0× 6.5×(22.5)	4.67	
15	板材	1.5×10.0×(23.0)	4.42	
16	板材	1.0× 6.5×118.5	4.61	壁板?
17	板材	1.3× 8.0× 9.5	4.36	礎板
18	板材	2.5× 7.0× 27.0	4.66	
19	板材	1.5× 7.0×(86.5)	4.57	
20	板材	1.5× 7.0×(76.5)	4.54	
21	板材	1.0× 5.0×(25.0)	4.44	
22	杭	4.0× 5.0×(46.5)	4.82	

図17　木組遺構２（１／20）

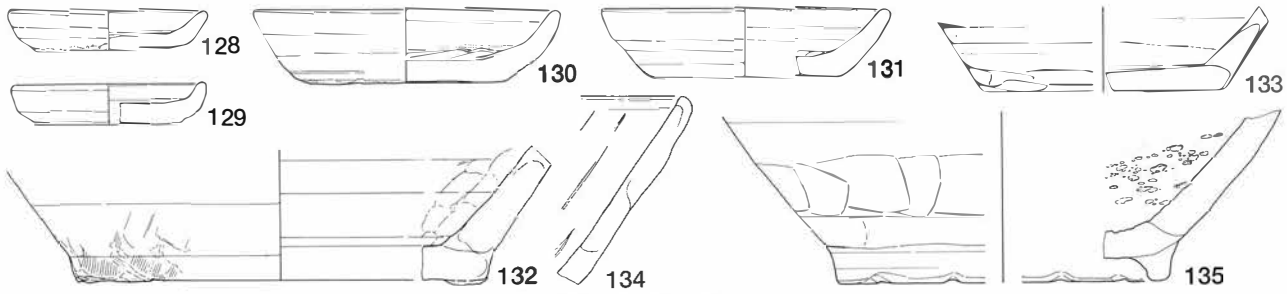


図18　木組遺構２出土遺物（１）

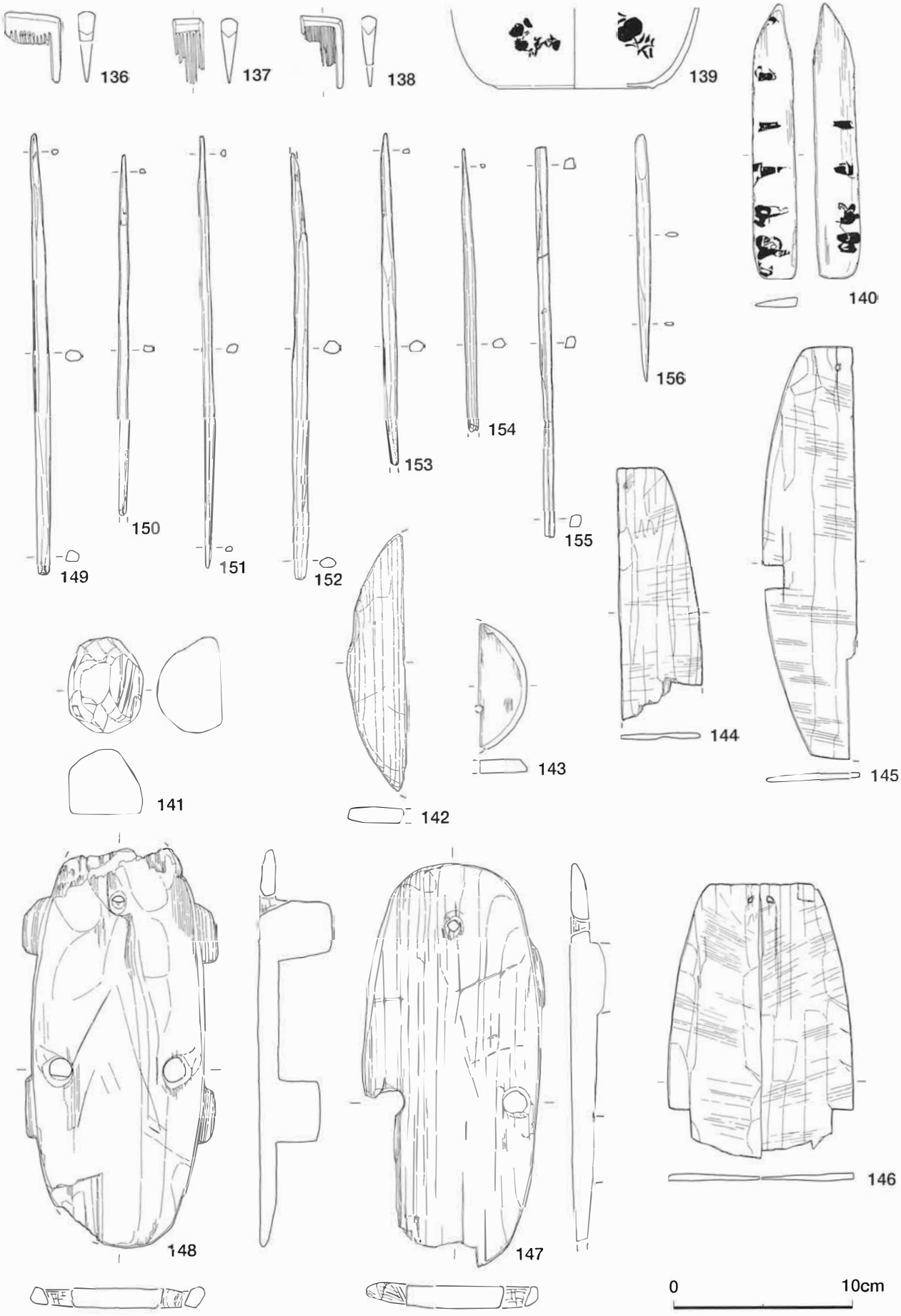
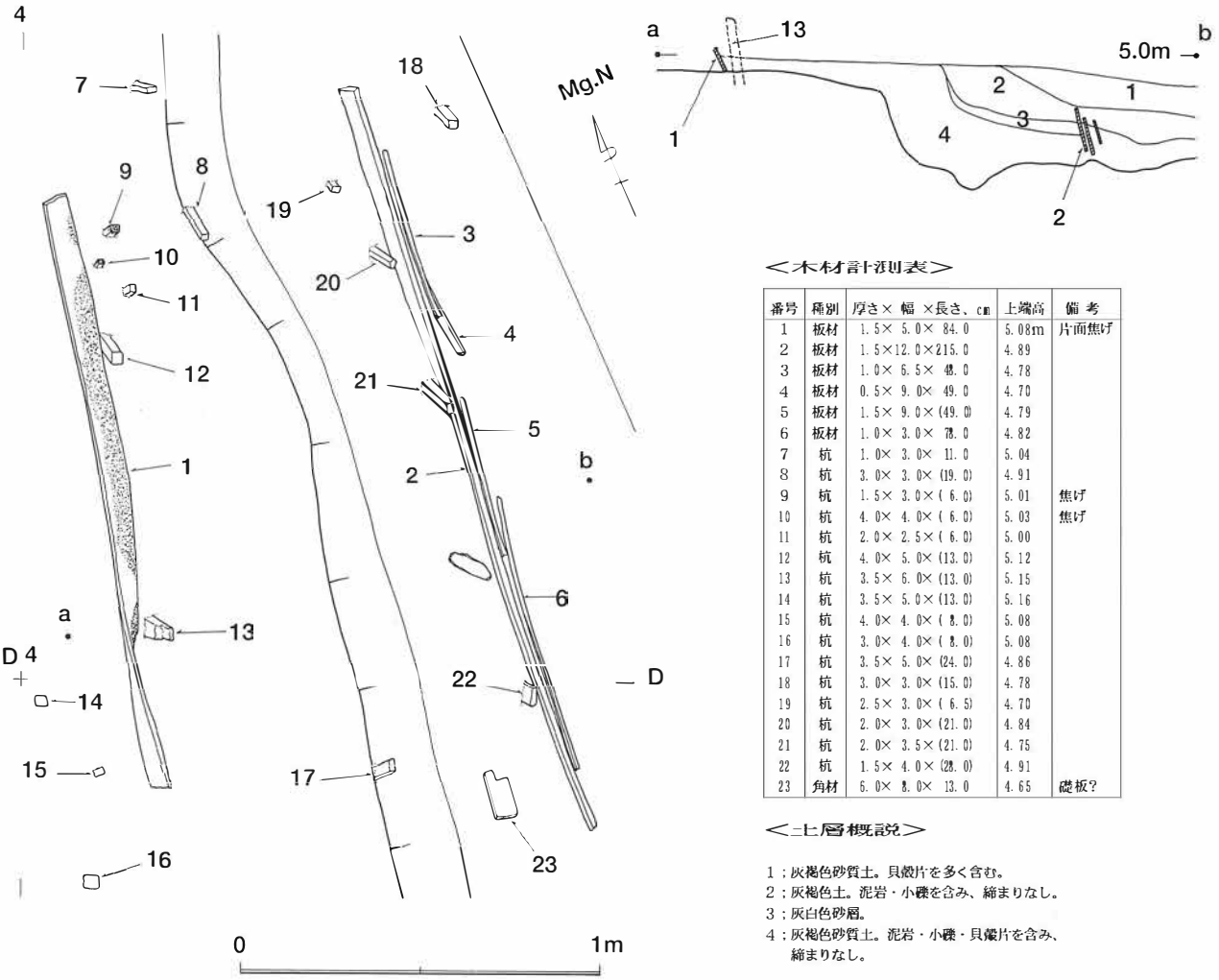


図19　木組遺構２出土遺物（２）



＜木材計測表＞

番号	種別	厚さ× 幅 ×長さ、cm	上端高	備 考
1	板材	1.5× 5.0× 84.0	5.08m	片面焦げ
2	板材	1.5×12.0×215.0	4.89	
3	板材	1.0× 6.5× 48.0	4.78	
4	板材	0.5× 9.0× 49.0	4.70	
5	板材	1.5× 9.0×(49.0)	4.79	
6	板材	1.0× 3.0× 78.0	4.82	
7	杭	1.0× 3.0× 11.0	5.04	
8	杭	3.0× 3.0×(19.0)	4.91	
9	杭	1.5× 3.0×(6.0)	5.01	焦げ
10	杭	4.0× 4.0×(6.0)	5.03	焦げ
11	杭	2.0× 2.5×(6.0)	5.00	
12	杭	4.0× 5.0×(13.0)	5.12	
13	杭	3.5× 6.0×(13.0)	5.15	
14	杭	3.5× 5.0×(13.0)	5.16	
15	杭	4.0× 4.0×(8.0)	5.08	
16	杭	3.0× 4.0×(8.0)	5.08	
17	杭	3.5× 5.0×(24.0)	4.86	
18	杭	3.0× 3.0×(15.0)	4.78	
19	杭	2.5× 3.0×(6.5)	4.70	
20	杭	2.0× 3.0×(21.0)	4.84	
21	杭	2.0× 3.5×(21.0)	4.75	
22	杭	1.5× 4.0×(28.0)	4.91	
23	角材	6.0× 8.0× 13.0	4.65	礎板?

＜土層概説＞

1；灰褐色砂質土。貝殻片を多く含む。
2；灰褐色土。泥岩・小礫を含み、締まりなし。
3；灰白色砂層。
4；灰褐色砂質土。泥岩・小礫・貝殻片を含み、締まりなし。

図20　木組遺構３（１／20）

136～138は櫛。いずれも小片。137は黒漆が一部残存している。

139は椀。黒漆塗りの地に朱漆で花卉文を描いている。

140はヘラ状の木製品。表裏ともに黒漆が付着している。用途不明。

141は不明木製品。上面を丸く削り整形するが、側面と裏面は平坦である。

142、143は曲物の底。142は直径約21.5。143は直径約7.5cmを測る。いずれも柾目取り。

144～146は板草履。表裏面には藁状圧痕がよく残っている。

147、148は下駄。歯は削りだし、かかと側の摩耗が著しい。

149～154は箸。155は箸の未製品であろうか。

156は不明木製品。箸に似るが、全体を偏平に削って一端を尖らせている。

木組遺構３（図20）

Ⅰ区二面精査時に上段（西側）の板材が確認され、道路遺構下で下段（東側）の板材が確認された。

上段の板材は道路遺構から約20cm隔てて平行しており、道路側溝の一部である可能性が高い。既に一帯を掘り過ぎていたため側溝プランは不明となるが、杭の並びが板材の延長線上に確認できた。なお、板材の東側面下部は火を受け焦げるが、固定している杭は焦げていない。火災後の廃材を転用したものと思われる。下段の板材は西側を杭で固定している。三面が段差をもって落ちており、この間約50cmを側溝としていた可能性がある。遺構の位置と方向性、構造の点からは二面、三面時の道路側溝と推定されるが、土層図に溝らしき線がないことに疑問も残る。出土遺物はない。

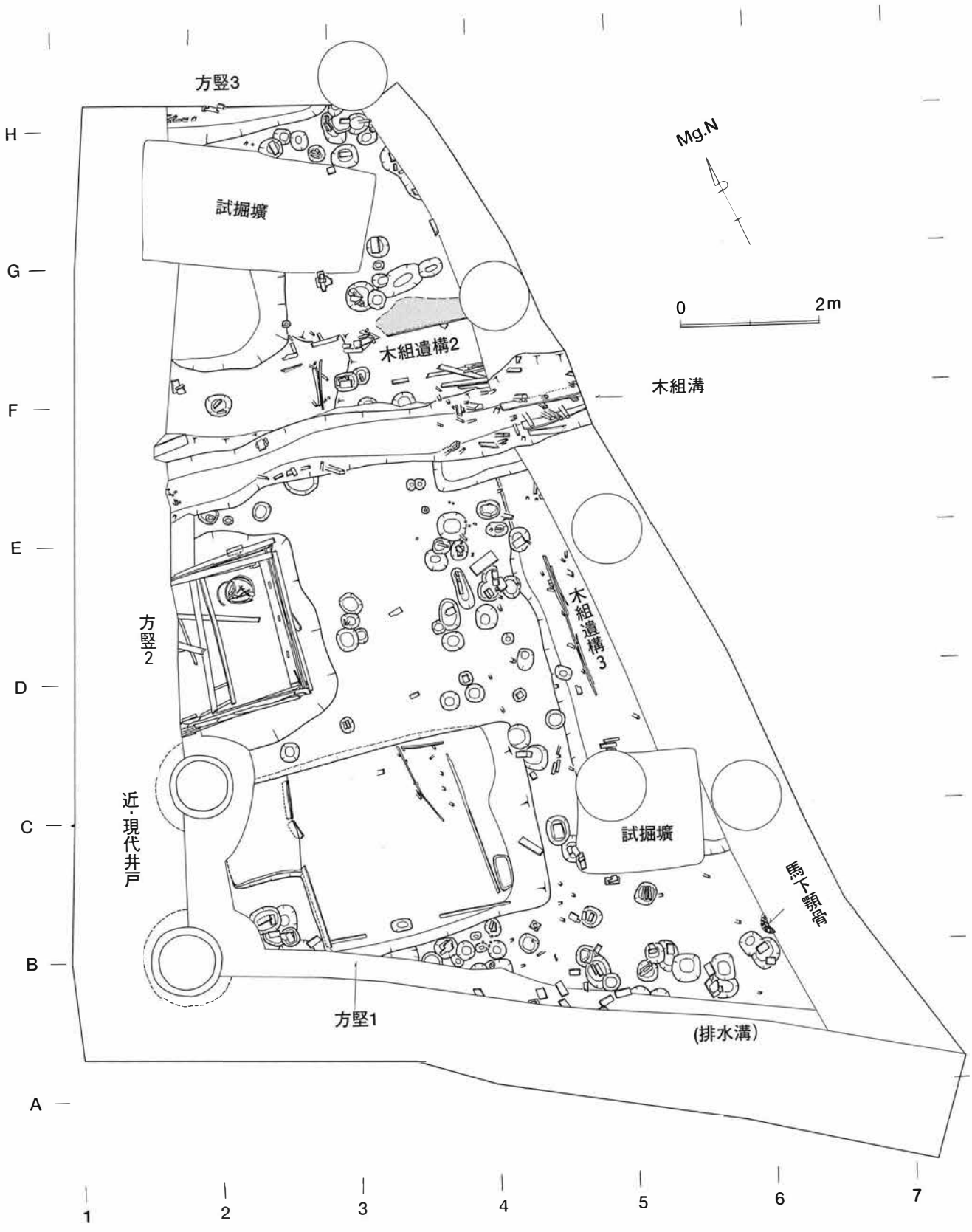


図21　三面遺構全体図（1／80）

5．三面の遺構と遺物

三面は中世基盤に似た暗褐色粘土層を生活面としている。この上面西側はほぼ平坦となっているが、二面道路遺構下は東側旧河川にむけてわずかに傾斜した地形を呈する。なお、Ⅰ区方形竪穴２の東側とⅡ区土壙１の南側で焼土面の広がりが確認され、三面生活時には火災を受けたと推定される。

道路遺構

安全確保のために調査区東壁際を掘り残したことで、三面に伴う道路遺構は検出できなかった。二面時道路より東側に寄って敷設されていたようである。なお、調査区東南隅（図21、馬下顎骨の横）で検出された柱穴は三面道路下の位置にあたり、より古い遺構が存在したことを推測させる。

道路面（泥岩版築層）直下から馬の下顎骨が出土したこと、木組遺構３が三面道路側溝の土留め板である可能性は既に前節（二面検出遺構）の各項で述べた。

木組溝

既に前節の項で述べた通りである。溝底が中世基盤の砂丘層をわずかに掘り込むだけであり、本址の構築が四面まで遡るとは考えられない。

木組遺構２・３

前節の各項で述べた通りである。参照されたい。

方形竪穴１（図22）

Ⅰ区南部で検出された。近現代の井戸掘り方で一部を壊されるが、１軒分の規模が判る遺構である。竪穴は東西3.5m、南北2.8m、深さ70cmの本体部に、東西1.0m、南北1.4m、深さ30cmの張り出し部を設け、内傾する北壁となだらかに傾斜する東壁を持ち、床面は平坦に削られている。

床面の北東部角近くに打たれた杭は２列、その杭を囲むように東・西・北の三方に板材が見られる。杭の内側を残して周囲を埋め戻し、通路状の間仕切りとしたのであろうか。西壁と南壁の板材は壁板の一部と思われる。床面から約10～20cm浮いた状態であり、竪穴使用時の床面は埋め戻して作られていたと推測できる。ただし、土層観察結果からは使用時床面の線を明確に区別できなかった。なお、床面の２箇所にある浅い窪みは柱穴と考えていたが、不定形に掘り広がる可能性があり、基盤となる砂層の汚れを掘ったものと判明した。

張り出し部は浅く掘り残した基盤砂層の上に、砂と粘土を積み上げて構築されている。現状では東側へ崩れているが、構築当初は本体部掘り方床面より25～30cm程高かったと推測される。土留めの板材は５枚検出された。立て並べた４枚の横板中央に１枚の縦板をあてて支柱としていたようである。杭の痕跡が見つからず、この状態では土留めの機能を果たさない。やはり本体部床面をかさ上げして使用したと判断せざるを得ない。なお、張り出し部上面からは、かわらけ皿40個体分がすべて伏せた状態で検出された。

方形竪穴１出土遺物（図23～25）

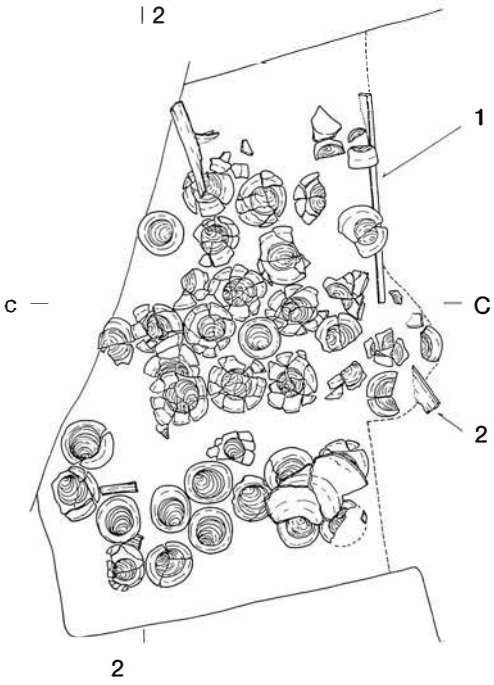
遺物の多くは覆土上層から出土したものである。張り出し部の遺物は区別して取り上げた。

157～167はかわらけ皿。157、158のみ手捏ね成形。161、162、164は胎土に赤色小粒を含む。159、162、164、165、166は完形。161は略完形。157、163は灯明皿として使用されている。164、165は張り出し部上面のかわらけ皿と同一型式で口縁部が歪んでいる。

167、168は常滑。167は甕の口縁部である。口径36cm前後の大型で、比較的精製された胎土には微気孔が多い。口縁部から肩部にかけて自然釉。168は甕の底部。底部内外面と腰部は焦げている。

169～172は山茶碗窯系捏ね鉢。172は胎土に大小の長石粒を含む。腰部はヘラケズリ調整、内底はよ

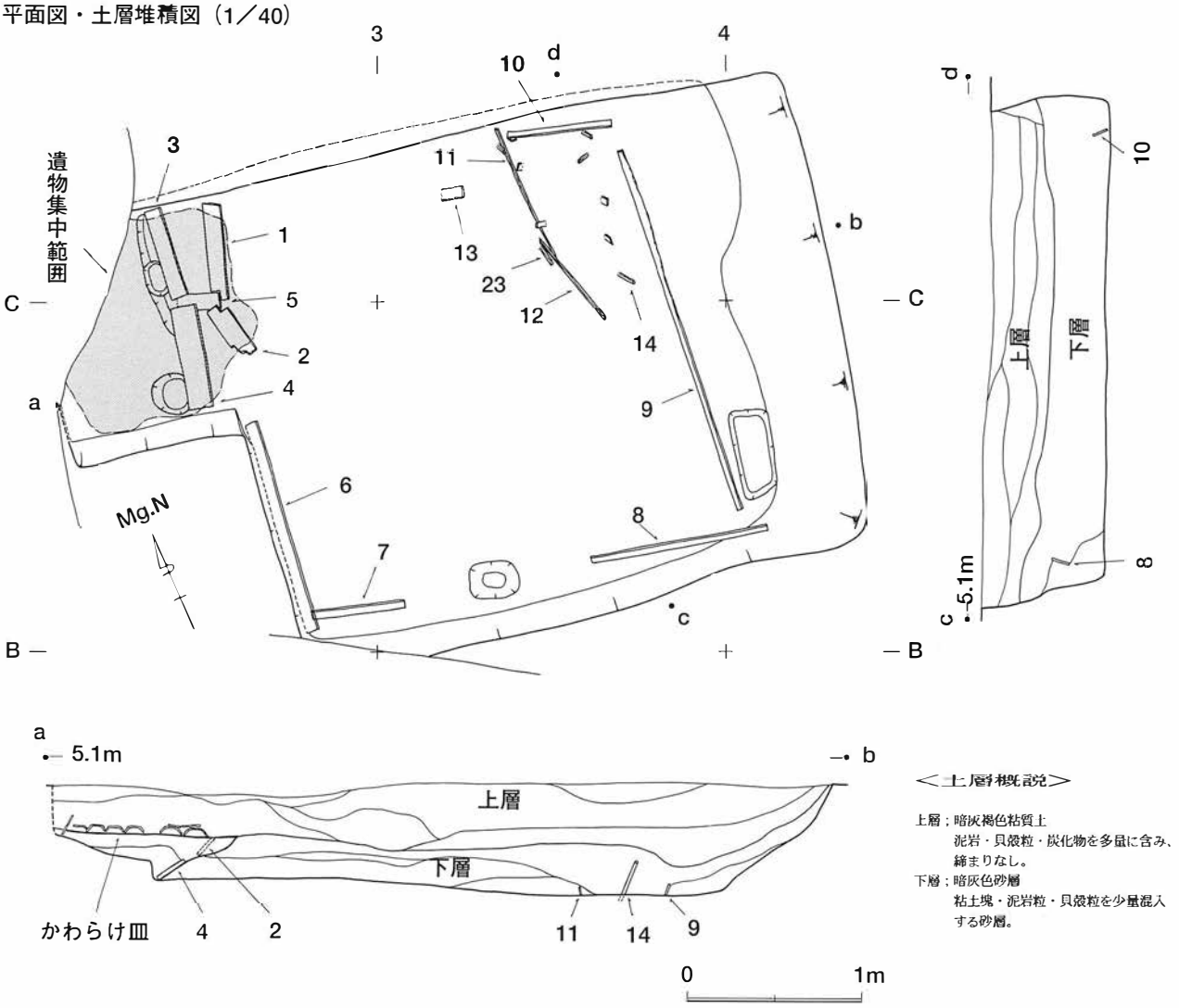
張り出し部・遺物出土状態（1／20）



＜木材計測表＞

番号	種別	厚さ× 幅 × 長さ、cm	上端高	備 考
1	板材	1.9×15.0× 54.5	4.63 m	ホゾ組み
2	板材	1.5×14.0× 34.5	4.65	ホゾ組み
3	板材	2.0×13.0× 52.5	4.45	
4	板材	2.5×16.5× 59.5	4.47	
5	板材	2.5× 9.5×(26.0)	4.57	支柱?
6	板材	2.0×27.0×127.0	4.63	
7	板材	2.0×15.0× 55.0	4.50	
8	板材	2.0×12.0×106.0	4.61	
9	板材	2.0× 3.0×216.0	4.34	
10	板材	1.0×10.0× 63.0	4.36	
11	板材	1.5×10.0× 85.0	4.38	
12	板材	1.5× 7.0× 60.0	4.34	
13	杭	2.0× 8.0×(34.0)	4.58	板状
14	杭	3.0× 3.0×(25.0)	4.52	順次北へ
15	杭	1.0× 3.0×(17.0)	4.46	
16	杭	1.5× 3.0×(23.0)	4.49	
17	杭	2.0× 3.0×(23.0)	4.48	
18	杭	2.5× 2.5×(22.0)	4.49	
19	杭	1.0× 2.5×(10.0)	4.36	順次南へ
20	杭	1.5× 2.0×(16.0)	4.58	
21	杭	1.5× 4.0×(31.0)	4.58	
22	杭	3.0× 3.5×(27.0)	4.50	
23	杭	2.0× 4.0×(26.0)	4.51	

平面図・土層堆積図（1／40）



＜土層概説＞

上層：暗灰褐色粘質土
泥岩・貝殻粒・炭化物を多量に含み、締まりなし。

下層：暗灰色砂層
粘土塊・泥岩粒・貝殻粒を少量混入する砂層。

図22　方形竪穴1（1／20，1／40）

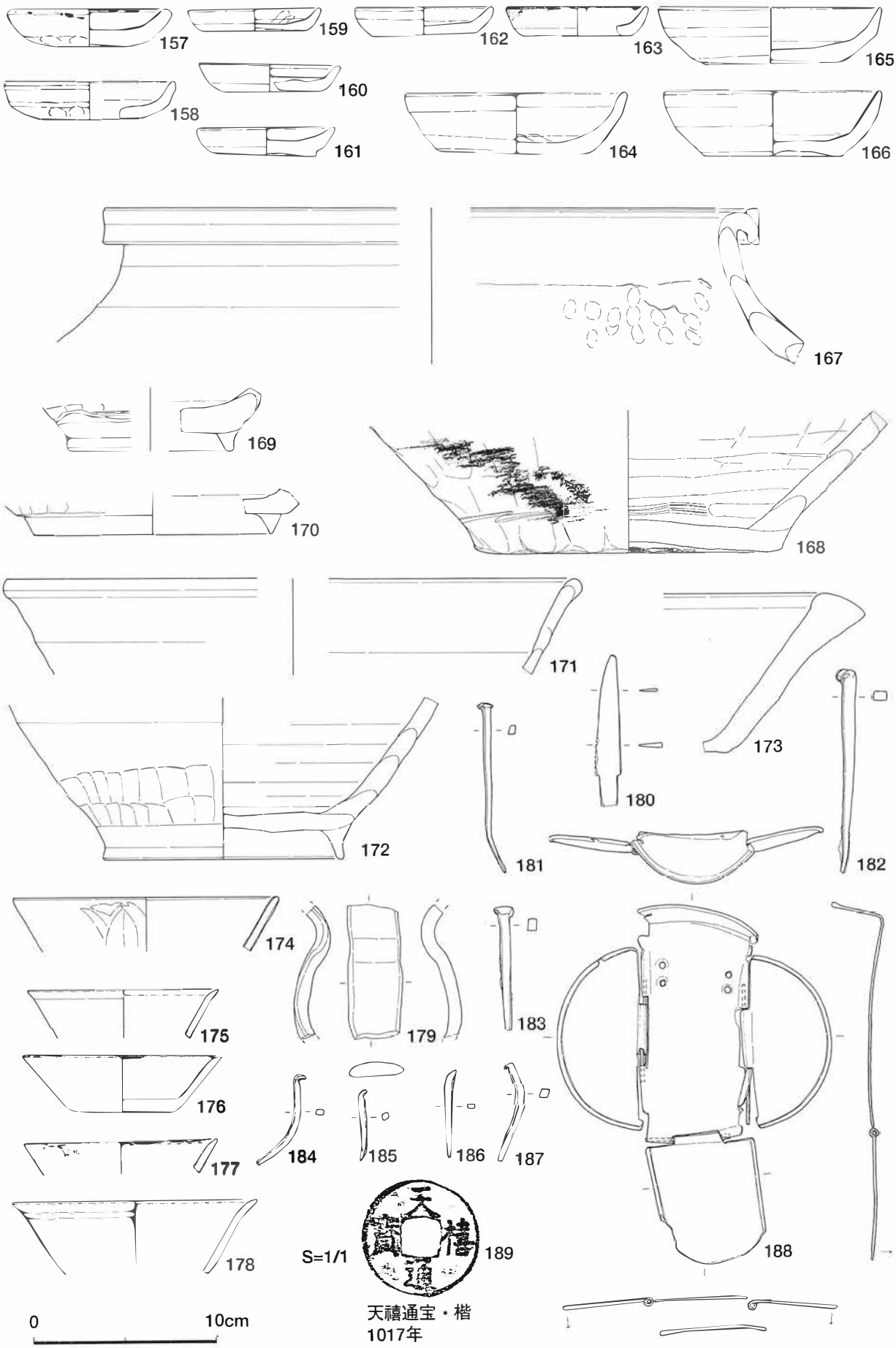


図23　方形竪穴１出土遺物（１）

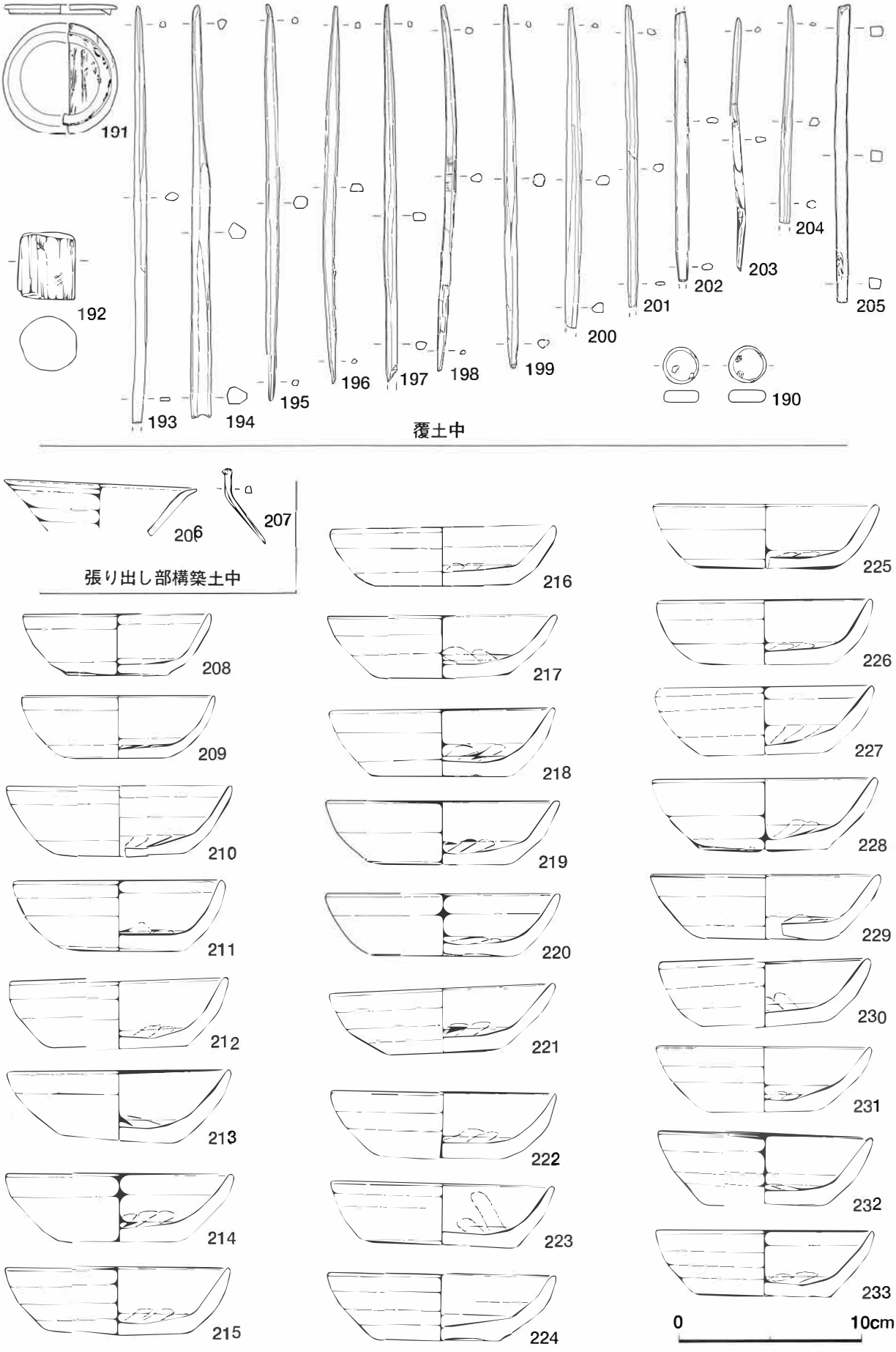


図24　方形竪穴１出土遺物（２）

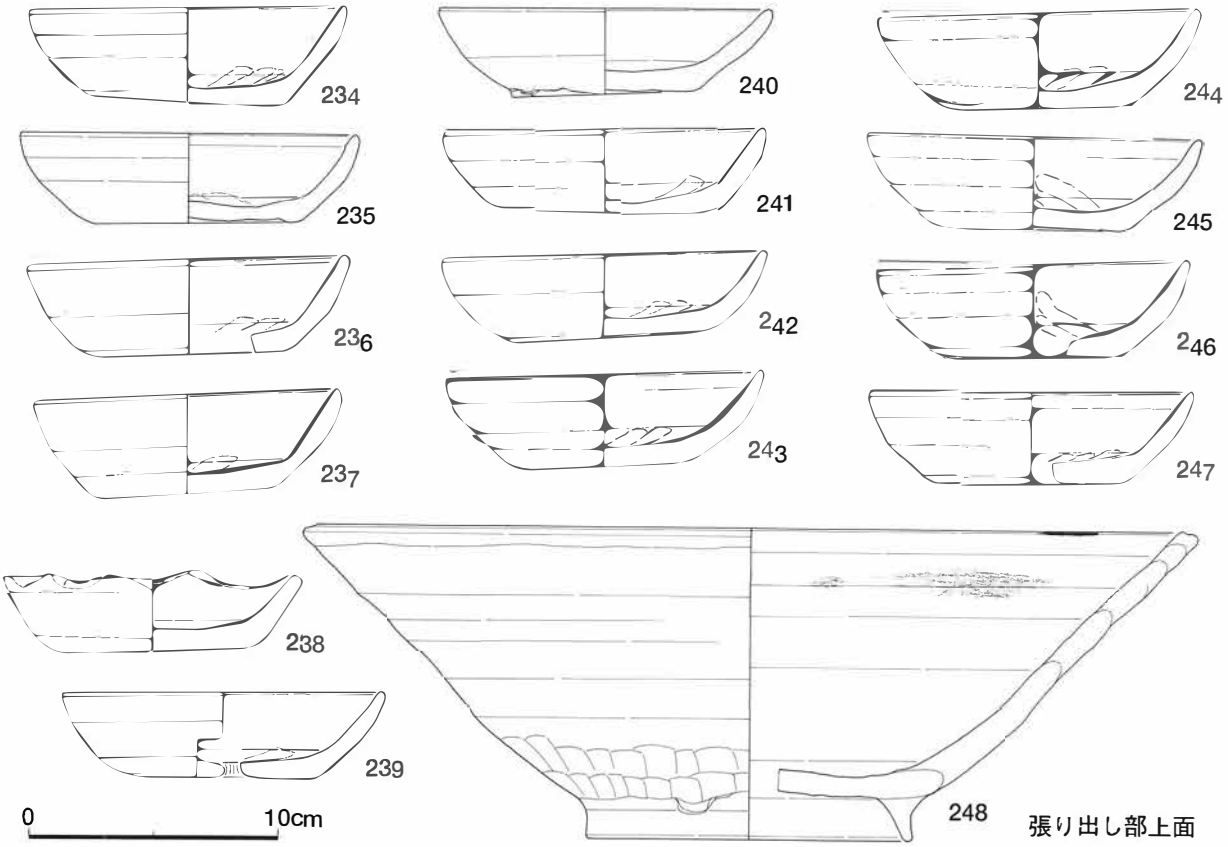


図25　方形竪穴１出土遺物（３）

く使い込まれて摩耗している。

173は瓦質手焙り。体部内面ヘラナデ。外面は指頭押さえ後、下位に縦のハケ調整を施す。口縁部下はヘラミガキ調整である。

174～179は舶載磁器。174は竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗。複弁。175、176、177は白磁口兀皿。178は口兀碗である。176、177は口唇部にスス付着。179は白磁水注の把手と思われる。

180～188は鉄製品。180は刀子。全長8.3cm、刃部長6.6cmを測る。181～187は釘。188は不明鉄製品。上端を前に折曲げた本体部の左右両翼と下端に、蝶番で可動式にした薄板を繋ぐ。各部材端部は丸く、内側に緩い曲面を持つ。本体部には釘穴らしき小孔が左右２個ずつある。本体部と左右両翼は竪穴の床面から約10cm上の砂層中から出土し、下端の舌状部分は張り出し部構築土中から出土した。

189は銭。天禧通宝。周縁を磨った加工銭である。

190は骨製品。獣骨（鹿角？）を円盤状に削ったもの。直径約2.0cm、厚さ約0.6cmを測り、覆土上層から２個出土した。双六の駒か。

191～205は木製品。191は不明木製品。円盤状の板の片面に高台状の削り出しを持ち、漆様のものが付着している。192は木栓。193～204は箸。205は箸の未製品か。

206、207は張り出し部構築土中から出土した遺物である。

206は白磁口兀皿。

207は釘。

208～248は張り出し部上面から一括出土した遺物である。接合不可能の小片を除くと、山茶碗窯系捏ね鉢１個体とかわらけ皿39個体を数える。かわらけ皿はすべて糸切り底である。

かわらけ皿は211、212、213、216、217、221、226、227、231、232、233、237、241が完形。215、218、222、238、239、

243、244が略完形である。

208、209、210は器壁薄く精製された胎土で色調は白っぽい茶系を呈す。他のかわらけ皿とは異なる型式の一群である。

211、212、213、215、216、217、221、222、224、226、227、228、230、231、232、233、237、240は橙色を呈し、胎土が粗く赤色粒子と雲母を含む。この一群は口縁部に両側から押したような歪みを持つが、他のかわらけ皿についても胎土や焼成は共通している。239は底部に穿孔がある。

248は山茶碗窯系捏ね鉢。約1/3個体片。胎土は大小の長石粒や小石が混入し暗灰色を呈する。口縁部下内面には火を受けた痕跡、内底面は磨耗が著しい。

第四章　まとめ

本報は国庫補助事業分の報告であるため、確認・検出されたすべての生活面と遺構を掲載できたわけではない。本報に掲載できた範囲と調査団分の報告書に割譲した範囲とを明確にし、併せて出土遺物の特徴や検出遺構の推定年代についても触れてまとめとしたい。

・一面での成果

一面で検出できたのは石組溝だけである。石組溝は小規模で簡易な構造を持ち、周辺部に住居となる建物跡や生活臭を感じさせる遺物がないこと、検出面が水田床土に似た灰色粘土層上面であることから、水田耕作用に掘られた給排水施設と考えられる。出土遺物から推定される年代は16世紀後半～末。根拠となるかわらけ皿（図７－５～13）は体部が直線的に外傾し、内底中央にナデツケがないため同心円ないし渦巻き状の強い整形痕が残る型式で、八幡宮直会殿用地の調査では「造営目論見絵図」（天正十九年／1591年）に描かれた下宮回廊跡を中心とした生活面から出土している。完形品を含めた９点が石組溝埋没段階で一括投棄されており、当該期の良好な資料となりうるものである。なお、石組溝に混入した薄手のかわらけ皿（図７－１～４）は17世紀代のものであり、一面および石組溝が中世最後の生活面と遺構であることを裏付けている。

・二面および三面での成果

二面から三面にかけては本地点の最盛期と思われ、数多くの遺構が検出された。時期的な新旧関係はあるが継続して使用された遺構も多く、土地利用状況に大きな変化はなかったと考えられる。

基本的な遺構配置としては、本地点東側に泥岩版築の南北道路が敷設され、道路西側一帯は東西方向に伸びる木組溝で区画された居住区となっていたようである。

道路遺構は本地点東側の旧河川に沿って作られ、県企業庁水道局用地の調査で検出された道路および河川に接続するものと推定される。河川は調査区の外にあり検出していないが、水道局用地での成果を援用すれば、多少の流路変更を伴いながら古代～中世にかけて流下しており、15世紀前半までには埋没したと考えられている。現在、調査地点と隣接地の境を流れる小河川（Ｕ字溝）は、この旧河川の名残りと思われる。

木組溝は居住区を南北に分ける区画溝として機能し、東端は道路遺構を切って旧河川に繋がるものと思われる。道路と木組溝は同時期に存在しており、板材を渡して簡単な橋としたのであろうが、調査区内ではそうした施設は確認できなかった。

居住区で検出された建物には、板囲い建物、掘立柱建物、方形竪穴がある。板囲い建物は主柱穴を除いて明確な柱穴を持たず、礎板上に柱を立てて間仕切りや板壁を配置した後に、建物の基礎範囲全体を

土で埋めて固定した構造であり、おそらく木組遺構１・２は板囲い建物の一部と推定される。木組遺構１は方形竪穴１より新しく、木組遺構２は道路遺構より古い。掘立柱建物は一軒分の柱並びの確認できたものがなく、大形の遺構に一部を壊されたものと思われる。つまり、掘立柱建物は方形竪穴より古い可能性がある。これら２種類の建物規模や配置については、調査団分の報告書を参照されたい。

方形竪穴は３軒検出された。方形竪穴１のみ本報で扱い、方形竪穴２・３については調査団分の報告書に譲った。方形竪穴１は一軒分の規模が判るだけでなく、張り出し部で確認された40個体のかわらけ皿の出土状態は類例のないものである。この竪穴の性格は明確にし難いが、日常の住居にしてはかわらけ皿以外の雑器がなく、工房にしては加工具や未製品が出土せず、商家や店舗とするにも確証がない。したがって、母屋に付随する物置き・作業小屋としておきたい。出土遺物から推定される年代は13世紀後葉～14世紀初頭に比定できる。

土壙１・２および三面上に堆積した土層中の遺物は調査団分の報告書に譲った。

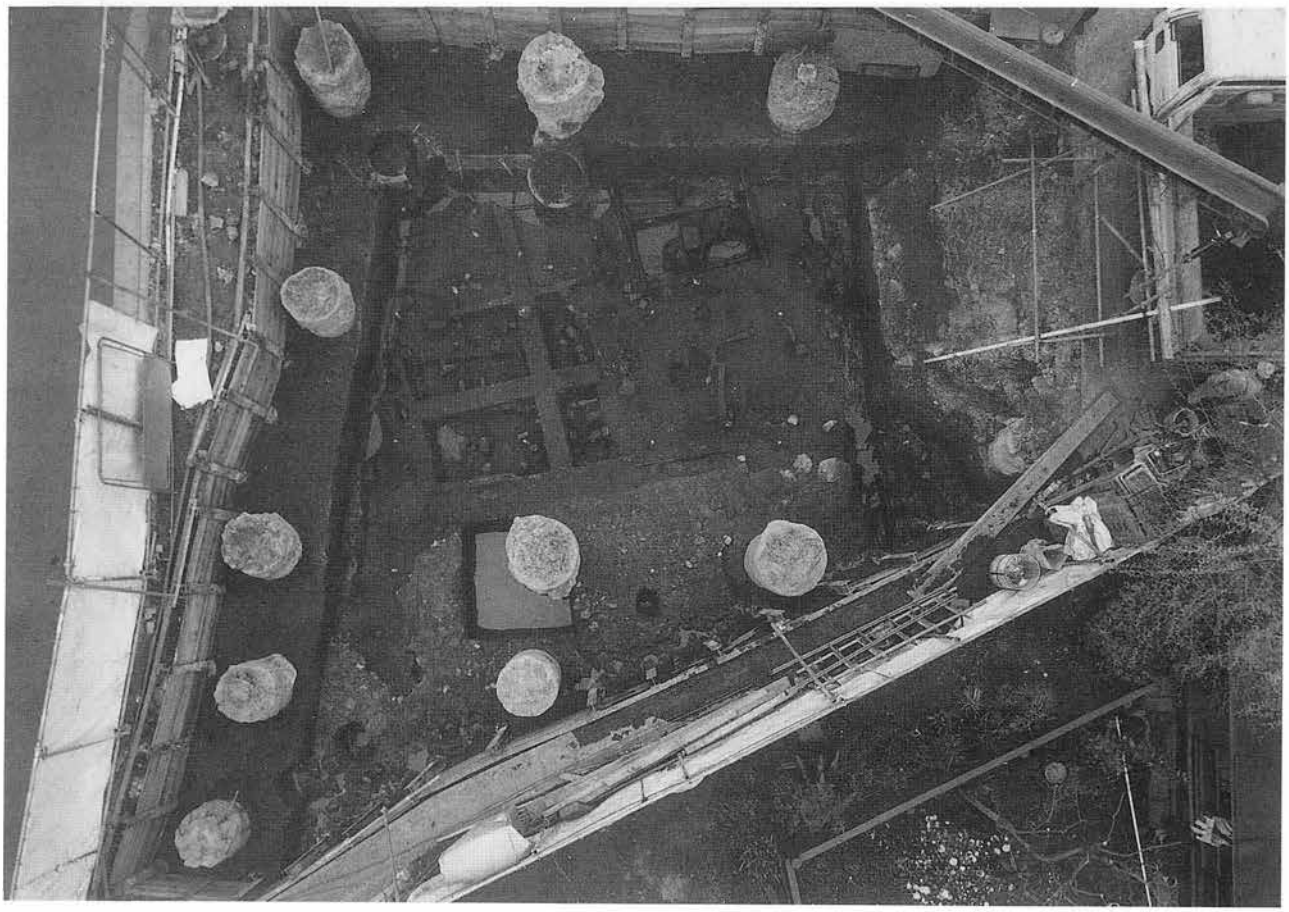
二面、三面については後刊される報告書に負うところが大きい。予察として言えば、当該期は13世紀後半～14世紀代までであり、15世紀の遺構や遺物は見つかっていない。今小路西（御成小学校内）遺跡では、大形武家屋敷の外縁に広がる庶民居住区を確認しているが、遺構・遺物の様相や年代観はほぼ一致しており、本地点がそうした庶民居住区の一画であることは間違いない。

・四面での成果

四面は中世基盤となる砂丘層であり、東側旧河川際には橋脚状の大形柱穴が検出された。出土遺物には縄文土器・土師器・須恵器・古代瓦などもあるが、遺構密度は低く中世以前の遺構は見つかっていない。遺構・遺物を含めた詳細は、後刊される調査団分の報告書で明らかにしたい。

写　真　図　版

遺跡全景（空撮）

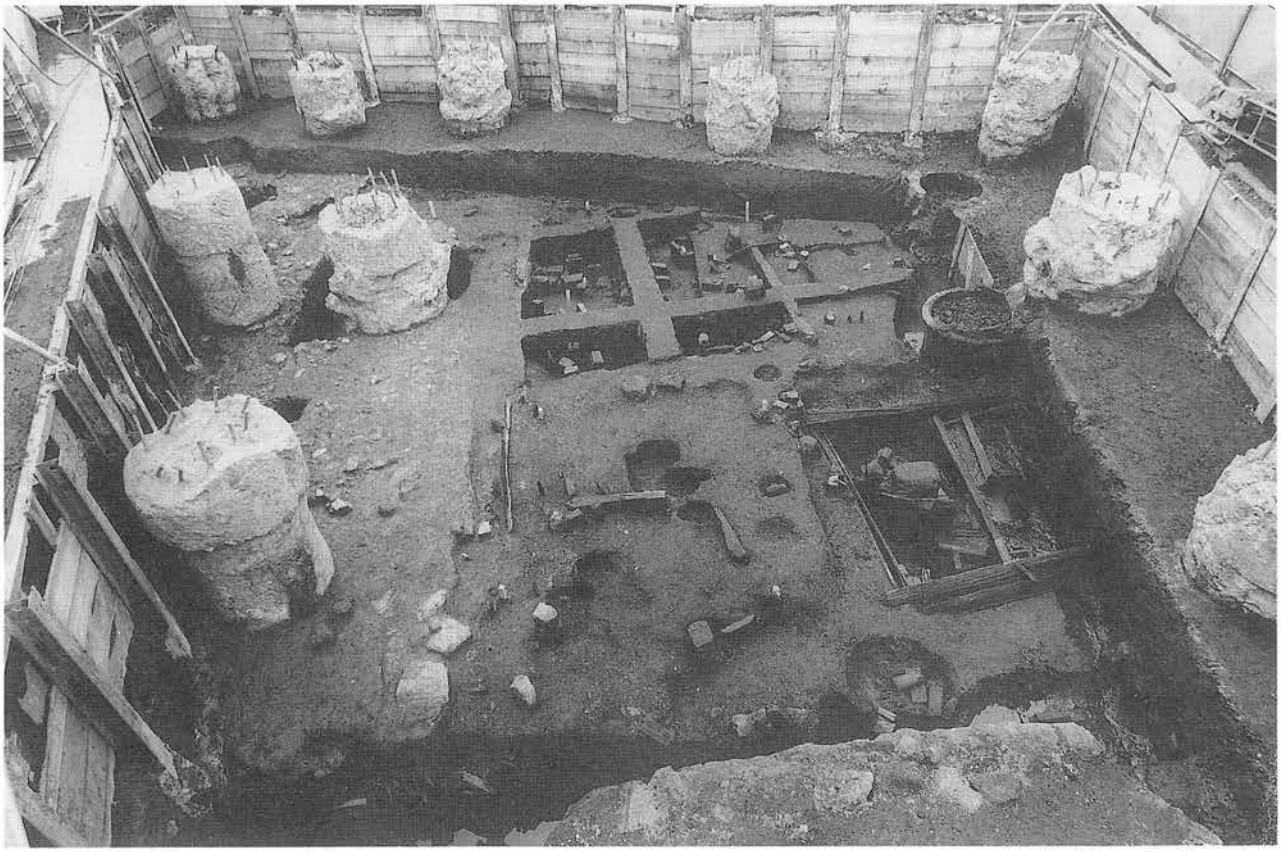


調査区全景（空撮）

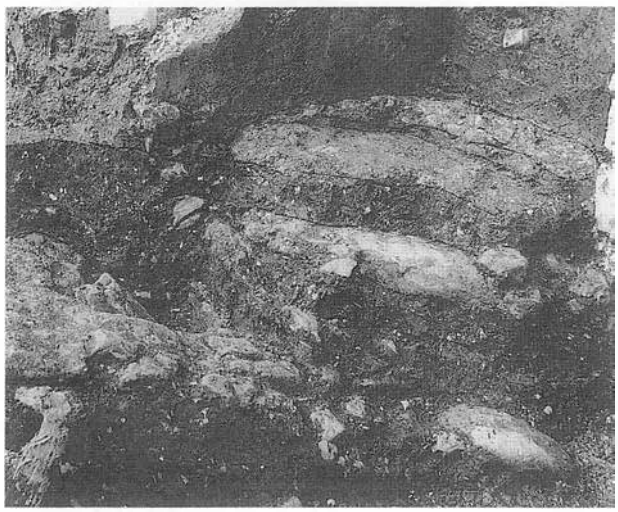
図版2

石組溝

石組溝・護岸および遺物出土状況

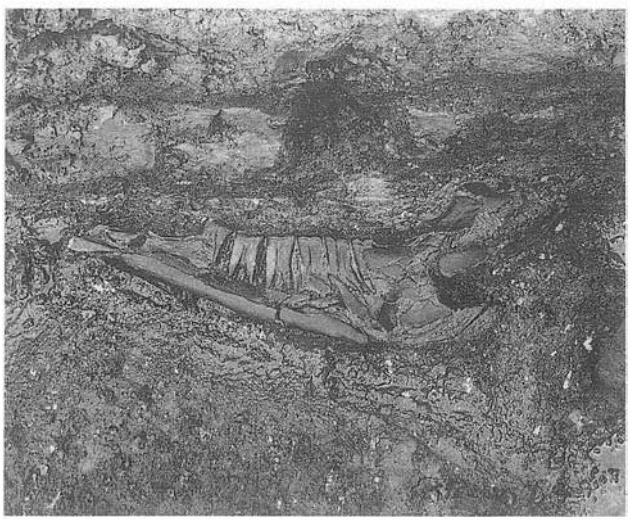


道路遺構全景



道路版築層の状態

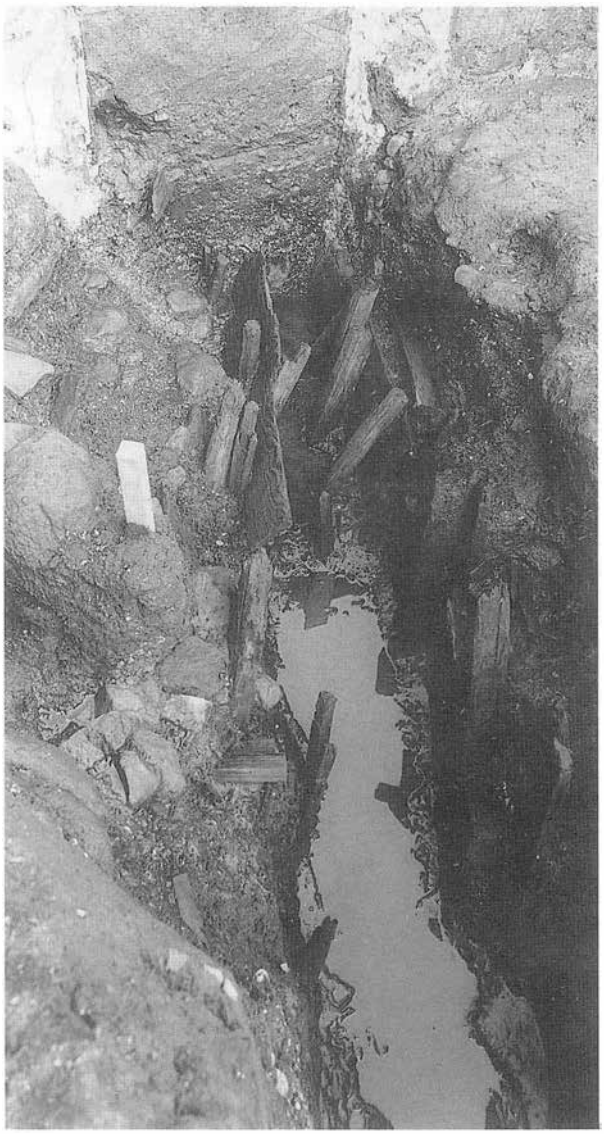
馬下顎骨の状態



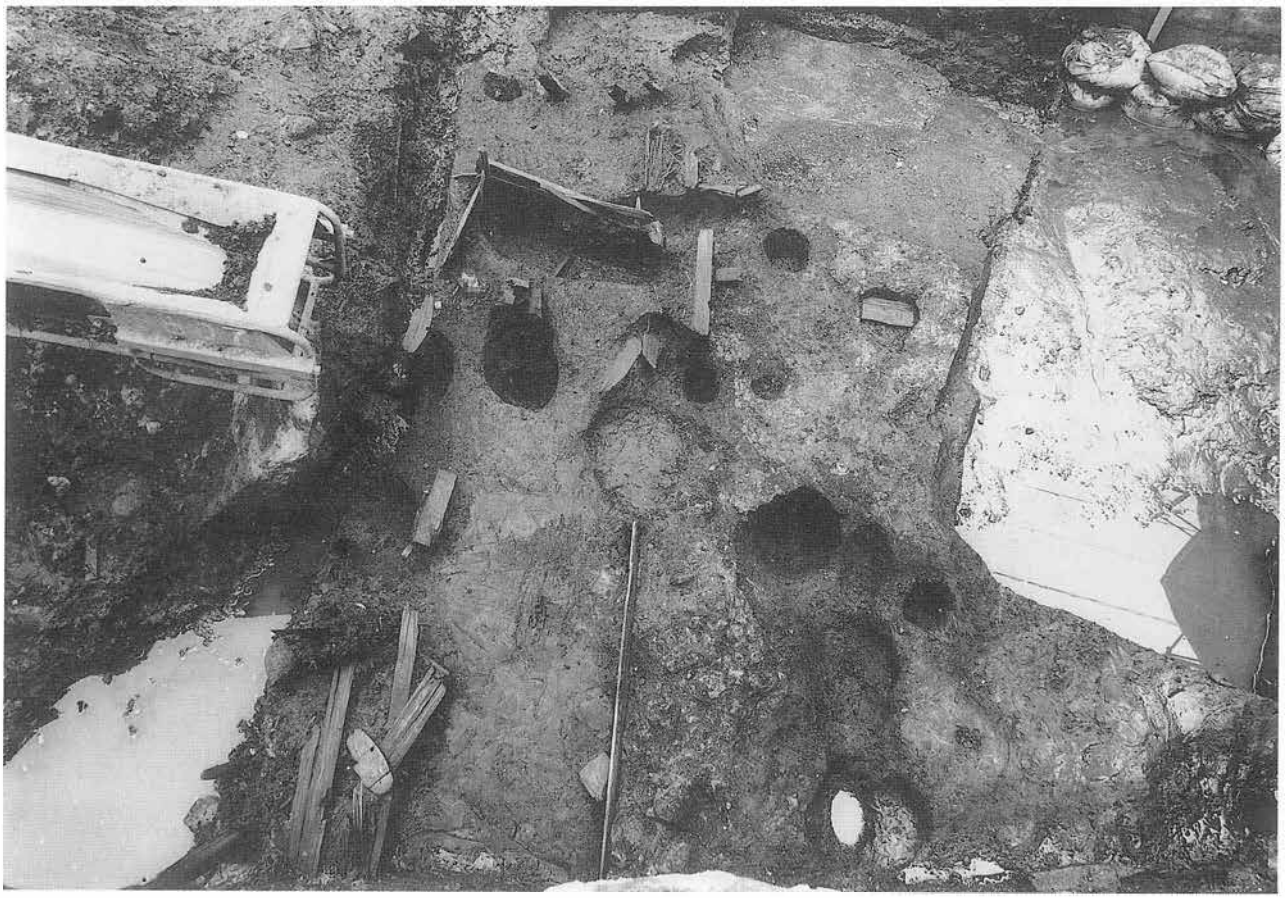
図版4

木組溝全景

木組溝・護岸の状態



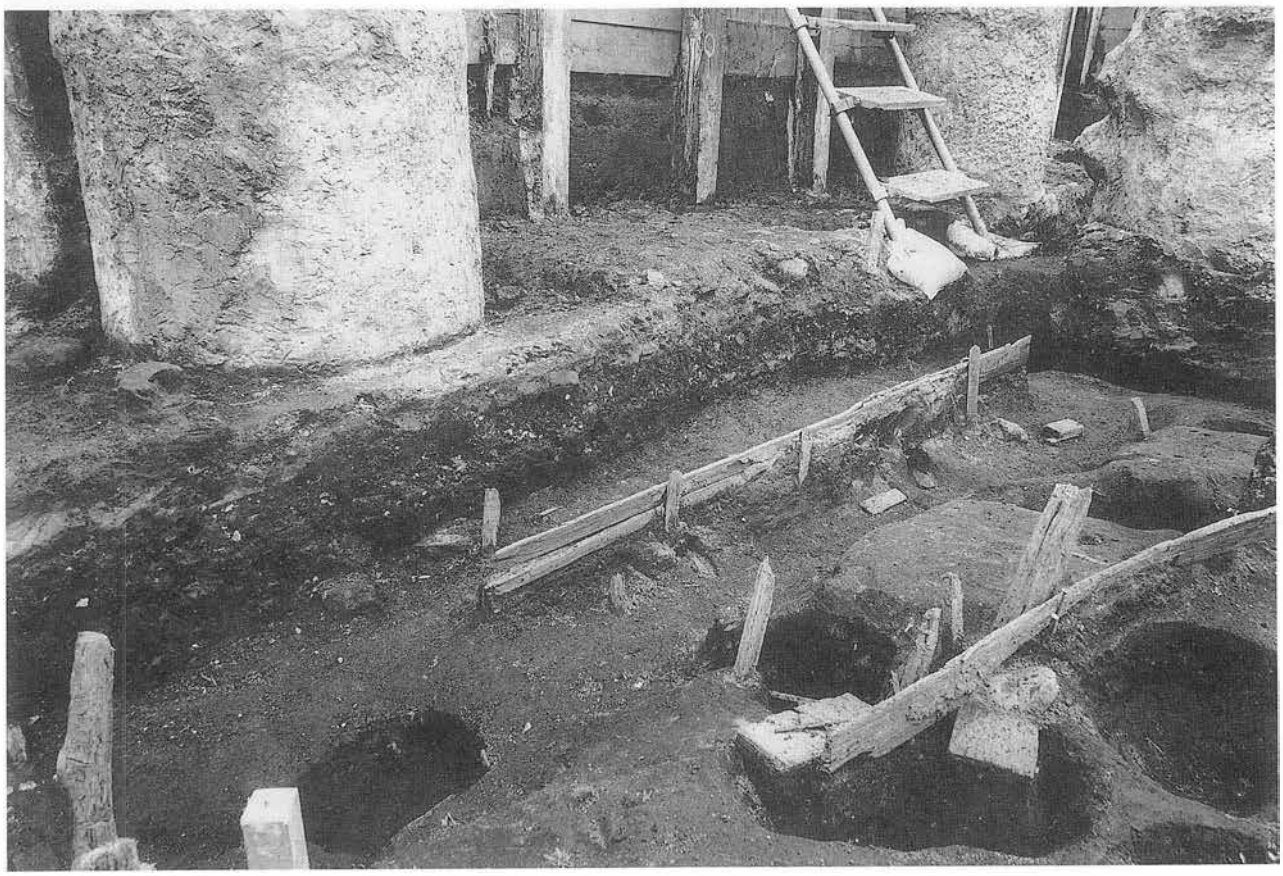
木組遺構1



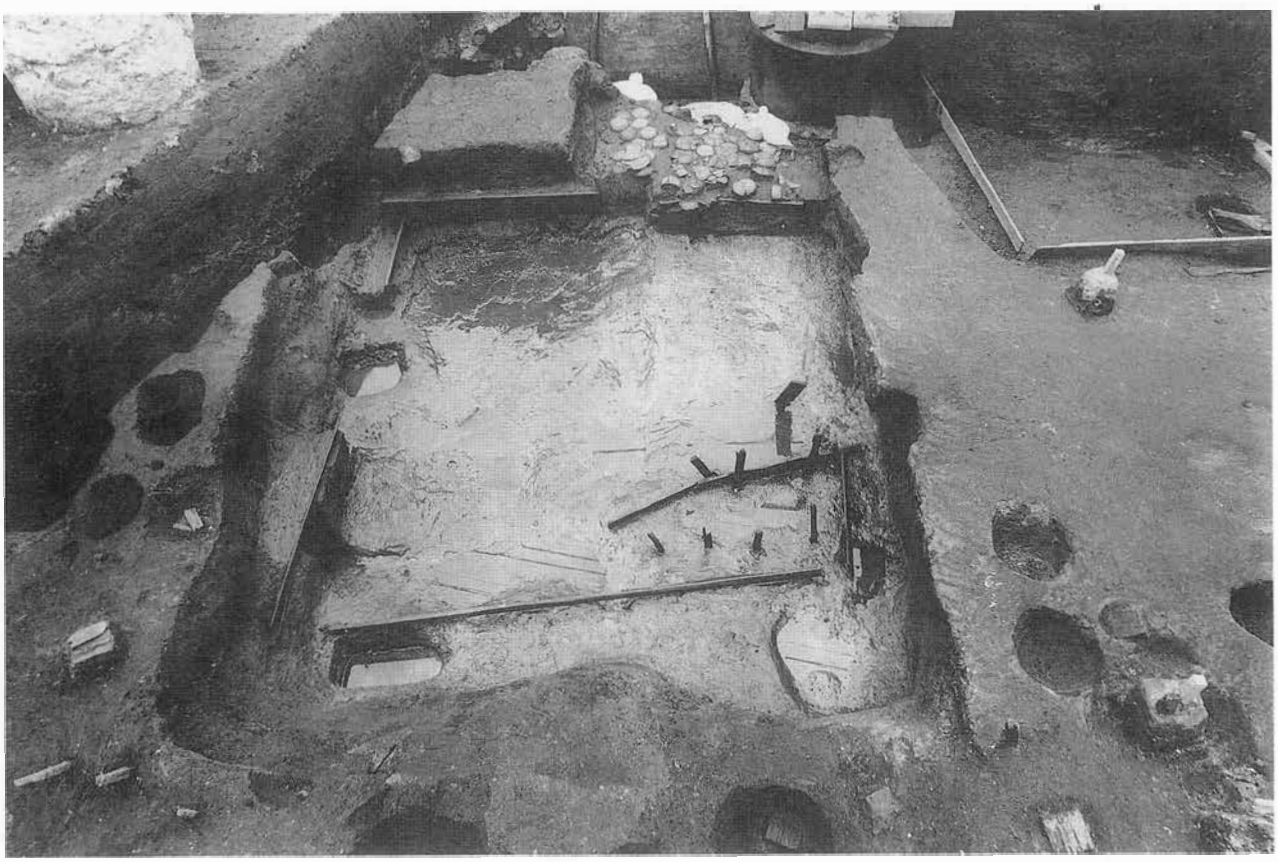
木組遺構2

図版6

木組遺構2・部分



木組遺構3



方形竪穴1全景

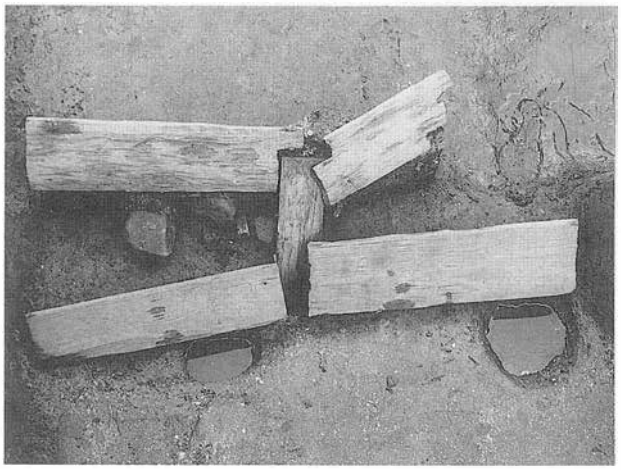
方形竪穴1張り出し部　遺物出土状況

図版8

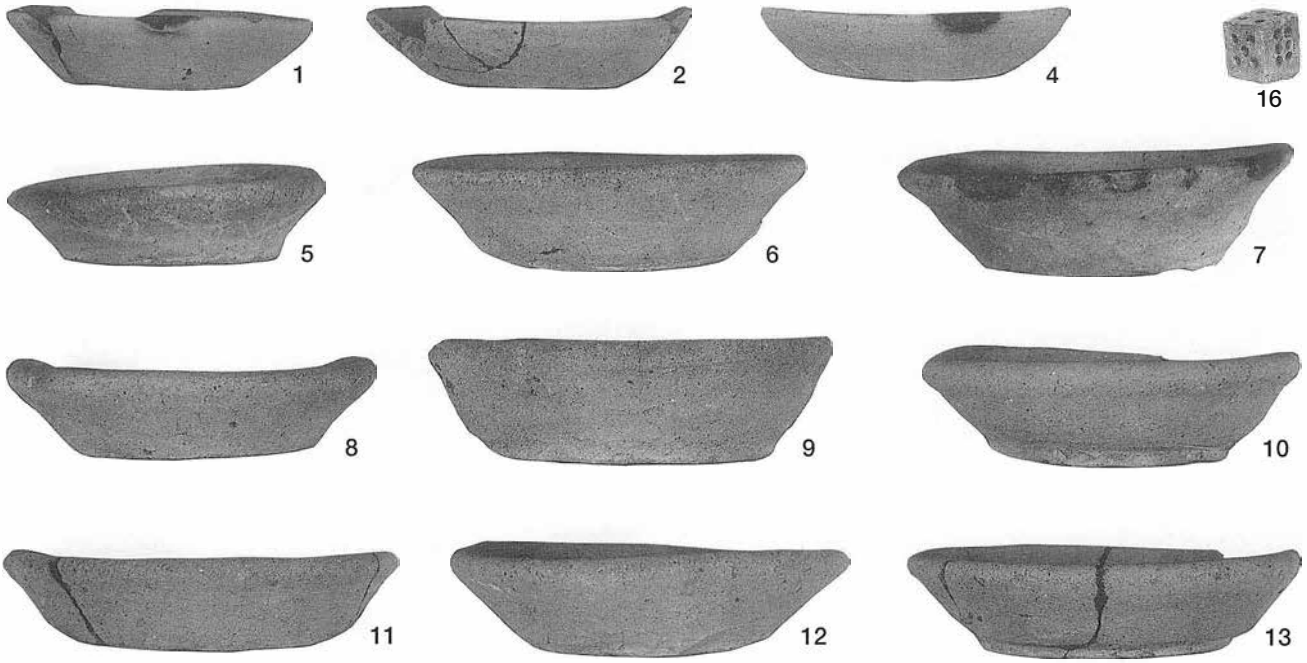
南から

方形竪穴1張り出し部
木組の状態

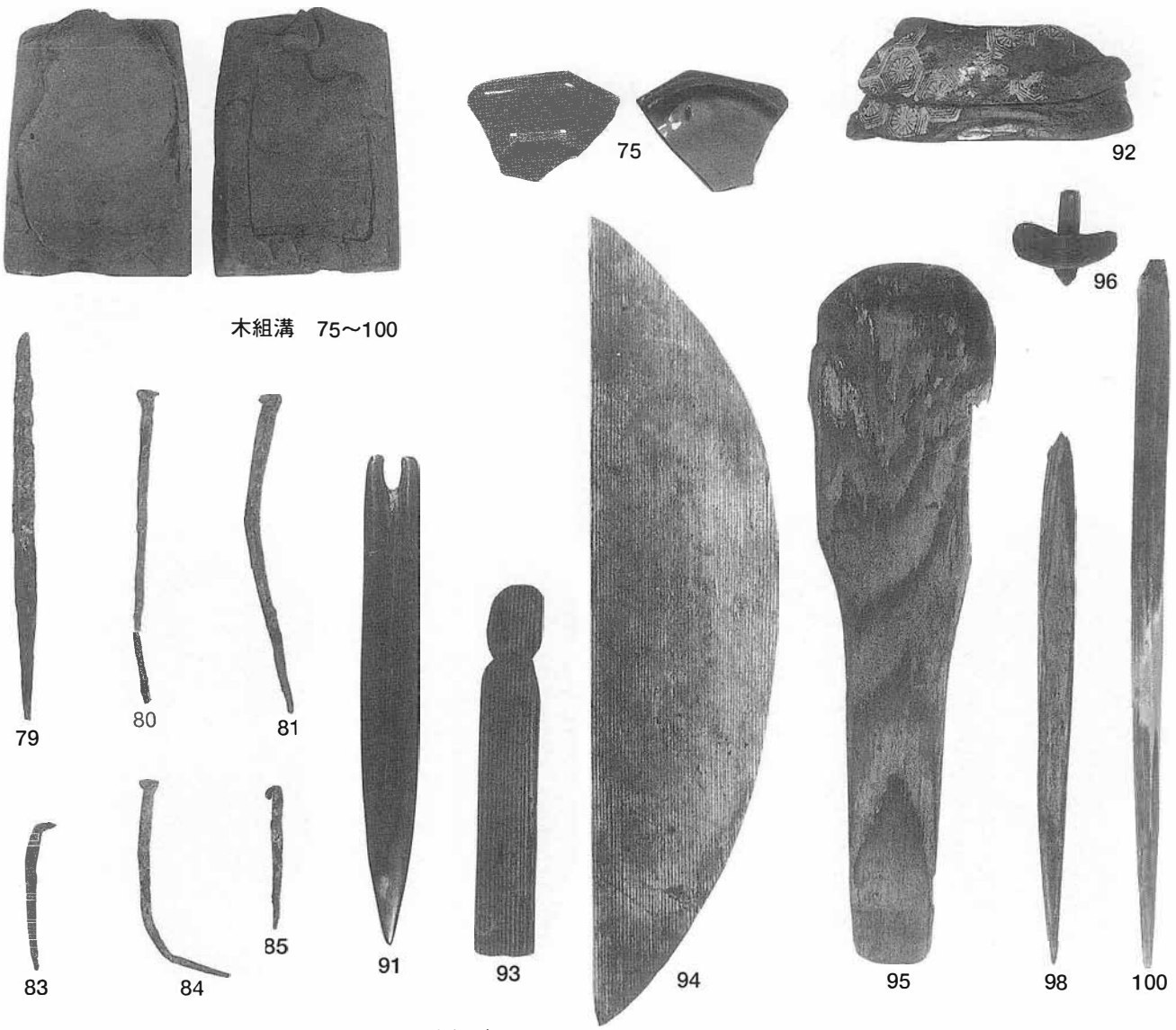
東から



方形竪穴1床面の木組施設



石組溝　1～16



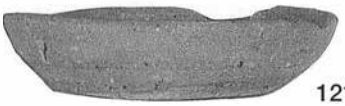
木組溝　75～100

▲　出土遺物（1）　番号は遺物実測図に対応する。

図版10

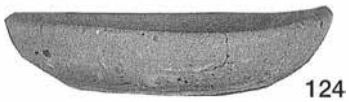
127

120

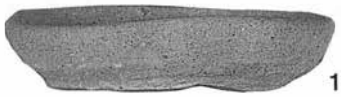


121

122



124



125

136

137

138

141

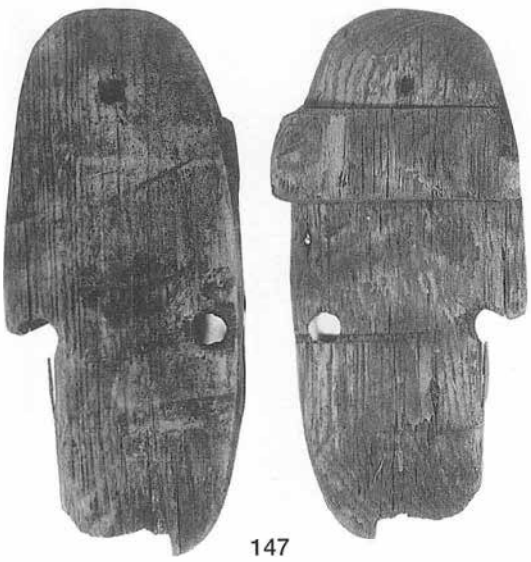
木組遺構1　120～127

木組遺構2　136～156

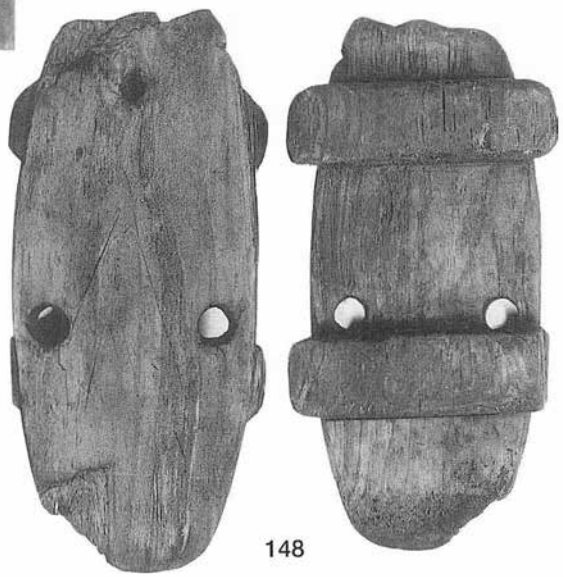
145

144

146



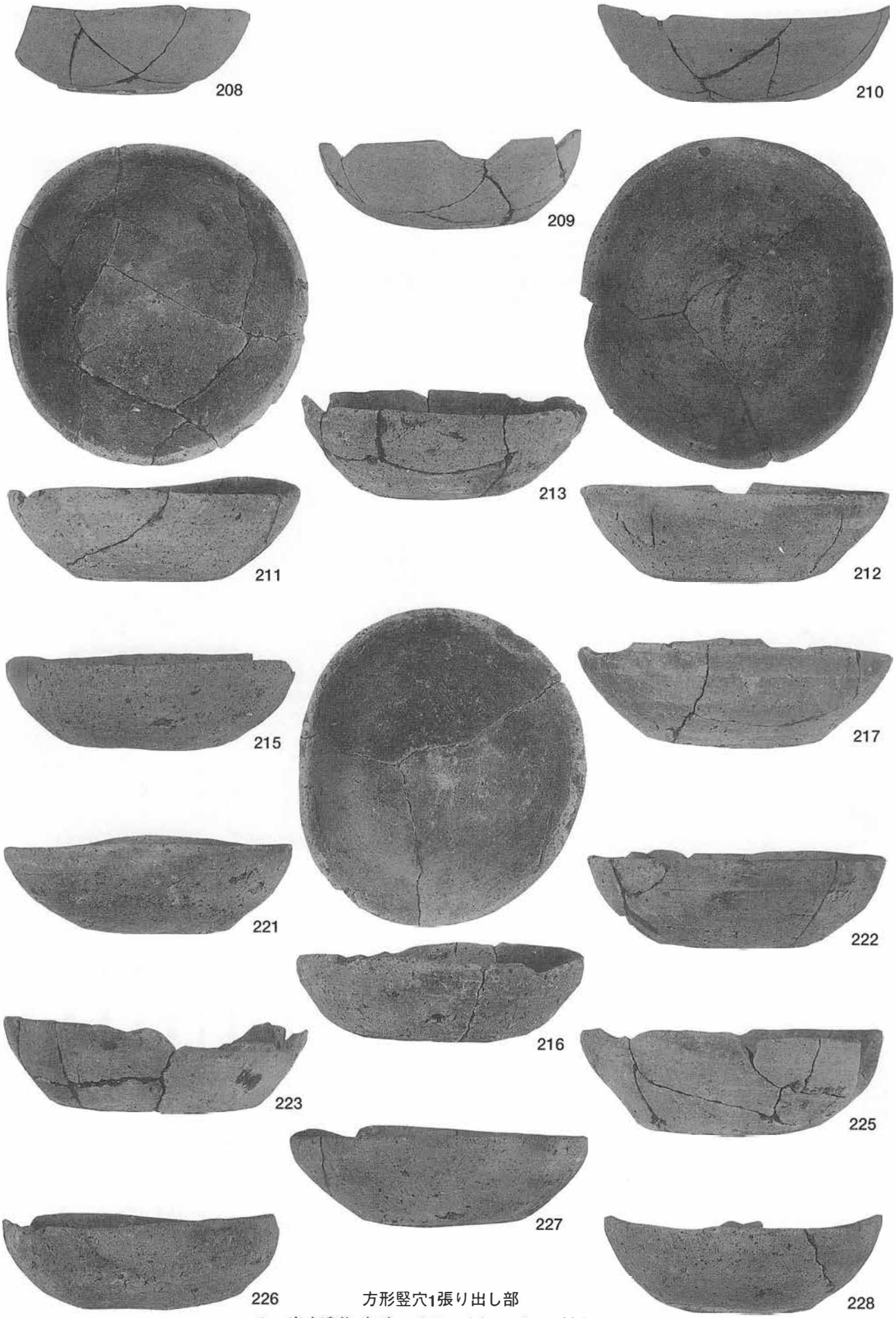
147



148

156

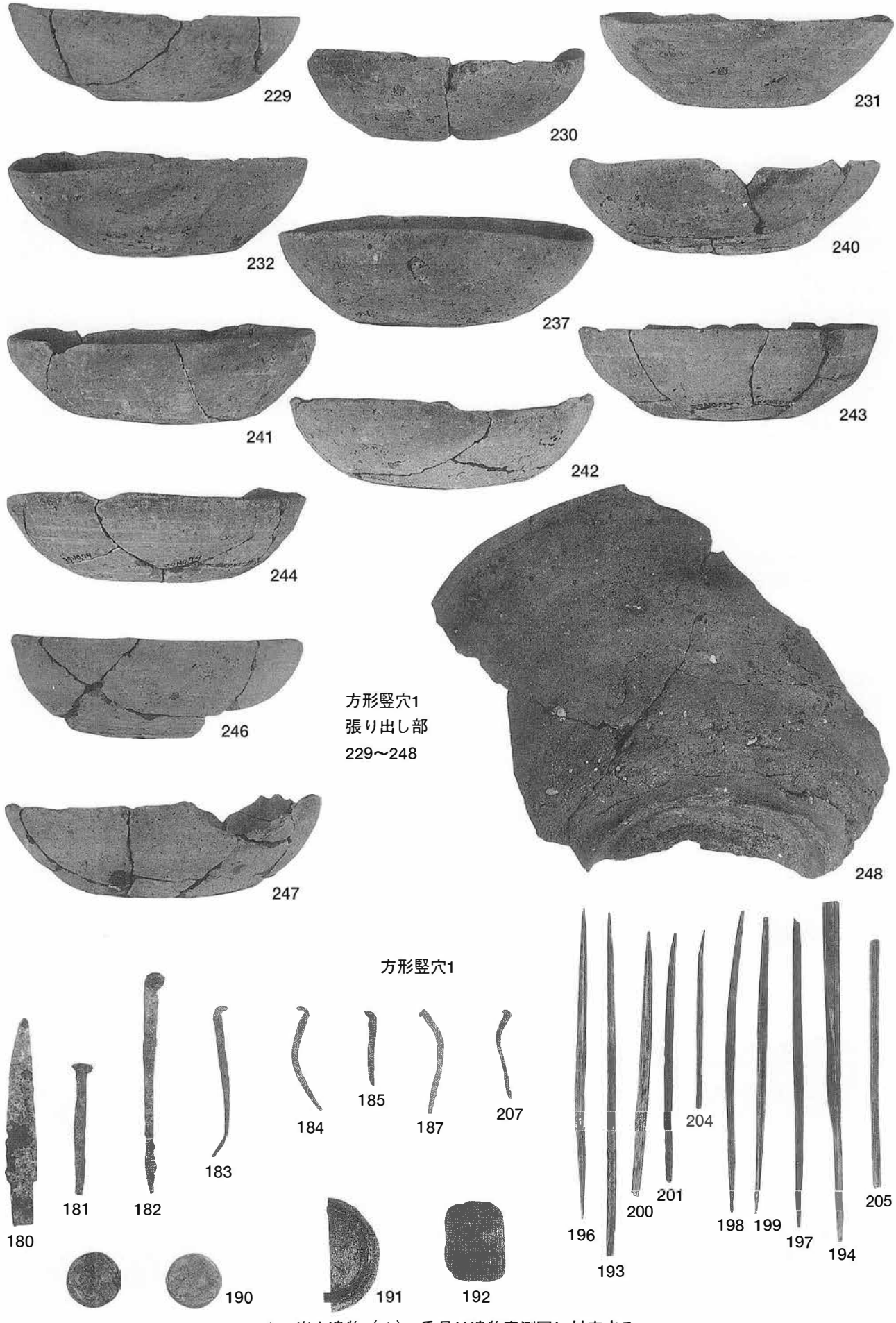
▲　出土遺物（２）　番号は遺物実測図に対応する。



方形竪穴1張り出し部

▲ 出土遺物（3） 番号は遺物実測図に対応する。

図版12



▲ 出土遺物（4） 番号は遺物実測図に対応する。

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	菊川英政
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
わかみやおおじ しゅうへんいせきぐん 若宮大路 周辺遺跡群	かながわけん かまくらし おなりまち 神奈川県 鎌倉市 御成町	204	242	35° 18′ 57″	139° 33′ 06″	19950309 ～ 19950415	68	自己用店舗併用住宅の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮大路 周辺遺跡群	中世都市遺跡	13～14世紀	道路遺構　1条 方形竪穴　3軒 溝　2条	かわらけ 常滑、瀬戸 木製品など 45箱分出土	

極楽寺旧境内遺跡（No.291）

極楽寺三丁目320番１地点

例　　言

1．本書は、極楽寺旧境内遺跡内の鎌倉市極楽寺三丁目320番1地点に於ける緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、個人専用住宅に係る建築範囲100㎡を対象とし、平成7年6月12日～6月30日にかけて鎌倉市教育委員会によって実施された。

3．報告書作成メンバーと担当分野は以下のとおりである。

・原稿執筆：田代郁夫（第1章）、継　実（第2、3、4章）

・資料整理・図版作成：大坪聖子、深尾義子、小西さつき、鈴木真由美、辻由美子、佐藤慈子、笠原さやか、西井末子、山田純子

・遺物写真撮影：上田求実、笠原さやか

・編　集：継　　実

4．調査体制は以下のとおりである。

・調査主体：鎌倉市教育委員会

・主任調査員：田代郁夫

・調　査　員：浜野洋一、大坪聖子、遠藤雅一

・調査補助員：渡邊王夫、高橋健一郎

5．出土遺物は、鎌倉市教育委員会が保管している。

凡　　例

・各図面の縮尺は次のとおりである。

遺跡位置図（1）：1／2,500

遺跡位置図（2）：1／250

遺構図：1／50

遺物実測図：1／3

・図版に掲載した遺物のうち、須恵器は断面黒色で表示した。

・各遺構図中のレベル数値はすべて海抜高である。

本　文　目　次

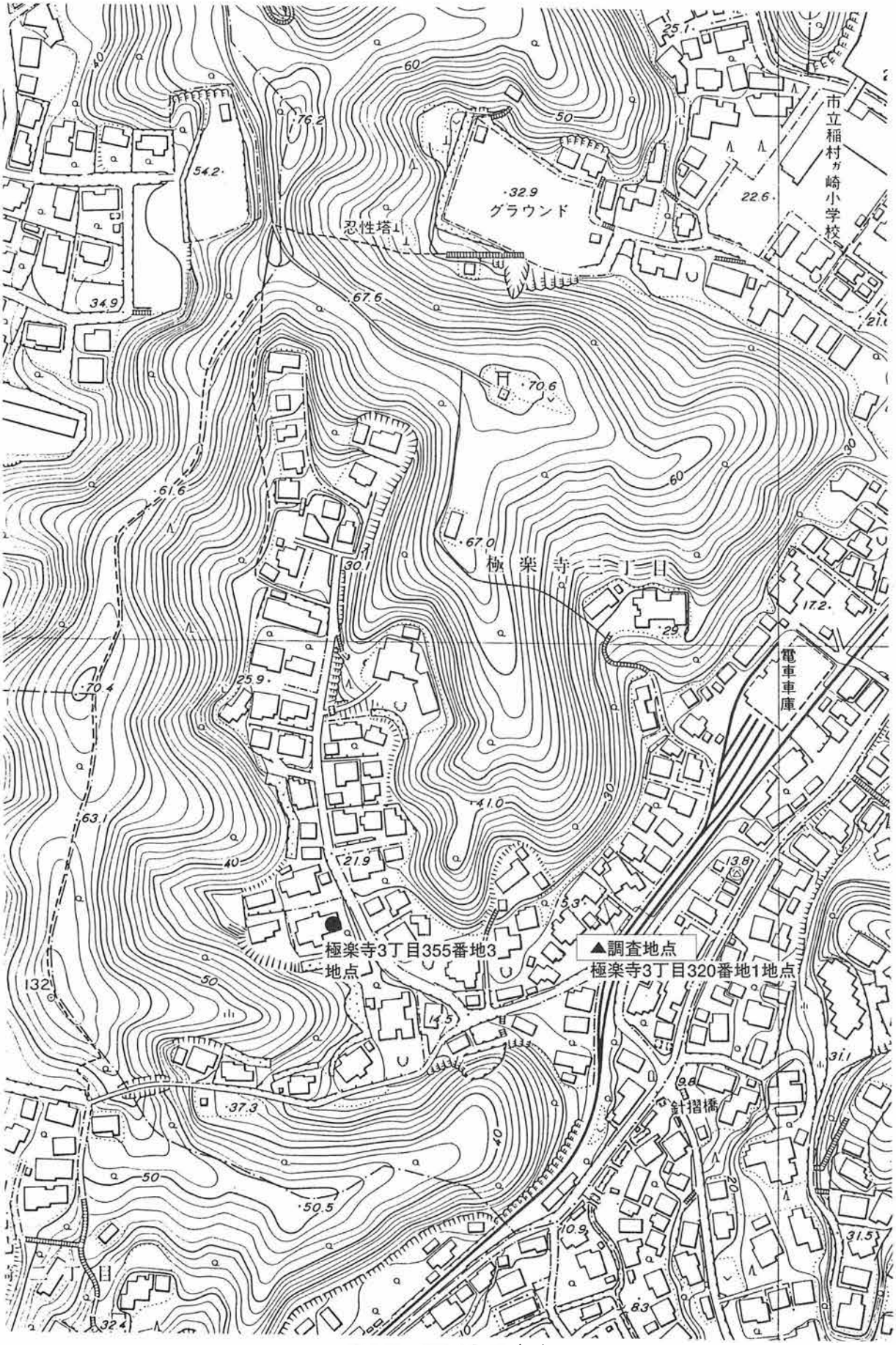
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……102
第二章　基本層序 ……102
第三章　検出遺構・遺物 ……104
第四章　まとめ ……111

挿　図　目　次

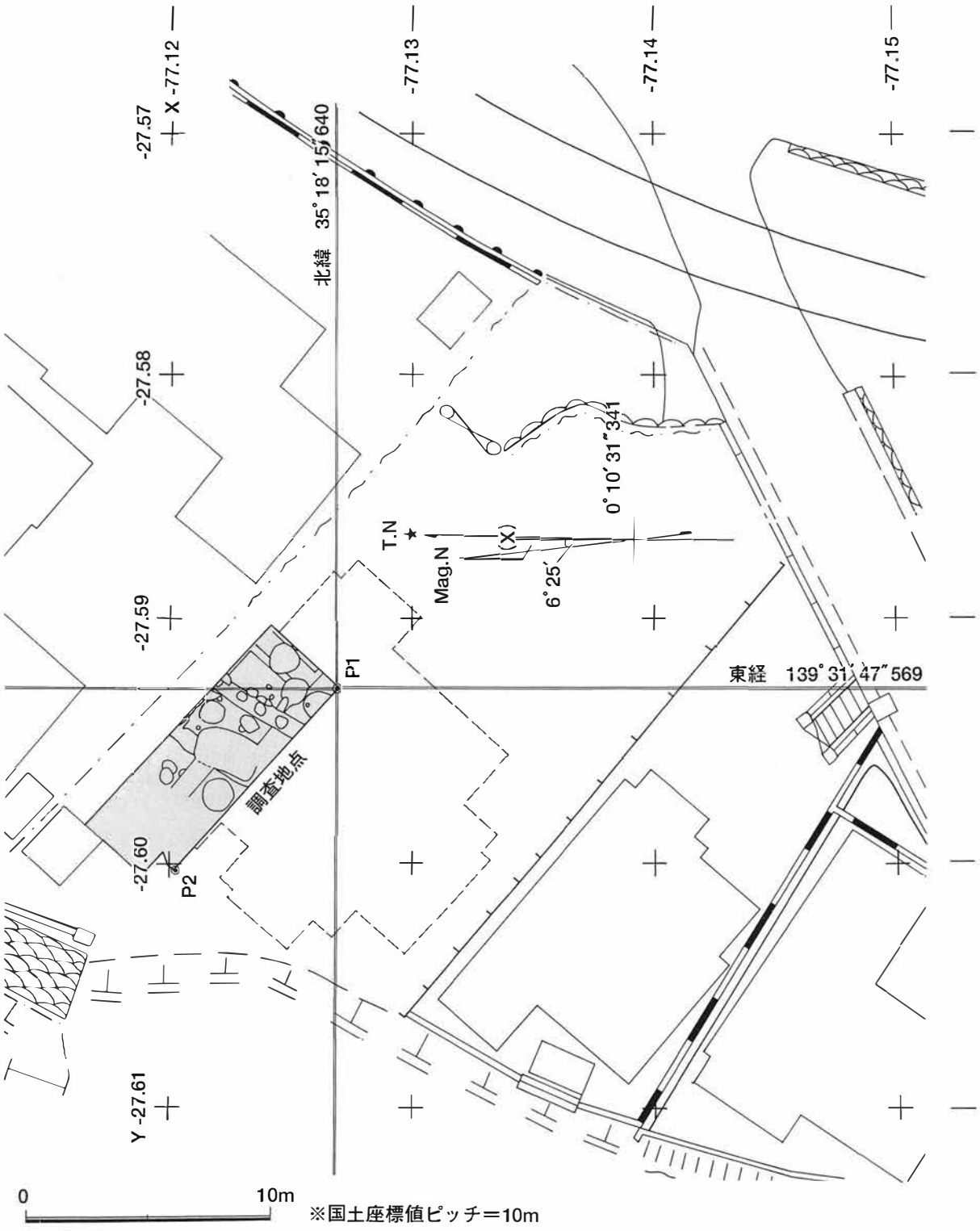
第１図　遺跡位置図（１）……100
第２図　遺跡位置図（２）……101
第３図　極楽寺境内絵図 ……103
第４図　遺構図 ……105
第５図　出土遺物（１）土壙１～６ ……108
第６図　出土遺物（２）溝（布掘）、中世地業層……109
第７図　出土遺物（３）古代遺物包含層 ……110

図　版　目　次

図版１　現在の月影ヶ谷入口付近、調査区全景 ……115
図版２　土壙１、土壙２、土壙３ ……116
図版３　土壙４、土壙５、土壙６ ……117
図版４　溝（布掘）、土層堆積状況、古代遺物出土状況……118
図版５　出土遺物（１）土壙１～６ ……119
図版６　出土遺物（２）溝（布掘）、中世地業層……120
図版７　出土遺物（３）古代遺物包含層 ……121


市立稲村ガ崎小学校
グラウンド
忍性塔
極楽寺二三丁目
電車車庫
針摺橋
▲調査地点
極楽寺3丁目320番地1地点
極楽寺3丁目355番地3
地点

第１図　遺跡位置図（１）



各点の地理的位置一覧表(座標系AREA9)

点名	X座標	Y座標	緯度	経度
P 1	X -77126.626	Y -27592.706	+35°18′15.640″	+139°31′47.569″
P 2	X -77119.812	Y -27600.250	---	---

第２図　遺跡位置図（２）

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

極楽寺旧境内遺跡は、江ノ島電鉄極楽寺駅から南西方向300mのところに位置する（第1図）。地番は鎌倉市極楽寺三丁目320番1。調査地点は現在の極楽寺の南側丘陵をひとつ隔てた月影ヶ谷と呼ばれる南向きに開口する谷戸の入口部に立地する。

極楽寺は霊鷲山感応院極楽寺と号し、真言律宗奈良西大寺の末寺である。開山は忍性、開基は北条重時である。「極楽寺縁起」によれば、正元元年（1259）、北条重時が良観上人忍性に従来一老僧によって営まれていた極楽寺という小寺を大寺に変えて、律院とするのに相応しい場所について諮ったところ、忍性は当時、地獄谷と呼ばれていた現在の境内地一帯を指したといわれている。「忍性菩薩行状略頌」には忍性は文永四年（1267）八月に極楽寺に入寺したとあり、この年に伽藍が落成したものと思われる。発願者の北条重時は弘長元年（1261）忍性の入寺を見ることなく歿している。文永四年以降、飛躍的な成長を遂げた極楽寺は元弘三年（1333）北条氏の滅亡により有力な後盾を失い、元亀3年（1572）には火災により講堂他3塔頭を残して焼失し、明暦年間には残った講堂を本堂に、仏法寺を方丈として現在地に移した。

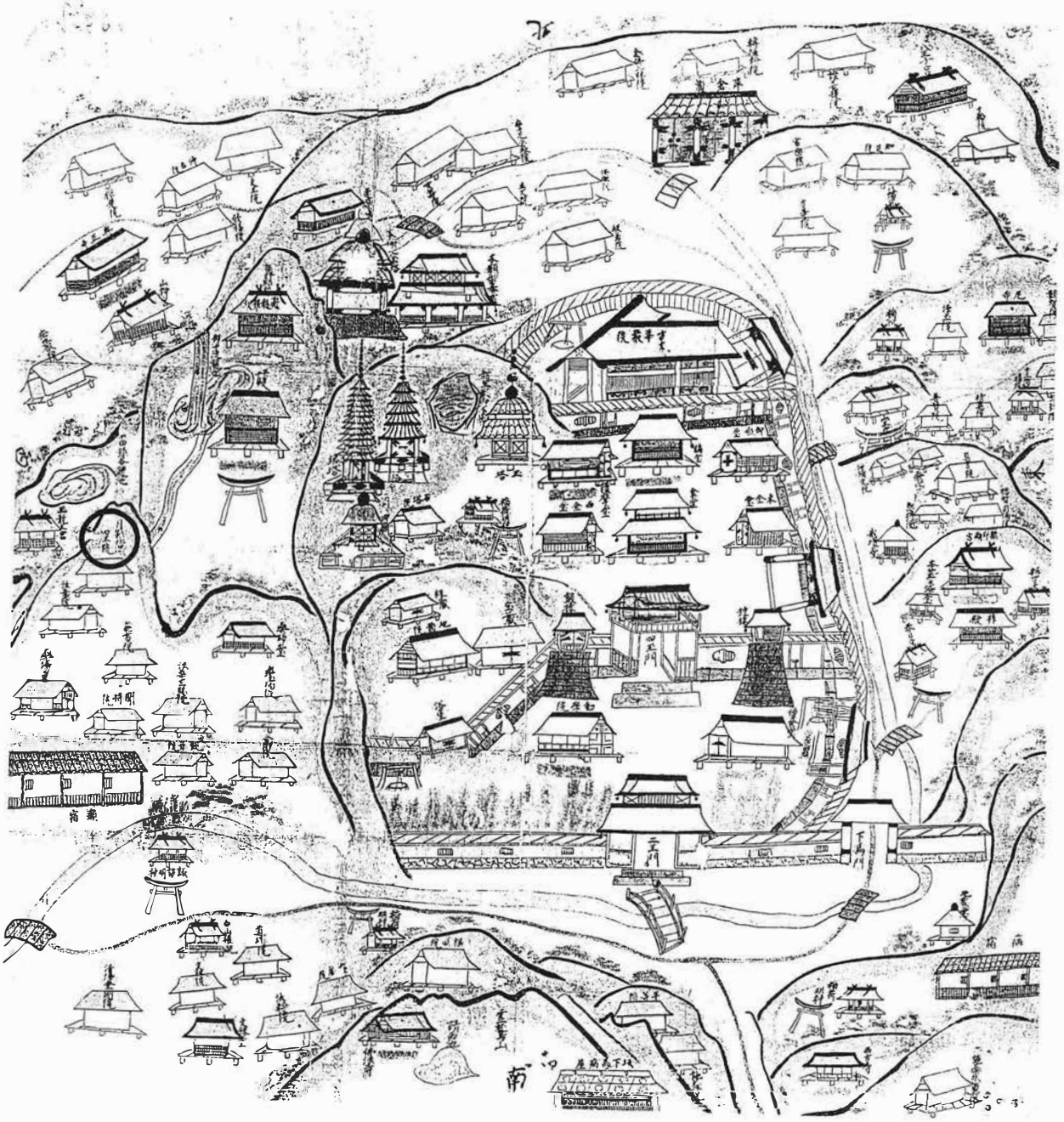
ところで、かつての境域には西方寺・仏法寺・真言院・興正寺・蓮華寺・尼寺・福田院・吉祥院・宝幢（塔）院・就学院・勧学院等の支院があったことが、境内古絵図等から推定されている。今回調査を実施した月影ヶ谷は、境内古絵図によれば最奥部に月影地蔵四王院、そしてその前面に法蔵院・無常院・薬湯寮などが建ち並んでいる谷戸である。

また、月影ヶ谷は、阿佛尼が住んだところといわれている。『十六夜日記』月影の谷には「あずまにて住むところは、月影の谷とぞ言ふなる。浦近き山もとにて、風いと荒し。山寺の傍なれば、のどかに、すごくて、浪の音、松の風絶えず。」とある。阿佛尼屋敷云々については、律宗に於ける尼寺の存在形態や歴史的意義との関連で議論されているところである。

第二章　基本層序

調査地点の原地形は上方からの流入土によって斜面となっていたようで、中世以降これを削平、土丹塊で地業し土地を利用していたものと思われる。現代のゴミを含む表土層によって遺構の上層部は破壊されており、中世以降、近代までの遺跡地の状況は不明である。

調査の最終段階に於いて、古代以前の状況把握の為、調査区の南西隅に1.5m四方のテスト・ピットを設定し、調査し得る限界（地表－3m）まで掘り下げたが、古代以前の遺構・遺物は検出されなかった。土層堆積状況の把握は、この部分及び調査区南・西壁で行った。堆積土は前述したように上方からの流入土で、粘性いずれも強い。また、山裾という事もあり、第8層以下は滞水層で土色は還元し灰色を呈する。尚、古代の遺物は第4層～第14層に包含される。各層の詳細は第4図を参照されたい。



第３図　極楽寺境内絵図（極楽寺蔵）

第三章　検出遺構・遺物

調査地点は前述したように谷戸内の沖積地に立地するが、調査区を設定し表土を除去した段階で岩盤が露出し、かつては山裾際であったことが明らかとなった。

検出した遺構は、土壙状遺構・溝（布掘）・ピットなどで、出土遺物から見てすべて中世の所産である。このうち溝・土壙3など方向性を有する遺構は、かつての山裾に平行して設けられる。いずれも後世の削平によって上層部が破壊され、原形を留めていない。但し、土層の観察から土壙群と溝には時期差が存在し、溝の方が構築時期が古い事が判明している。

遺構内や古代の堆積土中から古代（主に奈良時代）の土師・須恵器が出土しており、出土量としては中世遺物を凌駕するものの、調査区内では遺構の検出を見なかった。土層の堆積状況から見て、遺跡地の上方から流れ込んだものと思われる。以下、各遺構について詳述する。尚、出土遺物については出土遺物観察表を参照されたい。

土壙1（第4、5図－1～10／図版1、2、5）

調査区南西隅で検出した。直径約130cmの円形プランを呈する。確認面からの深さは約30cm。断面形は凹状を呈し、底面は平坦ではない。遺構覆土は3層に分層される。

出土遺物：覆土中から、かわらけが10点出土した。このうち、9点が完形品である。すべてロクロ成形品である。2は灯明皿。

土壙2（第4、5図－11～15／図版1、2、5）

調査区中央部北東側で検出した。直径約100cmの円形プランを呈する。確認面からの深さは約60cm。底面はほぼフラットで、壁は上方に向かってやや開く。遺構覆土は1層である。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、瓦、須恵器、円礫などが出土した。このうち、図示し得たのは瓦のみである。胎土の特徴から、平瓦は極楽寺瓦A種Ⅱ類、丸瓦は同A種に比定される。

土壙3（第4、5図－16～20／図版1、2、5）

調査区中央で検出した。プランは長方形を呈する。覆土の観察から、2基の土壙が重複している可能性もある。遺構方位は長軸でN－25°－E。規模は280×170cm、確認面からの深さは約50cmを測る。底面は平坦で、壁は上方に向かって開きながら立ち上がる。遺構覆土は5層に分層される。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、土師器、須恵器、鉄製品などが出土した。このうち図示し得たのは、かわらけと鉄釘のみである。かわらけはすべてロクロ成形品である。

土壙4（第4図／図版1、3）

調査区東南寄りで検出した。後述する布掘りに直交する溝状遺構より新しい遺構である。プランは東西方向にやや長い楕円形である。規模は120×100cm、確認面からの深さは約50cmである。断面形は碗形の凹状を呈する。遺構覆土は1層である。尚、遺物の出土は皆無である。

土層注記(土壙1)
1　：暗褐色粘質土。土丹粒をやや多く含む。しまりやや強。
2　：暗茶褐色粘質土。土丹粒をやや多く含む。しまりやや強。

土層注記(土壙2)
1　：暗褐色粘質土。土丹粒をやや多く含む。しまりやや強。

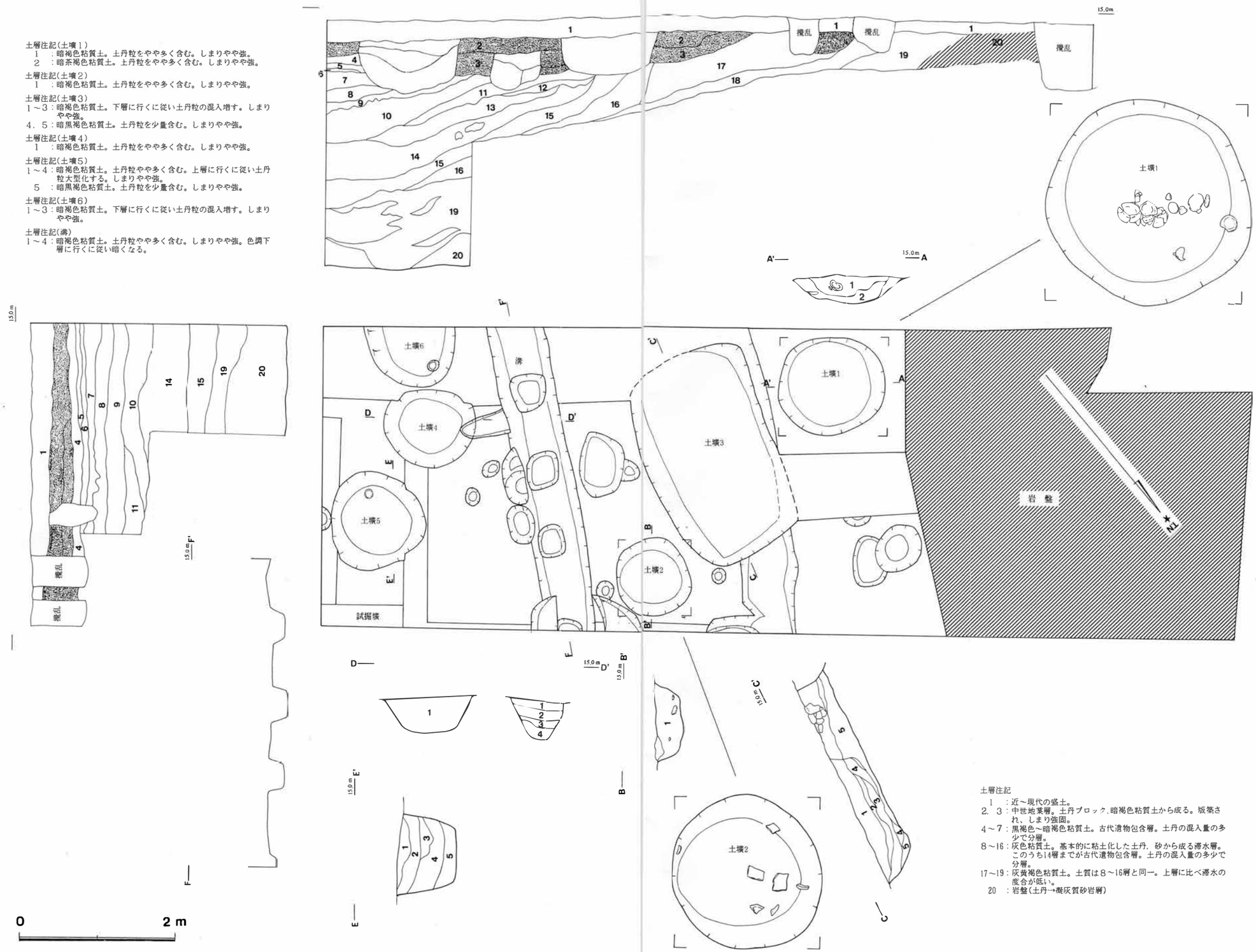
土層注記(土壙3)
1～3：暗褐色粘質土。下層に行くに従い土丹粒の混入増す。しまりやや強。
4．5：暗黒褐色粘質土。土丹粒を少量含む。しまりやや強。

土層注記(土壙4)
1　：暗褐色粘質土。土丹粒をやや多く含む。しまりやや強。

土層注記(土壙5)
1～4：暗褐色粘質土。土丹粒やや多く含む。上層に行くに従い土丹粒大型化する。しまりやや強。
5　：暗黒褐色粘質土。土丹粒を少量含む。しまりやや強。

土層注記(土壙6)
1～3：暗褐色粘質土。下層に行くに従い土丹粒の混入増す。しまりやや強。

土層注記(溝)
1～4：暗褐色粘質土。土丹粒やや多く含む。しまりやや強。色調下層に行くに従い暗くなる。



第4図　遺構図

土層注記
1　：近～現代の盛土。
2．3：中世地業層。土丹ブロック.暗褐色粘質土から成る。版築され、しまり強固。
4～7：黒褐色～暗褐色粘質土。古代遺物包含層。土丹の混入量の多少で分層。
8～16：灰色粘質土。基本的に粘土化した土丹、砂から成る滞水層。このうち14層までが古代遺物包含層。土丹の混入量の多少で分層。
17～19：灰黄褐色粘質土。土質は8～16層と同一。上層に比べ滞水の度合が低い。
20　：岩盤(土丹→凝灰質砂岩層)

土壙５（第４、５図－21／図版１、３、５）

調査区東隅で検出した。プランは直径125cmの円形、確認面からの深さは約80cmと他の土壙に比べ深い。断面形は箱形で、ほぼフラットな底面からわずかに開きながら壁は立ち上がる。遺構覆土は５層に分層される。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、土師器、骨片などが出土したが、図示し得たのはかわらけ１点（ロクロ成形品）のみである。

土壙６（第４、５図－22／図版１、３、５）

調査区南東隅で検出した。調査し得たのは遺構の東半のみである。プランは直径100cmの円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは約60cm。遺構覆土は３層に分層される。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、須恵器、舶載陶磁（青磁）などが出土したが、図示し得たのはかわらけ（ロクロ成形品）１点のみである。

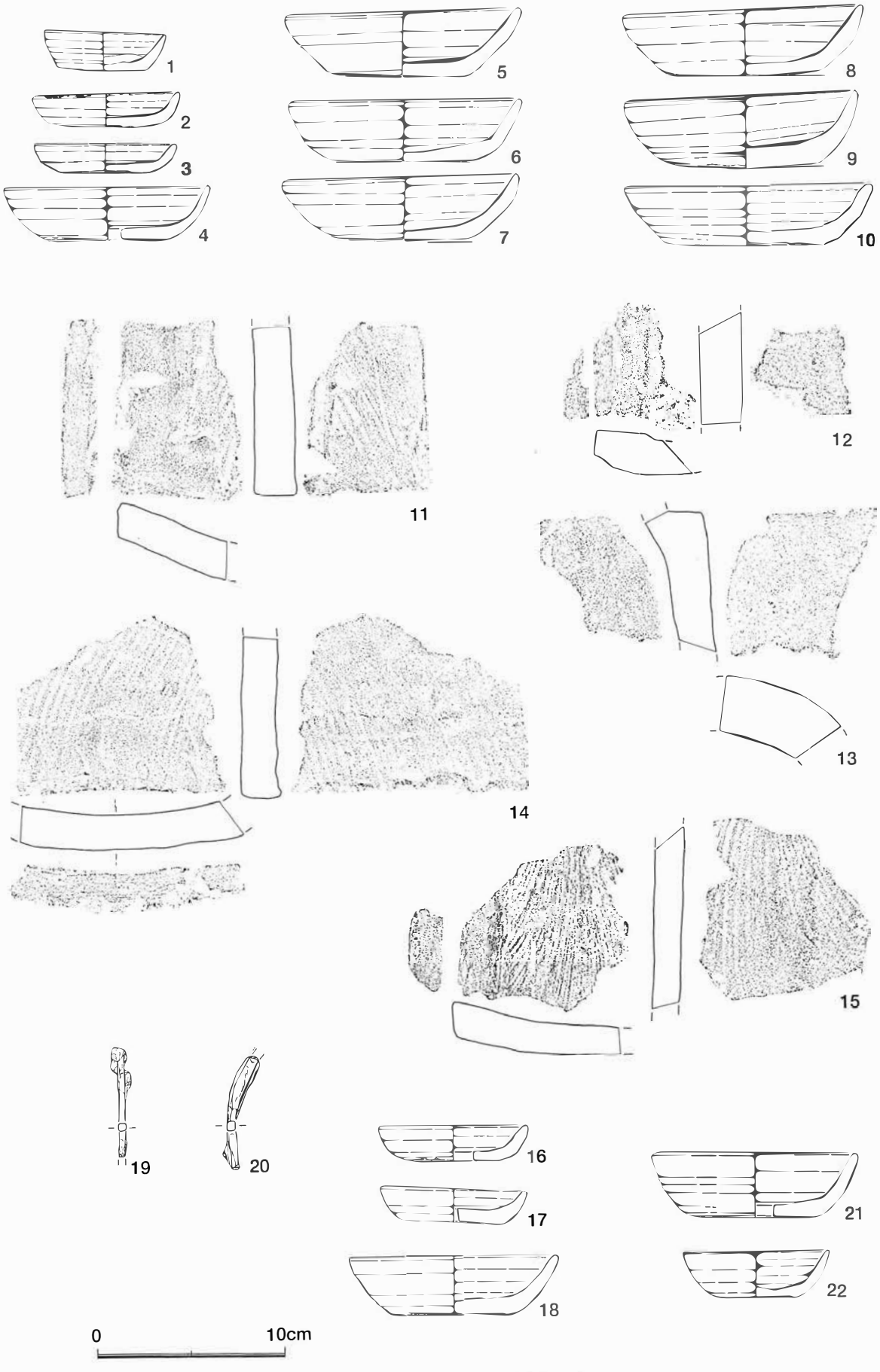
溝（布掘）(第４、６図－23～30／図版１、４、６）

調査区やや東寄で、その一部を検出した。調査区壁で観察する限りでは土壙群よりも古い段階の遺構である。

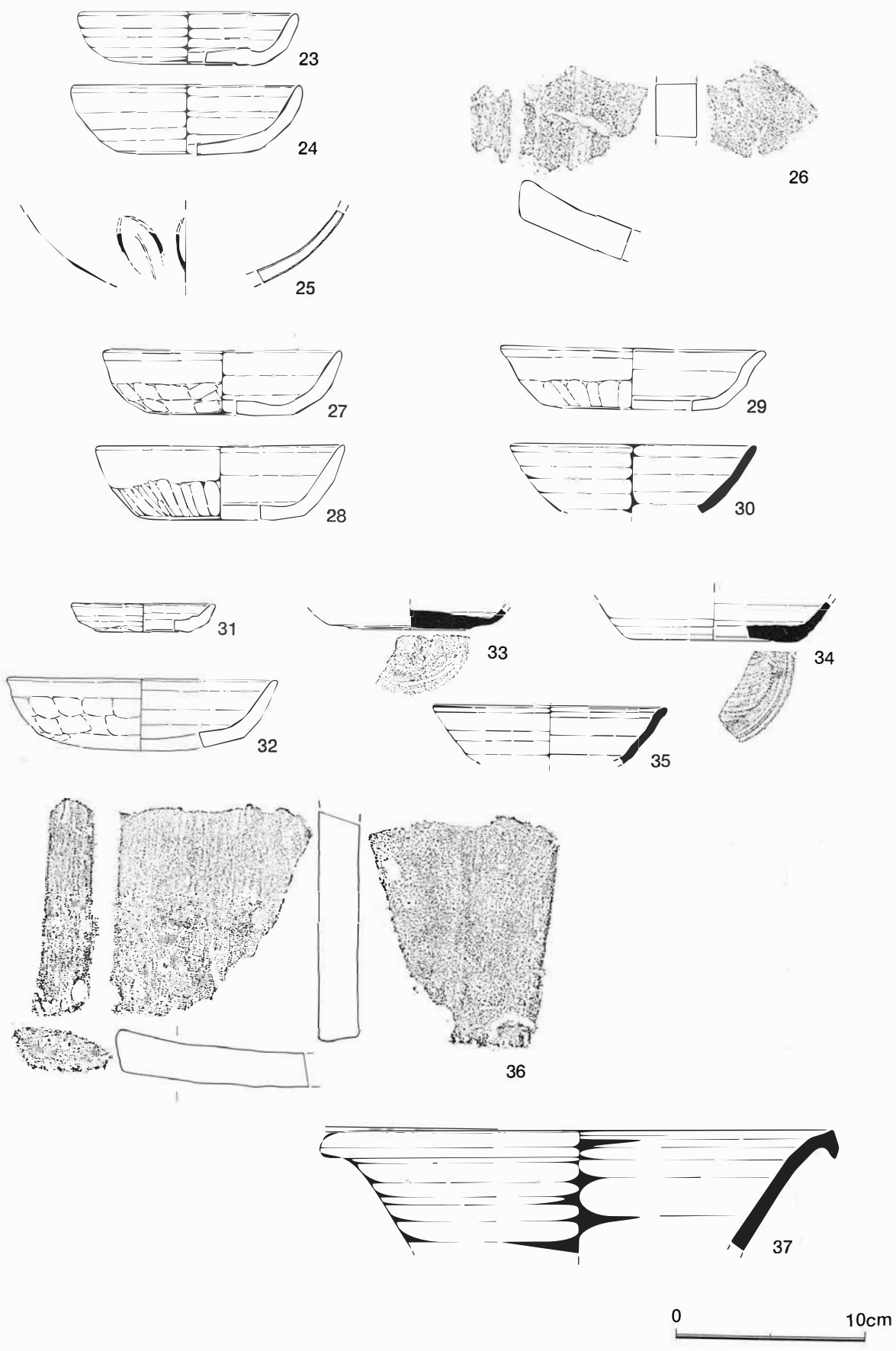
溝方位はＮ－30°－Ｅである。溝部分の規模は、横幅約70cm、確認面からの深さ約50cmである。断面形はＵ字状を呈する。遺構覆土は４層に分層される。溝底には一辺40～50cm、隅丸方形プランを呈するピットが４基検出された。柱間は芯々で90～110cmである。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、渥美窯製品、瓦質手焙、瓦、鉄製品、土師器、須恵器などが出土した。23、24はかわらけ（ロクロ成形品）である。25は龍泉窯系青磁蓮弁文碗、26は平瓦（極楽寺瓦Ａ種）で、以上が中世遺物である。27～29は相模型坏である。底部平底で、１もしくは２段のヘラケズリが成される。30は須恵器坏である。

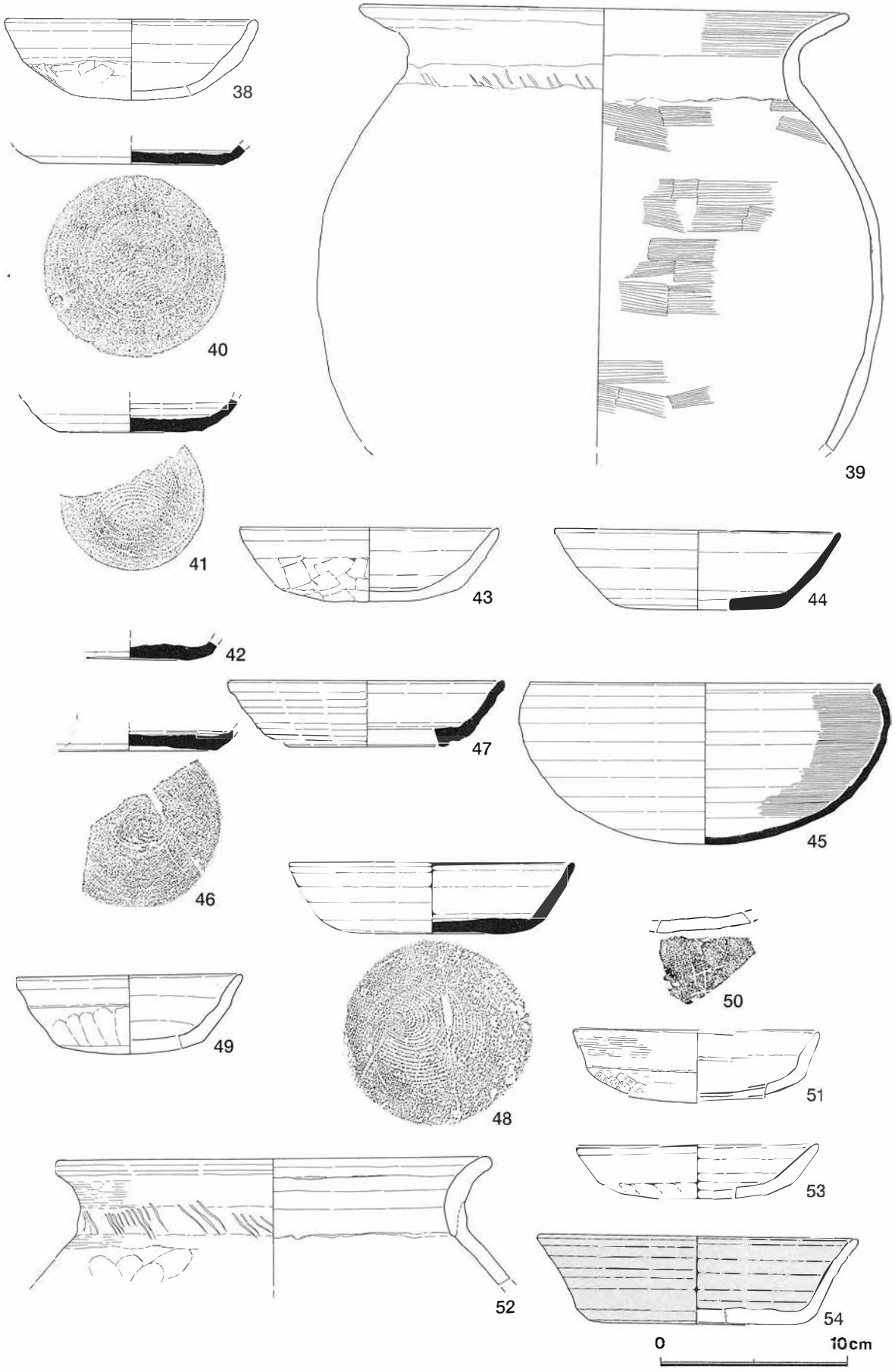
中世遺構以外にも、中世地業層中、古代遺物包含層中から多量の遺物が出土した（第６、７図－31～54／図版４、６、７）。遺物の主体はかわらけ、土師器である。31～37は中世地業層中から出土。31のかわらけ（ロクロ成形品）と36の平瓦（極楽寺瓦Ａ種Ⅱ類）のみ中世の所産である。38～54は古代遺物包含層から出土。50は底部に「井」の字形の線刻が成された土師坏片である。54は盤状坏。内・外面共に赤彩されるが、内面に暗紋は認められない。45、51～53は他に比べ古相を呈する一群である。51、53は底部丸底で、体部との境にやや強い稜を持つ。45は古墳時代後期の所産か。



第5図　出土遺物（1）土壙1～6



第６図　出土遺物（２）溝（布掘）・中世地業層



第７図　出土遺物（３）古代遺物包含層

第四章　まとめ

中世遺構の所産時期は、出土遺物から見て14世紀前半が適当と思われる。ほぼ同時期に実施された谷戸内の調査でも、14世紀前半以降、地業は行われていないようである。どちらも上層が破壊されており断定しかねるが、この時期以降、月影ヶ谷では遺跡は衰微する方向に向かうようである。14世紀前半といえば、元弘３年（1333）北条氏の滅亡、嘉元元年（1303）の開山忍性の病歿など、極楽寺を取り巻く環境にも大きな変化が生じた時期である。

土壙群は器の破片、食物残滓といった出土遺物の内容から、ゴミ穴であったものと思われる。溝（布掘）は築地塀の基礎部分か。これらは、層位的には時期差が明確に認められるものの、出土遺物、特にかわらけは両者に時期差が認められず、恐らく五十年以下というような時間の中で遺跡の機能が変化したものと思われる。遺構の性格から短絡的に考えるならば、支院か何か、ある種の領域が拡大された状況を提示するものか。

古代の遺構の検出は見なかったものの、中世遺物を圧倒する量の遺物が出土した。土師甕や須恵器に前代のものが若干認められるものの、坏の大半は相模型坏と盤状坏で占められ、谷戸内に８世紀後半から９世紀後半を中心とした遺跡の存在が予想される。安定した台地や低地の殆ど無い鎌倉市内では、弥生時代末以降、こうした谷戸内や、丘陵斜面に集落が発見される例が多く、谷戸内の沖積地を生産基盤とした当時の生活の一端を窺わせる。

・出土遺物の数量について

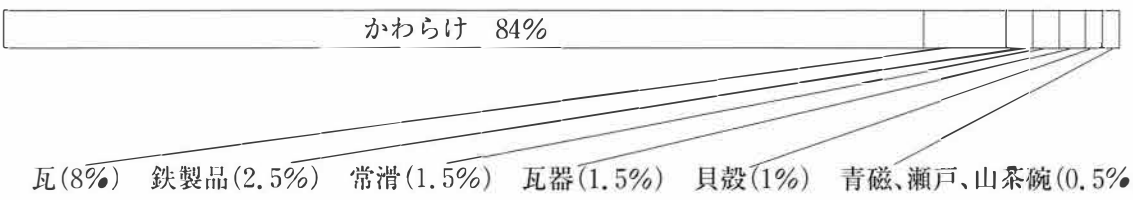
出土遺物の数量について、簡単なデータを提示する。算出にあたっては、完形品、破片に関係なく１個１点としてカウントした。

中世：出土遺物の総数は231点である。内訳は多いものから順に、かわらけ194点（84％）、瓦19点（８％）、鉄製品（含鉄滓）５点（2.5％）、常滑窯製品３点（1.5％）、瓦器３点（1.5％）、貝殻２点（１％）、青磁・瀬戸・山茶碗各１点（0.5％）、骨片少量（計測不能）である。傾向としては、かわらけが圧倒し、日常雑器の類が殆ど見あたらない。地点別の比率では土壙群65％、溝（布掘）15％、地業層中16％、その他４％と、土壙中からのものが高比率を示す。

古代：出土遺物の総数は817点と、量的に中世遺物を圧倒する。内訳は、土師器759点（93％）、須恵器58点（７％）である。須恵器は出土比率の割には図示し得る良好な破片が多く得られた。地点別の比率では、古代遺物包含層60％、中世遺構・地業層40％と、中世遺構に対する混入が目立つ。尚、器種・タイプ別分類は、遺物破片の確実な分類が困難な為、行わなかった。

出土遺物時代別割合

中世遺物器種別割合



出土遺物観察表

図版No.	種　別	法量（cm）　＊カッコ付は復元値	備考
土壙1			
1	かわらけ	口径6.5　底径4.9　器高3.0	完形
2	かわらけ	口径7.9　底径6.0　器高1.8	完形　＊灯明皿
3	かわらけ	口径7.6　底径4.8　器高1.6	4／5個体
4	かわらけ	口径(11.0)　底径(6.4)　器高2.9	1／3個体
5	かわらけ	口径12.6　底径7.3　器高3.7	完形
6	かわらけ	口径12.5　底径8.1　器高3.3	完形
7	かわらけ	口径12.5　底径7.0　器高3.5	完形
8	かわらけ	口径12.8　底径8.4　器高3.6	完形
9	かわらけ	口径12.4　底径8.2　器高3.9	完形
10	かわらけ	口径13.2　底径8.4　器高3.2	完形
土壙2			
11	平瓦	不明	破片　A種　Ⅱ類
12	平瓦	不明	破片　A種　Ⅱ類
13	丸瓦	不明	破片　A種
14	平瓦	不明	破片　A種　Ⅱ類
15	平瓦	不明	破片　A種　Ⅱ類
土壙3			
16	かわらけ	口径(8.0)　底径(4.6)　器高1.9	1／4個体
17	かわらけ	口径(7.8)　底径(5.8)　器高1.9	1／4個体　＊灯明皿か
18	かわらけ	口径(11.2)　底径(6.8)　器高3.1	1／4個体
19	鉄釘	断面方形　頭部折曲げ	先端部欠損
20	鉄釘	断面方形	破片
土壙5			
21	かわらけ	口径(11.0)　底径(6.8)　器高3.4	1／4個体
土壙6			
22	かわらけ	口径(7.8)　底径(4.4)　器高2.9	1／2個体
溝（布掘）			
23	かわらけ	口径(11.6)　底径(7.1)　器高2.8	1／3個体
24	かわらけ	口径12.2　底径7.6　器高3.7	完形
25	青磁　碗	不明	破片　龍泉窯系蓮弁碗
26	平瓦	不明	破片　A種　Ⅱ類
27	土師　坏	口径(12.6)　底径(8.0)　器高3.5	1／4個体　相模型
28	土師　坏	径(13.0)　底径(8.8)　器高3.9	1／5個体　相模型
29	土師　坏	口径(13.8)　底径(9.4)　器高3.0	1／6個体　相模型
30	須恵　坏	口径(12.9)	口縁～体部破片
中世地業層			
31	かわらけ	口径(7.6)　底径(5.0)　器高1.5	1／5個体
32	土師　坏	口径(14.0)　底径(10.8)　器高3.5	1／5個体　相模型
33	須恵　坏	底径(6.3)	底部破片
34	須恵　坏	底径(9.0)	底部破片
35	須恵　坏	口径(12.2)	口縁～体部破片
36	平瓦	不明	破片　A種　Ⅱ類
37	須恵　壷	口径(27.4)	口縁部破片
古代遺物包含層			
38	土師　坏	口径(13.4)　底径(7.5)　器高4.3	1／4個体　相模型
39	土師　甕	口径26.0　胴部最大径30.0	
40	須恵　坏	底径9.7	底部破片
41	須恵　坏	底径7.7	底部破片
42	須恵　坏	底径(7.8)	底部破片
43	土師　坏	口径(13.8)　底径(9.6)　器高3.8	1／8個体
44	須恵　坏	口径(15.2)　底径(8.9)　器高4.2	1／5個体
45	須恵　鉢	口径(18.4)　器高8.5	1／5個体
46	須恵　坏	底径9.4	底部破片
47	須恵　坏	口径(14.4)　底径(8.8)　器高3.8	1／5個体
48	須恵　坏	口径15.0　底径10.0　器高3.8	完形
49	土師　坏	口径(12.0)　底径(7.6)　器高4.1	1／5個体　相模型
50	土師　坏	不明	底部小片　＊外底面に「井」字形の線刻
51	土師　坏	口径(13.2)　底径(7.0)　器高4.9	1／5個体
52	土師　甕	口径(23.0)	口縁部破片
53	土師　坏	口径(12.7)　底径(8.0)　器高2.8	1／6個体
54	土師　坏	口径(17.0)　底径(11.6)　器高4.6	1／5個体　盤状坏　＊全面赤彩

＊瓦の分類は、極楽寺旧境内遺跡（註1）に於ける木村美代治氏（鎌倉考古学研究所）による分類に基づく

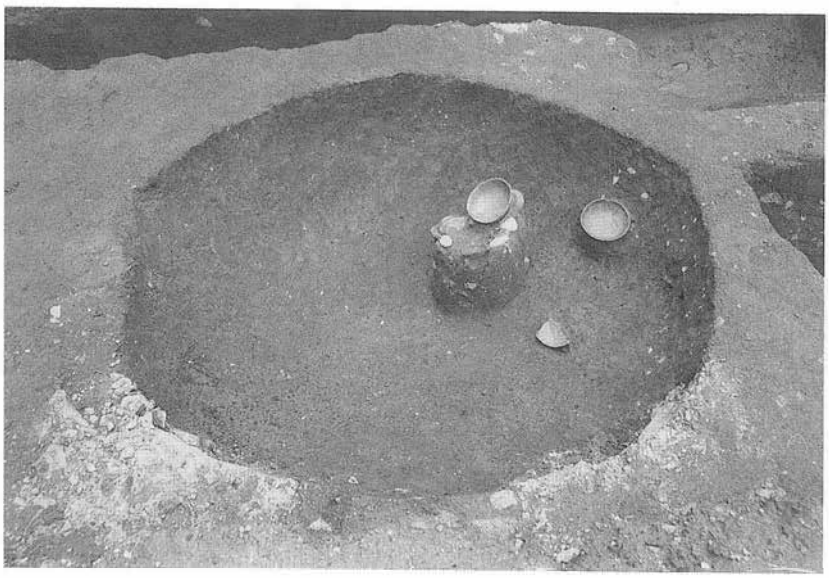
（註1）極楽寺旧境内遺跡　1980　極楽寺旧境内遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会

写　真　図　版

▲現在の月影ケ谷入口付近

▶調査区全景（北側から）

図版2

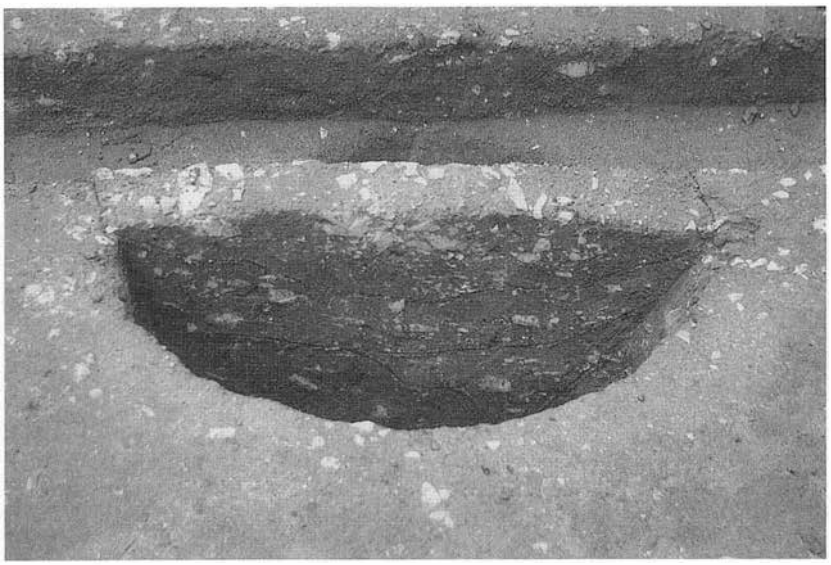


◀土壙1かわらけ検出状況

◀土壙2

◀土壙3

▶土壙4



▶土壙5

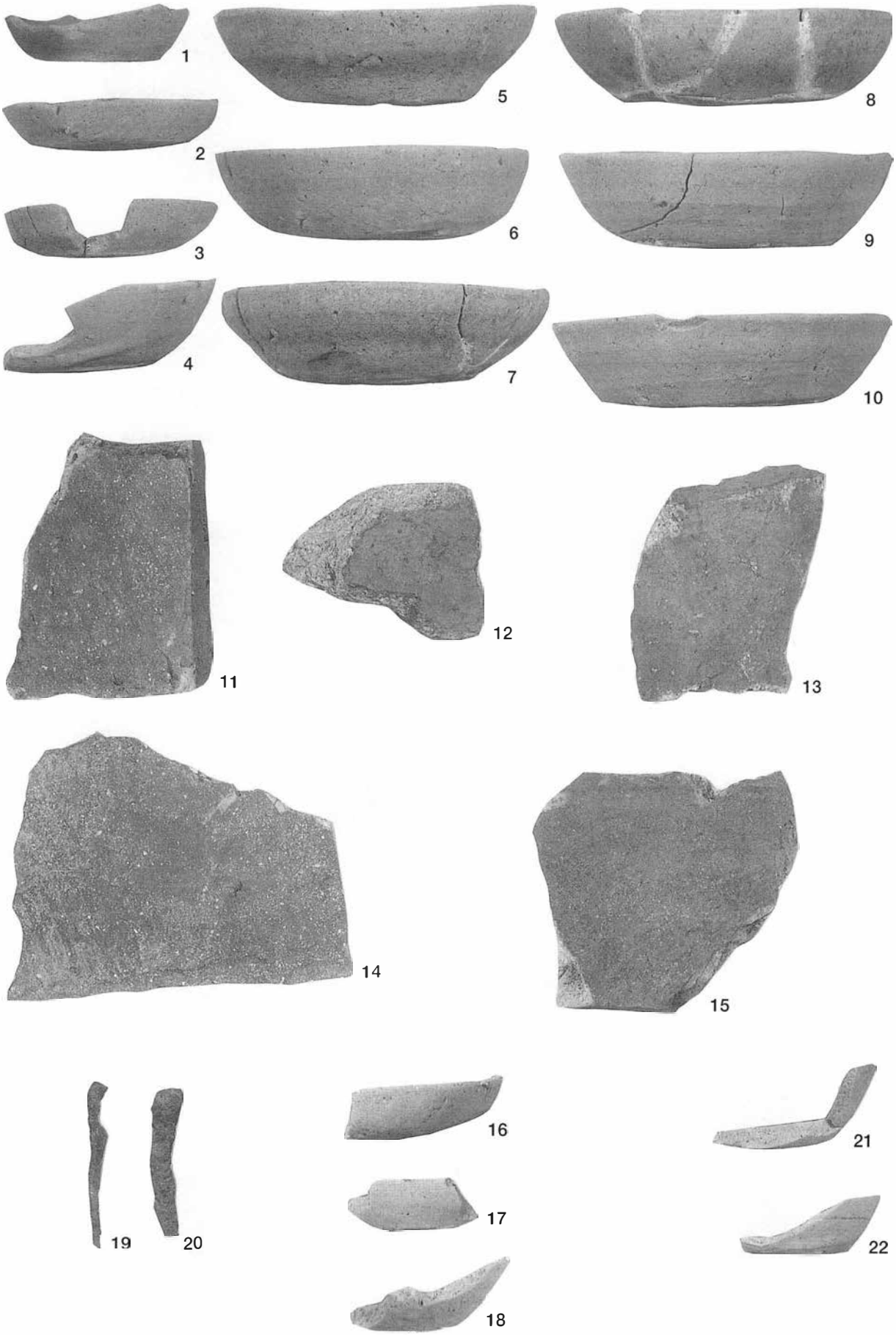
▶土壙6

図版4

◀溝（布掘）

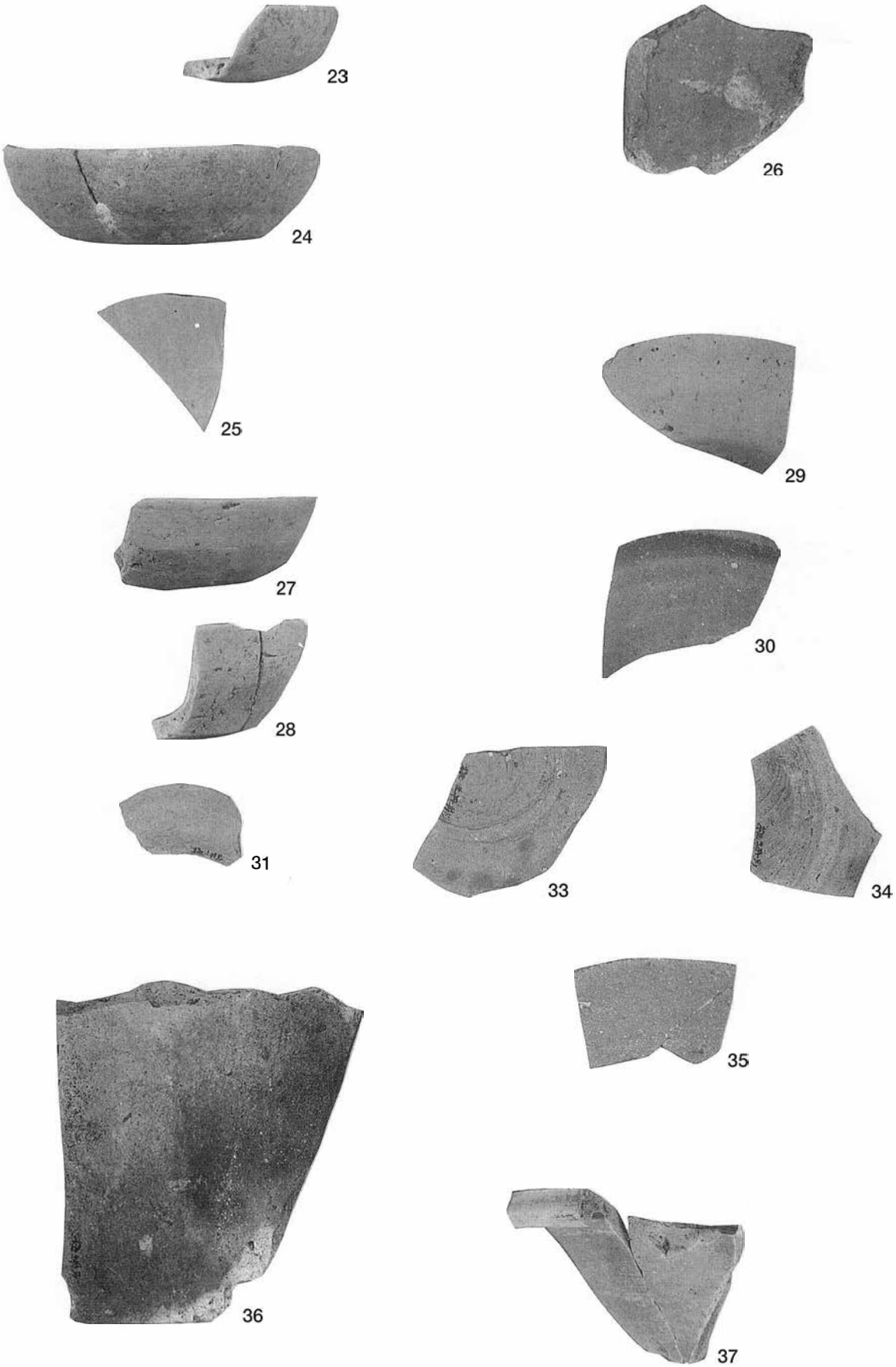
土層堆積状況▶
（調査区南西隅）

◀古代遺物（土師器）出土状況

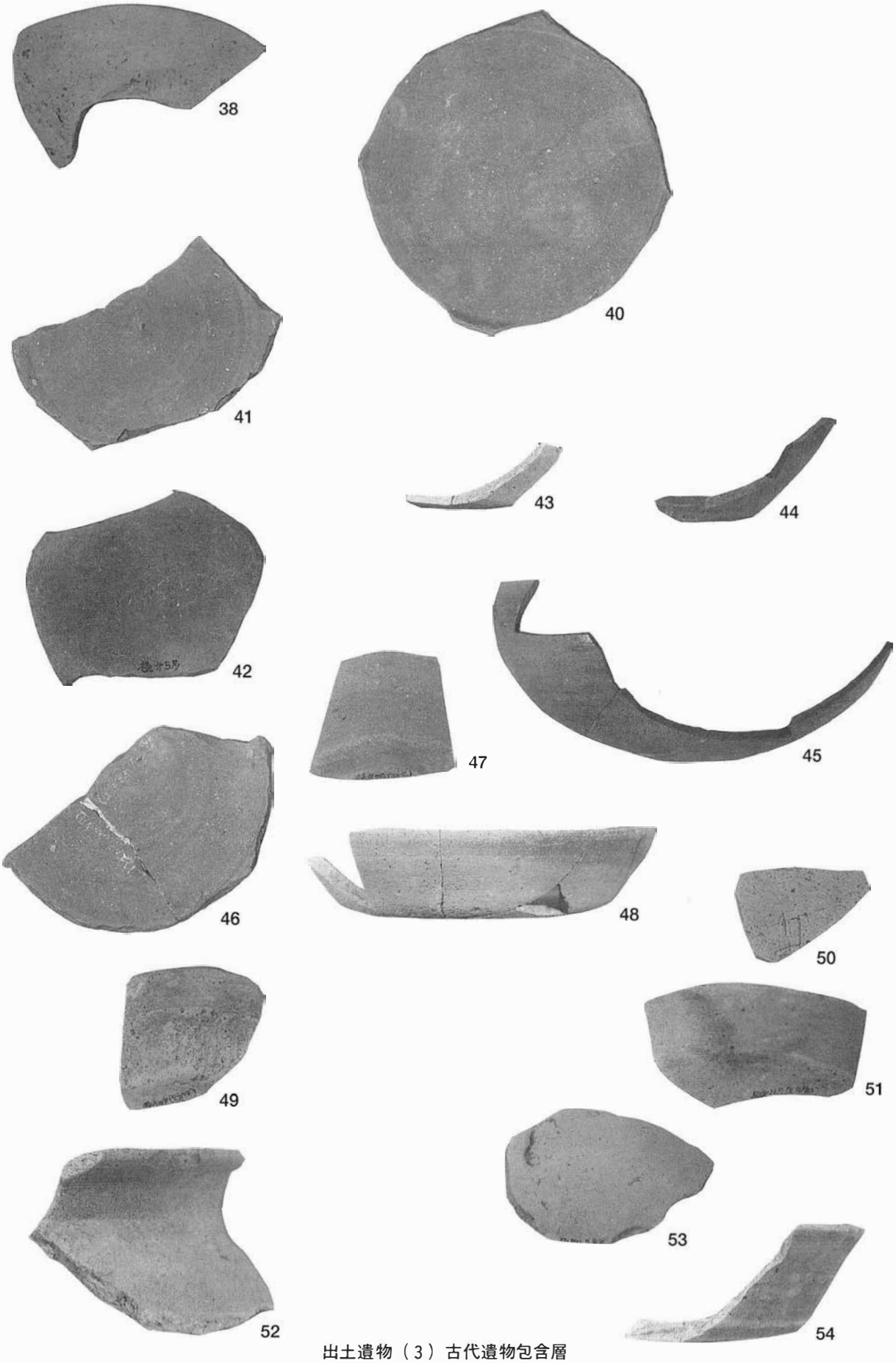


出土遺物（1）土壙1～6

図版6



出土遺物（２）溝（布掘）中世地業層



出土遺物（３）古代遺物包含層

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	継実
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ごくらくじ きゅうけいだいいせき 極楽寺 旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺 三丁目320番1		No.291	35度 18分 15秒	139度 31分 47秒	H7 6月12日 ～ 6月30日	100	個人専用住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
極楽寺 旧境内遺跡	寺院址	奈良・平安 ～ 鎌倉時代	中世　溝（布掘） 土壙群	古代　土師、須恵 （相模型坏、盤状坏） 中世　かわらけ 常滑 瓦 国産・ 舶載陶磁	

台山遺跡（No.29）

だいやまいせき

台字西ノ台1627番地点

例　言

1．本報は鎌倉市台字西ノ台1627番における自己住宅に係る車庫造成に伴う発掘調査報告である。
2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成７年６月19日から７月６日である。
3．本報の執筆・編集は野本が行った。出土遺物の実測は川又が行った。
4．本報に使用した写真は遺構を川又・野本が、遺物を野本が行った。
5．調査体制

担　当　者　手塚直樹
調　査　員　野本賢二・小柳津シゲ子
調査補助員　川又隆央・山崎理香
作　業　員　富岡真之・田代　昭・照井三喜・柴崎英輔・山崎一男

6．本調査で使用した調査グリッド設定に際し、福田　誠・菊川　泉の協力を受けた。
7．発掘調査にあたり次の諸氏より御協力を受けた。清沢工務店、田代郁夫、奥寺宏之
8．本遺跡に関する発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……126
第二章　調査の経過と堆積土層 ……128
第三章　検出された遺構と出土遺物 ……130
第四章　まとめ ……133

図　表　目　次

図１　遺跡の位置 ……127
図２　グリッド設定図 ……128
図３　遺構平面図及び土層断面図 ……131
図４　出土遺物 ……132
表　遺物観察表 ……132

写真図版目次

図版　１　遺跡全景（北から）、溝１・２（北から） ……137
　　２　出土遺物 ……138

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市のほぼ中央、横須賀線北鎌倉駅の西方約550ｍにあり、台山遺跡（県遺跡台帳№29）内、西北に開析する台本村が所在する谷戸奥に位置する。この谷戸内には縦貫する道路が走っているが、調査地点はこの道路に面している。

調査地点から東方に北に折れながら緩やかな坂を上りきると交差点となる。これを真っ直ぐ進むと曲がりくねった切通しの下り坂となるが、その途中、左（西）に西台（せいたい）山英月院光照寺がある。宗派は時宗で、開山は一向。本尊は阿弥陀如来像〔正長２年（1429）修理銘〕。境内には正中２年（1325）銘の阿弥陀三尊種子板碑がある。当寺は、一説には、弘安５年（1282）執権北条時宗に鎌倉入りを拒絶された一遍が一夜を明かした所につくられたとされる。坂を下りきり約100ｍ進むと県道横浜・鎌倉線（山ノ内路）に突き当たる。

反対に調査地点からこの道路を西に約30ｍ進むと左（南）に曲がる小道がある。この突き当たりが徳蔵山東渓院（臨済宗・早雲寺末）跡とされる。延宝８（1680）豊後国大野郡原城主中川久清が娘の供養に建てた位牌堂であった。当寺は明治５年（1872）に廃絶し、山門と本尊の釈迦如来像〔天文25年（1556）造立？〕は光照寺に移されている。

そこから約50ｍ進むと、右（北）に地蔵堂跡（現台公会堂）がある。堂内には地蔵菩薩坐像と半跏像が納められていた。坐像は室町前期の造立とされ宝暦８年（1758）の修理銘がある。半跏像は胎内に延宝３年（1675）、明治13年（1880）、明治42年（1909）の修補文書が納められていた。延宝３年の文書には念仏講の人々が中心となって寄付をつのり、仏師（三橋）但馬に依頼して修補をおこなうことができたとある。造立は室町期である。

さらに西に約400ｍ進むと台・神明社付近の江ノ島みちに突き当たる。江ノ島みちは台の水堰橋から山崎切通し（ほぼ消滅）を抜け、上町屋・手広切通し（鎖大師裏）を経由して江ノ島に至る道（途中断絶）で近世期の江ノ島詣の道であった。

台山遺跡内ではこれまで７カ所で調査が行われ、大きな成果を得ている。

《参　考　文　献》

阿部正道　1957年　『鎌倉の古道』鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

三山進・貫達人ほか　1974年　『鎌倉の文化財　第五集　鎌倉市指定編（五）』鎌倉市教育委員会

大藤ゆき　1977年　『鎌倉の民俗』　かまくら春秋社

貫　達人・川副武胤　1980年　『鎌倉廃寺事典』　有隣堂

木村彦三郎　1980年　「廃寺「東渓院」『鎌倉』34号　1980年

神奈川県図書館協会　1991年　『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』

三浦勝男　1996年２月11日　「かまくらの秘仏」朝日新聞連載

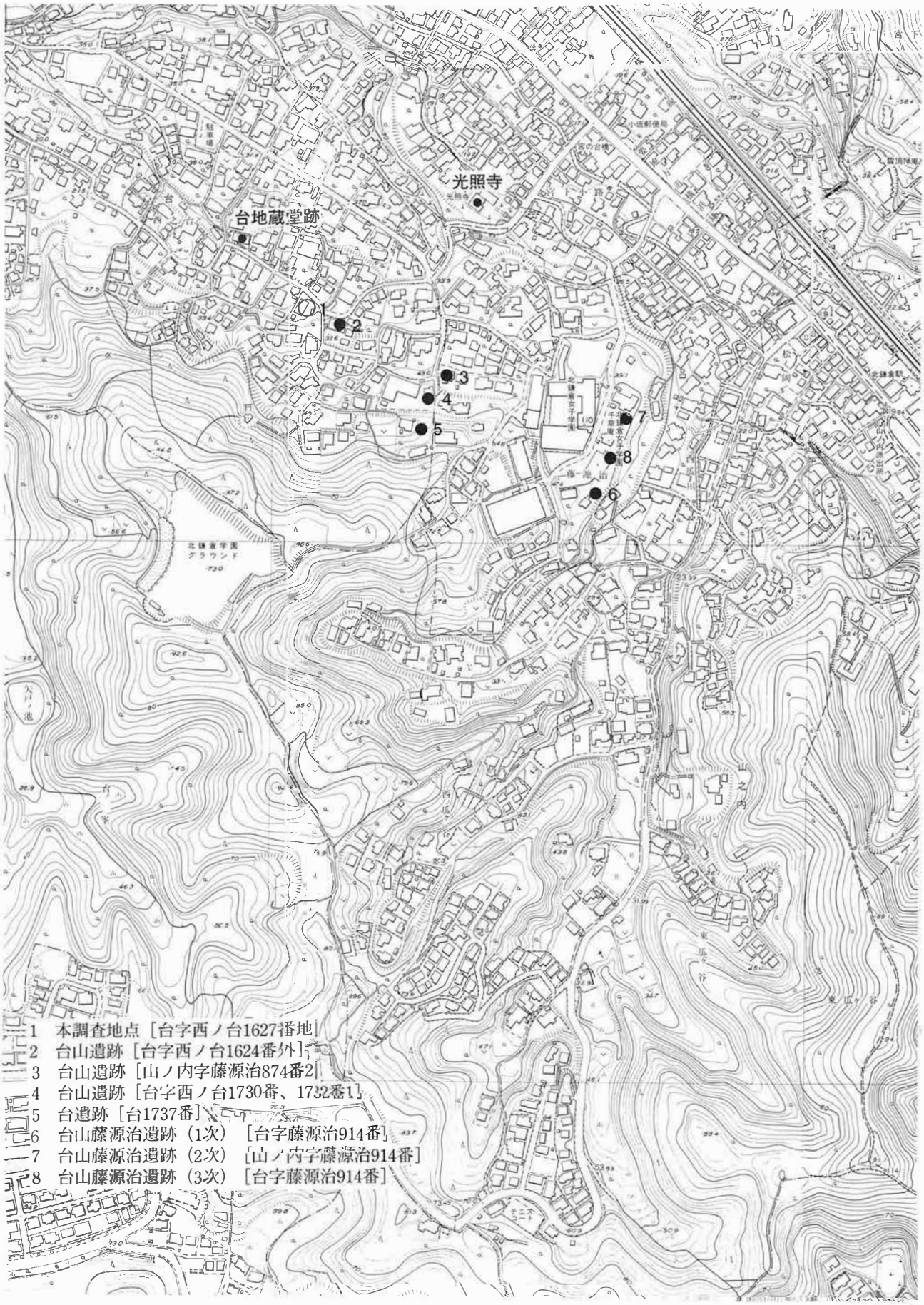

光照寺
台地蔵堂跡
1
2
3
4
5
6
7
8
北鎌倉学園グラウンド
1 本調査地点［台字西ノ台1627番地］
2 台山遺跡［台字西ノ台1624番外］
3 台山遺跡［山ノ内字藤源治874番2］
4 台山遺跡［台字西ノ台1730番、1732番1］
5 台遺跡［台1737番］
6 台山藤源治遺跡（1次）［台字藤源治914番］
7 台山藤源治遺跡（2次）［山ノ内字藤源治914番］
8 台山藤源治遺跡（3次）［台字藤源治914番］
0
200m

図1　遺跡の位置と周辺

第二章　調査の経過と堆積土層

調査経過

調査に先だって、鎌倉市教育委員会の試掘調査の結果をもとに、岩盤面から約20cm上まで重機によって表土を除去した。調査は6月19日開始、調査期間中は梅雨の時期と重なり調査がたびたび中断したが、7月6日に調査を終え撤収した。その間の経過は以下の通りである。

6月21日　岩盤面遺構検出を中心に作業開始

22日　遺構掘り上げ開始

27日　全景写真撮影・測量方眼の設定

28日　調査区壁土層断面図実測

29日　平面実測

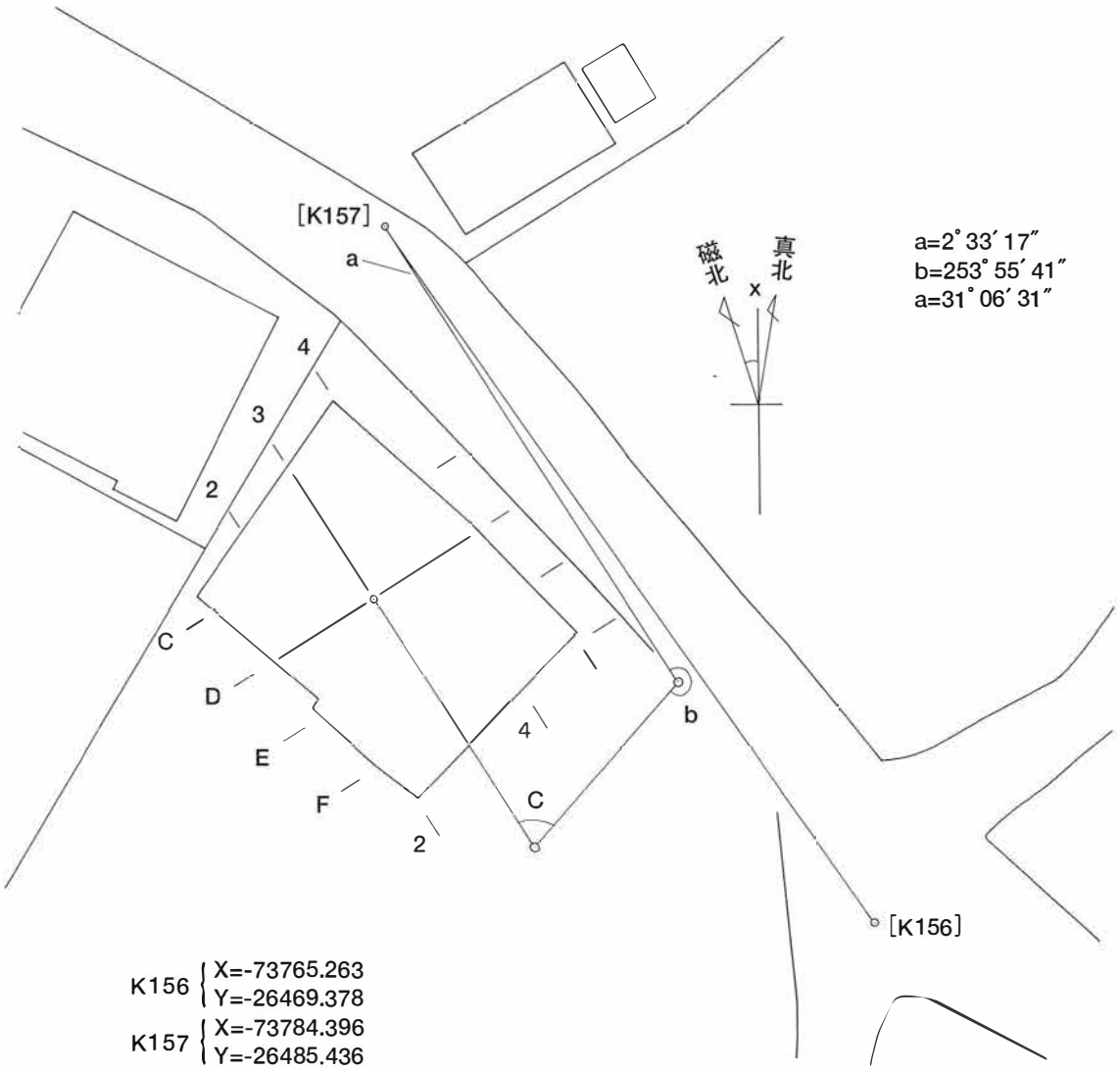


図2　グリッド設定図

本調査地点における地表面レベルは約29.60mで、それより約1.30～1.60m下で岩盤面を検出する。岩盤面は南から北に傾斜し、高低差は最大30cmある。

堆積状況は以下の通りである。

1．表土
2．暗黄褐色土　　泥岩粒多く含む。
3．灰褐色土　　泥岩粒多量に含む。
4．暗褐色粘質土　泥岩粒含む。しまり弱い。
5．暗褐色土　　泥岩粒・少量の炭粒含む。
6．灰褐色土　　泥岩粒・ごく少量の炭粒含む。
7．暗灰色土　　少量の泥岩粒含む。
8．暗褐色土　　多量の泥岩粒含む。
9．暗黄褐色土　　多量の泥岩粒・少量の炭粒含む。
10．暗褐色土　　多量の泥岩粒・少量の炭粒含む。
11．暗褐色土　　泥岩粒・少量の炭粒含む。粘性あり。
12．暗褐色土　　泥岩粒含む。
13．暗褐色土　　泥岩粒・炭粒含む。
14．暗褐色粘質土　多量の泥岩粒含む。
15．青灰色土　　少量の泥岩粒・炭粒含む。
16．暗褐色粘質土　泥岩粒・少量の炭粒含む。

第三章　検出された遺構と出土遺物

第１節　遺構（図３）

岩盤削平面に多数の遺構（溝２条、土壙６、ピット192）が検出された。

溝１

調査区東際で検出された。調査地点東の道路とほぼ平行に、南から北に流れる（下場高低差28cm）。上幅22～35cm、下幅12～16cm、深さ６～15cm。

溝２

溝１の約２ｍ西、溝１とほぼ平行に南から北に流れる（高低差37cm）。　上幅30～67cm、下幅16cm前後、深さ３～８cm。Ｅラインより南の底面にノミ痕状の穴が不規則に多数（43ケ）穿たれている。穴の形態は不正円形を呈し、径２～６cmとまちまちである。調査区南壁が近年の撹乱により残存状況が悪かったため、確認できなかったが、溝１・溝２はともに性格が同じと思われることから、この間は道路の可能性がある。

ピット

いづれのピットからも礎板・礎石は検出されていない。多くのピットがあることから（掘立柱）建物を想定することができるが、プランの検討をしたところ見出すことができなかった。

また、ピット36、63、72、142は柵列となる可能性がある。

第２節　出土遺物（図４・表）

本調査地点の出土遺物の総計は98点で内訳はかわらけ（ロクロ成形）48点（小型５・大型２・不明41）、土器（不明）１点、常滑・甕８点、平瓦２点、金属製品２点（釘１・不明１）、砥石２点（仕上げ砥１・中砥１）、近世以降陶磁器35点（陶器17・磁器13・擂鉢５）。ほとんどの遺物は小破片で実測可能なものは少なかった。

１～９は13層～岩盤面上から出土したもの。１は瀬戸・美濃系と思われる灯明皿受け皿で受けは口縁より低い。２は灯明皿上皿で産地不明。３は産地不明の皿で内面に草状の文様を配する。４は越前山内の緑釉碗と思われる。５は堺系の擂鉢。６・７は常滑・甕。８はかわらけで器肉が厚く粉っぽい。９は平瓦で凸面の叩き目は残っていない。

10は溝１から出土している砥石で方柱状を呈する中砥である。11・12はかわらけで11はピット43、12はピット122から出土。13は瀬戸美濃系の擂鉢で火を受けている。ピット30から出土。

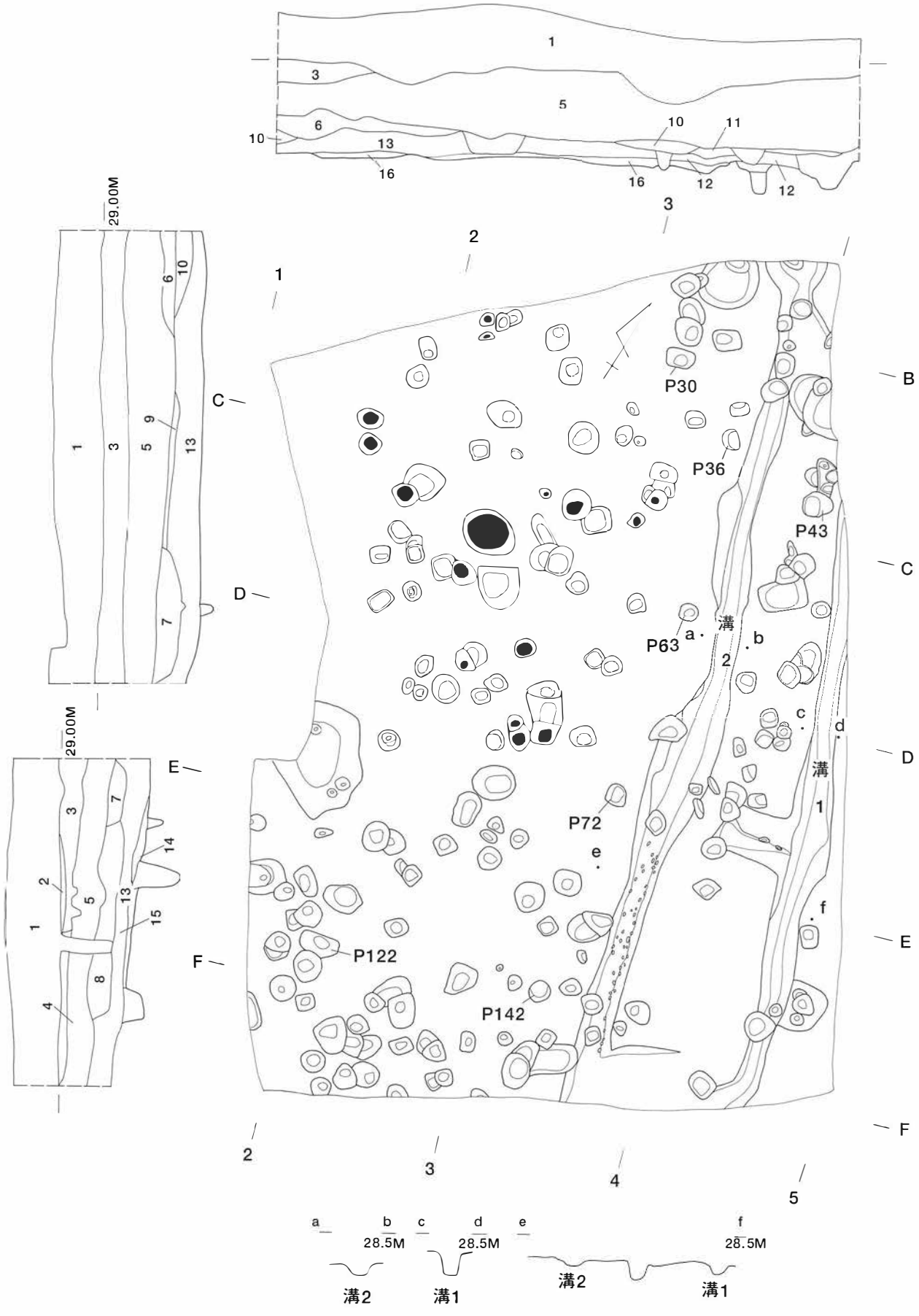


図３　遺構平面図及び土層断面図

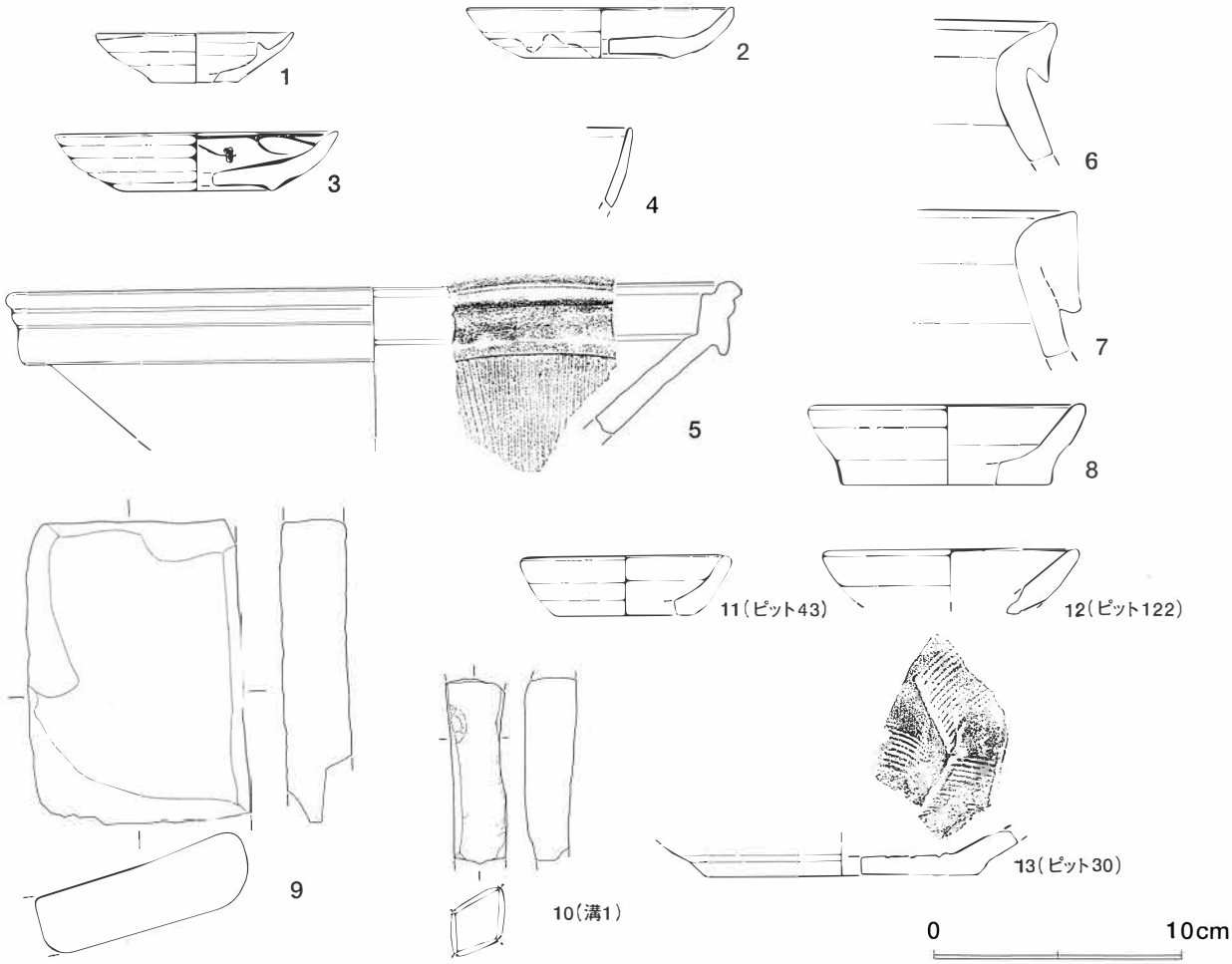


図4　出土遺物

番号	種　　類	計測値　単位cm、(　) は復元	特記事項
1	瀬戸・美濃？ 灯明皿受け皿	口径(7.8)　底径(3.5)　器高(2.0) 受け径(1.6)　受け高(1.6)	胎土　淡黄褐色　釉　黄灰色
2	産地不明 灯明皿上皿？	口径(10.6)　底径(6.6)　器高2.0	胎土　灰色　釉　茶褐色
3	産地不明 皿	口径(11.3)　底径(6.1)　器高2.4	胎土　淡黄褐色　釉　灰褐色　内面に植物文様（茶褐色）　目痕あり
4	肥前山ノ内窯 緑釉碗		胎土　淡黄褐色　釉　不透明（外）草緑色（内）クリーム色
5	堺系　擂鉢	口径(28.8)	胎土・器表ともに暗赤茶褐色
6	常滑　甕		胎土　暗灰色　器表　暗茶褐色
7	常滑　甕		胎土　暗灰色　器表　暗茶褐色
8	かわらけ	口径(9.1)　底径(6.7)　器高3.2	胎土　淡橙色
9	平瓦	厚さ2.5	胎土　淡褐色
10	砥石（中砥）	残存長7.2	頁岩・淡黄灰色　4面使用
11	かわらけ	口径(8.2)　底径(5.9)　器高2.4	胎土　淡橙色
12	かわらけ	口径(9.9)	胎土　橙褐色
13	瀬戸・美濃系擂鉢	底径(11.0)	胎土　淡黄褐色　釉　小豆色

表　遺物観察表

第四章　まとめ

本調査地点は台字西ノ台1624番３外地点（図１－２）に続き、谷戸の奥の調査であった。調査範囲が狭く、遺物も小破片がほとんどで遺構の年代を特定するのは難しい。が、遺構検出時の出土状況等から中世後半以降と思われる。本地点と台字西ノ台1624番３外地点は約30mと至近距離にあり、遺構の方向性（溝）はほぼ同一なものの、連続性は認められなかった。

台山遺跡内で中世の遺構が確認されている地点は以下の通りである。

台山藤源治遺跡（１次）・・・・・・・・削平面、道路［14世紀～16世紀］

台山藤源治遺跡（３次）・・・・・・・・削平面、柵列、切り岸（２段）、道路［14世紀中葉～後葉］

台字西ノ台1624番３外地点・・・・・・・溝状遺構、落ち込み遺構、ピット［中世後半］

台字西ノ台1627番地点（本地点）・・・・溝（道路）、土壙、ピット８

８地点の調査で中世遺構は４地点で検出されていて、台山藤源治遺跡（２次）・山ノ内字藤源治874番２地点と上記のあわせて６地点で14～16世紀代の遺物が出土している。宗臺氏は台山藤源治（３次）のピット中から密教系法具である銅製の六器皿が出土していることと、遺跡地周辺の宗教施設等の存在から、中世期に遺跡地（台山藤源治遺跡１～３次）に寺院が存在していたと想定している。また、大河内氏は小字「藤源治（トウゲンジ）」の語源を『新編相模国風土記稿』「徳泉寺蹟」の項にみえる「東現寺」と推定している。以上のように、台山遺跡の丘陵南東部は中世鎌倉の北の境界的要素を有していたことがうかがわれる。本調査地点付近は丘陵の裾部にあたり、調査例も２カ所と僅かなことから今後の調査の進展に期待したい。

《参　考　文　献》

井野　毅　1974年　「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告」『人文科学科紀要』第59輯　東京大学教養学部人文科学科

手塚直樹ほか　1985年　『台山藤源治遺跡』　台山藤源治遺跡発掘調査団

斎木秀雄・宗臺秀明　1985年　「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』１　鎌倉市教育委員会

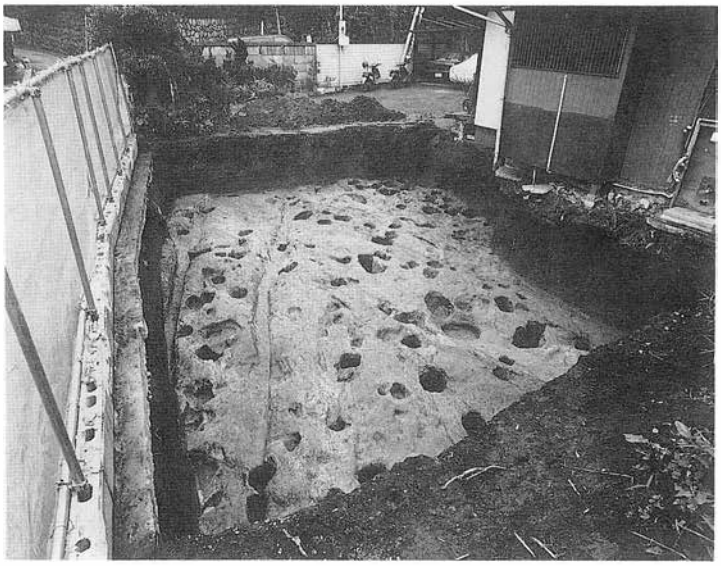
玉林美男・新国哲也　1988年　「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』４　鎌倉市教育委員会

大上周三　1992年　「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』８　鎌倉市教育委員会

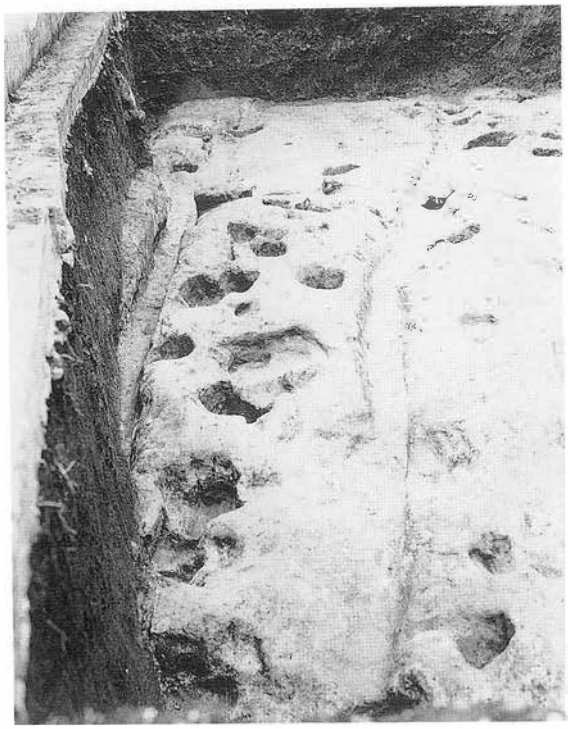
宗臺秀明　1993年　『台山藤源治遺跡－第三次調査報告－』　台山遺跡発掘調査団

大河内勉　1996年　『台山藤源治遺跡－第２次調査報告－』　台山遺跡発掘調査団

写　真　図　版



1. 遺跡遠景（北から）

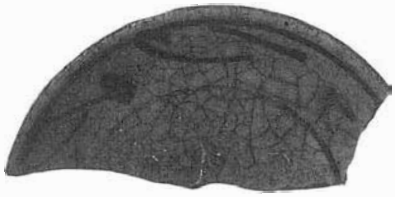


2. 溝1・2（北から）

図版2

1

2


3

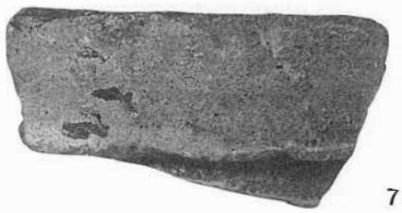
4

5

6

8

11


7

9

10

13

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
だいやまいせき 台山遺跡	神奈川県鎌倉市台字西ノ台1627番	204	No.29			950619～ 950706	56	自己住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
台山遺跡	集落址	中世	ピット 土壙 溝状遺構	かわらけ 常滑窯製品	

材木座町屋遺跡（No.261）

ざいもくざまちやいせき

材木座三丁目364番１外地点

例　言

1．本報は鎌倉市材木座三丁目364番1外地点における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．発掘調査は個人専用住宅建設にともなう国庫補助事業として、1995年6月19日～同年7月29日におこなわれた。調査面積は100㎡である。

3．調査体制は次のとおり

担　当　者　馬淵和雄

調　査　員　太田美知子・山上玉恵・渡部律子（資料整理）・及川加代子(同前)

調査補助員　丹行正・坂倉美恵子・岡陽一郎・兼行恍枝（資料整理）

調査参加者　岸名富雄・斉藤栄一・山下俊明・簑田孝善・長島三男・渡辺鉄雄

4．本報作成分担は次のとおり

遺構図整理　丹

同墨入れ　　丹

遺物実測　　渡部・及川・兼行・太田・馬淵

同墨入れ　　馬淵

遺物計量　　兼行・丹

表 作 成　　兼行

遺物写真撮影　太田

原稿執筆　　馬淵

編　　集　　馬淵

5．出土遺物等、本発掘調査にかかわる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　調査地点概観 ……145
　1．位置と地勢 ……145
　2．歴史的環境 ……147
第二章　調査の概略 ……149
　1．調査にいたる経緯 ……149
　2．方眼設定方法 ……149
　3．調査の概要と経過 ……150
第三章　調査結果 ……151
　第1節　概　要 ……151
　1．層序と遺構面の概略 ……151
　2．出土遺物の概要 ……151
　第2節　検出遺構と出土遺物 ……151
　1．井戸 ……151
　2．竪穴建物 ……151
　3．礫集中部 ……156
　4．方形土壙 ……156
　5．土壙 ……156
　6．柱穴様小落ち込み ……166
　7．包含層その他からの出土遺物 ……168
第四章　まとめ ……184

挿　図　目　次

図1　調査地点の位置 ……145
図2　調査地点と周辺の遺跡・旧跡 ……146
図3　調査地点位置図（拡大） ……147
図4　方眼設定図 ……149
図5　上層遺構群全図 ……152
図6　下層遺構群全図 ……153
図7　井戸1 ……154
図8　竪穴建物1・4・8 ……155
図9　竪穴建物2 ……157
図10　竪穴建物6 ……158
図11　竪穴建物6出土遺物（1）……159
図12　竪穴建物6出土遺物（2）……160
図13　竪穴建物9・11 ……164
図14　竪穴建物出土遺物 ……165
図15　方形土壙・同出土遺物 ……167
図16　方形土壙8・土壙9・10 ……169
図17　礫集中部・土壙 ……170
図18　土壙出土遺物 ……171
図19　柱穴出土遺物 ……174
図20　上層出土遺物（1）……176
図21　上層出土遺物（2）……177
図22　下層出土遺物 ……177
図23　採集遺物（1）……182
図24　採集遺物（2）……183

表　目　次

表１　竪穴建物１出土遺物観察表 ……157
表２　竪穴建物４出土遺物観察表 ……157
表３　竪穴建物８出土遺物観察表 ……157
表４　竪穴建物６出土遺物観察表（１）……161
表５　竪穴建物６出土遺物観察表（２）……162
表６　竪穴建物６出土遺物観察表（３）……163
表７　竪穴建物９出土遺物観察表 ……165
表８　竪穴建物11出土遺物観察表 ……165
表９　竪穴建物３出土遺物観察表 ……166
表10　竪穴建物５出土遺物観察表 ……166
表11　方形土壙１出土遺物観察表 ……168
表12　方形土壙２出土遺物観察表 ……168
表13　方形土壙４出土遺物観察表 ……168
表14　方形土壙５出土遺物観察表 ……168
表15　土壙９・10出土遺物観察表 ……169
表16　土壙２出土遺物観察表 ……172
表17　土壙４出土遺物観察表 ……172
表18　土壙５出土遺物観察表 ……172
表19　土壙８出土遺物観察表 ……172
表20　土壙11出土遺物観察表 ……172
表21　土壙12出土遺物観察表 ……173
表22　土壙14出土遺物観察表 ……173
表23　土壙17出土遺物観察表 ……173
表24　土壙20出土遺物観察表 ……173
表25　土壙13出土遺物観察表 ……173
表26　土壙18出土遺物観察表 ……173
表27　柱穴出土遺物観察表 ……175
表28　上層出土遺物観察表（１）……178
表29　上層出土遺物観察表（２）……179
表30　上層出土遺物観察表（３）……180
表31　下層出土遺物観察表 ……181
表32　採集遺物観察表（１）……181
表33　採集遺物観察表（２）……182
表34　採集遺物観察表（３）……183
表35　出土遺物組成表 ……185

図　版　目　次

図版1－1　東端部上層遺構面（西から）……189
1－2　同上　下層遺構面（西から）
1－3　下層面全景（西から）
図版2－1　南北土層断面（東壁寄り）……190
2－2　井戸１（東から）
2－3　同上　内部の状況
図版3－1　竪穴建物１・４（東から）……191
3－2　竪穴建物２（東から）
3－3　竪穴建物８（東から）
図版4－1　竪穴建物６東辺部（西から）……192
4－2　同上　西域部（西から）
4－3　同上　図11－13・12－50（左から）出土状況
図版5－1　竪穴建物６　図11－７・17・20（左から）出土状況……193
5－2　同上　図11－５・８・６・15・16・14（左上から）出土状況
5－3　竪穴建物11南域（北から）
図版6－1　中央部柱穴群（東から）……194
6－2　方形土壙１南半部（西から）
6－3　方形土壙８（南から）
図版7－1　図17－４出土状況 ……195
7－2　図19－６出土状況
7－3　図13－６出土状況
図版８　竪穴建物出土遺物 ……196
図版９　竪穴建物・土壙出土遺物 ……197
図版10　包含層などからの採集遺物 ……198

第一章　調査地点概観

1．位置と地勢

鎌倉旧市街は、三本の幹線南北道路と、それに直交する数本の東西道路により構成される。南北道の中心は「若宮大路」で、西側に「今小（大）路」、東側に「小町大路」が通る。中世期にこれらの南北道が海岸方向にどこまで延びていたか検討の余地があるが、このうち最も海岸寄りを通る東西道路が小町大路と交差する場所は、近在の寺院の名称が冠せられ、九品寺交差点と呼ばれている。調査地点はこの交差点の約100m北に位置する。地番は鎌倉市材木座三丁目364番１外地点。

付近一帯は、鎌倉の平野部を形成する滑川扇状地の東南の一隅にあたり、現在の海岸まで300mほどの距離にある。海抜は地表面で６m前後。また、先年おこなわれた北東250mにある能蔵寺跡の発掘調査の結果、この辺りの地層は東の山裾まで海成砂層であったことがわかっている[1]。

中世期鎌倉の海岸線が現在よりもだいぶ奥まで湾入していたことは確実だが、この点について、近年斉藤直子は次のようにいっている[2]。

（１）滑川の河口は、かつては現在よりも400～500m東寄りにあり、このことは17世紀後半まで遡れる。また、現河口へと移されたのは1829年頃から幕末にかけての間である。

（２）海岸部には砂丘（砂州）が形成されていたが、それは遅くとも15世紀の中頃にはその上に堂が建てられるまでに安定していた。

（３）鎌倉期には、海岸砂丘の内側（陸側）に広い潟湖が存在していた。

斉藤のこの意見は、先に紹介した九品寺交差点付近から海岸にかけての一帯が、現在でも標高12m程

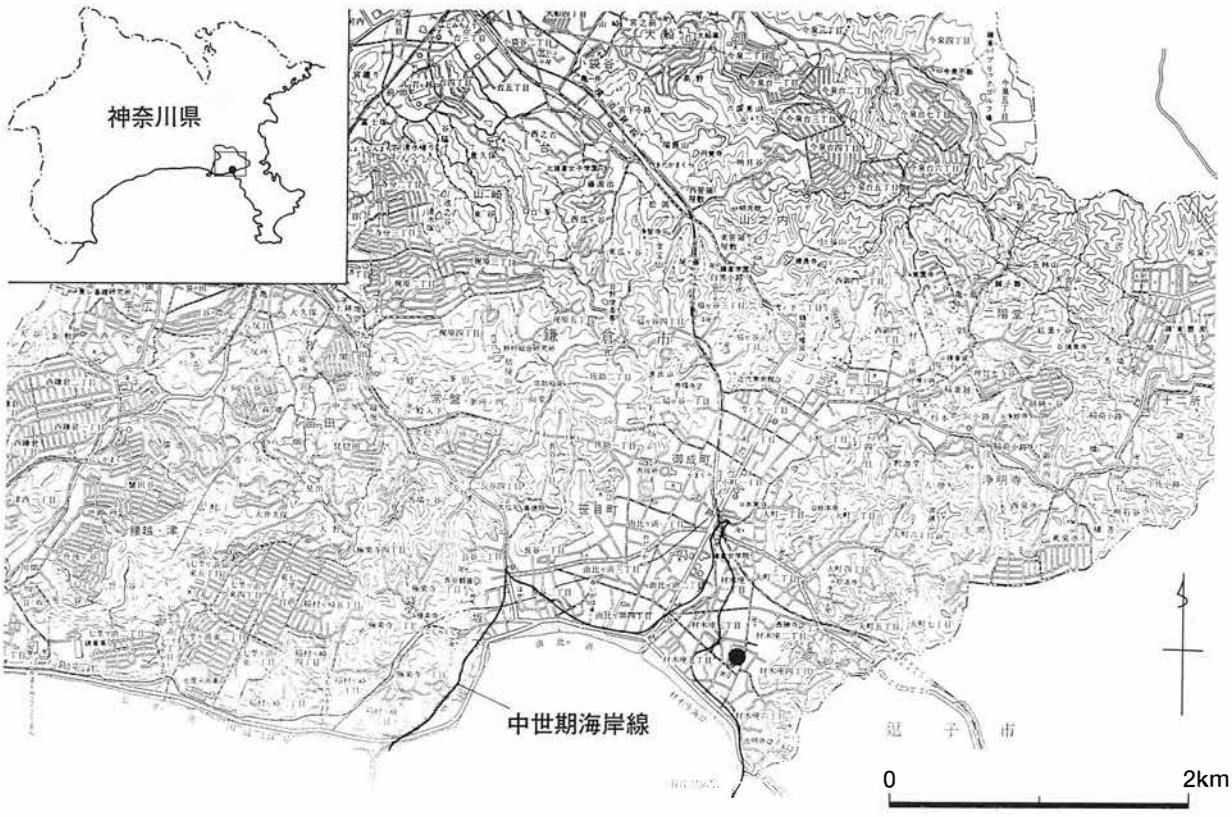


図１　調査地点の位置

1．調査地点
2．材木座町屋遺跡
（材木座四丁目260番1外地点）
3．能蔵寺遺跡
4．長勝寺遺跡
5．材木座町屋遺跡
（材木座二丁目217番6外地点）
6．材木座町屋遺跡
（材木座一丁目144番3外地点）
7．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡
（由比ヶ浜二丁目1037番1外地点）
8．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡
（由比ヶ浜二丁目1034番1外地点）
9．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡
（由比ヶ浜二丁目1015番29外地点）
10．由比ヶ浜中世集団墓地遺跡
（材木座遺跡）
11．新善光寺跡内やぐら
12．光明寺裏遺跡

和賀江島

図２　調査地点と周辺の遺跡・旧跡

図３　調査地点位置図（拡大・１／500）

度の微高地になっていることや、潟湖推定範囲のなかに古い来歴をもつ寺院が存在しないことからも、いちおう首肯できる。そしてそうだとすれば、調査地点は潟湖のだいたい東辺に位置することになり、現在の実感よりもはるかに水辺に近かったといえる。

２．歴史的環境

鎌倉の海岸地帯では、これまで主に滑川対岸の由比ケ浜地区では頻繁に発掘調査が行われてきた。しかし材木座地区では少なく、谷戸部を除くと本調査は４例目に過ぎない。これらの調査結果からみて、調査地点付近で人の生活痕が認められるようになるのはおおむね律令期とみてよい。

鎌倉に源氏が入るのは11世紀なかばのことで、康平六年（1063）頼義が石清水八幡宮を勧請して建てた由比若宮は、ここから約500ｍ北に位置する。以後、鎌倉時代前期ごろまで材木座一帯の消息は、よく伝わらない。

『吾妻鏡』建保四年（1216）６月15日によれば、将軍実朝は宋人陳和卿と面談し、渡宋用の「唐船」修造を命じた。翌建保五年４月17日、完成した船を進水させようとしたが、不首尾に終わった。『吾妻鏡』は失敗の理由を、由比浦が唐船の出入りに不向きであったからだとしている。貞応二年（1223）成立の紀行文『海道記』には「湯井浜」（由比ケ浜）に停泊する船のにぎわいと、浜の「東南角ノ一道」に蝟集する商人たちのことがみえる。

執権北条泰時の貞永元年（1232）、本地点から700ｍあまり南の飯島崎に、念仏僧往阿弥陀仏の勧進により和賀江港が作られた。「為無舟船着岸煩、可築和賀江嶋之由」と泰時に願い出たという。狭くなったのか、遠浅で大船の接岸に不向きだったのか、おそらく両方が理由であろう。とすると、やや話は逸

れるが、陳和卿の唐船とはよほど大きなものだったのだろうか。

建長三年（1251）、鎌倉幕府は市内に七カ所の商業地区を指定した。和賀江はそのうちのひとつとなる。文永二年（1265）に幕府は再度の商業地指定をするが、このとき和賀江は指定から外れた。鎌倉を海岸部とそれ以外の地区という二分法で分けた場合、幕府はただひとつ海岸部に含まれる和賀江を放棄したことになる。その意味は、この法令の時点で、幕府は海岸部における商行為の統制から手を引いたということである。この点は以前にも何度か書いたが[3]、もう一度簡単に触れておきたい。

よく知られているように、鎌倉時代後期の海岸部（前浜・浜地）は西大寺流律宗の極楽寺が殺生禁断を布令して検断権を有するところとなり、和賀江の維持・管理も忍性以来極楽寺長老に任されていた。西大寺律が浜に弘通するのは、弘長二年（1262）、叡尊が関東下向したときだと考える。そして、文永二年の商業地の再指定で和賀江が除かれたとき、浜での権益が極楽寺に移ったのである。

調査地点北東300mにある材木座鎮守五所神社には、市指定文化財の弘長二年銘板碑（「倶利迦羅明王板碑」とも）がある。灰黒色粘板岩の常総型で、もと近在の感応寺（廃寺）に所在していた。この板碑について筆者は、弘長二年の西大寺律の前浜弘通を示すものとかつて書いた[4]。なお感応寺は調査地点向かい側の材木座公会堂の辺にあったという。

材木座から東の山塊にかけては、おもに鎌倉時代後期、新善光寺・最福寺・最宝寺・光明寺など念仏系寺院が多く集まる空間となっていた。また北条高時の開いた禅寺の崇寿寺、先の五所神社板碑が元あった真言宗醍醐三宝院流の感応寺もあり、和賀江に近いこの付近は、当時寺院の集中する、特異ともいえる宗教空間が形成されていたらしい[5]。これらはすべて廃寺化、あるいは別の場所に移転している。

なお、調査区から少し南の九品寺には永仁四年（1296）銘石造薬師如来座像があり、これについて赤星直忠は、箱根精進池畔の石仏群中の像に似ているといっている[6]。箱根のものは極楽寺忍性作とされており、赤星の評価が正しければ、九品寺像も彼に関係する可能性がある。この一帯の特殊な宗教的あり方も、前浜における西大寺律の弘通と何かしらのつながりを見出すことができるかもしれない。

明治四十一年（1908）、乱橋村と材木座村が合併してこの辺は東鎌倉村大字乱橋材木座となった。このとき、乱橋村鎮守の三島神社の地に近在の四社を合祀して、現在の五所神社が建てられている。五所神社には、鎌倉の代表的古謡である「天王唄」が伝わる。文言からみてその成立はおそらく近世を遡らないだろうが、この唄は中世以来の伊勢と鎌倉間の太平洋交通の様子をよく伝えている。これについては別に書いた[7]。なお材木座の地名は近世を初見とする。

注

1　馬淵和雄　1995　『能蔵寺跡－材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査－』鎌倉市教育委員会

2　斉藤直子　1995　「中世前期鎌倉の海岸線と港湾機能」『中世東国の物流と都市』山川出版社

3 a　馬淵和雄　1991　「都市の周縁、または周縁の都市」『青山考古』第9号　青山考古学会

b　馬淵和雄　1994　「武士の都　鎌倉－その成立と構想をめぐって－」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）新人物往来社　ほか

4　馬淵和雄　1995　「浜と板碑－五所神社蔵弘長二年銘板碑の意味－」注1前掲書　35頁

5　高橋慎一朗　1995　「中世鎌倉における浄土宗西山義の空間」『中世の空間を読む』吉川弘文館

6　赤星直忠　1959　『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館456頁

7　注1馬淵前掲書　3・4頁　なお唄の文句にある「わかの浦」について、注1前掲書中で「どこであるかは分からない」と書いたが、おそらく紀州のそれであろうと訂正したい。

第二章　調査の概略

1．調査にいたる経緯

この点については、『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12（第1分冊　鎌倉市教育委員会1996）所収「平成7年度調査の概観」を参照してほしい。

2．方眼設定方法

調査の便宜上、県道（小町大路？）側を東、海岸側を南と仮称することにした。

まず、北西調査区外に任意点を設定し、それを原点Ａ－１とした。ここから東に向かい南北軸を、南に向かい東西軸を５ｍごとに派生させ、前者に算用数字を、後者に大文字アルファベットの呼称を付した。ただし調査区が狭いため、区内を実際に通過するのは、南北は２・３軸、東西はＢ軸のみである。

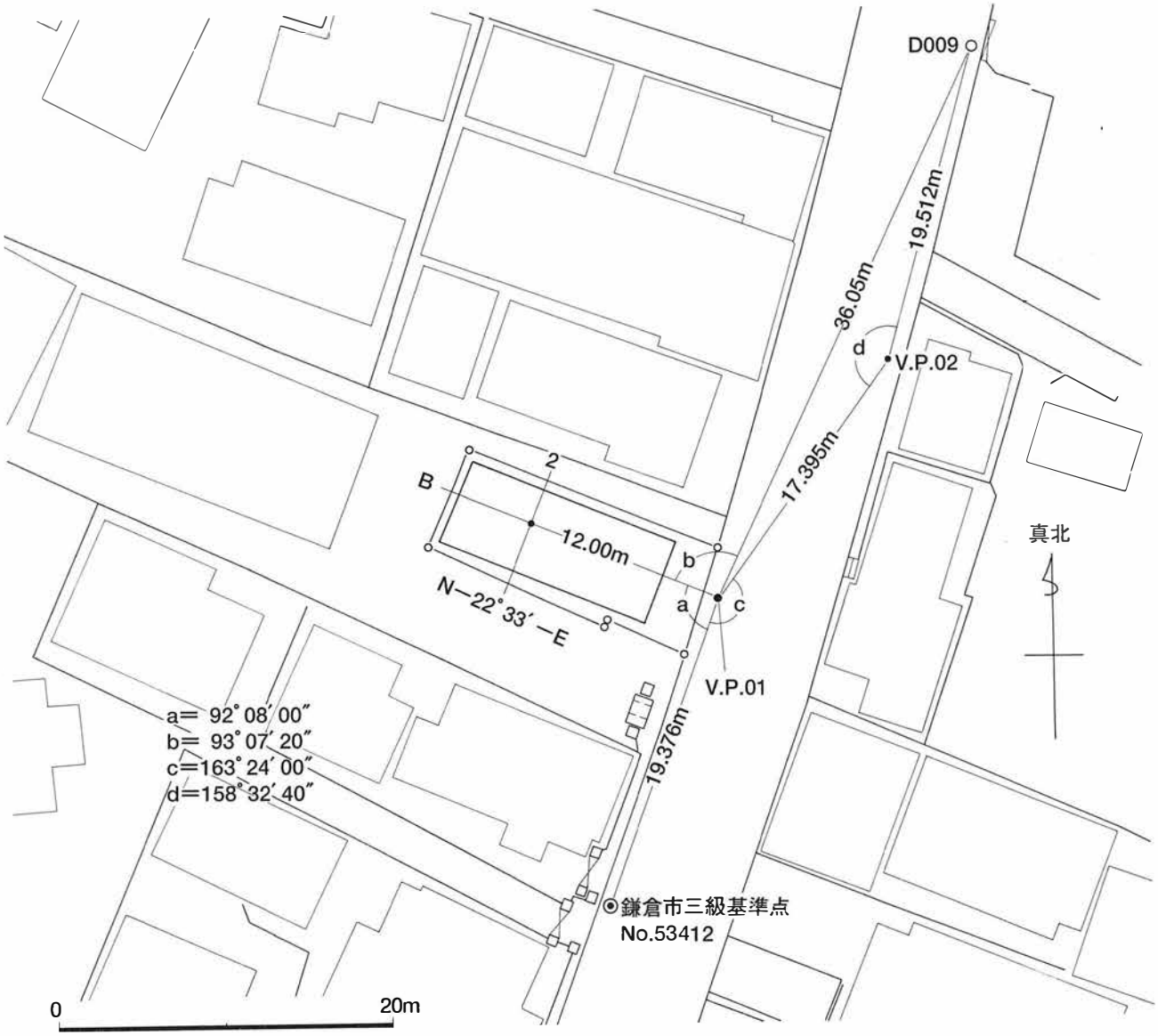


図４　方眼設定図

各方眼区画の名称は北西角の軸線交点で表される。また、東西軸は測量の便宜を考慮して調査区長軸に平行させたため、経緯方向に一致しない。

南北軸方位Ｎ－22°33’－Ｅ。

軸線交点Ｂ－２の位置はつぎのとおり。

東経　139°33’20”

北緯　35°18’16”

この方眼は次のように鎌倉市三級基準点№53412、および四級基準点Ｄ009に連結している。

Ｂ－４東２ｍのＢ軸上に任意点V.P.01をおいた。ここからＤ009までは距離36.05ｍ、Ｂ軸との角度は時計回りで93°07’20”である。また№53412まで19.376ｍ、角度は反時計回りで92°08’である。

また、ここからさらに163°24’反時計回りに進んだ軸線上17.395ｍの場所に、もうひとつの任意点Ｖ．Ｐ.02を派生させ、補助点とした。この点はＤ009まで19.512ｍの位置にある。

３．調査の概要と経過

調査は1995年６月19日から、同年７月29日までを要した。調査面積は100㎡である。

調査区は敷地のほとんど全面にわたるので、残土の場外搬出のための空間を確保する必要があり、調査を二期に分けた。すなわち当初は、東側の道路に接した部分を幅３ｍほど掘り残して、以西で作業を進め、のち東側の作業をおこなう。このとき排土は西側の調査区に置く。このような手順を余儀なくされたので、西側調査区と東端部を一緒に写真撮影することはできなかった。

建設工事にともなう掘削深度は地表下195㎝である。そのため調査の掘削深度にもそこまでの規制があった。しかし中世層については、かなり広い範囲にわたってこの深度までで基盤層を確認することができた。

鎌倉市教育委員会の試掘調査により、現地表下約70～80㎝まで、近・現代の整地層が及んでいることが判明していた。そこでまず、当初の二日間で地表下70㎝まで重機によって排土した。

以下人力によって順次作業を進めたが、おりしも梅雨の真っ最中であり、また海岸に近いこともあってか、予想以上に湧水が多く、海成砂層に掘りこまれた遺構はたちまち崩落していくことがしばしばあった。

以下、順次作業を進めていった。作業の節目を日誌から抜粋して記す。

６月24日（土）　基準点設置

７月19日（水）　西側の全景写真撮影

７月21日（金）　東端部掘削開始

７月28日（金）　東端部地山面写真撮影

７月29日（土）　機材撤収，現地作業終了

第三章　調査結果

第1節　概要

1．層序と遺構面の概略

厚さ70～80cmほどの近・現代の客土層を除去すると、中・近世の包含層となる。この層は海岸の砂そのもので、これ以下もすべて砂層となる。

すでに層位的にはこの付近から切り込まれた遺構もあるが、攪乱が非常に多く、本格的な検出はもう20～30cmほど下げなければならない。すると、生活面自体はそれほど明瞭ではないが、遺構の検出が可能となる。部分的に遺存している生活面構成土は、灰～黄褐色の砂であり、人工遺物のほか、自然遺体も多く含む。この面では井戸など近世の遺構も検出されている。

遺構は複雑に切り合っており、ほぼ全面がその堆積土となって連続的に検出されるため、生活面はほとんど残っていなかった。また、したがって、調査中に遺構を層位から群別することは難しかったが、整理の際の検討により、中世期に属する遺構をいちおう上層遺構群・下層遺構群の二群に大別した。ただし、以下の個別記載では上下の区別をしていない。なお、整理の結果、消滅した遺構もいくつかあるが、整理時の混乱を避けるため、欠番はそのままにしておいた。

上層遺構群としては、竪穴建物6・方形土壙4・土壙7・柱穴様小落込み約50がある。また炭化物の散在した部分や、暗黄灰色の粘土を叩き締めた土間状の面などが検出された。

下層遺構群としては、竪穴建物4・方形土壙1・土壙8・柱穴様小落込み約60がある。柱穴様小落込みのうちいくつかには規則性が認められ、掘立柱建物の一部である可能性もある。

2．出土遺物の概要

縄文時代から近代まで、合成樹脂整理箱で約30箱ほどの出土遺物があった。土器・陶磁器・鉄製品・石製品などがある。木製品は、土層が砂で構成されているためとみられるが、ほとんどなかった。詳細な内訳は本文末の出土遺物組成表に譲る。

第2節　検出遺構と出土遺物

1．井戸

井戸1（図7）

1－Aにあり近世後期に属す。直径1.7m前後の掘方中に、弧状に成形した泥岩を積み上げて井戸枠にしている。底部近くには木桶の溜まり部が遺存していたが、厳しい掘削深度規制があり、全体を底部まで掘り出すことはできなかった。現状で確認面からの深さ約1.8m。

2．竪穴建物

竪穴建物1・4（図8）

調査区西南角1－Bで、重複して検出された。当初検出した1の掘削途中、ほぼ重なる位置にもう1基あることを確認し、竪穴建物4とした。4が1を切る。

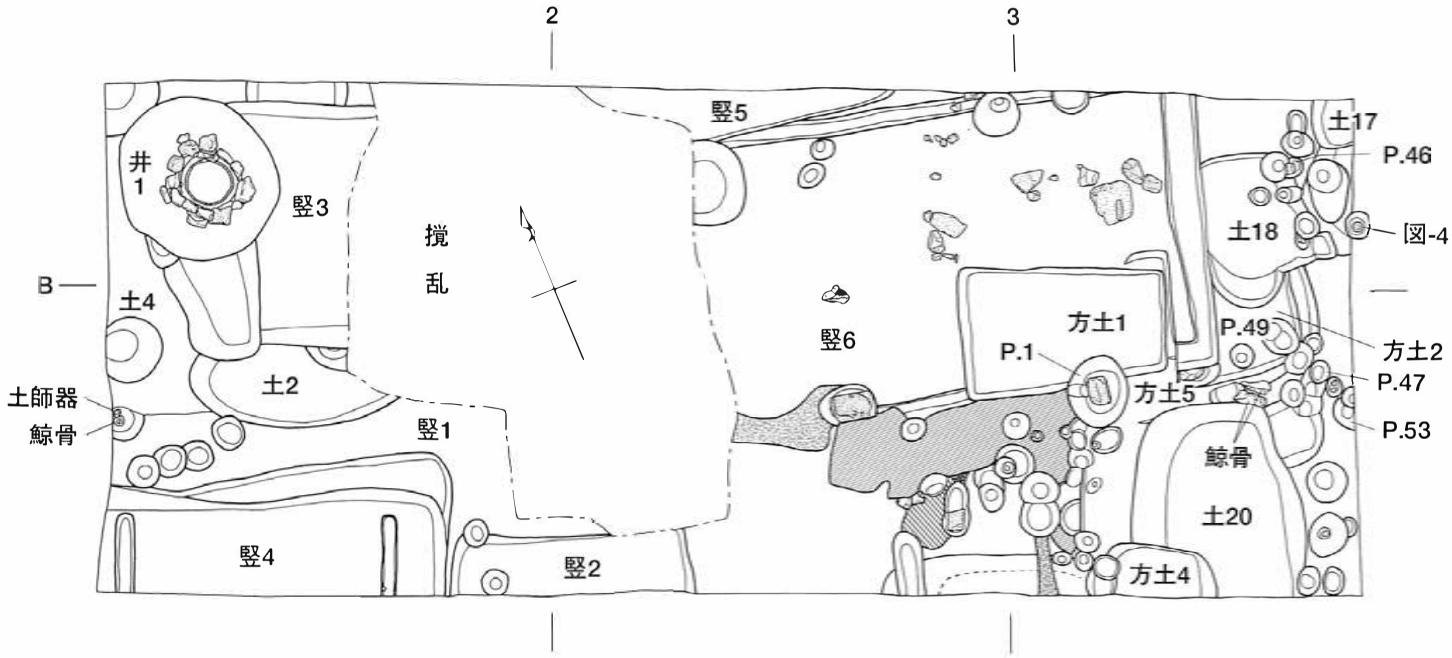

2
3
井1
竪3
竪5
撹乱
土17
P.46
土18
図-4
B
土4
竪6
方土1
P.49
方土2
P.1
方土5
P.47
土師器
鯨骨
土2
竪1
P.53
鯨骨
土20
竪4
竪2
方土4
暗黄灰色粘土
炭化物散布域
破砕シルト岩敷
被熱痕
竪　竪穴建物
土　土壙
方土　方形土壙
P.1　柱穴1
シ　シルト岩
凝　凝灰質砂岩
安　安山岩
0
4m

図5　上層遺構群全図

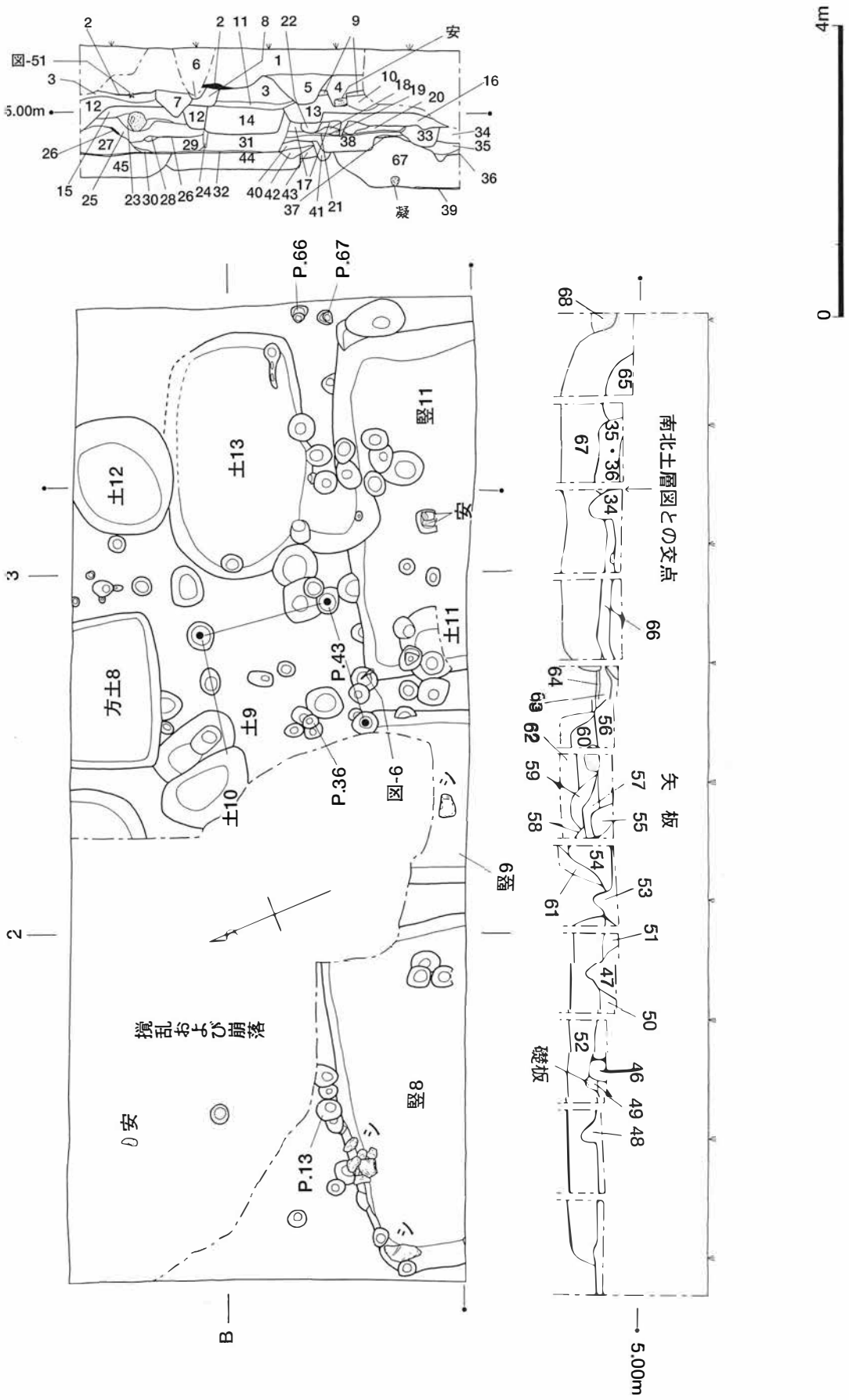


図-51
5.00m
安
凝
P.66
P.67
P.43
P.36
P.13
図-6
方土8
土9
土10
土11
土12
土13
竪11
竪8
竪6
撹乱および崩落
南北土層図との交点
矢板
礎板
4m
0
5.00m

図6　下層遺構群全図

図６　土層説明（東西・南北土層図共通）　１．表土　２．炭化層　３．茶褐色土（一部暗灰褐色粘土含む）　４．暗灰褐色土　５．暗茶褐色土　６．明灰褐色土　７．暗黄灰色土　８．茶褐色土　９．明灰褐色粘土　10．暗茶褐色土　11．明茶灰色土　12．茶褐色土　13．暗灰褐色粘質土　14．方形土壙１　15．明茶褐色砂質土　16．茶褐色土　17．黄灰色砂質土(泥岩粒子多い)　18．茶褐色砂質土　19．明黄灰色砂質土　20．暗茶灰色砂質土　21．暗茶褐色土　22．暗茶褐色土　23．暗黄褐色砂質土　24．暗灰褐色土　25．暗黄褐色砂質土（以下32まで竪穴建物６，図10参照）　26．炭化層　27．黄灰褐色砂質土　28．焼土　29．灰茶褐色砂質土　30．灰層　31．暗灰褐色砂質土　32．暗灰色粘土　33．茶褐色砂質土　34．灰褐色土　35．暗灰褐色粘質土（暗黄褐色砂との混土，土壙埋土）　36．暗黄色砂　37．灰褐色粘質土　38．暗灰褐色砂質土（土壙５）　39．暗灰色粘土　40．灰茶褐色土　41．暗灰白色砂質土　42．灰褐色砂質土　43．明灰褐色砂質土　44．土壙13（図17参照）　45．明黄褐色砂質土（土壙12）　46．小落ち込み（以下52まで図８参照）　47．同前　48．竪穴建物４　49．小落ち込み　50．暗褐色粘質土　51．暗灰褐色砂質土　52．竪穴建物８　53．暗褐色砂質土　54．小落ち込み（以下61まで図13参照）　55．同前　56．暗褐色砂質土　57．土壙埋土　58．小落ち込み　59．土壙埋土　60．土壙14埋土　61．竪穴建物９　62．褐色砂　63．暗褐色砂質土（粘土・貝粒子を含む）　64．土壙20（以下67まで図13参照）　65．土壙６・７　66．竪穴建物11　67．灰褐色砂質土

１は深さ22cm、４は深さ50cm。大きさは、半ば以上調査区外に出ているため不明だが、４の東西については、底面の根太の痕跡から、約４ｍ前後に復元される。

出土遺物には土師器・常滑こね鉢（Ⅱ類）・瀬戸・鉄製品などがあり、１・４ともに鎌倉時代後期に属している。

竪穴建物２（図９）

上記竪穴建物１・４のすぐ東側２－Ｂにある。東西5.2ｍで、南側の大半は調査区外に出ている。深さ26cm。

出土遺物に図示しうるものはなかった。

竪穴建物６（図10～12）

調査区東寄りの２・３－Ａ・Ｂにある長方形の竪穴建物。西側を撹乱壙に削られ、東北角が少し調査区外に出ているが、現状で東西10.8ｍ、南北6.7ｍほどの規模を持つ。深さ約50cm。

壁際の底面には、切石を据えたとみられる幅25～40cmの浅い溝が巡っている。また、床上７～８cmには暗灰色の粘土が薄く敷かれていた痕跡がある。

出土遺物は多彩で、床面に土師器がかなり散在していたほか、常滑・瀬戸などの国産陶器、青磁・黒釉陶器など舶載陶器、砥石・土製品・釘・銭などがある。瀬戸のなかには仏像か何かの蓮台とみられるものもある（図12－59）。遺物の年代は、手づくね土師器（土師器Ｔ種）の存在を下層からの混入とみれば、おおむね鎌倉時代後半～末期に納まる。

竪穴建物８（図８）

前出竪穴建物１・４の下に検出された遺構で、や

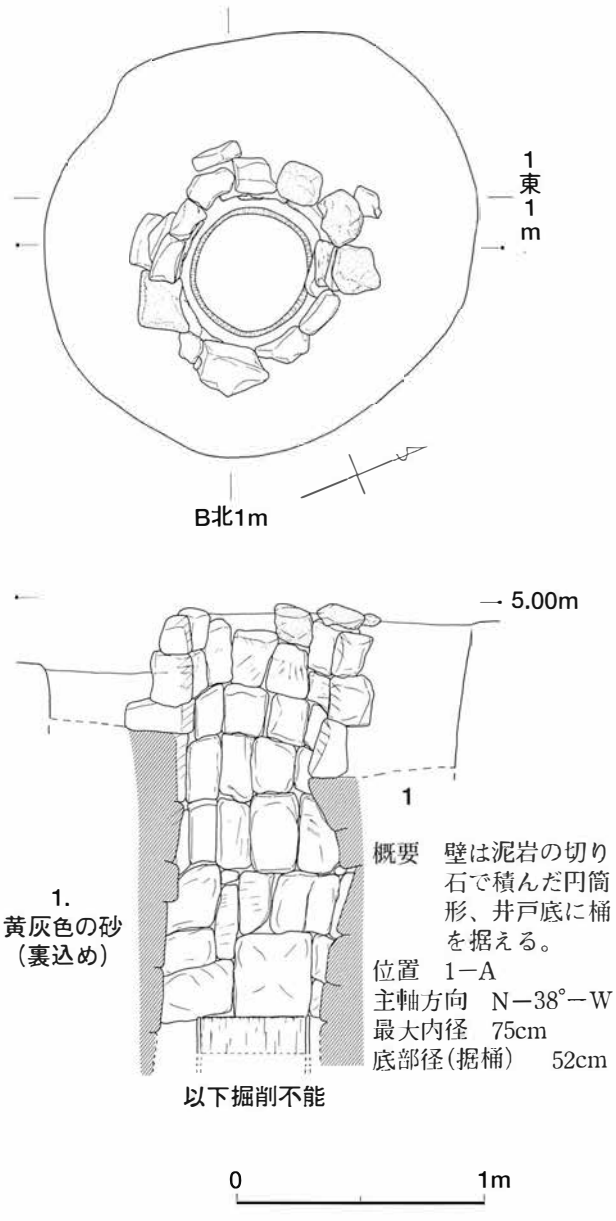
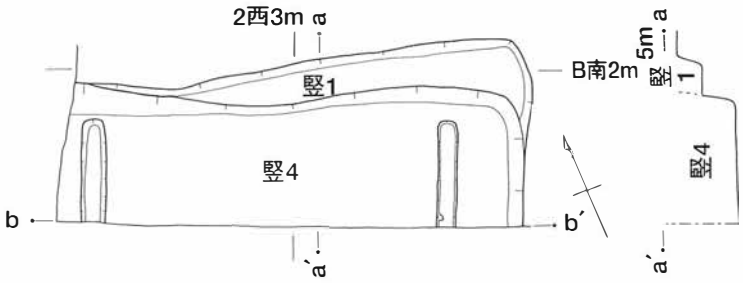
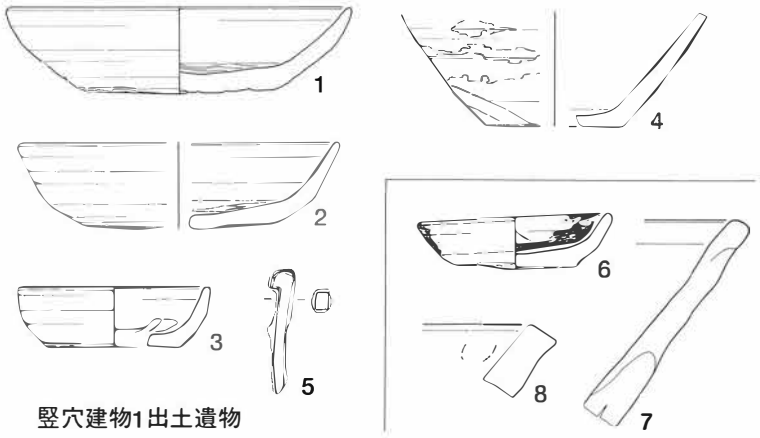


図７　井戸１



竪穴建物4の土層は竪穴建物8を参照



竪穴建物1出土遺物　　竪穴建物4出土遺物

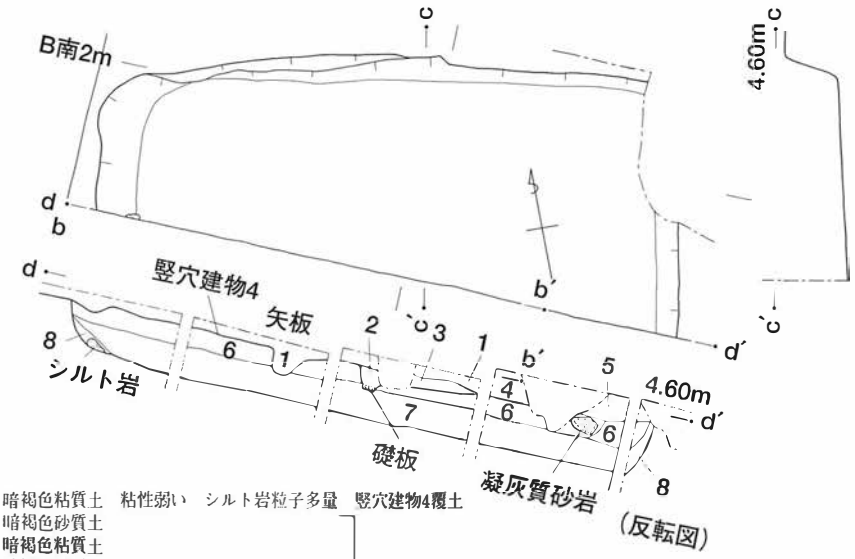
0　　2m(遺構)
0　　10cm(遺物)

竪穴建物1

位　置　1−B
軸方位　N−105°−E
平面形　隅丸長方形
規　模　(3)m×(7)m
深　さ　22cm
特記事項　竪穴建物4に切られる

竪穴建物4

位　置　1−B
軸方位　N−111°−E
平面形　隅丸長方形
規　模　(2.3)m×(7.5)m
深　さ　50cm
面　積　(17.25)㎡
特記事項　竪穴東西床面に根太木を据えた痕あり、竪穴建物1を切る



1. 暗褐色粘質土　粘性弱い　シルト岩粒子多量　竪穴建物4覆土
2. 暗褐色砂質土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 暗灰褐色砂質土
6. 黄褐色砂質土　炭粒多量　硬くしまっている
7. 暗灰褐色砂質土　貝殻片多量
8. 暗褐色砂質土　壁崩土

竪穴建物8覆土

竪穴建物8

位　置　1−B
軸方位　N−105°−E
平面形　隅丸長方形
規　模　(4)m×9.3m
面　積　(37.2)㎡

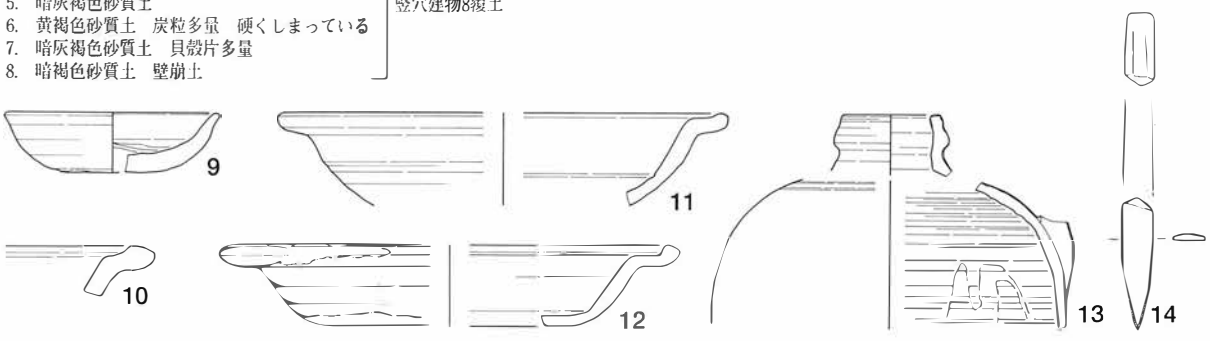


図8　竪穴建物1・4・8

はり南半部は調査区外に出ている。東西9.3mほどで、深さは約40cm。

出土遺物には土師器・瀬戸・青白磁水注・骨製笄などがあるが、年代的に鎌倉末期から南北朝期のものまで含んでおり、竪穴建物１・４、あるいは他の上層の遺物が混入した可能性もある。

竪穴建物９（図13）

竪穴建物８の東隣、同２の下に検出された。南側は調査区外にある。東西4.8mで、深さは規制深度よりも下にいくが、現状までで55cm以上ある。規模からいって後述の土壙８に共通しており、土壙といっても差し支えない。

出土遺物には土師器・瀬戸・青磁などがある他、直径2.2cmの水晶製念珠（母指）がある。他の数珠玉は発見されなかった。青磁に古い様相のものがみられるが、おおむね鎌倉時代後期とみて大過なかろう。

竪穴建物11（図13）

竪穴建物９のさらに東側にあり、これも南半部は外に出ている。これらの点からみて、本地点の竪穴建物が大体この辺に並んでいることがわかる。東西9.4m、深さ75cm。

出土遺物には土師器・常滑・瀬戸・貿易陶磁・土製品・鉄釘などがあるが、これもほかの竪穴建物と同様、鎌倉時代後期～末期に属する。

竪穴建物出土遺物（図14）

竪穴建物３・５からの出土遺物を図示しておいた。前者からは口縁部内面に凸帯の付いた瀬戸の鉢、後者からは土師器のほか、青磁や火打金が出土している。

３．礫集中部（図17）

Ａ－２・３付近に、凝灰質砂岩やシルト岩、安山岩などが散在した状況がみられたので示しておく。床面からは若干浮いているが、位置からいって竪穴建物６の埋土中に投棄されたものかもしれない。

４．方形土壙

方形土壙１（図15）

調査区東寄りの３－Ｂ交点付近に竪穴建物６を切る形で検出された。東西に長い長方形で、東辺の方が西辺に比べ、やや短い。西辺1.4m、東辺1.05m、東西2.2m。深さ33cm。

出土遺物には、土師器・常滑こね鉢・瀬戸・銭などがあり、大体鎌倉時代末とみてよい。

方形土壙８（図16）

調査区中央部北寄り２－Ａにあり、北側は調査区外に出ている。整った矩形を呈し、東西2.13m、深さ23cmの規模をもつ。

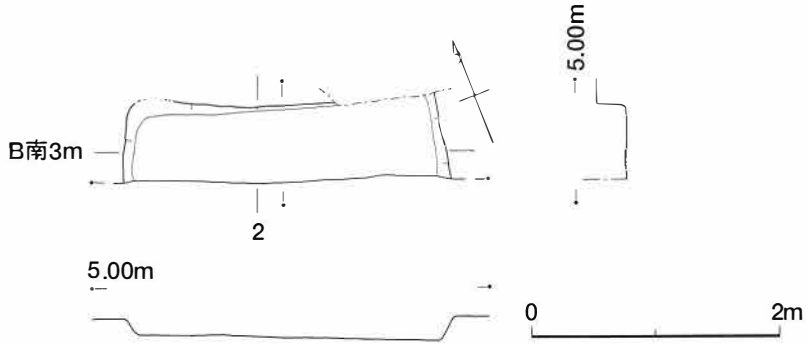
出土遺物には図示しうるものはなかった。

方形土壙出土遺物（図15）

方形土壙２・４・５出土遺物を提示する。２からは土師器・貿易陶磁・常滑などが、４からは土師器・白磁口はげ皿・鹿角製品未成品などが出土。５からは線刻のある砂岩片が出土している。全体に舟形をしているが、性格等については不明。

５．土壙

土壙９・10（図16）



竪穴建物2

位　置　2－B
軸方位　N－71°－W
平面形　隅丸方形
深　さ　26cm
規　模　5.2m×(1.2)m
面　積　(6.24) ㎡

図9　竪穴建物2

竪穴建物1	1	土師器	寸法　口径14.0cm　底径8.0cm　器高3.25cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	2	土師器	寸法　口径(13.0cm)　底径8.3cm　器高3.5cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　暗橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	3	土師器	寸法　口径9.4cm　底径5.4cm　器高2.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	4	瀬戸 碗	寸法　口径(5.6cm)　成形　ロクロ 胎土　黄灰色　微気孔有り　釉薬　灰緑色透明　ハケ塗り　焼成　良好
	5	鉄製品　釘	寸法　残存長(4.8cm)　幅0.55cm　厚さ0.7cm

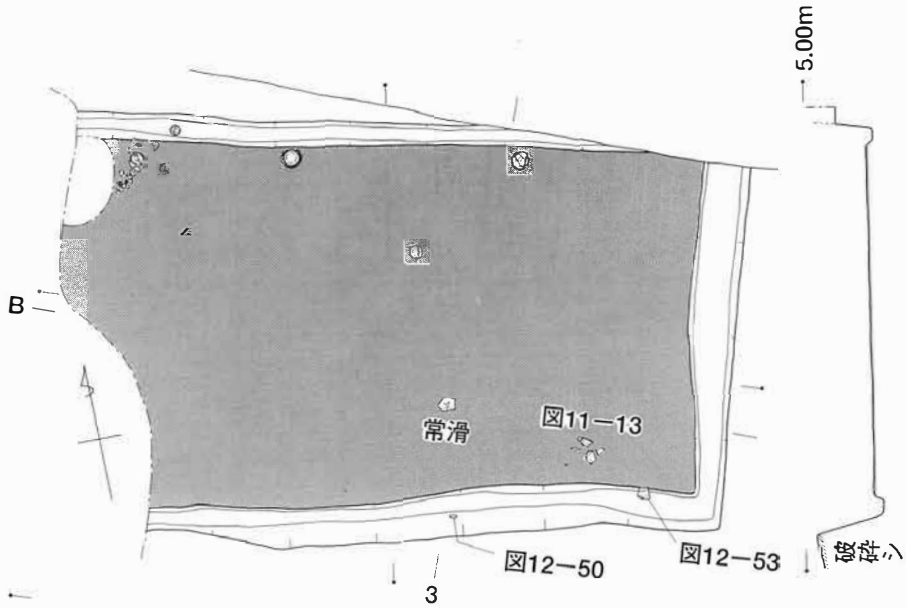
表1　竪穴建物1出土遺物観察表

竪穴建物4	6	土師器	寸法　口径7.8cm　底径4.8cm　器高2.0cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰褐色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり　二次焼成を受ける
	7	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　灰褐色　小石　白色粒含む　色調　暗赤褐色　焼成　良好
	8	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　黒褐色　小石　白色粒含む　色調　暗赤褐色　焼成　良好

表2　竪穴建物4出土遺物観察表

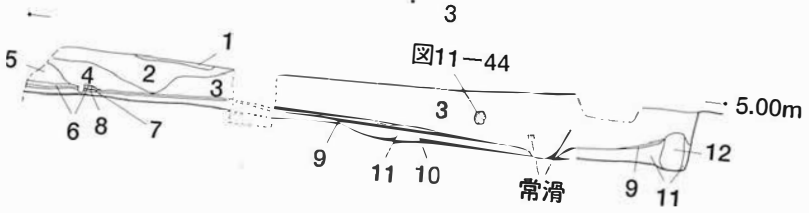
竪穴建物8	9	土師器	寸法　口径8.6cm　底径4.0cm　器高2.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好
	10	瀬戸 折縁皿	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　灰黄色　微気孔有り　釉薬　灰黄緑色　透明　漬掛け　焼成　良好
	11	瀬戸 折縁皿	寸法　口径(18.0cm)　成形　ロクロ 胎土　灰黄色　微砂粒含む　灰緑褐色　透明　ハケ塗り　焼成　良好
	12	瀬戸 折縁皿	寸法　口径(18.4cm)　底径(10.0cm)　器高3.25cm　成形　ロクロ 胎土　灰白色　微砂粒含む　釉薬　灰緑色　透明　漬掛け　焼成　良好
	13	青白磁 水注	寸法　不明　成形　ロクロ　文様　肩部に2本の沈線 素地　灰白色　釉薬　淡青白色　透明　焼成　良好
	14	骨製品　笄	寸法　残存長(12.7cm)　幅1.4cm　厚さ0.25cm　獣骨

表3　竪穴建物8出土遺物観察表



竪穴建物6

位　置　2.3−A.B
軸方位　N−103°−E
平面形　長方形
規　模　(10.8)m×6.7m
深　さ　50cm
面　積　(72.36)㎡
特記事項　壁際の底面に切石を沿えたとみられる浅い溝が廻る。また床から7〜8cmの高さに暗灰色の粘土を敷いたような痕跡あり



暗灰色粘土（床面）

1．暗灰色砂質土
2．暗灰色砂質土　黄褐色砂を多く含んでいる
3．暗灰色砂質土　2よりしまりなくもろい
4．暗黄褐色砂質土
5．暗灰色砂質土
6．暗黄灰色砂
7．暗灰色砂質土
8．炭化物層
9．暗灰色粘土
10．暗灰褐色砂
11．暗灰色砂質土
12．暗褐色粘質土　木質の腐植土？

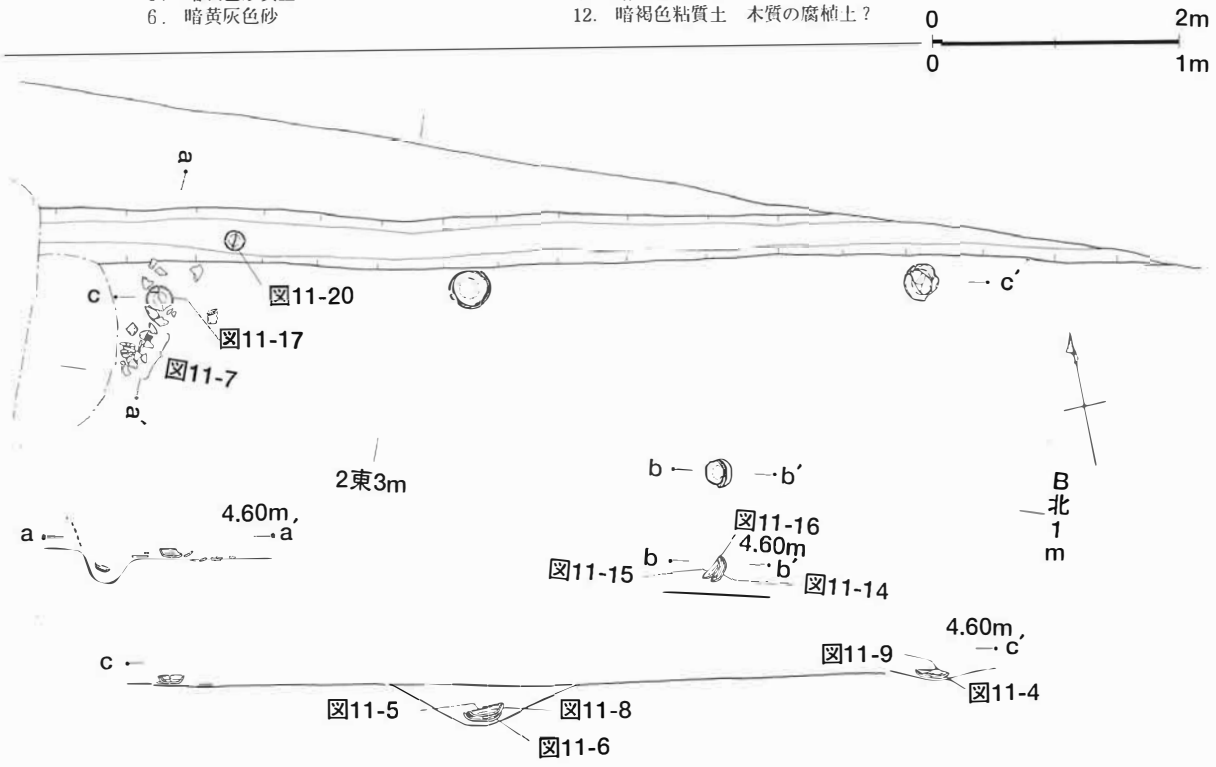


図10　竪穴建物6

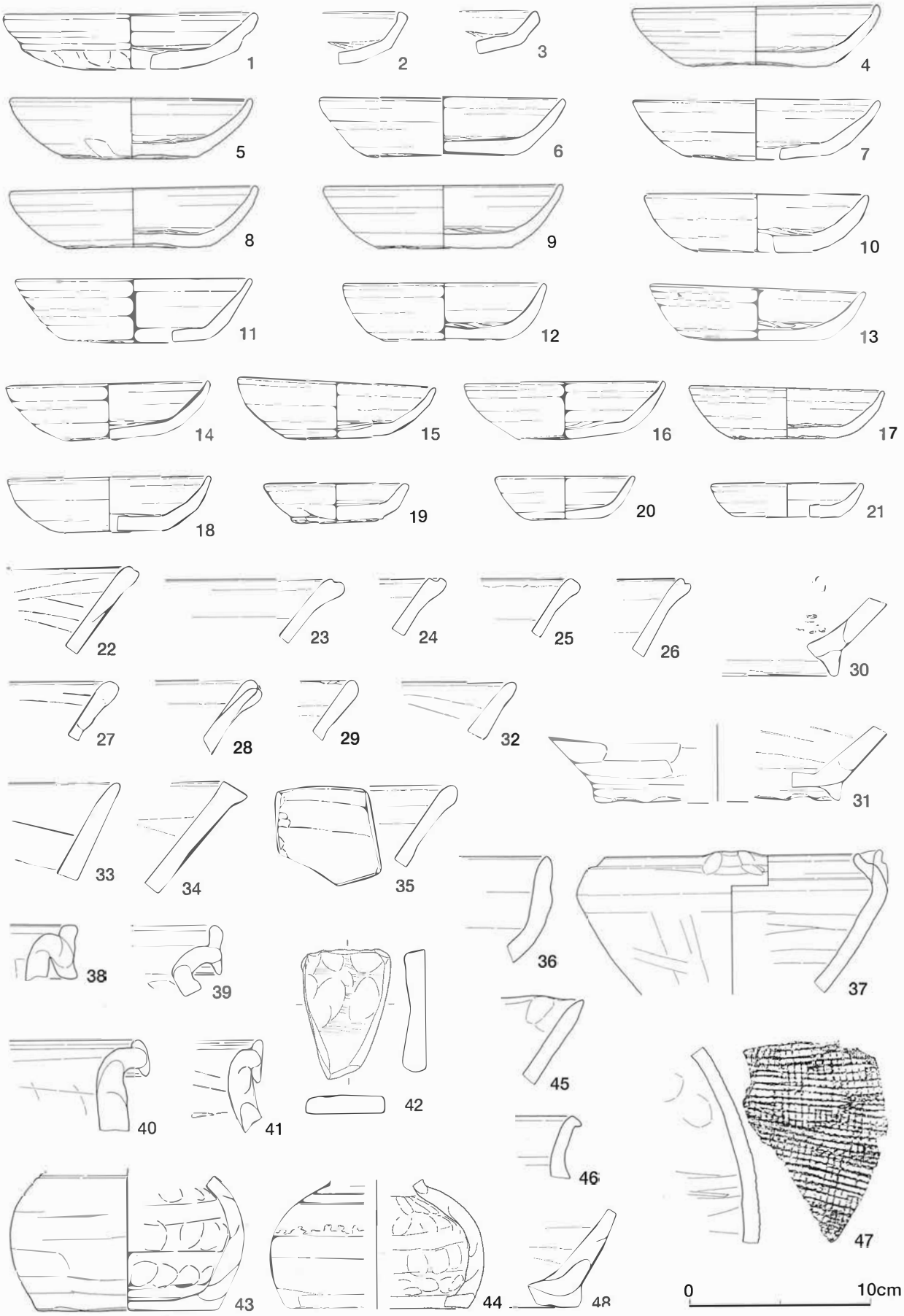


図11　竪穴建物6出土遺物（1）

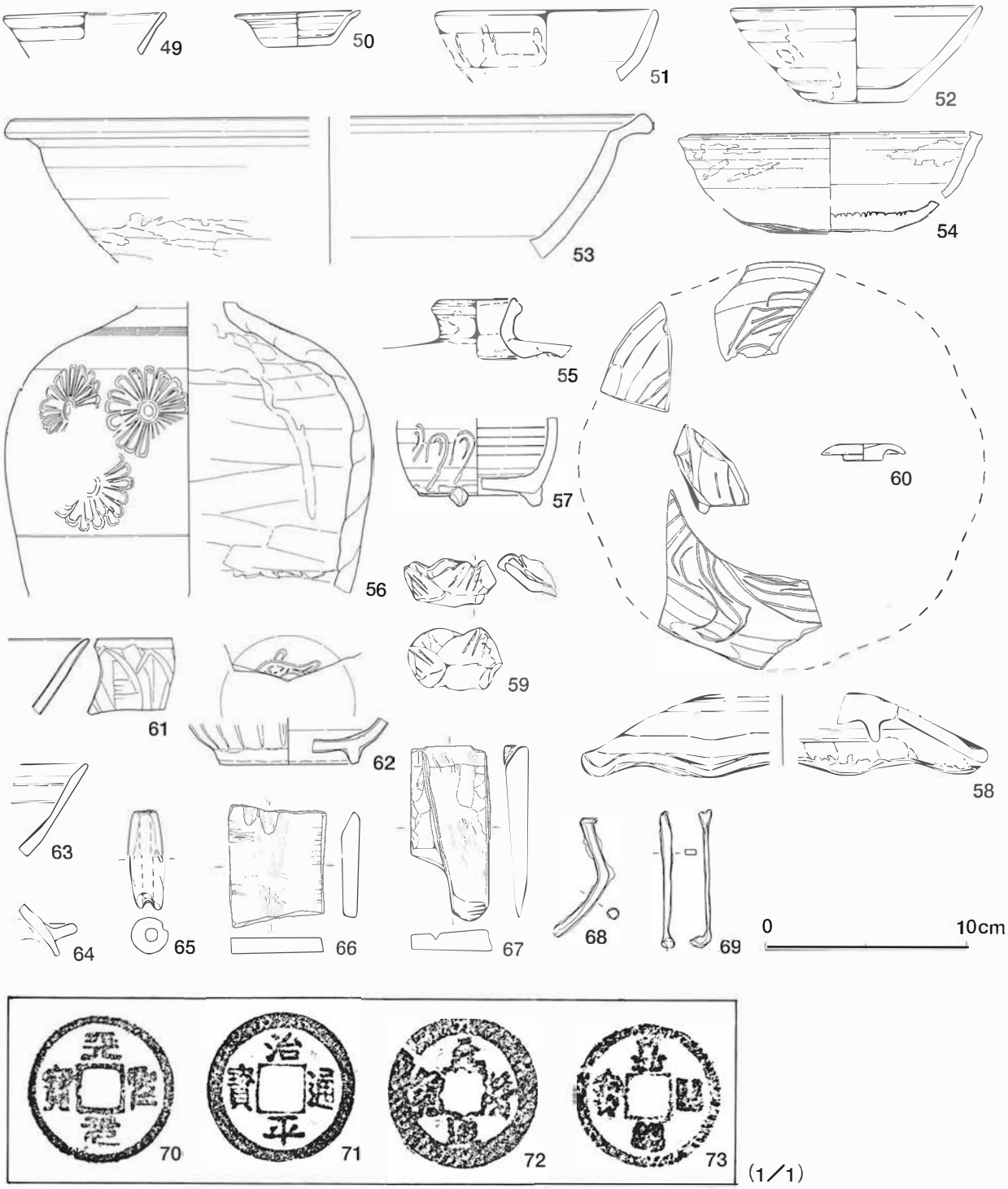


図12　竪穴建物６出土遺物（２）

ほぼ同等の規模を持ち、調査区中央部２－Ａに両者接して存在する。いずれも長楕円形で、浅い逆台形、もしくはすり鉢形の断面を呈する。新旧の関係は確認できなかった。同時存在である可能性があろう。

大きさは９が長さ1.23m、幅60cm以上、深さ20cm、10が長さ1.35m、幅82cm以上、深さ22cm。

出土遺物には土師器・瀬戸・不明鉄製品などがあるが、当初１基の土壙と認識して掘ってしまったので、９・10いずれの土壙に帰属するか、確実ではない。不明鉄製品は、先端が偏平に尖った細長いもので、基部には、おそらく握りの部分とおぼしい木質が残っている。銛か何か、漁具の一種だろうか。全体に13世紀末～14世紀前半の様相を示している。

竪穴建物6	1	土師器	寸法　口径14.0cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　針状物質　貝粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好
	2	土師器	寸法　不明　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	3	土師器	寸法　不明　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰褐色　焼成　良好
	4	土師器	寸法　口径13.6cm　底径7.5cm　器高3.2cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　暗橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	5	土師器	寸法　口径13.4cm　底径7.8cm　器高3.3cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　暗橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	6	土師器	寸法　口径13.4cm　底径8.2cm　器高3.2cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　暗橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	7	土師器	寸法　口径13.6cm　底径7.8cm　器高3.3cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	8	土師器	寸法　口径13.7cm　底径7.8cm　器高3.3cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　暗橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	9	土師器	寸法　口径13.2cm　底径7.6cm　器高3.45cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　針状物質　砂粒　赤色小粒含む　色調　橙色　備考　板状圧痕あり
	10	土師器	寸法　口径12.4cm　底径7.0cm　器高3.2cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　白色粒含む　色調　暗灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	11	土師器	寸法　口径13.0cm　底径8.0cm　器高3.5cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	12	土師器	寸法　口径11.2cm　底径6.6cm　器高3.1cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	13	土師器	寸法　口径11.9cm　底径7.6cm　器高2.9cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好
	14	土師器	寸法　口径11.2cm　底径5.6cm　器高3.15cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	15	土師器	寸法　口径10.9cm　底径5.7cm　器高3.15cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　長石　赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	16	土師器	寸法　口径11.0cm　底径5.8cm　器高3.15cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒　白色粒含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	17	土師器	寸法　口径10.75cm　底径5.6cm　器高2.7cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	18	土師器	寸法　口径11.2cm　底径6.0cm　器高2.95cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　淡橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	19	土師器	寸法　口径8.0cm　底径5.0cm　器高2.15cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　暗灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	20	土師器	寸法　口径7.7cm　底径4.2cm　器高2.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　シルト岩粒　長石含む　色調　暗灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	21	土師器	寸法　口径8.4cm　底径5.6cm　器高1.8cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰褐色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	22	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　小石含む　色調　暗灰色　焼成　良好
	23	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　小石含む　色調　灰褐色　焼成　良好
	24	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　小石含む　色調　淡灰褐色　焼成　良好

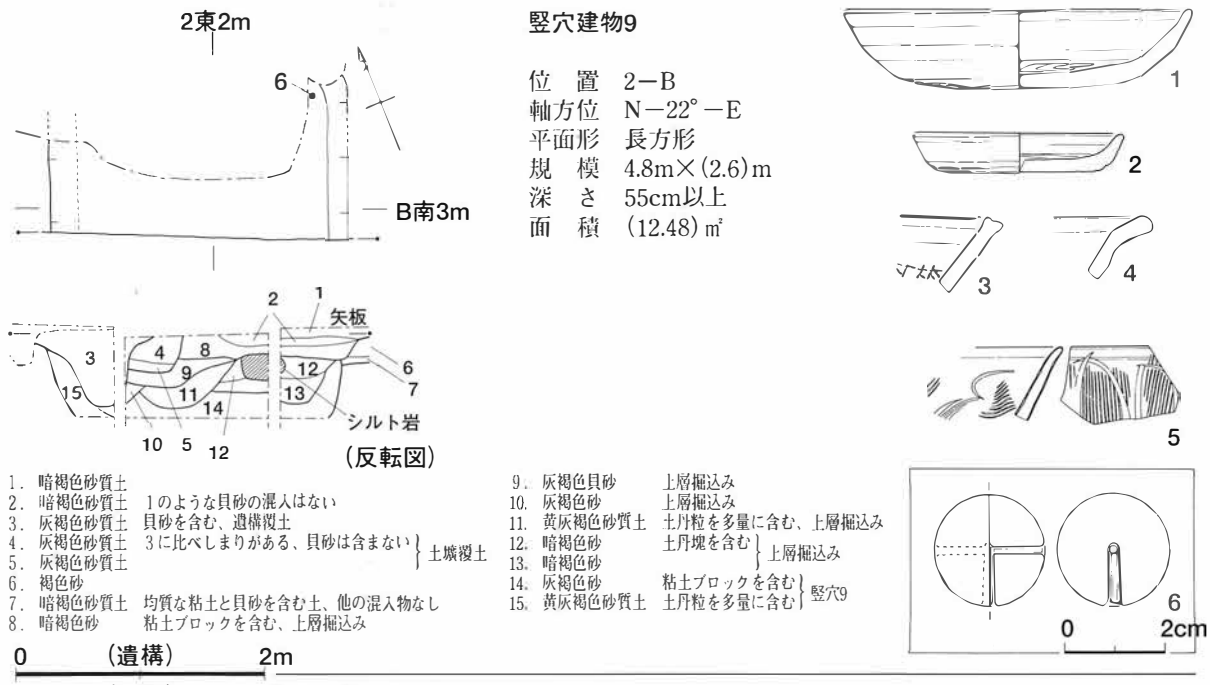
表4　竪穴建物6出土遺物観察表（1）

竪穴建物6	25	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　白色粒含む　色調　淡灰褐色　焼成　良好
	26	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　シルト岩粒含む　色調　灰白色　焼成　良好
	27	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　小石含む　色調　灰褐色　焼成　良好
	28	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　小石　白色粒含む　焼成　良好
	29	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積後ロクロ 胎土　砂粒　小石　白色粒含む　焼成　良好
	30	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積後ロクロ　外面体部下位ヘラ削り　高台貼り付け 胎土　砂粒　小石　白色粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好
	31	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　底径（13.4cm）　成形　輪積後ロクロ　外面体部下位ヘラ削り　高台貼り付け 胎土　砂粒　小石含む　色調　灰褐色　焼成　良好
	32	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積後ロクロ 胎土　砂粒　小石含む　キメ細かい　色調　暗灰褐色　内面降灰　焼成　良好
	33	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　茶褐色　砂粒　小石含む　色調　茶褐色　焼成　良好
	34	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　橙色　小石　白色粒含む　色調　橙褐色　焼成　良好
	35	常滑こね鉢Ⅰ類　転用砥石	寸法　長さ5.0cm　幅5.0cm　厚さ0.7cm　成形　輪積 胎土　灰褐色　砂粒　小石含む　色調　外面茶褐色　内面黄緑褐色　焼成　良好　備考　砥石として転用
	36	常滑 鉢	寸法　不明　成形　輪積 胎土　暗灰色　小石　白色粒含む　色調　暗褐色の施釉　焼成　良好
	37	常滑 広口壺	寸法　口径17.0cm　成形　輪積 胎土　暗灰色　白色粒含む　色調　暗灰色　焼成　良好
	38	常滑 甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　灰褐色　小石　白色粒含む　色調　黒褐色　自然釉　焼成　良好
	39	常滑 甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　黒灰色　白色粒含む　色調　黒灰色　焼成　良好
	40	常滑 甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　灰黄褐色　砂粒　小石含む　色調　内面自然釉　外面茶褐色　焼成　良好
	41	常滑 甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　灰黒色
	42	常滑 甕転用	寸法　長さ7.0cm　幅4.5cm　厚さ1.0cm 胎土　淡灰褐色　白色粒含む　色調　外面黒褐色　内面茶褐色　焼成　良好　備考　砥石に転用
	43	常滑 鳶口壺	寸法　底径10.0cm　成形　輪積 胎土　灰褐色　砂粒　小石含む　色調　灰茶褐色　焼成　良好　備考　スス付着
	44	常滑 鳶口壺	寸法　底径10.0cm　成形　輪積　内面指頭押さえ 胎土　暗灰褐色　白色粒　小石含む　色調　茶褐色　自然釉　焼成　良好
	45	渥美 こね鉢	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　小石含む　色調　灰色　焼成　良好
	46	渥美 壺	寸法　不明　成形　輪積 胎土　暗灰色　砂粒含む　釉薬　黒灰色　ハケ塗り　焼成　良好
	47	亀山 甕	寸法　不明　成形　輪積　外面体部　格子の叩き目 胎土　瓦質　灰色　砂粒　白色粒含む　色調　暗灰色　焼成　良好　備考　拓本あり
	48	窯不明 こね鉢	寸法　不明　成形　輪積 胎土　砂粒　小石　白色粒含む　色調　暗灰色　焼成　良好

表5　竪穴建物6出土遺物観察表（2）

竪穴建物6	49	瀬戸入れ子	寸法　口径8.0cm　成形　ロクロ 胎土　淡灰色　色調　灰色　焼成　良好
	50	瀬戸小皿	寸法　口径6.2cm　底径3.2cm　器高1.7cm　成形　ロクロ 胎土　灰白色　砂粒　小石含む　気孔少しあり　色調　黄白色　焼成　良好
	51	瀬戸碗	寸法　口径11.0cm　成形　ロクロ 胎土　黄灰色　砂粒含む　釉薬　暗灰緑色透明　ハケ塗り　焼成　良好
	52	瀬戸碗	寸法　口径12.4cm　底径5.0cm　器高4.75cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 胎土　淡灰黄色　砂粒含む　気孔あり　釉薬　淡灰緑色失透　漬掛け　焼成　良好　備考　二次焼成を受ける
	53	瀬戸折縁皿	寸法　口径（32.0cm）　成形　ロクロ 胎土　黄灰色　砂粒　白色粒　長石粒含む　釉薬　灰緑色透明　ハケ塗り後漬掛け　焼成　良好
	54	瀬戸卸皿	寸法　口径7.5cm　底径6.0cm　器高(4.9cm) 胎土　黄灰色　白色粒含む　気孔あり　釉薬　灰緑色失透　ハケ塗り　焼成　良好
	55	瀬戸瓶子	寸法　口径4.4cm　成形　ロクロ 胎土　黄灰色　長石含む　気孔あり　釉薬　灰緑色　剥落　焼成　良好
	56	瀬戸瓶子	寸法　最大径17.4cm　成形　ロクロ　文様　外面体部に押印の菊花文 胎土　黄灰色　小石含む　気孔あり　釉薬　黒褐色半透明　漬掛け
	57	瀬戸香炉	寸法　底径6.0cm　成形　ロクロ　文様　線刻の蓮弁文 胎土　黄灰色　気孔あり　釉薬　緑褐色透明　漬掛け　焼成　良好
	58	瀬戸酒会壺蓋	寸法　口径（20.0cm）　成形　ロクロ　文様　刻花文 胎土　黄灰色　気孔あり　釉薬　暗緑色透明　漬掛け　焼成　良好
	59	仏華瓶の飾り部分	寸法　不明　成形　花弁貼り合わせの蓮華座 胎土　淡灰橙色　砂粒含む　釉薬　暗緑褐色失透　漬掛け　焼成　良好
	60	瀬戸小壺蓋	寸法　径4.2cm　底径2.0cm　器高0.8cm　成形　ロクロ　底部回転糸切り 胎土　黄灰色　釉薬　飴釉　失透　漬掛け　焼成　良好
	61	竜泉窯青磁碗	寸法　不明　成形　ロクロ　文様　蓮弁 素地　暗灰色　釉薬　青緑色透明　焼成　良好
	62	竜泉窯青磁小鉢	寸法　底径7.0cm　成形　ロクロ　文様　内底部　魚文　体部外面　蓮弁文 素地　灰白色　釉薬　灰緑色透明　内外面　高台内施釉　畳付露胎　焼成　良好
	63	白磁碗	寸法　不明　成形　ロクロ 素地　黄灰色　釉薬　黄白色半透明　焼成　良好
	64	土鍋鍔付き	寸法　不明　成形　輪積 胎土　肌色　砂粒　赤色小粒含む　色調　肌色　焼成　普通　備考　ス付着
	65	土錘	寸法　長さ4.9cm　最大径4.9cm　内径0.6cm　成形　手づくね 胎土　砂粒　針状物質　小石含む　色調　暗褐色　焼成　良好
	66	砥石	寸法　残存長（5.3cm）　幅4.6cm　厚さ0.75cm　産地　天草　備考　中砥　2面が砥面
	67	砥石	寸法　残存長（8.7cm）　幅4.0cm　厚さ1.0cm　産地　天草　備考　中砥　2面が砥面
	68	鉄製品　釘	寸法　残存長（6.6cm）　幅0.5cm　厚さ0.75cm
	69	鉄製品　釘	寸法　残存長（7.0cm）　幅0.5cm　厚さ0.2cm
	70	銭	天聖元宝　北宋　初鋳　1028年　篆書
	71	銭	治平通宝　北宋　初鋳　1064年　隷書
	72	銭	元符通宝　北宋　初鋳　1098年　行書
	73	銭	判読不能

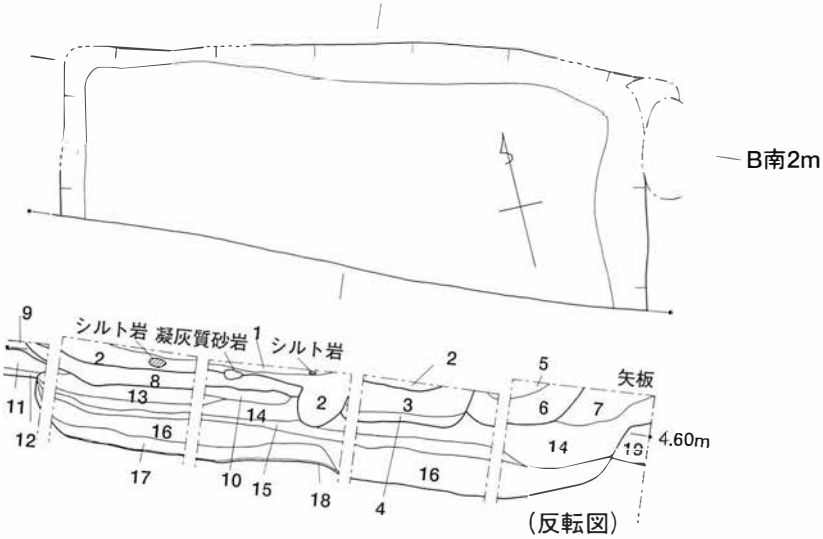
表6　竪穴建物6出土遺物観察表（3）



竪穴建物9

位　置　2−B
軸方位　N−22°−E
平面形　長方形
規　模　4.8m×(2.6)m
深　さ　55cm以上
面　積　(12.48)㎡

1. 暗褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土　1のような貝砂の混入はない
3. 灰褐色砂質土　貝砂を含む、遺構覆土
4. 灰褐色砂質土　3に比べしまりがある、貝砂は含まない　} 土壙覆土
5. 灰褐色砂質土
6. 褐色砂
7. 暗褐色砂質土　均質な粘土と貝砂を含む土、他の混入物なし
8. 暗褐色砂　粘土ブロックを含む、上層掘込み
9. 灰褐色貝砂　上層掘込み
10. 灰褐色砂　上層掘込み
11. 黄灰褐色砂質土　土丹粒を多量に含む、上層掘込み
12. 暗褐色砂　土丹塊を含む　} 上層掘込み
13. 暗褐色砂
14. 灰褐色砂　粘土ブロックを含む　} 竪穴9
15. 黄灰褐色砂質土　土丹粒を多量に含む



竪穴建物11

位　置　2.3−B
軸方位　N−106.5°−E
平面形　隅丸方形
規　模　9.4m×(3.8)m
深　さ　75cm
面　積　(35.72)㎡

1. 暗褐色粘質土　粘性は弱い、シルト岩粒を多量に含む
2. 暗褐色砂質土　貝砂多量に含む
3. 暗褐色粘質土　粘性は弱い　}
4. 暗褐色粘質土　粘性は弱い　} 土壙覆土
5. 暗褐色砂質土　貝砂多量に含む　}
6. 暗褐色粘質土　粘性は弱い　} 土壙20
7. 暗褐色砂質土　貝砂多量に含む
8. 暗褐色粘質土　粘性は弱い、炭化物、凝灰質砂岩多量、遺物多量に含む。土壙6,7
9. 暗褐色砂質土
10. 暗褐色砂質土　粘土ブロックを少量含む
11. 褐色砂　混入物のない砂
12. 暗褐色砂質土　均質な粘土と貝砂を含む土、他の混入物なし
13. 暗黄灰色砂　固くしまった砂の層、粘土ブロックを少量含む　}
14. 暗黄灰色砂　13とほぼ同じだがやや含まれるものが少ない
15. 黄褐色砂　きめの細かい粘土と砂が混入　} 竪穴11
16. 暗灰褐色砂質土
17. 暗灰色粘質土と暗黄褐色砂の混合　ややしまりがある　}
18. 暗灰色粘土　竪穴の床面か
19. 灰褐色砂質土　貝砂多量に含む

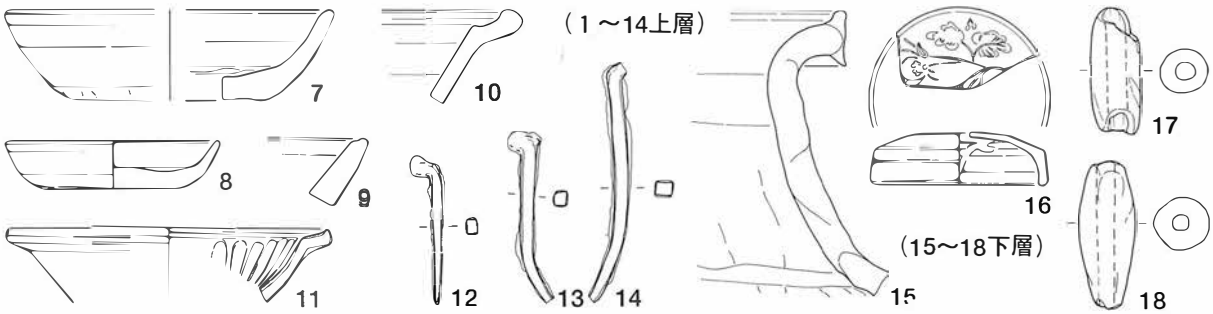


図13　竪穴建物9・11

竪穴建物9	1	土師器	寸法　口径14.0cm　底径7.8cm　器高3.2cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	2	土師器 灯明皿	寸法　口径8.6cm　底径6.0cm　器高1.6cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり　油煤付着
	3	瀬戸 卸皿	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　黄白色　微砂粒含む　気孔あり　釉薬　黄白色透明　ハケ塗り　焼成　良好
	4	瀬戸 折縁皿	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　灰白色　気孔有り　釉薬　淡灰緑色失透　漬掛け　焼成　良好　備考　二次焼成を受ける
	5	竜泉窯 青磁碗	寸法　不明　成形　ロクロ　文様　外面　櫛描き蓮弁文　内面　櫛描き文　画花文 素地　暗灰色　釉薬　青緑色半透明　焼成　良好
	6	水晶玉	寸法　直径2.25cm　穿孔部径　横1.5mm　縦2.0mm　完形

表7　竪穴建物6出土遺物観察表

竪穴建物11上層	7	土師器	寸法　口径13.2cm　底径7.8cm　器高3.6cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	8	土師器	寸法　口径9.2cm　底径5.5cm　器高1.9cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	9	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　茶色　色調　茶褐色　焼成　良好
	10	瀬戸 折縁皿	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　灰色　釉薬　灰緑色　焼成　良好
	11	竜泉窯 青磁鉢	寸法　口径13.0cm　成形　ロクロ　文様　内面蓮弁文 素地　灰白色　微砂粒含む　釉薬　黄緑色不透明　焼成　良好
	12	鉄製品　釘	寸法　長さ6.0cm　幅0.4cm　厚さ0.55cm
	13	鉄製品　釘	寸法　残存長（7.9cm）　幅0.55cm　厚さ0.6cm
	14	鉄製品　釘	寸法　残存長（9.6cm）　幅0.65cm　厚さ0.55cm
竪穴建物11下層	15	常滑 甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　茶褐色　小石　白色粒含む　色調　黒褐色　焼成　良好
	16	青白磁 合子蓋	寸法　口径7.2cm　器高2.05cm　成形　ロクロ　文様　型押し花弁文 素地　灰白色　一部淡橙色　釉薬　淡黄緑色透明　焼成　良好
	17	土錘	寸法　長さ5.0cm　最大径1.9cm　内径0.7cm　成形　手づくね 胎土　白色粒含む　色調　暗褐色　焼成　良好
	18	土錘	寸法　長さ5.9cm　最大径2.2cm　内径0.6cm　成形　手づくね 胎土　砂粒含む　色調　暗褐色　焼成　良好

表8　竪穴建物11出土遺物観察表

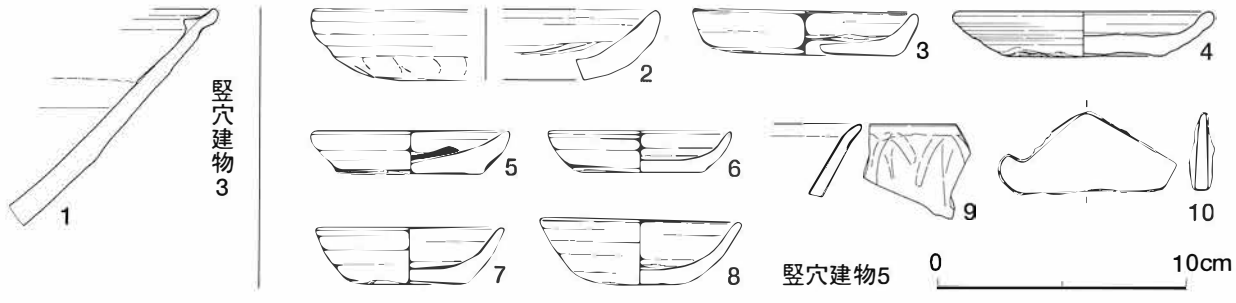


図14　竪穴建物出土遺物

竪3	1	瀬戸 太平鉢	寸法　不明　成形　ロクロ　外面下位回転ヘラ削り　胎土　黄白色　微砂粒含む　釉薬　鉄釉半 透明　焼成　良好

表９　竪穴建物３出土遺物観察表

竪穴建物5	2	土師器	寸法　口径（14.0cm）　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好
	3	土師器	寸法　口径9.0cm　底径7.2cm　器高1.75cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	4	土師器	寸法　口径10.4cm　底径6.4cm　器高1.75cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	5	土師器	寸法　口径8.0cm　底径5.8cm　器高1.75cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好
	6	土師器	寸法　口径7.4cm　底径5.2cm　器高1.65cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	7	土師器	寸法　口径7.6cm　底径4.7cm　器高2.25cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒　金雲母含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	8	土師器	寸法　口径8.1cm　底径4.1cm　器高2.1cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　色調　灰橙色　焼成　良好
	9	竜泉窯 青磁碗	寸法　不明　成形　ロクロ　文様　蓮弁文 素地　灰色　釉薬　青緑色不透明　焼成　良好
	10	鉄製品火打金	寸法　長さ3.0cm　厚さ0.45cm

表10　竪穴建物５出土遺物観察表

土壙13（図17）

調査区東寄りの３－Ａ・Ｂで検出された楕円形土壙。大きさは、長さ3.38ｍ、幅1.93ｍで、深さは上部を削られているが、現状で22cm。

出土遺物として、土師器小皿１点を図示する。

土壙18（図17）

調査区東北角近くで検出された不整形土壙。規模は現状で2.80ｍ×2.38ｍ、深さ30cm。

出土遺物には、土師器のほか常滑壺類がある。年代的には、Ｔ種土師器を除いて鎌倉時代後期とみてよいだろう。

土壙出土遺物（図18）

土壙２・４・５・８・11・12・14・17・20出土遺物をまとめて図示する。

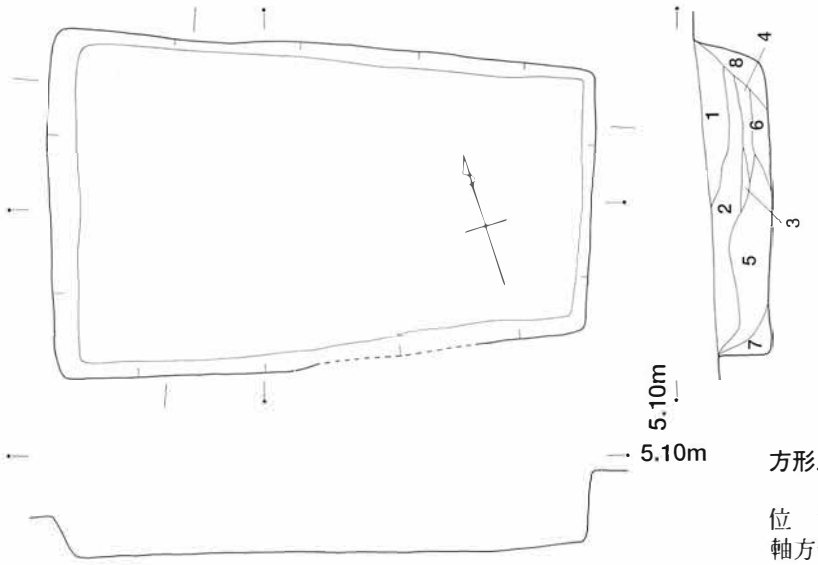
土師器・土製品・常滑・瀬戸・青磁・白磁・などがあり、年代的には13世紀前半のもの（土師器皿Ｔ種）から14世紀半ばの瀬戸（図18－11・17）まで含まれているが、主体は13世紀後半～14世紀初頭、つまり鎌倉時代後期にある。

６．柱穴様小落ち込み

柱穴らしい小さな穴もいくつか検出したが、掘立柱建物を形成するような秩序立った並びは見出せなかった。ただ、中央部に同規模の穴がカギ形に配置されたものがあったので、図６の図上で線を結び、配列を示しておいた（調査区中央部）。

柱穴出土遺物（図19）

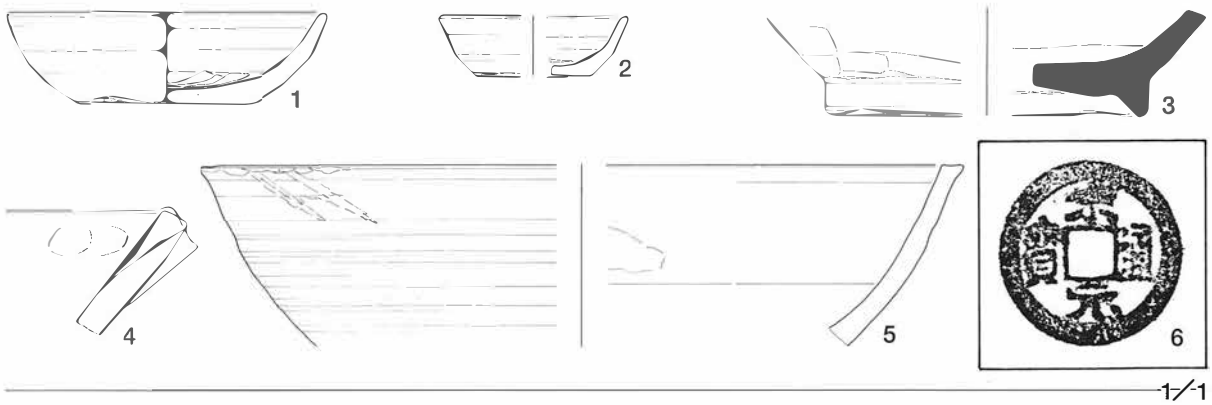
いくつかの小穴から、図示しうる遺物が出土している。５は滑石の温石だが、鍋を転用したような様子はないところから、滑石が必ずしも製品化されたもののみでなく、おそらく板状、あるいは切り出さ

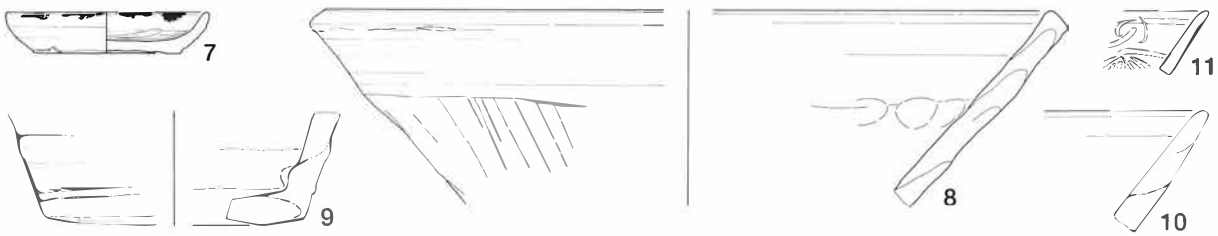


方形土壙1

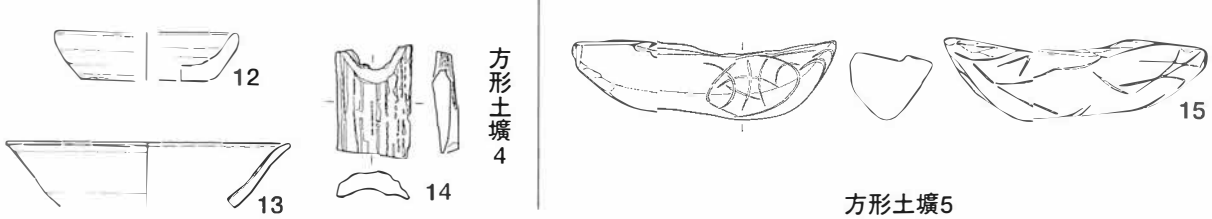
位　置　2.3－B
軸方位　N－107°－E
平面形　東部が狭く西部が広がった台形
断面形状　底部がやや狭い台形
規　模　1.4m×2.2m
深　さ　33cm
面　積　2.7㎡

0　1m（遺構）
0　10cm（遺物）





方形土壙2



方形土壙5

図15　方形土壙・同出土遺物

方形土壙1	1	土師器	寸法　口径12.8cm　底径7.0cm　器高3.6cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　貝片　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	2	土師器	寸法　口径（7.6cm）　底径(4.6cm)　器高2.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	3	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　底径（13.0cm）　成形　輪積後ロクロ　外面下位ヘラ削り　高台貼り付け 胎土　砂粒　長石　白色粒含む　色調　灰色　焼成　普通
	4	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　淡褐色　白色粒　長石　石英含む　色調　赤褐色　焼成　普通　備考　注口一部残存
	5	瀬戸 洗	寸法　口径（30.6cm）　成形　ロクロ　胎土　淡灰黄色 釉薬　外面飴釉　淡褐色　内面灰釉　淡灰緑色　ハケ塗り　焼成　良好
	6	銭	宋通元宝　北宋　初鋳　960年　隷書

表11　方形土壙1出土遺物観察表

方形土壙2	7	土師器 灯明皿	寸法　口径8.2cm　底径5.9cm　器高1.7cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　針状物質　砂粒　貝片含む　色調　淡灰褐色　焼成　良好　備考　口縁部油煤付着　板状圧痕あり
	8	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　口径（30.4cm）　成形　外面中位ヘラナデ 胎土　砂粒　長石含む　キメ細かい　色調　淡褐色　焼成　固く焼き締まる
	9	常滑 壷	寸法　底径（10.4cm）　成形　輪積　外面に褐釉を施す　内面は自然釉 胎土　微砂粒含む　キメ細かい　色調　茶褐色　焼成　良好
	10	渥美 こね鉢	寸法　不明　成形　輪積 胎土　暗灰色　微砂粒　長石含む　色調　暗灰色　口縁部自然釉　焼成　良好　備考　注口一部残存
	11	竜泉窯 青磁碗	寸法　不明　成形　ロクロ　文様　体部内面にヘラ描き文 素地　灰色　黒色微砂粒含む　釉薬　黄緑色半透明　焼成　良好

表12　方形土壙2出土遺物観察表

方形土壙4	12	土師器	寸法　口径7.4cm　底径5.4cm　器高1.7cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　小石　赤色小粒　長石含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	13	白磁 口兀皿	寸法　口径11.4cm　成形　ロクロ 素地　乳白色　黒色粒　釉薬　灰白色　白濁　焼成　良好
	14	骨製品	寸法　長さ4.5cm　幅3.0cm　厚さ0.8cm　鹿角の加工品

表13　方形土壙4出土遺物観察表

方5	15	石製品	寸法　長さ10.5cm　幅（2.5cm）　厚さ（3.3cm）　石材　砂岩　備考　線刻文様あり

表14　方形土壙5出土遺物観察表

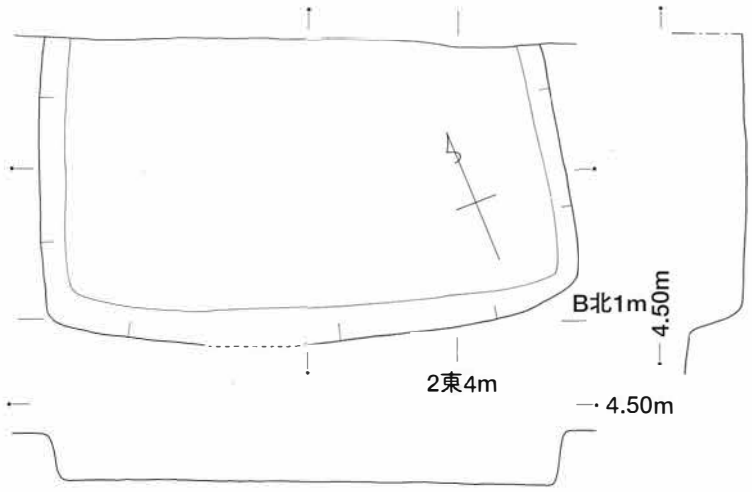
れたままの状態で搬入された例もあることを示している。

6は掛け金の受け部、12は不明鉄製品である。10・11の土錘はひとつの落ち込みから一緒に出たもので、このような例はときにあるようだ。漁具埋納儀礼があるとすれば、これはその例かもしれない。

13・14・15などは13世紀前半までのもので、材木座一帯の開発が、かなり早い時期からあったことがわかる。

7．包含層その他からの出土遺物

遺構に帰属しない出土遺物や、表土・攪乱壙などからの出土遺物を提示する。

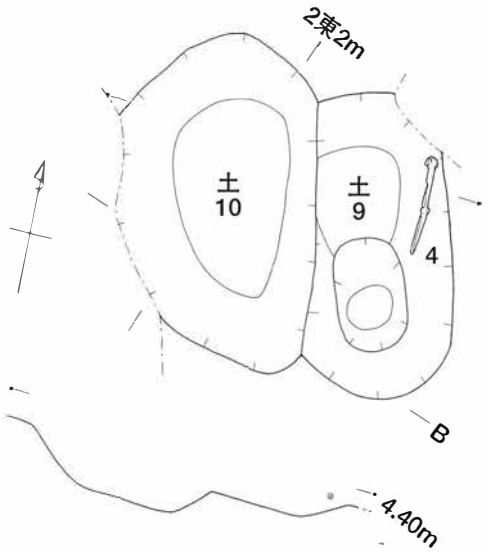


方形土壙8

位　置　2－A
軸方位　N－23°－E
平面形　北部が狭く南部が広い台形か
規　模　2.13m×(1.23)m
深　さ　23cm
断面形状　逆台形

方形土壙8

0　(遺構)　1m
0　(遺物)　10cm



土壙9

位　置　2－A
軸方位　N－19°－W
平面形　楕円
規　模　1.23m×(60cm)
深　さ　20cm
断面形状　皿形

土壙10

位　置　2－A・B
軸方位　N－18°－W
平面形　楕円
規　模　1.35m×(82cm)
深　さ　22cm
断面形状　皿形

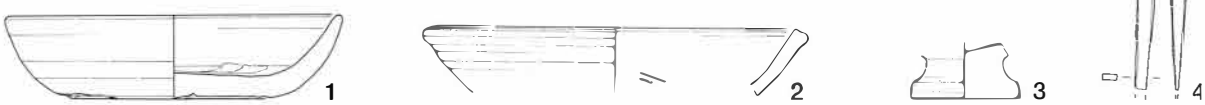


図16　方形土壙8・土壙9・10

土壙9・10	1	土師器	寸法　口径13.6cm　底径8.4cm　器高3.3cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	2	瀬戸 卸皿	寸法　口径15.4cm　成形　ロクロ 胎土　黄灰色　微砂粒含む　釉薬　全面剥離　二次焼成を受けたか？
	3	瀬戸 仏華瓶	寸法　底径4.4cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 胎土　黄灰色　微砂粒含む　釉薬　二次焼成により剥離　焼成　良好
	4	鉄製品	寸法　残存長（37.1cm）幅0.7cm　厚さ0.75cm

表15　土壙9・10出土遺物観察表

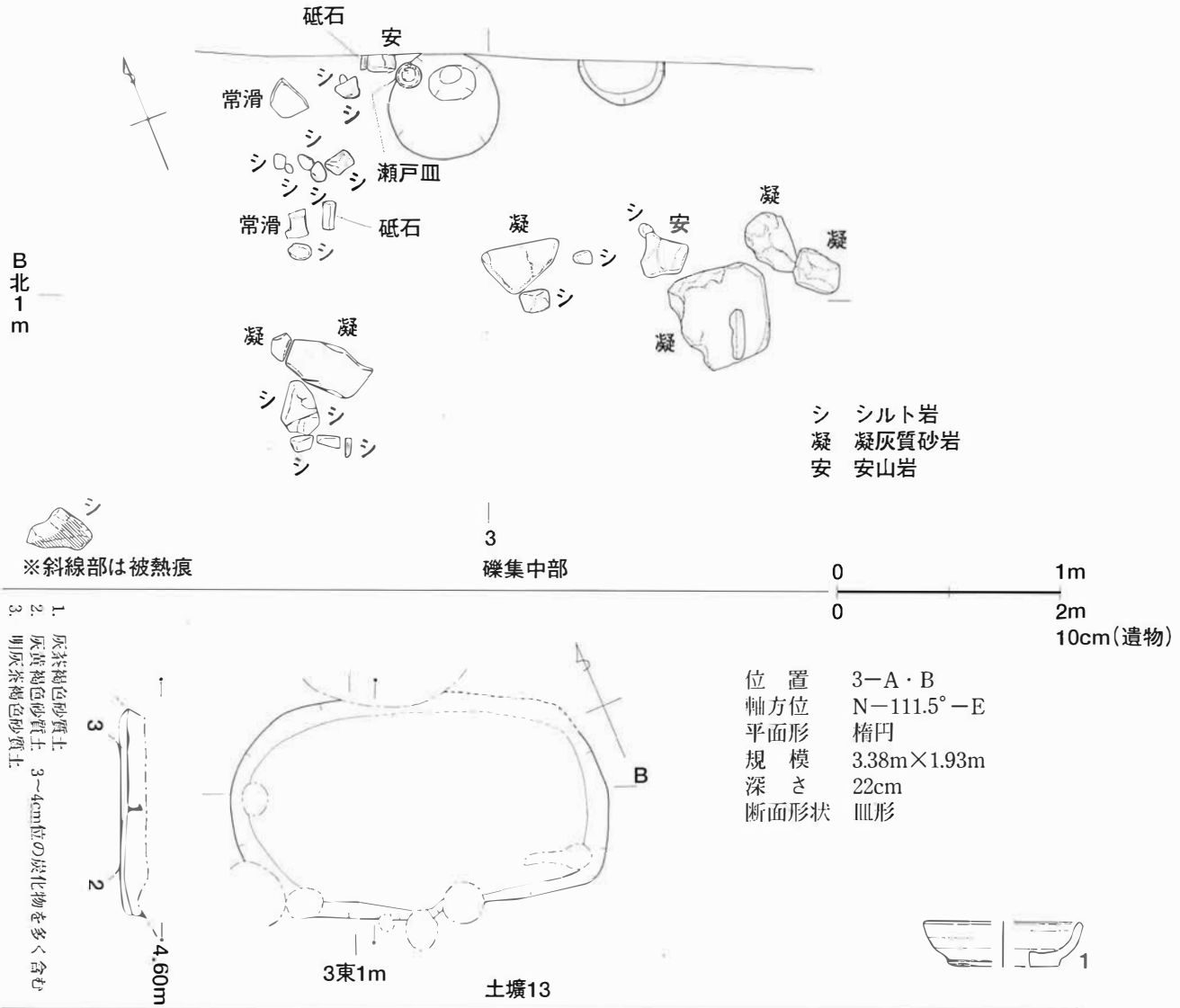

砥石
安
常滑
シ
瀬戸皿
凝
B北1m
シ　シルト岩
凝　凝灰質砂岩
安　安山岩
※斜線部は被熱痕
3
礫集中部
0
1m
2m
10cm(遺物)
1. 灰茶褐色砂質土
2. 灰黄褐色砂質土
3. 明灰茶褐色砂質土
3～4cm位の炭化物を多く含む
4.60m
3東1m
B
土壙13
位　置　3－A・B
軸方位　N－111.5°－E
平面形　楕円
規　模　3.38m×1.93m
深　さ　22cm
断面形状　皿形
1
5.00m
土壙18
位　置　3－A
軸方位　N－20°－E
規　模　(2.80)m×(2.38)m
深　さ　30cm
断面形状　逆台形
常滑
3東3m
0
10cm
2
3
4
5

図17　礫集中部・土壙

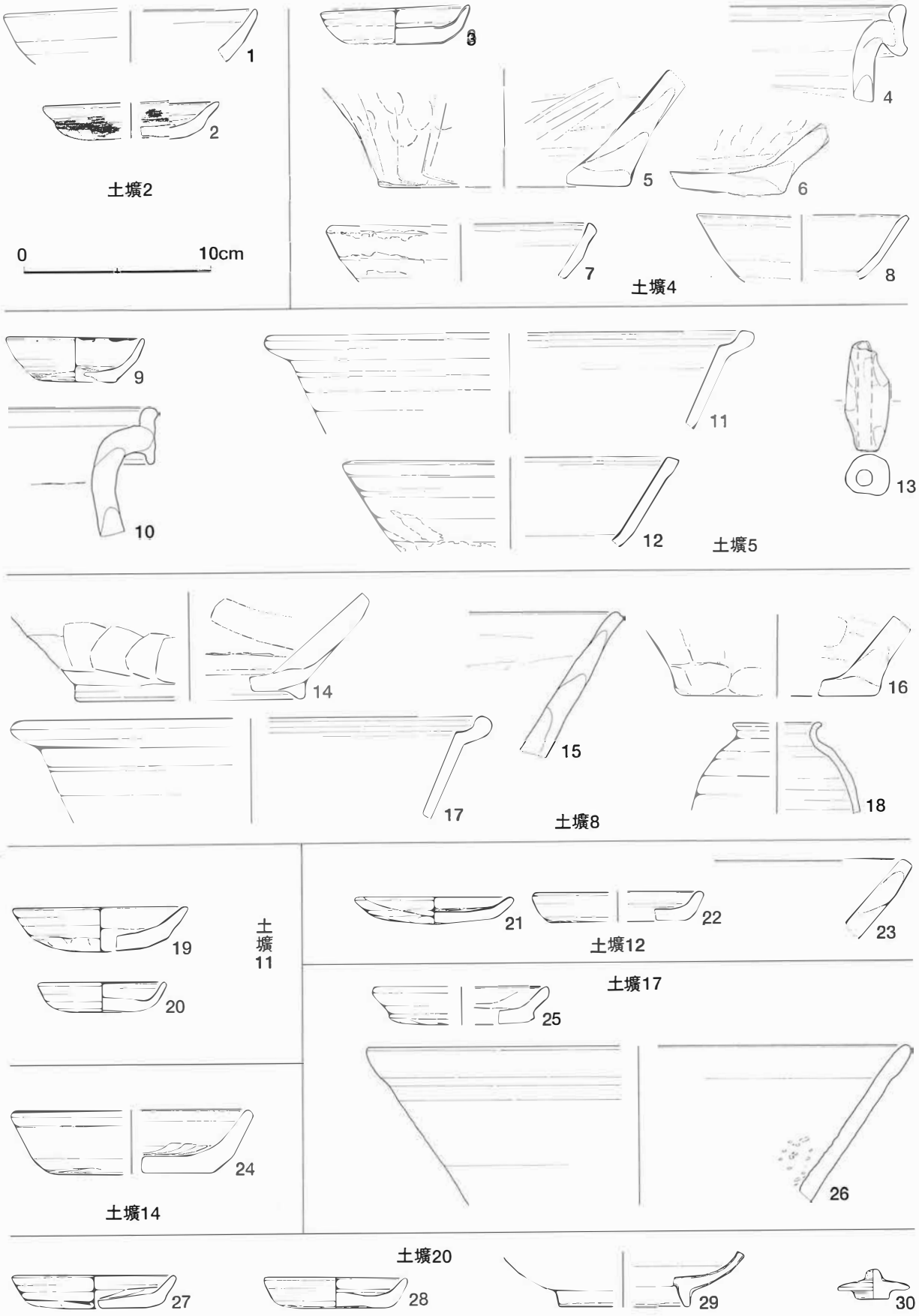

1
2
土壙2
0
10cm
3
4
5
6
7
8
土壙4
9
10
11
12
13
土壙5
14
15
16
17
18
土壙8
土壙11
19
20
21
22
23
土壙12
土壙17
24
土壙14
25
26
土壙20
27
28
29
30

図18　土壙出土遺物

土壙2	1	土師器	寸法　口径13.6cm　成形　ロクロ 胎土　砂粒　針状物質　小石含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	2	土師器 灯明皿	寸法　口径9.4cm　底径5.2cm　器高1.9cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　針状物質　雲母含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　油煤付着

表16　土壙2出土遺物観察表

土壙4	3	土師器	寸法　口径8.0cm　底径5.1cm　器高1.9cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　雲母　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	4	常滑 甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　灰白色　砂粒　白色粒含む　色調　明褐色　焼成　良好
	5	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　底径13.2cm　成形　輪積　外面下位よりタテ方向のヘラナデ 胎土　橙色　白色粒　砂粒　雲母含む　色調　赤茶色　焼成　良好　備考　内外面にスス付着
	6	常滑 甕	寸法　不明　成形　輪積　外面下位よりタテ方向のヘラナデ 胎土　暗褐色　白色粒　長石　小石含む　色調　暗褐色　焼成　良好
	7	瀬戸 卸皿	寸法　口径（14.4cm）　成形　ロクロ 胎土　灰白色　微砂粒含む　釉薬　灰緑色透明　漬掛け　焼成　良好
	8	白磁 口兀碗	寸法　口径（11.4cm）　成形　ロクロ 素地　白色　微砂粒含む　釉薬　青白色　白濁　気泡あり　焼成　良好

表17　土壙4出土遺物観察表

土壙5	9	土師器 灯明皿	寸法　口径7.4cm　底径4.4cm　器高2.3cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり　油煤付着
	10	常滑 甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　暗褐色　白色粒　長石　砂粒含む　色調　暗褐色　焼成　良好
	11	瀬戸 折縁皿	寸法　口径（26.2cm）　成形　ロクロ 胎土　灰白色　微砂粒含む　釉薬　灰緑色透明　漬掛け　焼成　良好
	12	瀬戸 卸皿	寸法　口径（18.0cm）　成形　ロクロ 胎土　黄灰色　微砂粒含む　釉薬　淡灰緑色透明　漬掛け　焼成　良好
	13	土錘	寸法　長さ5.8cm　幅2.3cm　厚さ2.1cm　成形　手づくね 胎土　微砂粒　針状物質含む　色調　淡灰橙色　焼成　良好

表18　土壙5出土遺物観察表

土壙8	14	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　底径（12.4cm）　成形　輪積後ロクロ　外面下位ヘラ削り　高台貼り付け 胎土　灰色　長石　砂粒　小石含む　色調　灰色　焼成　良好
	15	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積後ロクロ 胎土　褐色　白色粒　砂粒　長石　雲母　小石含む　粗い　色調　赤褐色　焼成　良好
	16	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　底径（11.0cm）　成形　輪積　外面下位タテのヘラナデ 胎土　暗褐色　長石　赤色小粒　小石含む　色調　暗灰橙色　焼成　良好
	17	瀬戸 折縁皿	寸法　口径（25.8cm）　成形　ロクロ　胎土　黄灰色　微砂粒含む　気孔あり 釉薬　灰緑色半透明　漬掛け　焼成　良好　備考　二次焼成により内面器表が荒れている
	18	瀬戸 茶入れ	寸法　口径（4.8cm）　成形　ロクロ 胎土　暗灰色　微砂粒含む　釉薬　黒褐色半透明　漬掛け　焼成　良好

表19　土壙8出土遺物観察表

土壙11	19	土師器	寸法　口径9.6cm　底径(4.7cm)　器高(2.4cm)　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　貝片　針状物質　赤色小粒含む　色調　淡灰褐色　焼成　良好
	20	土師器	寸法　口径6.9cm　底径4.6cm　器高1.6cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　針状物質　砂粒含む　色調　淡灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり

表20　土壙11出土遺物観察表

土壙12	21	土師器	寸法 口径8.6cm 底径3.4cm 器高1.5cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 微砂粒含む きめ細かい 色調 灰橙色 焼成 良好
	22	土師器	寸法 口径（9.2cm） 底径(7.3cm) 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 雲母 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
	23	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法 不明 成形 輪積 口縁部ナデ 外面体部上位斜めのヘラナデ 胎土 砂粒 長石多量に含む 粗い 色調 明茶色 焼成 良好

表21 土壙12出土遺物観察表

土14	24	土師器	寸法 口径(13.0cm) 底径(8.7cm) 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表22 土壙14出土遺物観察表

土壙17	25	土師器	寸法 口径（9.5cm） 底径(6.9cm) 器高2.0cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	26	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法 口径（29.2cm） 成形 輪積後ロクロ 胎土 砂粒 長石 貝片 小石含む 色調 灰色 焼成 良好

表23 土壙17出土遺物観察表

土壙20	27	土師器	寸法 口径8.8cm 底径6.0cm 器高1.8cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	28	土師器	寸法 口径7.7cm 底径5.6cm 器高1.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質 シルト岩粒 貝片含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	29	竜泉窯 青磁碗	寸法 底径（7.0cm） 成形 ロクロ 素地 乳白色 釉薬 淡青緑色半透明 焼成 良好
	30	瀬戸 蓋	寸法 径3.8cm 底径1.8cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 底部回転糸切り 胎土 黄白色 微砂粒含む 釉薬 淡緑色透明 焼成 良好

表24 土壙20出土遺物観察表

土13	1	土師器	寸法 口径7.2cm 底径5.0cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 小石含む 色調 灰橙色 焼成 良好

表25 土壙13出土遺物観察表

土壙18	2	土師器	寸法 口径9.8cm 底径4.8cm 器高2.4cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好
	3	土師器	寸法 口径9.0cm 底径6.1cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 微砂粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	4	常滑 壷	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 肩部に沈線２本巡る 円形押印文 胎土 灰白色 砂粒 長石 雲母含む 色調 明茶色 肩部に自然釉
	5	常滑 壷	寸法 口径14.4cm 底径10.0cm 器高(30.1cm) 成形 輪積後ロクロ 胎土 暗灰色 白色粒含む 色調 褐色 口縁部 肩部自然釉 焼成 良好

表26 土壙18出土遺物観察表

上層出土遺物（図20・21）

土師器・瓦質火鉢・内耳土鍋・常滑・瀬戸・青磁・白磁・鉄製品・石製品・木製品・銭がある。

土師器の中には、口縁部を意図的に打ち欠いたもの（４・６）、底部を穿孔されているもの（12）、坩堝代わりに使われたらしく、溶融した鉄分が付着したもの（13・14）がある。

18の内耳土鍋は土師質で、外面は口縁部まで煤が濃く付着している。報告例では「名越・山王堂跡」（同発掘調査団199●）に続き、市内で２例目。14世紀半ば過ぎには相模に出現するのだろうか。

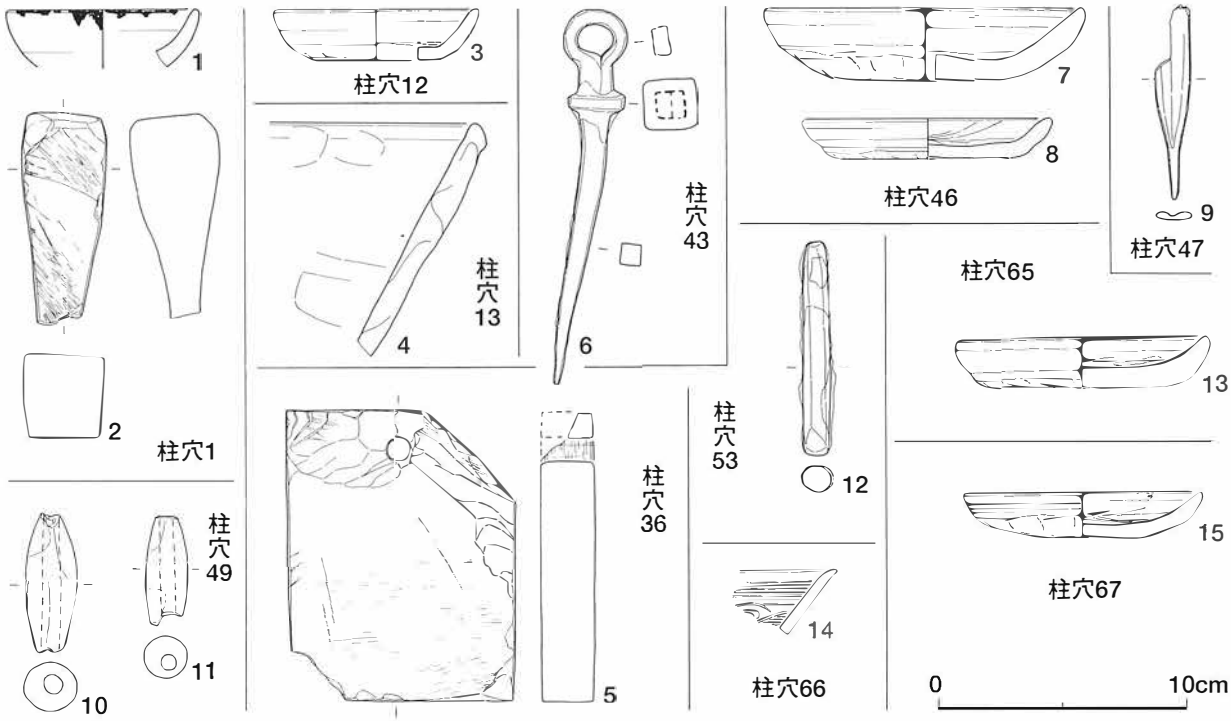


図19　柱穴出土遺物

常滑・瀬戸・備前は13世紀前半のもの（22・27・43）から14世紀代のもの（21・34・41・42・45・46・47・50ほか）、15世紀のもの（52・53）まであるが、もっとも多いのはやはり13世紀後半から14世紀前半の鎌倉後期にあるとみてよい。

62は掛け金、63は鉄鏃とみられる。64には「南無□」の文字が線刻されている。67は針山で、これはあるいは近世以降のものが混入したのかもしれない。

66は古代竪穴住居のカマド支脚か。

下層出土遺物（図22）

調査区東側では規制深度内で中世基盤層まで達した。その直上面の主な遺物を提示する。土師器・常滑こね鉢Ⅱ類・白磁四耳壺・滑石鍋・鉄釘・灰釉陶器がある。

土師器はすべてT種で、中世基盤層の主体が鎌倉時代前期に始まったことを示している。滑石鍋（9）は底部に直径1cmほどの小孔が開けられており、せいろに使われた可能性がある。

採集遺物（図23・24）

表土掘削中、あるいは攪乱壙などの中で採集された遺物のうち、主なものを提示する。土師器・同白色系・つば鍋・（土鍋・炮烙などの）土器蓋・備前すり鉢・常滑こね鉢Ⅱ類・瀬戸美濃すり鉢・志戸呂小皿・青白磁梅瓶・鉄製品・石製品・近代の七輪・縄文の凹石などがあり、年代的には一様でない。

1は産地不明。4はつばの付いた土鍋で、内耳土鍋と同様、相模ではこれも14世紀半ば頃出現するようだ。ただし、こちらのほうが内耳土鍋よりはるかに多く出土する。鉄鍋などとの関係については、いまだ大きな課題が残る。

11の瀬戸美濃すり鉢は破片の縁辺や底面を磨っており、すりこぎ代わりに使われた可能性がある。14～17は近世陶器で、うち14・15は志戸呂産。

19は船釘だろう。20・21はいずれも上野産の中砥。22は茶臼で、下臼の受け皿部。石材は安山岩。

24は箱型の七輪である。四角い外枠の中に、上部の拡がった筒形の内枠（燃焼部本体）を納め、両者を上端で接着して後者を前者の中でぶら下げるかたちになっている。外枠前面下部には火力調整のため

柱穴出土遺物	P1	1	土師器 灯明皿	寸法　口径7.7cm　成形　ロクロ 胎土　砂粒　赤色小粒　針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　油煤付着
		2	砥石	寸法　残存長(8.6cm)　幅3.2cm　厚さ3.4cm　産地　上野　備考　4面砥面中砥　よく使い込まれている
	P12	3	土師器 灯明皿	寸法　口径8.2cm　底径5.1cm　器高2.1cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　油煤付着
	P13	4	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積　体部指頭痕　口縁部横ナデ後ハケ目調整 胎土　胎芯　暗灰褐色　粗砂粒　石英粒含む　気孔あり　色調　鉄色　焼成　良好　備考　降灰
	P36	5	温石	寸法　長さ11.5cm　幅9.1cm　厚さ2.2cm　石材　滑石　備考　転用かどうか不明
	P43	6	鉄製品 掛け金部材	寸法　長さ15.2cm　幅2.2cm　厚さ2.0cm
	P46	7	土師器	寸法　口径13.0cm　底径6.6cm　器高2.95cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　針状物質　白色粒　赤色小粒含む　気孔多い　色調　暗灰橙色　焼成　良好
		8	土師器	寸法　口径10.0cm　底径7.0cm　器高1.6cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　小石　白色粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好
	P47	9	骨製品　笄	寸法　幅1.45cm　厚さ0.25cm　素材　獣骨　部位不明　備考　加工後ていねいに磨かれている
	P49	10	土錘	寸法　長さ5.6cm　胴径2.1cm　内径0.75cm　成形　手づくね 胎土　針状物質含む　色調　暗灰褐色
		11	土錘	寸法　残存長（4.0cm）　胴径1.7cm　内径0.6cm　成形　手づくね 胎土　針状物質含む　色調　暗灰褐色
	P53	12	不明鉄製品	寸法　残存長（8.5cm）　径1.0cm×1.2cm　円柱状
	P65	13	土師器	寸法　口径10.2cm　底径6.2cm　器高2.1cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　小石含む　色調　灰褐色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	P66	14	青白磁 碗	寸法　不明　成形　ロクロ 素地　乳白色　釉薬　淡青白色透明　光沢が無い　焼成　良好
	P67	15	土師器	寸法　口径9.6cm　底径4.2cm　器高1.85cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　針状物質　微砂粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好

表27　柱穴出土遺物観察表

の引き戸式小窓があり、内枠の対応位置にも四角く窓が開けられている。内枠には上部壁面に径２cm前後の空気孔が７つあり、上端には窖器を支える五徳代わりの突起が３つ付いている。内枠外側上部には櫛目の調整が残る。外枠外面はヘラ磨きされ、上面には煤が付着している。胎土は赤褐色で金雲母を含む。内枠上端の内径16.5cmとやや小さめ。明治以降のものだろう。

24は縄文の凹み石。安山岩。

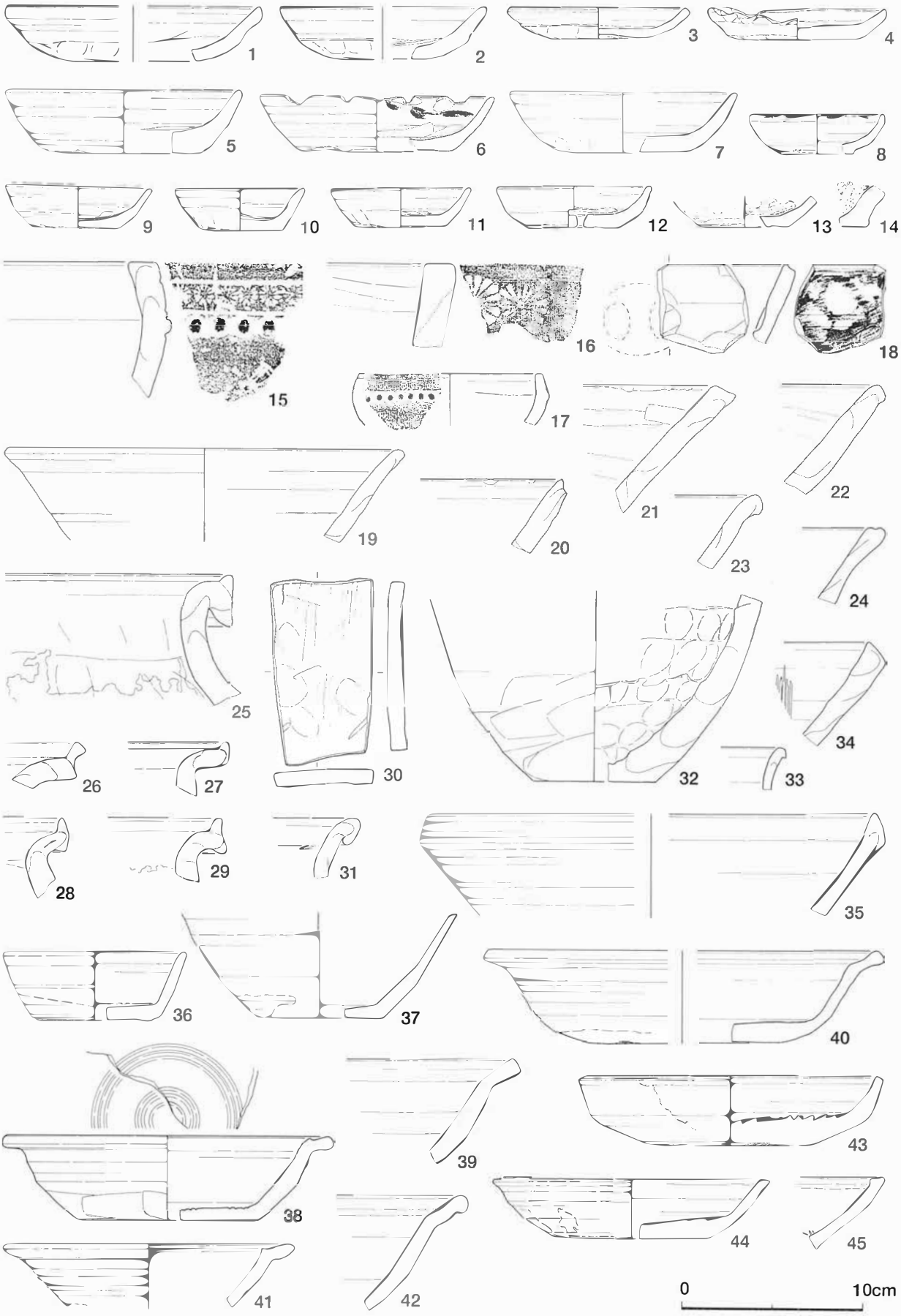
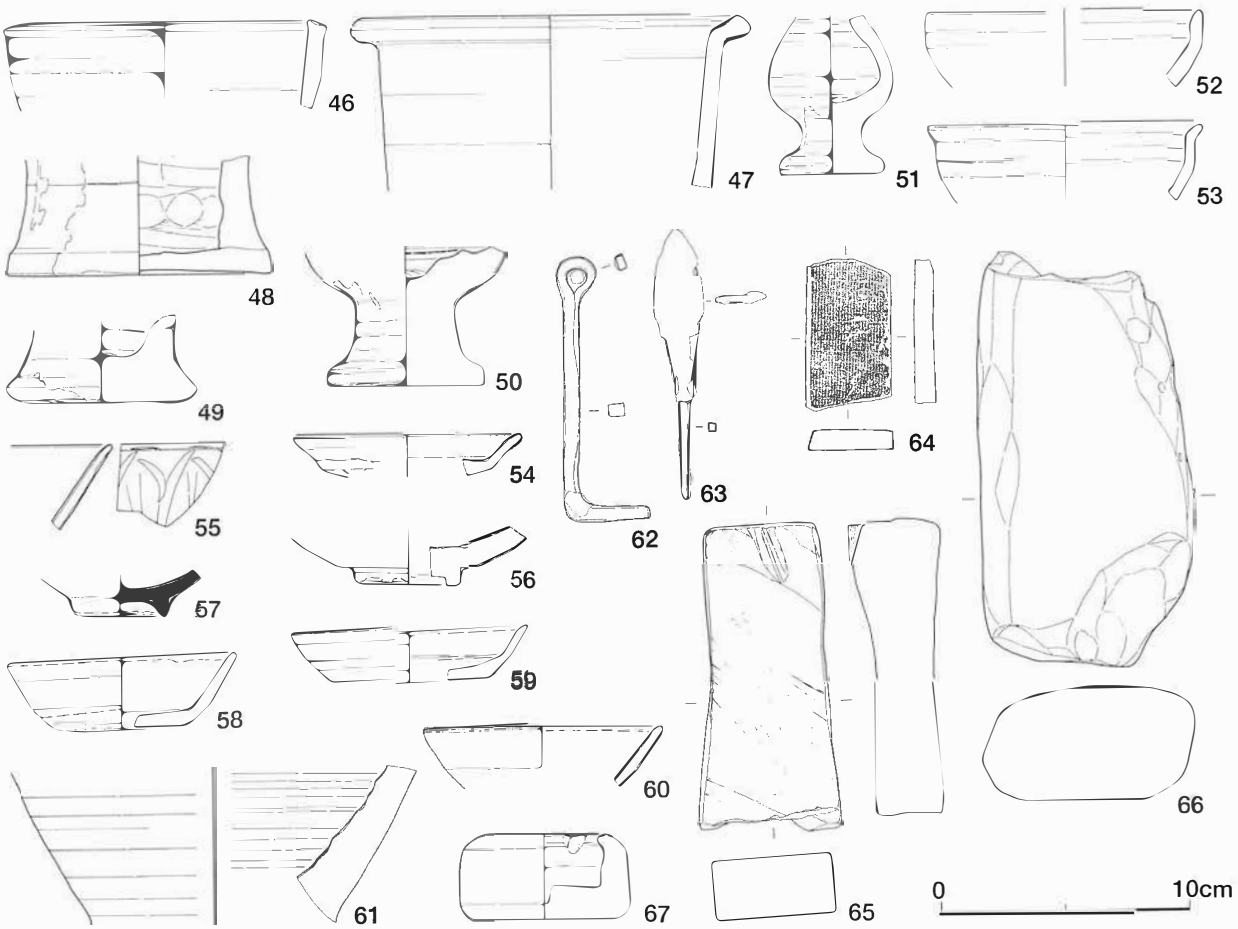

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
10cm

図20　上層出土遺物（1）



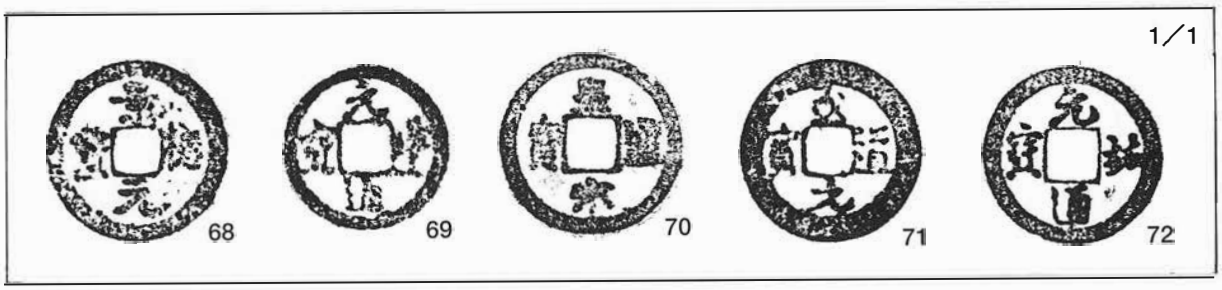


図21　上層出土遺物（２）

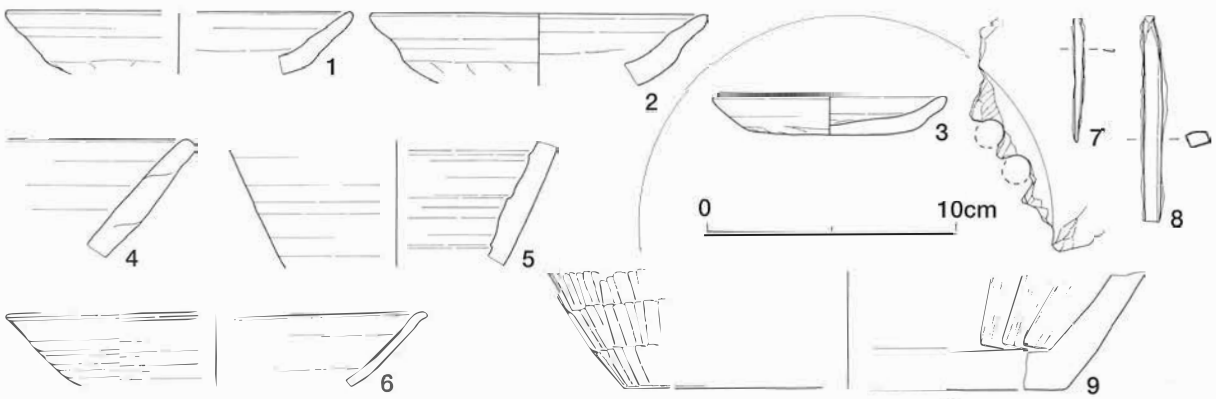


図22　下層出土遺物

上層出土遺物	1	土師器	寸法　口径14.0cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　胎芯　灰黒色　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	2	土師器 （赤彩）	寸法　口径（6.6cm）　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　針状物質　砂粒　シルト岩粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好　備考　内面赤彩
	3	土師器	寸法　口径10.0cm　底径6.0cm　器高1.8cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　白色粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好　二次焼成？
	4	土師器	寸法　口径9.8cm　底径7.6cm　器高1.7cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ　胎土　針状物質 小礫含む　色調　灰褐色　焼成　良好　備考　内面　外面一部に赤褐色彩色残る　口縁部を打ち欠く　完形
	5	土師器	寸法　口径12.8cm　底径8.4cm　器高3.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　暗灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	6	土師器 灯明皿	寸法　口径12.8cm　底径4.4cm　器高3.1cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕　胎土　針状物質 シルト岩粒　小礫　赤色小粒含む　色調　暗橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり　油煤付着　口縁部を打ち欠く
	7	土師器	寸法　口径12.2cm　底径7.0cm　器高3.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　シルト岩粒含む　色調　暗橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	8	土師器 灯明皿	寸法　口径7.4cm　底径4.0cm　器高2.2cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰褐色　焼成　良好　備考　油煤付着
	9	土師器	寸法　口径8.0cm　底径4.8cm　器高2.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	10	土師器	寸法　口径7.1cm　底径4.5cm　器高2.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　針状物質　赤色小粒　雲母　シルト岩粒含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	11	土師器	寸法　口径7.5cm　底径5.0cm　器高2.2cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　針状物質　赤色小粒　シルト岩粒　小礫　金雲母含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　略完形
	12	土師器 穿孔	寸法　口径（5.0cm）　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　小石　針状物質　赤色小粒含む　色調　暗橙色　焼成　良好　備考　外底部に穿孔
	13	土師器	寸法　底径5.0cm　成形　ロクロ 胎土　砂粒　針状物質　小石含む　色調　暗灰褐色　焼成　良好　備考　二次焼成？坩堝？
	14	坩堝	寸法　不明　成形　ロクロ　胎土　砂粒　針状物質含む　色調　黒灰色　焼成　良好
	15	瓦質 火鉢	寸法　不明　成形　輪積　外側面押印文　文様　外面上位に菊花文　連珠文　中位に方形文 胎土　瓦質　砂粒　小礫小石含む　色調　灰橙白色　焼成　良好
	16	瓦質 火鉢	寸法　不明　成形　輪積　内面ヘラ磨き　外側面押印文　文様　菊花文 胎土　瓦質　白色粒　小礫含む　胎芯　赤灰色　色調　赤灰褐色　焼成　良好
	17	瓦質 香炉	寸法　口径10．0cm　成形　ロクロ　外側面押印　文様　雷文　連珠文　菊花文 胎土　瓦質　胎芯　茶灰色　白色粒含む　色調　暗赤褐色　焼成　良好
	18	土師質 内耳土鍋	寸法　不明　成形　輪積後ロクロ　胎土　針状物質　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好 備考　スス付着　内外側面に指頭痕あり　内耳の一部が覗く
	19	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　口径22.0cm　成形　輪積後ロクロ 胎土　小石　砂粒　長石含む　色調　暗灰色　焼成　良好
	20	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　胎芯　黒灰色　長石　小礫　針状物質含む　色調　赤褐色　焼成　良好
	21	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積　ヘラ削り　ヘラナデ 胎土　胎芯　黒灰色　小石　シルト岩粒含む　色調　赤褐色　焼成　良好
	22	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　胎芯　灰黒色　長石　小石含む　色調　褐色　焼成　良好
	23	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積後ロクロ 胎土　小石　長石　黒色粒含む　色調　灰茶色　焼成　良好
	24	常滑 こね鉢Ⅰ類	寸法　不明　成形　輪積後ロクロ 胎土　針状物質　砂粒含む　キメ細かい　色調　灰色　焼成　良好

表28　上層出土遺物観察表（1）

上層出土遺物	25	常滑甕	寸法　不明　成形　輪積　胎土　長石　小礫含む 色調　黒灰色　焼成　良好　備考　内面肩部に無機質カルシウム付着　便槽か？
	26	常滑甕	寸法　不明　成形　輪積　口縁部　回転ナデ 胎土　シルト岩粒　針状物質含む　色調　灰色　焼成　良好
	27	常滑甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　針状物質　長石　シルト岩粒含む　色調　淡灰茶色　焼成　良好
	28	常滑甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　淡褐色　白色粒　長石含む　色調　褐色　焼成　良好
	29	常滑甕	寸法　不明　成形　輪積 胎土　小礫　小石含む　色調　灰色　焼成　良好　備考　口縁に透明の降灰
	30	転用常滑	寸法　長さ10.2cm　幅5.6cm　厚さ1.0cm　胎土　針状物質　長石　石粒含む 色調　暗灰色　焼成　良好　備考　輪積成形の甕の破片　外面にハケナデ　割れ口に擦り痕あり
	31	常滑壷	寸法　口径13.0cm　成形　輪積 胎土　長石　針状物質含む　色調　黒灰色　焼成　良好　備考　二次焼成を受ける
	32	常滑壷	寸法　底径6.6cm　成形　輪積　体部外面ヘラ削り　内面ナデ 胎土　小石　針状物質　黒色粒子含む　色調　黒灰色　焼成　良好
	33	常滑壷	寸法　不明　成形　輪積 胎土　針状物質　小礫含む　色調　淡灰茶色　焼成　良好
	34	備前すり鉢	寸法　不明　成形　輪積 胎土　胎芯　内側赤褐色　外側黒灰色　砂粒　小礫含む　色調　褐色　焼成　良好
	35	魚住こね鉢	寸法　口径（24.4cm）　成形　輪積 胎土　小石粒　砂粒　黒色粒含む　色調　黒灰色　焼成　良好
	36	瀬戸鉢高台付	寸法　口径10.0cm　底径6.2cm　器高3.8cm　成形　ロクロ 胎土　灰茶色　白色粒含む　釉薬　黄緑色透明　体部外面下位から底部まで露胎　漬掛け　焼成　良好
	37	瀬戸鉢？	寸法　底径7.0cm　成形　ロクロ 胎土　黄灰色　長石含む　釉薬　淡緑色透明　体部外面下位から底部まで露胎　漬掛け　焼成　良好
	38	瀬戸折縁皿	寸法　口径18.2cm　底径10.0cm　器高4.6cm　成形　ロクロ　体部外面下位外底部　ヘラ削り　文様　内底部　中央に3本　外周に4本の沈線　釉薬　灰緑色半透明　ハケ塗り　焼成　良好　備考　二次焼成を受ける
	39	瀬戸折縁皿	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　黄灰色　釉薬　緑黄色半透明　ハケ塗り　焼成　良好
	40	瀬戸折縁皿	寸法　口径（22.0cm）　底径(10.4cm)　器高5.2cm　成形　ロクロ 胎土　胎芯　黄灰色　長石　小礫含む　釉薬　黄緑色半透明　ハケ塗り後漬掛け　焼成　良好
	41	瀬戸折縁皿	寸法　口径16.0cm　成形　ロクロ 胎土　淡灰色　釉薬　黄緑色透明　ハケ塗りか？　焼成　良好
	42	瀬戸折縁皿	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　淡灰茶色　釉薬　灰緑色半透明　ハケ塗り　焼成　良好
	43	瀬戸卸皿	寸法　口径16.6cm　底径7.0cm　器高3.7cm　成形　ロクロ 胎土　胎芯　灰色　釉薬　黄緑色透明　焼成　良好　備考　外面　釉薬部分的に剥離　内面スス付着
	44	瀬戸卸皿	寸法　口径15.0cm　底径9.0cm　器高3.4cm　成形　ロクロ 胎土　灰白色　釉薬　黄灰色半透明　ハケ塗り　焼成　良好
	45	瀬戸卸皿	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　灰色　釉薬　黄緑色半透明　内面および外面体部中位まで施釉　焼成　良好
	46	瀬戸鉢	寸法　口径13.0cm　成形　ロクロ 胎土　灰白色　黒色粒子含む　釉薬　淡黄緑色透明　漬掛け　焼成　良好
	47	瀬戸行平鍋	寸法　口径16.0cm　成形　ロクロ 胎土　淡灰茶色　白色粒含む　釉薬　黄緑色透明　焼成　良好
	48	瀬戸瓶子	寸法　底径10.6cm　成形　輪積　外面下位施釉 胎土　灰色　石英含む　緻密　釉薬　緑色透明　漬掛け　焼成　良好

表29　上層出土遺物観察表（2）

上層出土遺物	49	瀬戸 花瓶	寸法　底径7.8cm　成形　ロクロ 胎土　胎芯　淡灰茶色　釉薬　緑色透明　漬掛け　焼成　良好
	50	瀬戸 仏華瓶	寸法　底径6.2cm　成形　ロクロ 胎土　灰白色　白色粒子含む　釉薬　外面体部中位　黒釉か？高台より底部まで露胎　焼成　良好
	51	瀬戸 仏華瓶	寸法　最大径5.2cm　底径4.1cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り痕 胎土　黄白色　砂粒　長石含む　釉薬　淡灰緑色透明　焼成　良好
	52	瀬戸 小鉢	寸法　口径11.0cm　成形　ロクロ 胎土　灰白色　釉薬　鉄釉　漬掛け　焼成　良好
	53	瀬戸 小鉢	寸法　口径11.0cm　成形　ロクロ 胎土　灰白色　釉薬　飴釉　透明　漬掛け　焼成　良好
	54	同安窯系 青磁皿	寸法　口径9.2cm　成形　ロクロ 素地　灰白色　釉薬　淡青緑色透明　外面体部中位より下露胎　備考　露胎部分にノッキング痕残る
	55	竜泉窯 青磁碗	寸法　不明　成形　ロクロ　文様　外面体部に蓮弁文 素地　暗灰色　釉薬　黄緑色半透明　焼成　良好
	56	竜泉窯 青磁碗	寸法　底径4.2cm　成形　ロクロ　文様　内底部に文字 素地　灰白色　白色粒子含む　気泡あり　釉薬　青緑色透明　高台内露胎　焼成　良好
	57	竜泉窯 青磁碗	寸法　底径3.8cm　成形　ロクロ 胎土　灰白色　釉薬　淡黄緑色半透明　高台下位　内外面露胎　焼成　良好
	58	白磁 口兀皿	寸法　口径9.2cm　底径6.0cm　器高2.9cm　成形　ロクロ 素地　乳白色　微砂粒含む　釉薬　乳白色　白濁　外面体部下位より底部露胎　焼成　良好
	59	白磁 口兀皿	寸法　口径7.4cm　底径6.4cm　器高2.0cm　成形　ロクロ 素地　灰白色　釉薬　灰白色　白濁　焼成　良好
	60	白磁 口兀皿	寸法　口径9.6cm　成形　ロクロ 素地　乳白色　釉薬　灰白色　失透　焼成　良好
	61	白磁 瓶子	寸法　不明　成形　輪積　ロクロ 素地　灰白色　砂粒　白色粒子含む　釉薬　淡青緑色透明　焼成　良好
	62	鉄製品掛け金	寸法　長さ10.7cm　幅0.65cm　厚さ0.5cm
	63	鉄製品　鏃	寸法　長さ10.8cm　幅2.1cm　厚さ0.45cm
	64	砥石	寸法　長さ5.8cm　幅3.4cm　厚さ0.85cm　産地　鳴滝　備考　2面が砥面　文字が刻まれている　仕上げ砥
	65	砥石	寸法　長さ12.2cm　幅4.9cm　厚さ3.4cm　産地　天草　備考　4面が砥面中砥
	66	カマド 支脚	寸法　長さ（15.5cm）　幅8.5cm　厚さ（4.5cm）　石材　シルト岩 成形　面をとって楕円柱状に切り出したもの
	67	木製品 針刺し入れ	寸法　口径4.2cm　底径5.8cm　器高3.4cm 成形　ロクロで円柱状に削り　その内側をロクロで削り出したもの　底部にロクロの軸に刺した痕残る
	68	銭	景徳元宝　北宋　初鋳　1004年　隷書
	69	銭	元豊通宝　北宋　初鋳　1078年　行書
	70	銭	皇宋通宝　北宋　初鋳　1039年　隷書
	71	銭	至道元宝　北宋　初鋳　995年　行書
	72	銭	元祐通宝　北宋　初鋳　1086年　行書

表30　上層出土遺物観察表（3）

下層出土遺物	1	土師器	寸法　口径（14.0cm）　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	2	土師器	寸法　口径（13.4cm）　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　胎芯黄灰色　砂粒　針状物質含む　色調　灰褐色　焼成　良好
	3	土師器	寸法　口径9.2cm　底径7.0cm　器高1.6cm　成形　手づくね　成形後口縁部ナデ 胎土　砂粒　針状物質含む　色調　黄褐色　焼成　良好
	4	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　長石含む　色調　暗褐色　焼成　良好
	5	白磁 瓶子	寸法　不明　成形　ロクロ 胎土　灰白色　微砂粒含む　釉薬　淡灰緑色透明　焼成　良好
	6	灰釉陶器 皿	寸法　口径（17.0cm）　成形　ロクロ 胎土　灰色　砂粒含む　釉薬　黄緑色半透明　ハケ塗り　焼成　良好
	7	鉄製品　釘	寸法　残存長(5.15cm)　幅0.45cm　厚さ0.15cm
	8	鉄製品　釘	寸法　残存長（8.2cm）　幅0.8cm　厚さ0.5cm
	9	滑石鍋　転用	寸法　底径（17.8cm）　成形　体部外面ヘラ削り　内面櫛歯状工具による調整　底部に2か所穿孔　セイロか？

表31　下層出土遺物観察表

採集遺物	1	土師器	寸法　口径10.0cm　成形　ロクロ 胎土　砂粒　白色粒　赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	2	土師器	寸法　口径8.4cm　底径5.7cm　器高1.9cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒多量　針状物質　小石　雲母含む　色調　灰橙色　焼成　良好　備考　板状圧痕あり
	3	土師器	寸法　口径7.2cm　底径5.1cm　器高2.4cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　砂粒　赤色小粒　針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	4	土製品 土鍋	寸法　口径（15.6cm）　器高(3.1cm)　成形　手づくね　内面　横位のハケ目 胎土　外面橙褐色　胎芯部暗灰色　微砂粒　針状物質　金雲母含む　焼成　良好
	5	土製品 蓋	寸法　口径27.1cm　器高3.8cm　成形　ロクロ　口縁部横ナデ　外面ヘラ磨き 胎土　灰褐色　胎芯部暗灰色　赤色小粒　小石含む　やや粗い　焼成　良好　備考　使用痕あり
	6	常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法　不明　成形　輪積 胎土　胎芯　暗灰色　針状物質　黒色粒含む　色調　赤褐色　焼成　良好
	7	備前 すり鉢	寸法　不明　成形　輪積 胎土　赤褐色　小石　黒色粒含む　色調　黒褐色　焼成　良好
	8	瀬戸美濃 すり鉢	寸法　底径9.4cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り痕　外面体部横ナデ　内面条線1束11本 胎土　灰橙色　小石若干含む　釉薬　褐釉（鬼板）内外面ハケ塗り　焼成　良好
	9	瀬戸美濃 すり鉢	寸法　底径13.8cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り痕　外面体部横ナデ　内面条線1束15本 胎土　灰褐色　小石若干含む　気孔あり　釉薬（鬼板）内外面ハケ塗り　焼成　良好
	10	瀬戸美濃 すり鉢	寸法　底径18.8cm　成形　ロクロ　外底部糸切り痕　外面体部横ナデ　外底部脇指頭痕あり 胎土　灰褐色　小石多く含む　気孔あり　釉薬（鬼板）内外面ハケ塗り　備考　内底部磨耗が顕著
	11	瀬戸美濃 すり鉢　転用	寸法　底径（14.4cm）　成形　ロクロ　外底部回転糸切り痕　外面体部横ナデ　内面条線1束19本 胎土　肌色　石英粒　黒色小粒含む　釉薬（鬼板）内外面ハケ塗りか？　備考　内面に重ね痕　外底面使用痕
	12	土製品 極小土器	寸法　口径2.45cm　底径2.6cm　器高1.45cm　成形　ロクロ　内底部ナデ　外底部回転糸切り痕 胎土　金雲母　軽石小粒含む　キメ細かい　色調　灰褐色　焼成　良好
	13	瀬戸 花生？	寸法　口径11.5cm　成形　ロクロ 胎土　灰色　キメ細かい　微気孔あり　釉薬　透明度のある緑色　ハケ塗り　焼成　良好
	14	志戸呂 小皿	寸法　口径7.75cm　底径3.3cm　器高1.75cm　成形　ロクロ　外面体部下位ヘラ削り　高台削り出し 胎土　灰褐色　小石含む　気孔少々　やや粗い　釉薬　褐釉　緑味を帯びた濁色　焼成　良好
	15	志戸呂 小皿	寸法　口径7.9cm　成形　ロクロ　外面体部下位ヘラ削り 胎土　肌色　キメ細かい　釉薬　灰釉　二次焼成により白濁　焼成　良好

表32　採集遺物観察表（1）

第四章　まとめ

遺跡の年代

縄文時代から近代までの遺物が出土している。中世では、鎌倉時代前期（13世紀前半以前）の土師器T種（手づくね成形）、竜泉窯櫛描蓮弁文なども含まれているが、国産陶器では、みてきたとおり、瀬戸の大半が古瀬戸前期の終わりから中期前半にかけての様式（藤沢良祐編年）である。また常滑も、13世紀前半のものから始まり、13世紀中葉から14世紀前半に主体をもつ。これはほぼ鎌倉時代後期～南北朝時代前半に相当する。そして、どうやら15世紀半ば以降からは人の往来が衰えるようである。

遺跡の変遷と性格

以上の出土遺物の状況を念頭に、検出された遺構のあり方を参照して、中世におけるこの遺跡の変遷をまとめると、次のようになる。

一、鎌倉時代初期に、この一帯に人の居住が始まる。

二、13世紀前半にはかなりの人の往来が見られるようになる。

三、13世紀後半には非常に賑やかな場所となり、おそらく倉庫のような港湾施設としての竪穴建物の立ち並ぶ場所となる。この繁栄は南北朝前期頃まで続くようだ。

四、次第に衰退はするものの、なお大体15世紀半ば頃まで人の往来は残る。

一については、鎌倉開府に続いて、港湾としての鎌倉湾が機能しはじめ、それにともなってこの一帯にも開発の手が入ったことを示している。貞応二年（1223）に書かれた『海道記』にある、「東南角ノ一道」の賑わいとは、まさにこの辺のことを指しているのであろう。

二の状況は、ここから至近の距離にある和賀江港の築造が貞永元年（1232）に行われたことにともなっているとみたい。

三の時期には鎌倉全体がもっとも繁栄したのであり、竪穴建物の群集することからも、ここが典型的な浜地の様相をもっていたことがわかる。また13世紀半ばから第３四半期にかけて、この付近には浄土宗系寺院が相次ぎ建立されるが、そのことも影響を及ぼしていたことは間違いない。

ところで、和賀江および浜地一帯を管理していたのが極楽寺であったのはいうまでもないが、四に述べた、15世紀半ば以降の遺跡地の衰退は、極楽寺だけでなく鎌倉全体のそれと軌を一にしているとみてよいのだろう。

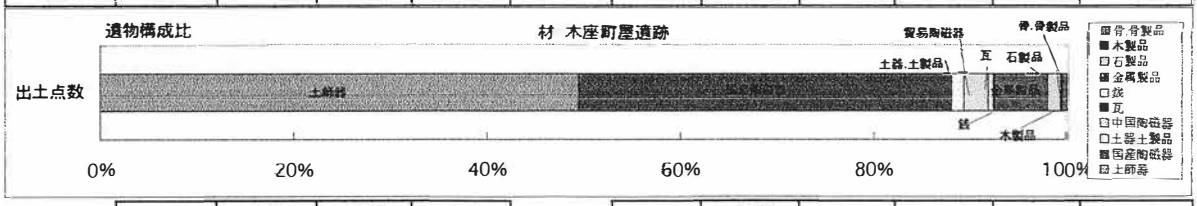
出土遺物について

出土遺物の計数表を表35に示しておく。縄文･古代･近世以降を除き、総数4422点で、そのうち49.48％（2188点）が土師器である。続いて国産陶器38.56％（1705点）、貿易陶磁器2.49％（110点）となっている。この状況は、大倉幕府周辺遺跡や北条小町邸跡など都市中核部において土師器比率が90％を越えることが多いのに比べ、際立って低い数値であるといえる。このことは幕府所在地や北条邸といったいわば「格の高い」場所と、職能民のような中世の下層階級の人々の集住する場所との、土師器使用量の差を如実に示している。すなわち、前者ではしきりに土師器が使われ、後者では少ないということである。この背景について、筆者（馬淵）は最近詳しく論じたのでそちらに譲りたい（「食器にみる中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集　1997近刊予定）。

土師器のうちR種（ロクロ成形）が89.90％（1967点）を占めているのは、鎌倉後期に主体を持つと

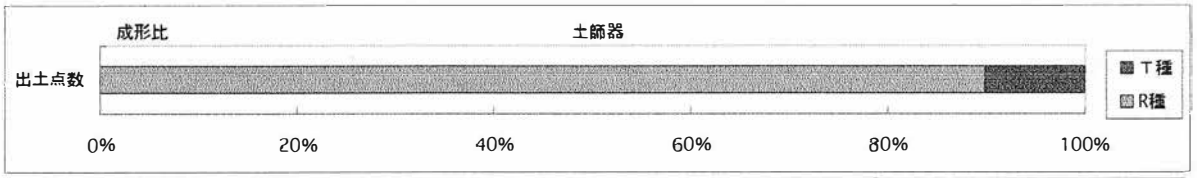
出土遺物構成比　　材木座町屋遺跡

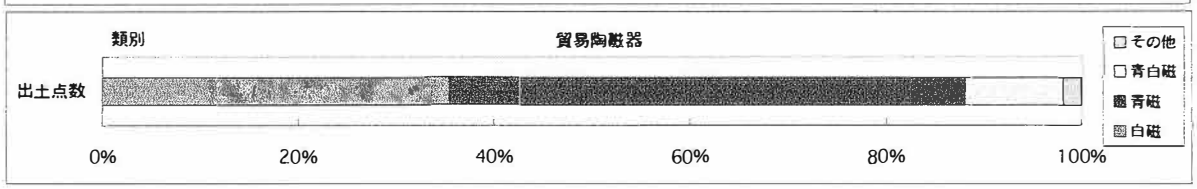
類別	土師器	国産陶磁器	土器土製品	中国陶磁器	瓦	銭	金属製品	石製品	木製品	骨.骨製品	計
出土点数	2188	1705	58	110	24	6	242	61	6	22	4422
百分率	49.48%	38.56%	1.31%	2.49%	0.54%	0.14%	5.47%	1.38%	0.14%	0.50%	100.00%



土師器	成形	R種	T種	合計
	出土点数	1967	221	2188
	百分率	89.90%	10.10%	100.00%

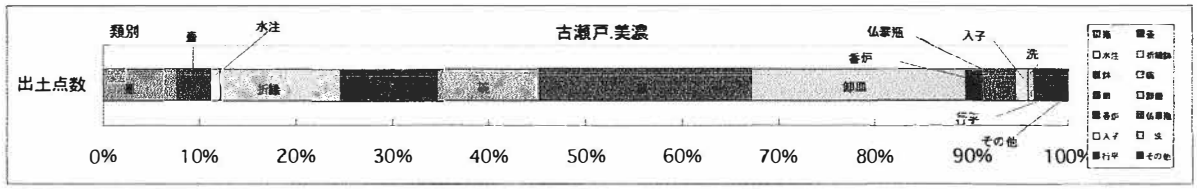
貿易陶磁器	類別	白磁	青磁	青白磁	その他	合計
	出土点数	39	58	11	2	110
	百分率	35.45%	52.73%	10.00%	1.82%	100.00%





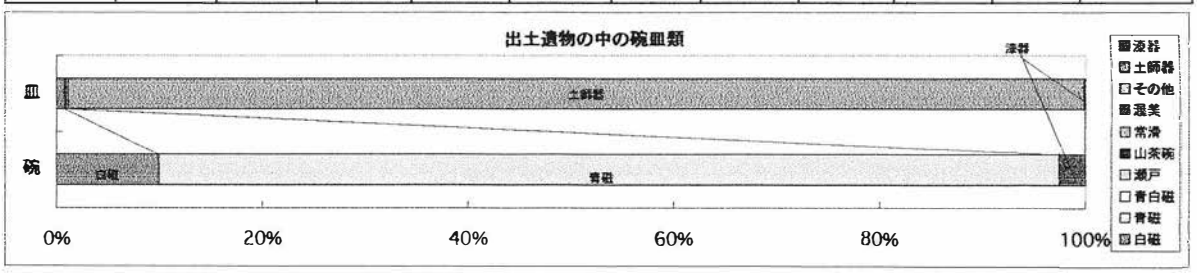
古瀬戸.美濃

類別	瓶	壷	水注	折縁鉢	鉢	碗	皿	揮皿	香炉	仏華瓶	入子	洗	行平	その他	総数
出土点数	24	11	3	39	31	33	68	69	5	11	4	2	7	4	311
百分率	7.72%	3.54%	0.96%	12.54%	9.97%	10.61%	21.86%	22.19%	1.61%	3.54%	1.29%	0.64%	2.25%	1.29%	100.00%



出土遺物の中の碗皿類

類別	土師器	白磁	青磁	青白磁	瀬戸	山茶碗	常滑	渥美	その他	漆器	総数
碗		4	35		19	4	6	2	6	1	77
百分率	0.00%	5.19%	45.45%	0.00%	24.68%	5.19%	7.79%	2.60%	7.79%	1.30%	100.00%
皿	2188	18	3	4	96	1	2	1		2	2215
百分率	98.78%	0.81%	0.14%	0.18%	4.33%	0.05%	0.09%	0.05%	0.00%	0.09%	100.00%



常滑

類別	捏鉢	碗	山皿	甕	壷	小壷	鉢	磨製品	総数
出土点数	203	6	2	1109	11	5	4	4	1344
百分率	15.10%	0.45%	2.30%	82.51%	0.82%	0.37%	0.30%	0.30%	100.00%

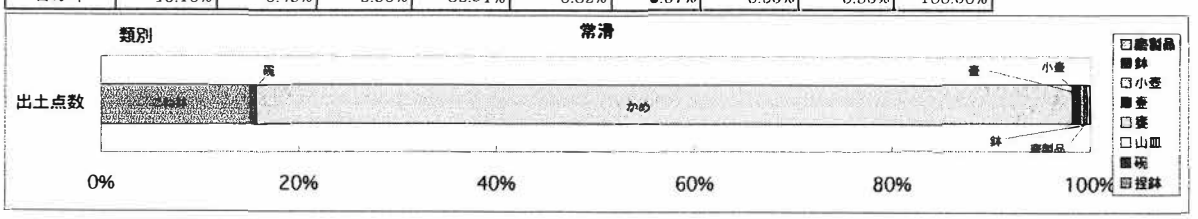


表35　出土遺物組成表

いう、この遺跡の年代的なものに由来するのだろう。T種（手づくね成形）の存在は、鎌倉前期からの人の往来を示す。

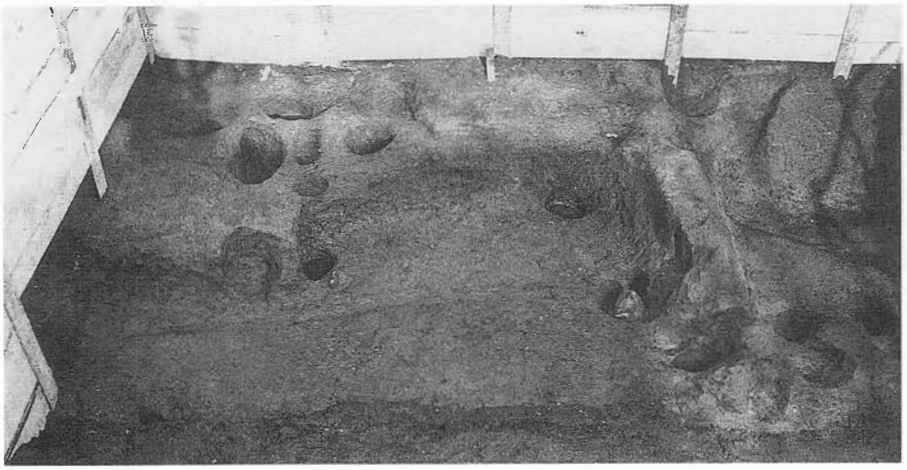
311点出土した瀬戸製品では卸皿が22.19%（69点）でもっとも多く、食器類・折縁皿が続く。これはおそらく、市内の他の地域でも共通のあり方だろう。瓶子が7.72%（24点）となっているが、この容器の価値が実用性にあるのか、所持者の地位表象にあるのかによって、数値の意味が違ってこよう。この点はもう少し資料の蓄積が欲しいところである。

また金属製品が5.47%（242点）と、意外に多いことが注目される。おそらくその多くは鉄釘であるが、掛け金の出土について、簡単に触れておきたい。統計を取ったわけではないが、掛け金の出土は、都市中核域よりも浜地においてのほうが多いような感触がある。これは何らかの建物の戸にともなうものだが、浜に多いという状況がもし確かだとすれば、一帯にほとんど無数に建てられた竪穴建物のそれに使われたものである可能性が高い。掛け金の出土分布を精査することにより、今後竪穴建物と掘立柱建物、あるいは一般的な板囲いの都市住居などとの構造差に言及することができるようになるかもしれない。

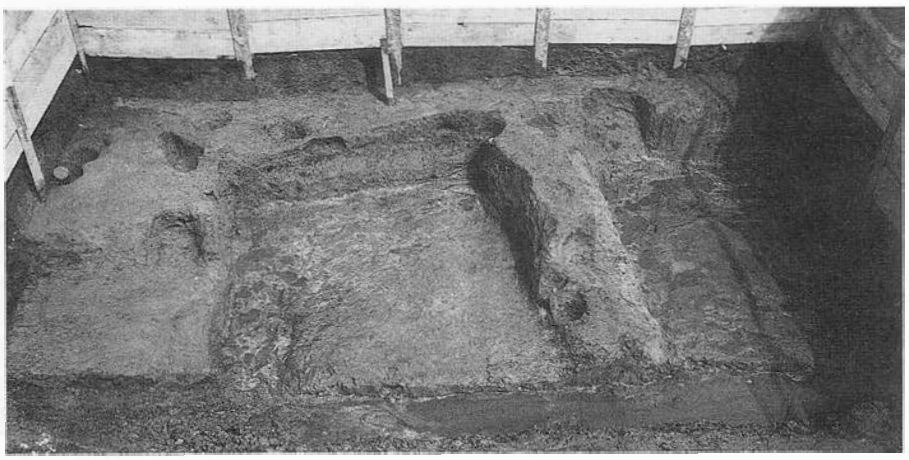
砥石や滑石鍋といったおもに九州から搬入された石製品も多いが、鎌倉時代後期という遺跡の中心年代を考え合わせれば、これらの製品の搬入量の急騰が、この時期の九州地方への得宗勢力の急激な浸透と関連があるとみたほうがいいだろう。これは本地点に限らず、全国的な傾向ではあるが。

水晶製の母指の出土は、一帯の宗教地帯化と無関係ではあるまい。水晶製五輪塔は、鎌倉時代後期の禅律系寺院に多いが、これは当時盛んだった舎利信仰に由来するのだろう。その背景には律の持っていた精密な石材加工技術が必要だが、本地点での母指の出土が、一帯の律宗勢力と関係する可能性はないだろうか。

写　真　図　版



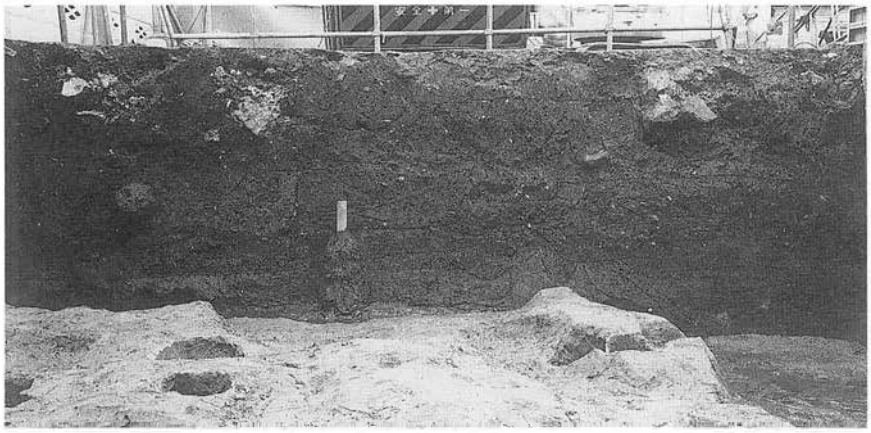
1. 東端部上層遺構面（西から）



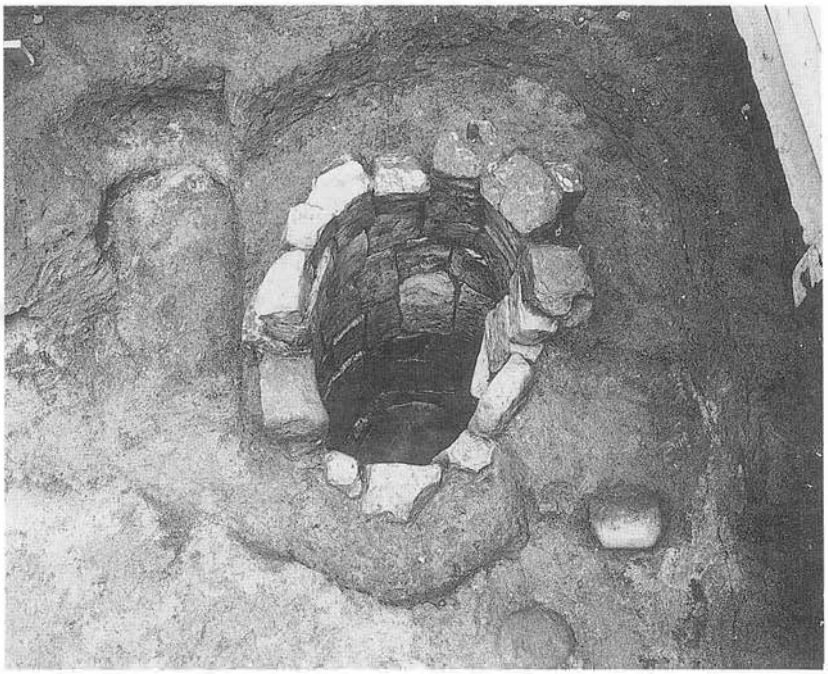
2. 同上　下層遺構面（西から）

3. 下層面全景（西から）

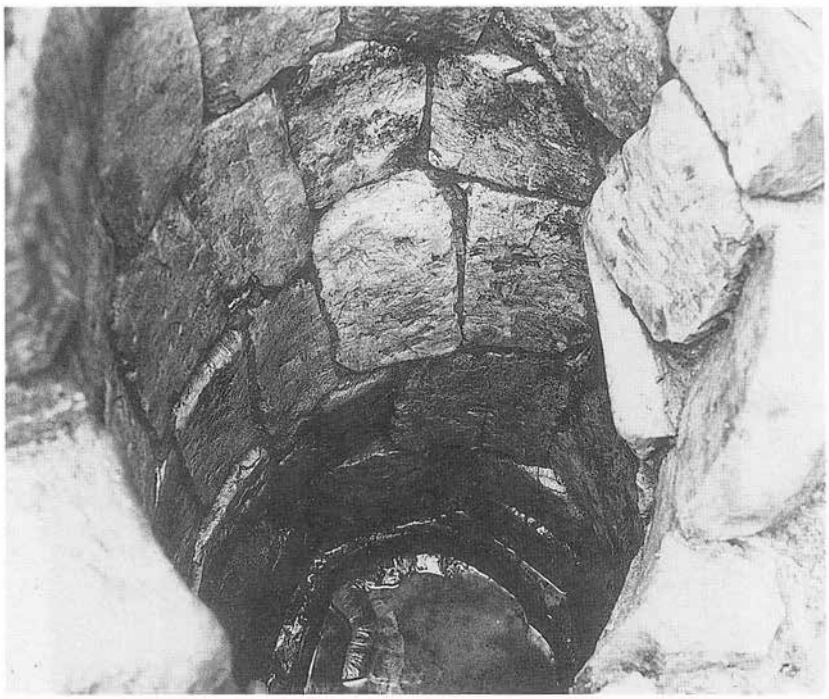
図版2



1. 南北土層断面（東壁寄り）



2. 井戸1（東から）

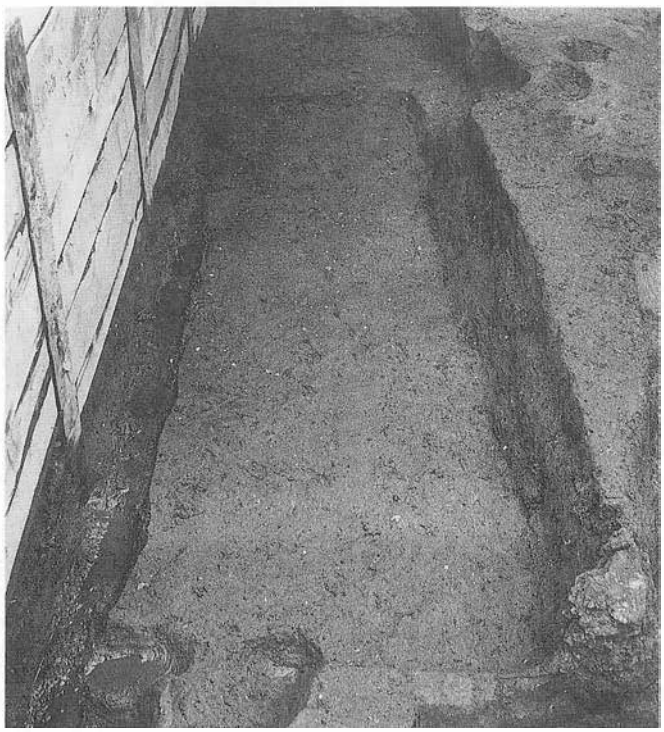


3. 同上　内部の状況

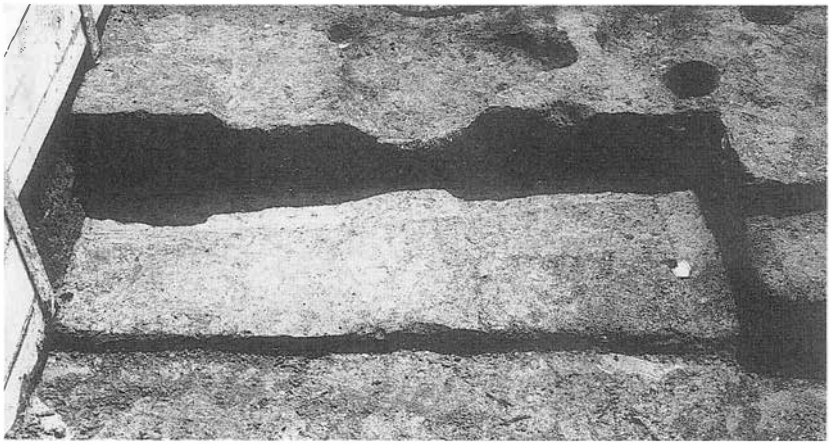
1. 竪穴建物1・4（東から）

2. 竪穴建物2（東から）

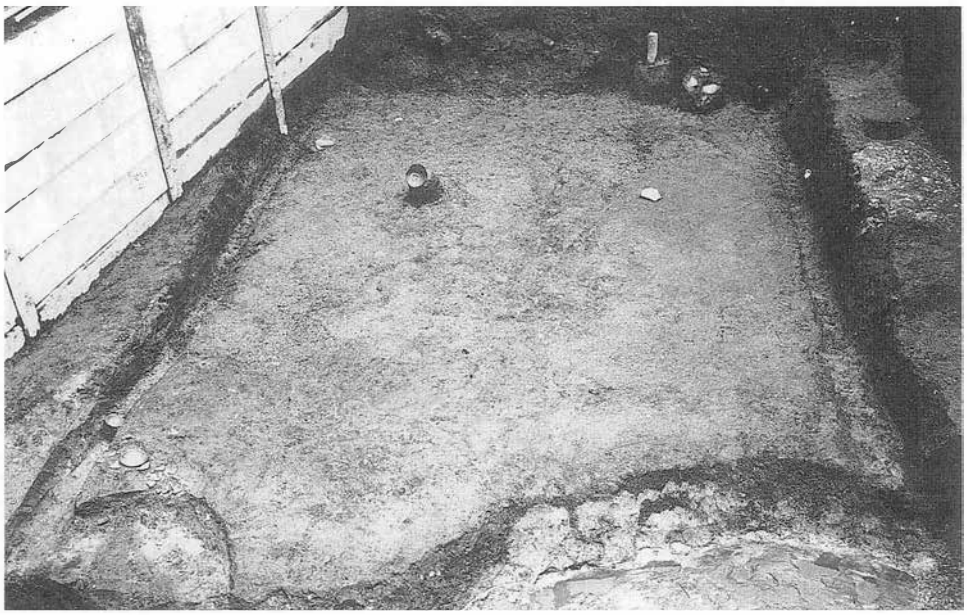
3. 竪穴建物8（東から）



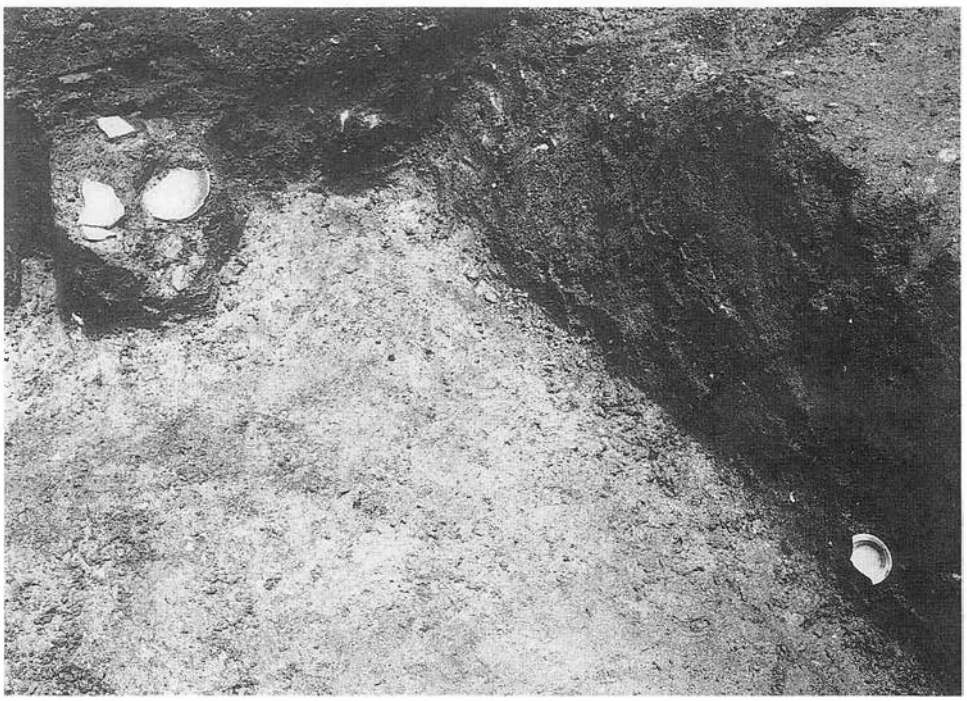
図版4



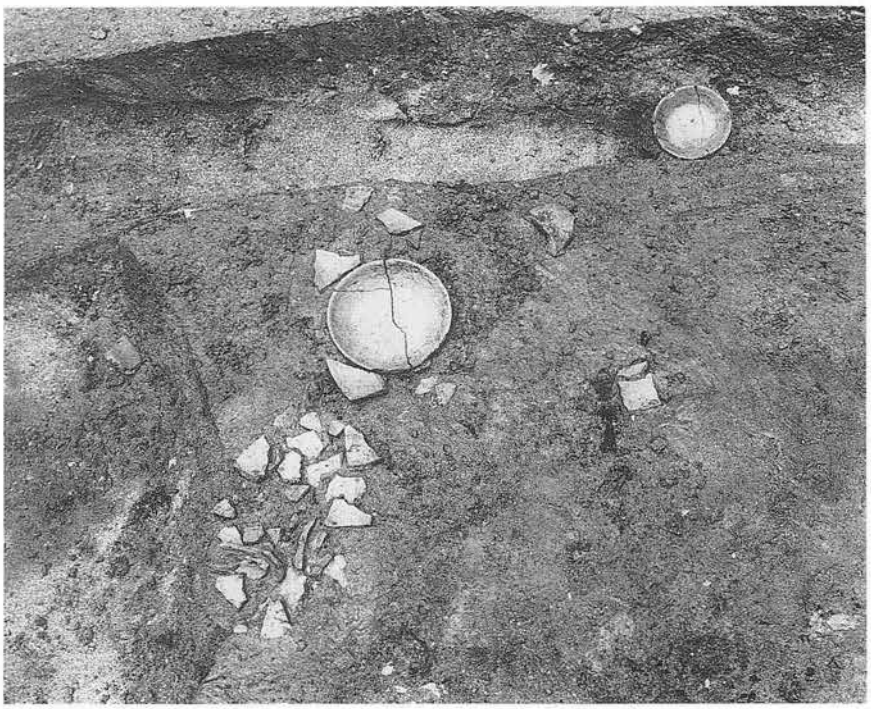
1. 竪穴建物6東辺部（西から）



2. 同上　西域部（西から）



3. 同上　図11-13・12-50（左から）出土状況



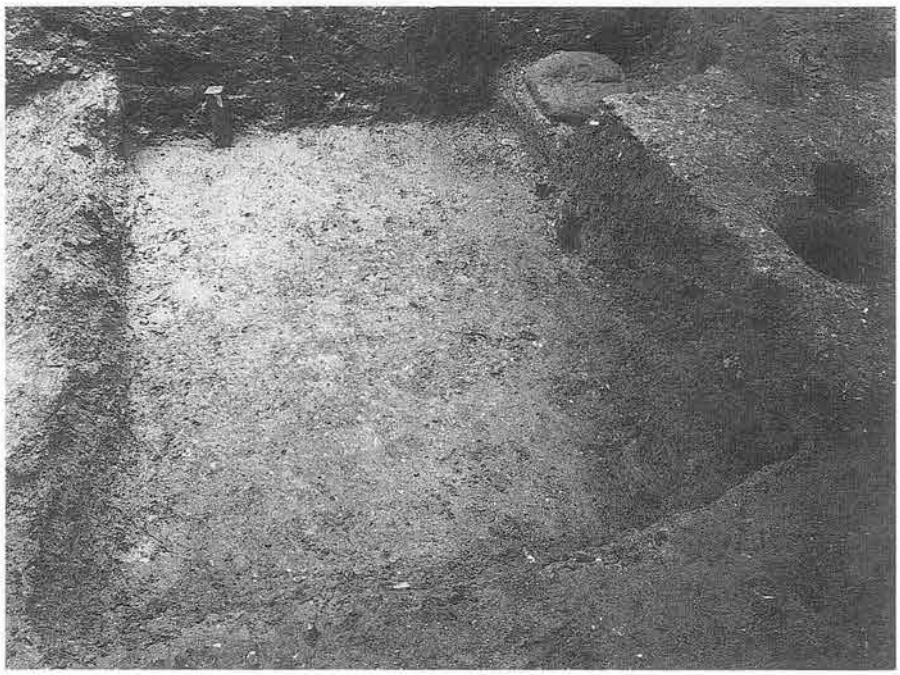
1. 竪穴建物6　図11-7・17・20（左から）出土状況

2. 同上　図11-5・8・6・15・16・14（左上から）出土状況

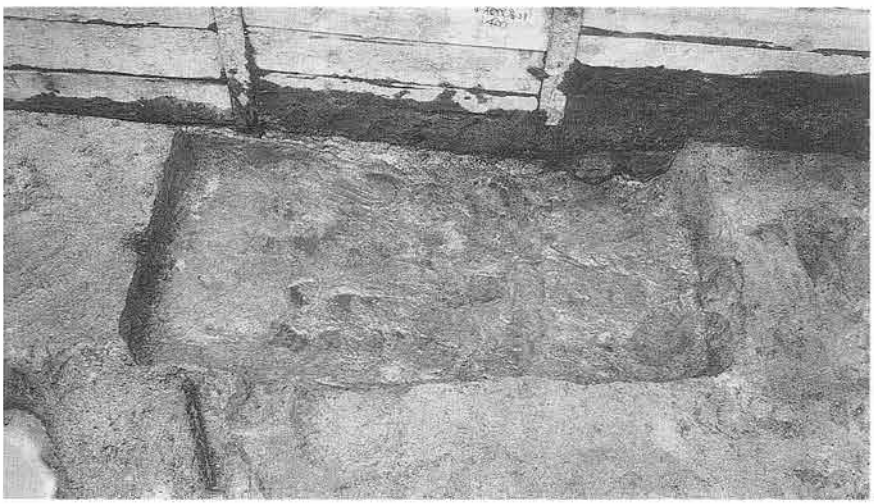
3. 竪穴建物11南域（北から）

図版6

1. 中央部柱穴群（東から）



2. 方形土壙1南半部（西から）



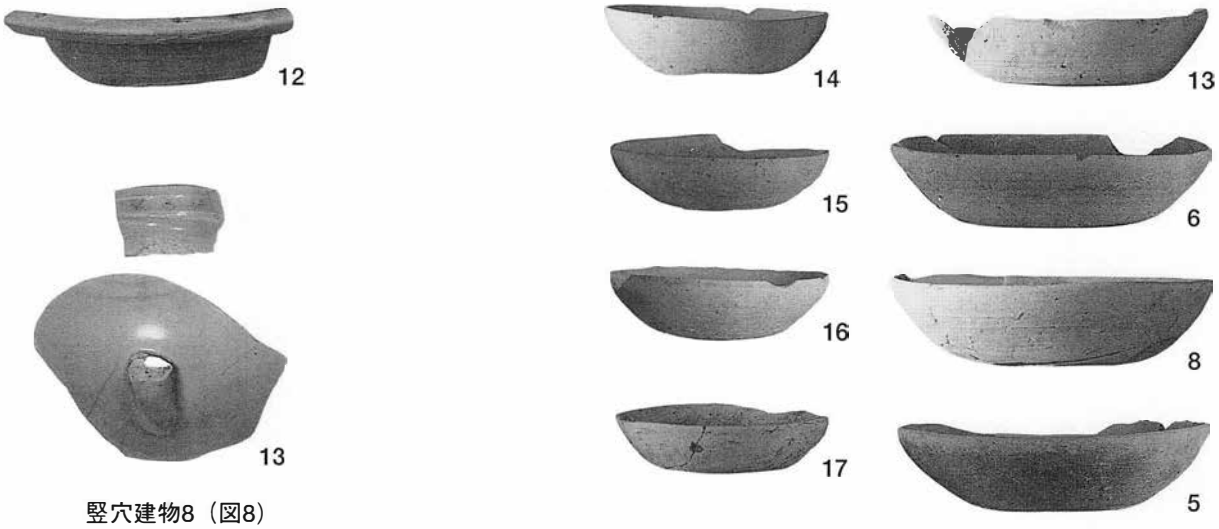
3. 方形土壙8（南から）

1. 図17-4出土状況

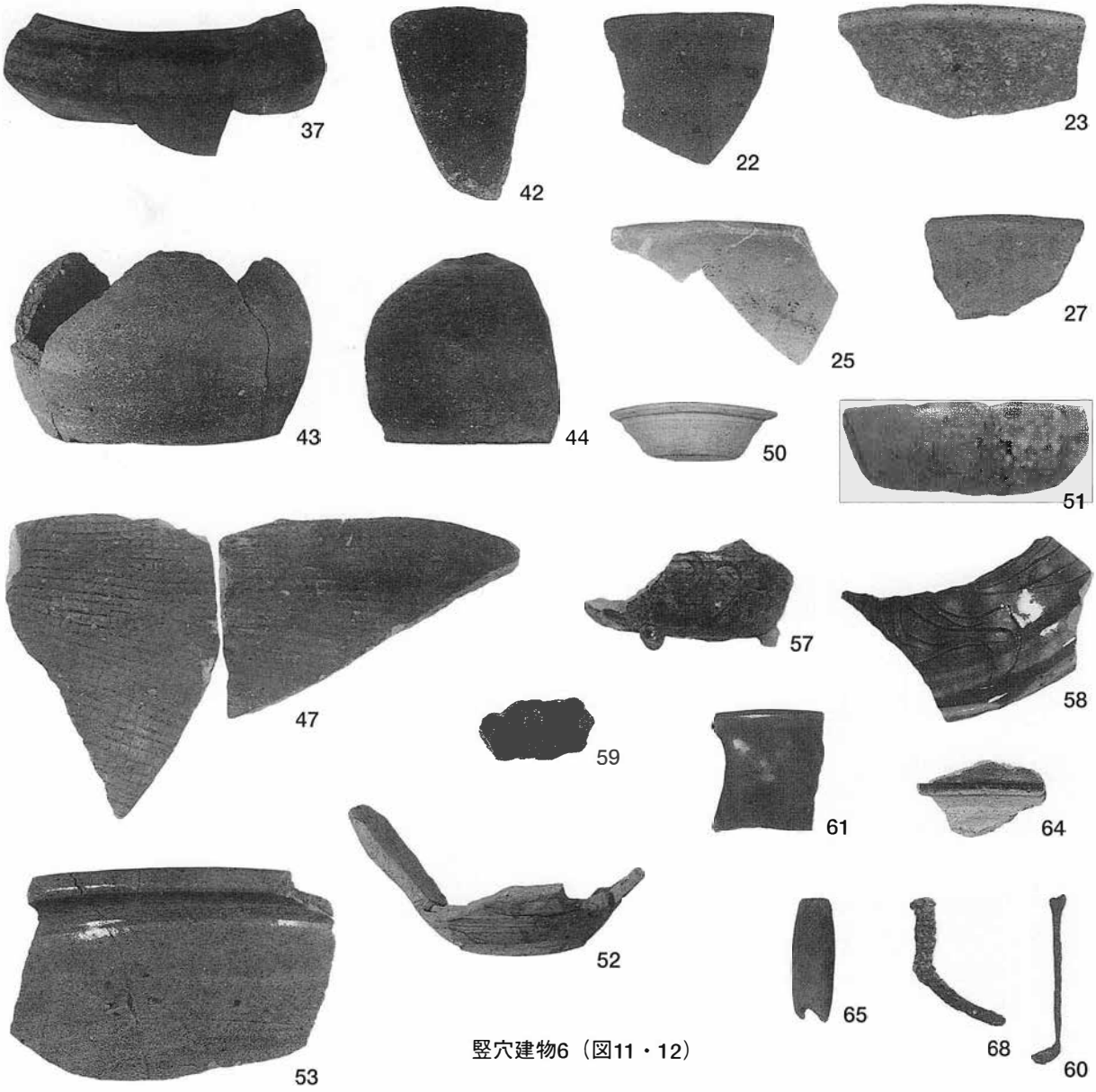
2. 図19-6出土状況

3. 図13-6出土状況

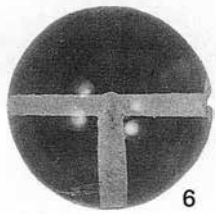
図版8

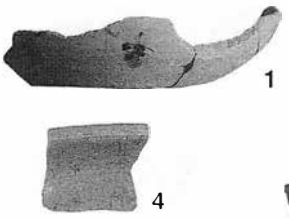


竪穴建物8（図8）

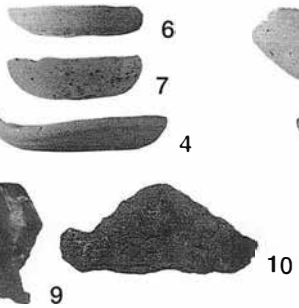


竪穴建物6（図11・12）

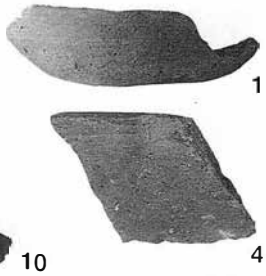

6


1
4

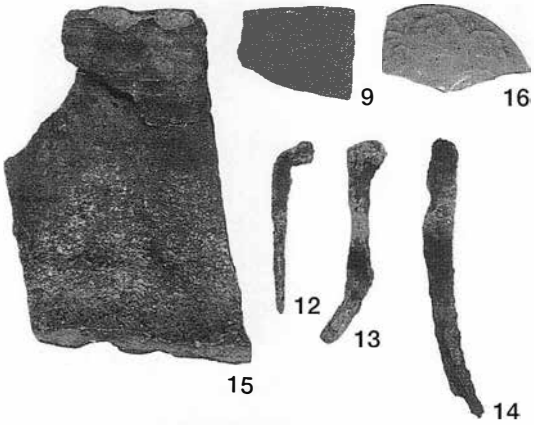
竪穴建物9（図13）


6
7
4
9
10

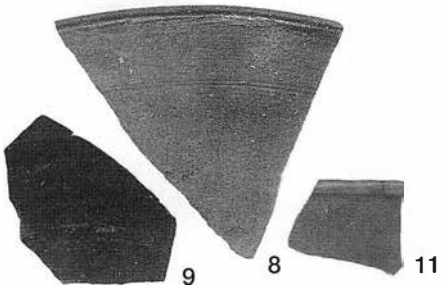
竪穴建物5（図14）


1
4

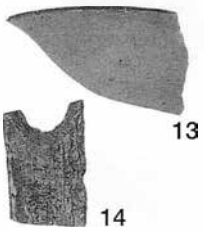
方形土壙1（図15）


9
16
12
13
15
14

竪穴建物11（図13）


9
8
11

方形土壙2（図15）


13
14

方形土壙4（図15）

15

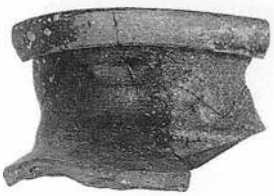
方形土壙5（図15）

4

2

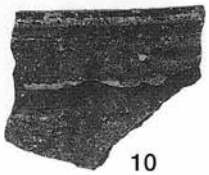
3

9



8

土壙4（図18）


10

土壙5（図5）

30

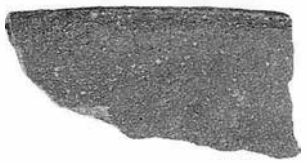
土壙20
（図18）

2

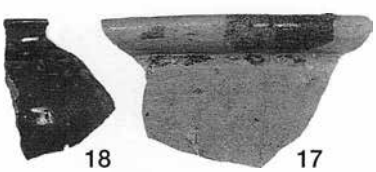
土壙9,10
（図16）

5

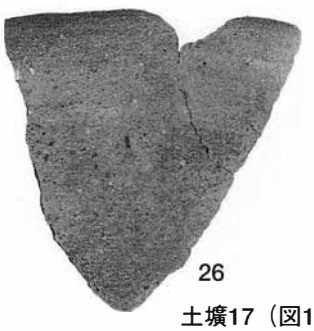
土壙18（図17）


23

土壙12（図18）


18
17

土壙8（図18）

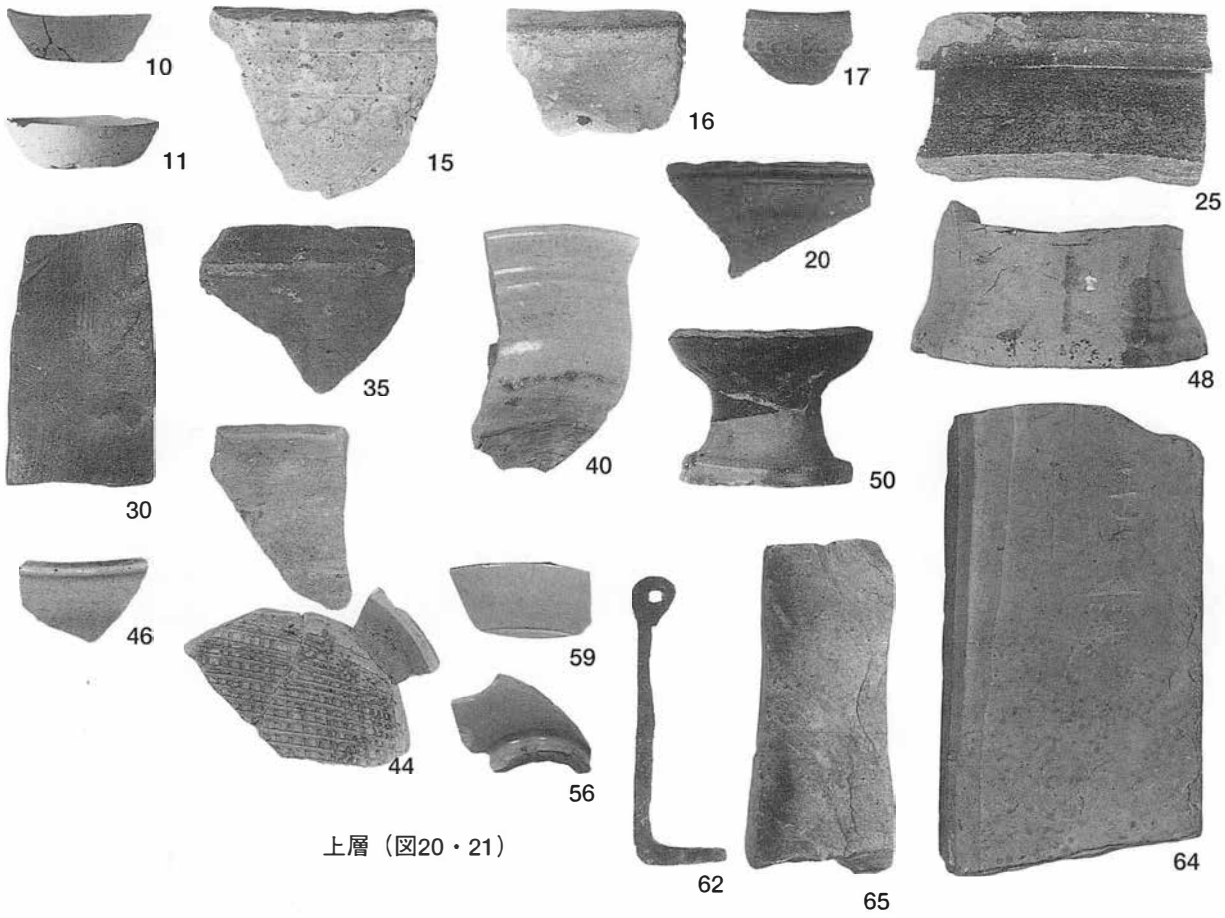

26

土壙17（図18）

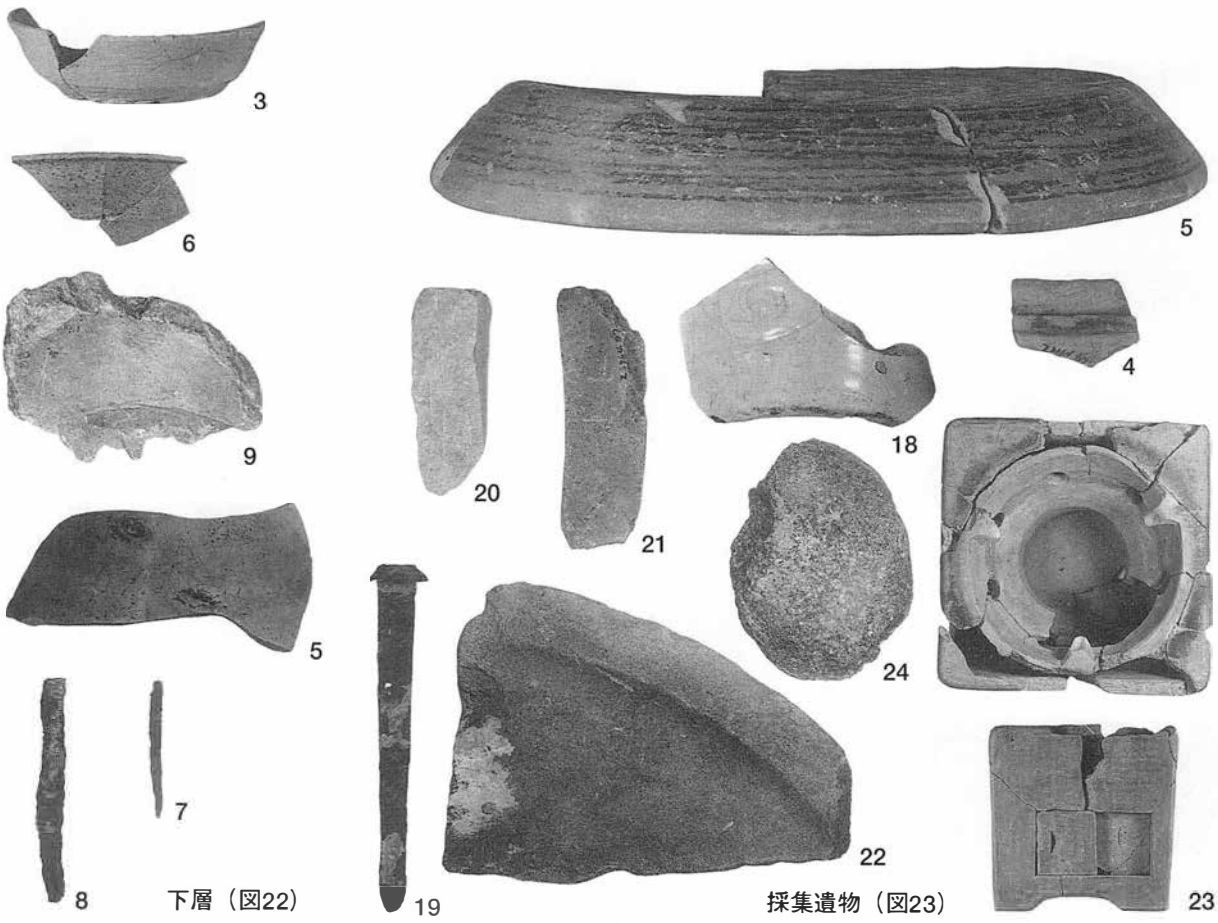
9
6

柱穴（図19）

図版10



上層（図20・21）



下層（図22）　採集遺物（図23）

報告書抄録

ふりがな	ざいもくざまちやいせき
書名	材木座町屋遺跡
副書名	材木座三丁目364番1外地点
巻次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	馬淵和雄
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ざいもくざ まちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけん かまくらし ざいもくざ 神奈川県鎌倉市 材木座三丁目364番 1外	14204	261	35度 18分 16秒	139度 33分 20秒	1995. 6.19～ 1995. 7.29	100	個人専用住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
材木座町屋遺跡	都市	鎌倉時代	竪穴建物　10 方形土壙　5 土壙　15 柱穴様小穴　110 小穴列　1 井戸　1	中世土師器・常滑・瀬戸・備前・竜泉窯青磁・口はげ白磁・鉄釘・骨製品・近世土製品・志土呂・近世陶器・近世土器・その他	鎌倉時代後半期を主体に竪穴建物など浜地特有の遺構が連続的に作られている。水晶製念珠（母指）出土

永福寺跡（No.61）

二階堂字獅子舞603番１地点

例　　言

1．本報は神奈川県鎌倉市二階堂字獅子舞603番１における、個人住宅造成に伴う永福寺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は調査対象面積128㎡を国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成７年７月７日～同年９月22日まで実施した。

3．本報の執筆　は第１・２章・第４章を福田　誠が、第３章、出土した遺物を菊川　泉、神山晶子が担当し、編集は福田が行った。

4．本報の資料整理には、福田、菊川、神山、岩野裕巳、汐見尚子があたった。

5．本報に使用した遺構写真の内、遺構の全景写真は木村美代治がポール式高所撮影装置を用い撮影した。個別の遺構は福田が撮影した。遺物写真は菊川が撮影した。

6．調査体制は以下の通りである。

調 査 主 体　鎌倉市教育委員会

主任調査員　福田　誠（鎌倉市教育委員会嘱託）、木村美代治

調　査　員　菊川　泉、岩野裕巳、神山晶子、本城　裕

調査補助員　小西さつき、汐見尚子

7．出土遺物、図面、写真等は鎌倉市教育委員会で保管している。

目　　次

例言

第一章　調査の経過 ……204
　第1節　遺跡の位置と歴史的環境 ……204
　第2節　調査地の設定 ……206
　第3節　層序 ……206

第二章　検出された遺構 ……206
　第1面 ……206
　第2面 ……207
　第3面 ……207

第三章　出土した遺物 ……211
　第1面 ……211
　第2面 ……211
　第3面 ……211

第四章　まとめ ……217

挿　図　目　次

図1　遺跡周辺図 ……204
図2　調査地設定図 ……205
図3　土層断面図 ……206
図4　井戸見透し断面図 ……207
図5　第1面平面図 ……208
図6　第2面平面図 ……209
図7　第3面平面図 ……210
図8　1区第1面井戸出土遺物 ……212
図9　1区第2面・第2面溝覆土出土遺物 …213
図10　1区第3面・炭層出土遺物 ……214
図11　2区第2面まで出土遺物 ……215
図12　2区第3面覆土出土遺物 ……216
図13　2区第3面覆土出土遺物 ……217
図14　2区第3面・第3面遺構出土遺物 ……218

図　版　目　次

図版1　1区第2面 ……223
図版2　1区第1面井戸 ……224
図版3　第3面全景 ……225
図版4　第3面礎石検出状況 ……226
図版5　1区第1面井戸覆土出土遺物 ……227
図版6　1区第2面・第2面覆土出土遺物 …228
図版7　1区第3面・炭層出土遺物 ……229
図版8　2区第2面まで出土遺物 ……230
図版9　2区第3面覆土出土遺物 ……231
図版10　2区第3面覆土・第3面遺構出土遺物 ……232

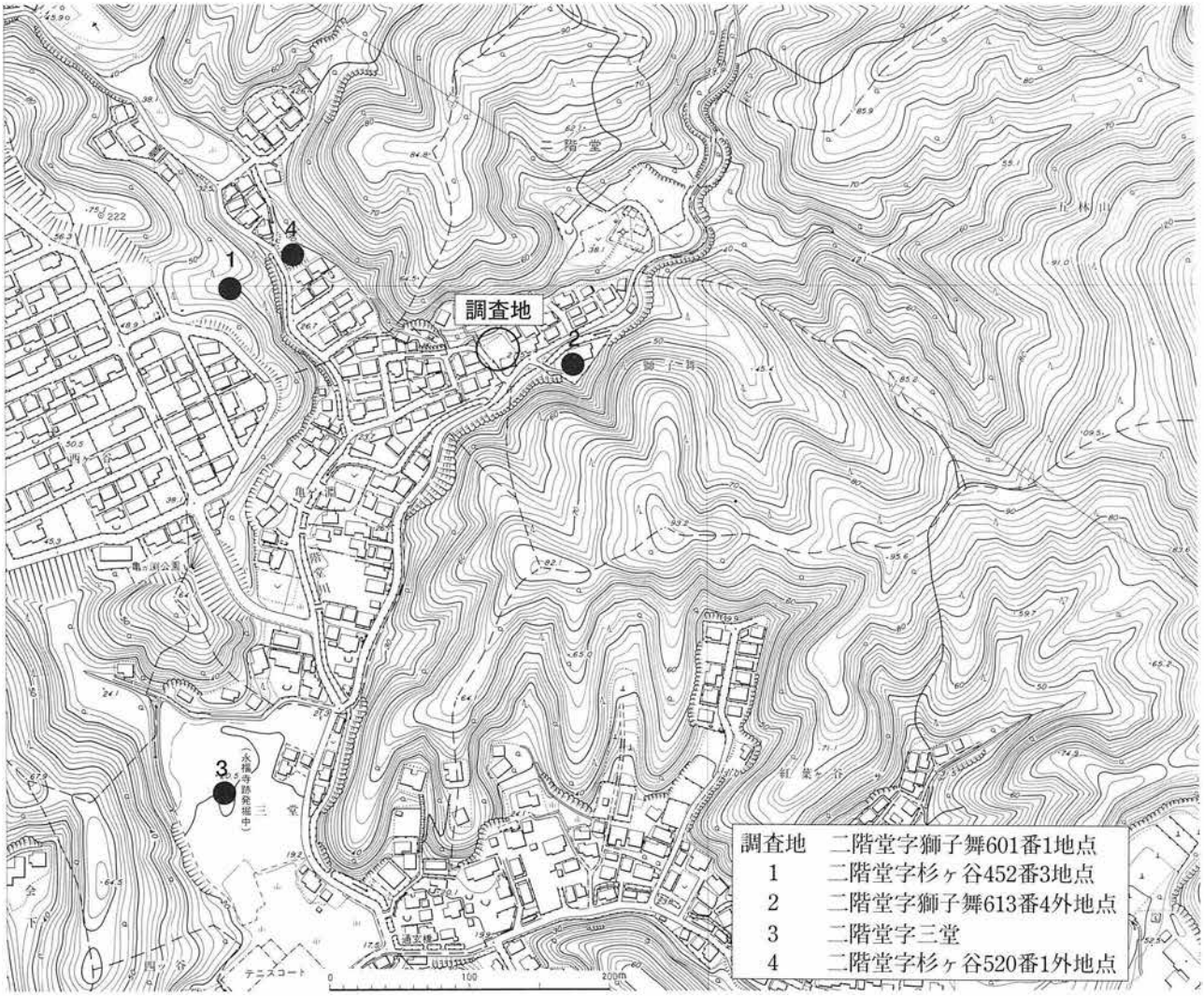


図1　遺跡周辺図

第一章　調査の経過

第1節　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市二階堂字獅子舞603番1地点に所在し、県遺跡台帳No.61「永福寺跡」に登録されている。本遺跡は、国指定史跡「永福寺跡」中心部から北約400mに位置している。永福寺の中心伽藍より北に延びる杉ヶ谷が、更に二股に分かれる分岐点にあたり、字名の獅子舞は、山頂に獅子がうずくまっているように見える（獅子岩）ところから付いた名と伝えられている。

永福寺跡は、源頼朝が奥州合戦の際に見聞した平泉の堂舎を模して建立したと伝えられる寺院で、文治五年（1185）に事始めを行い、建久三年（1192）に二階堂が、そして相次いで阿弥陀堂、薬師堂が完成し、建久五年（1194）には境内の伽藍がほぼそろったと考えられる。

幕府の御願寺として手厚く保護され、鎌倉幕府滅亡後も、頼朝縁の寺として、室町幕府からも保護されたようである。創建から約200年後の応永十二年（1405）の火災で焼け落ち、この後再建されず、15世紀中頃までに廃寺になったと考えられる。

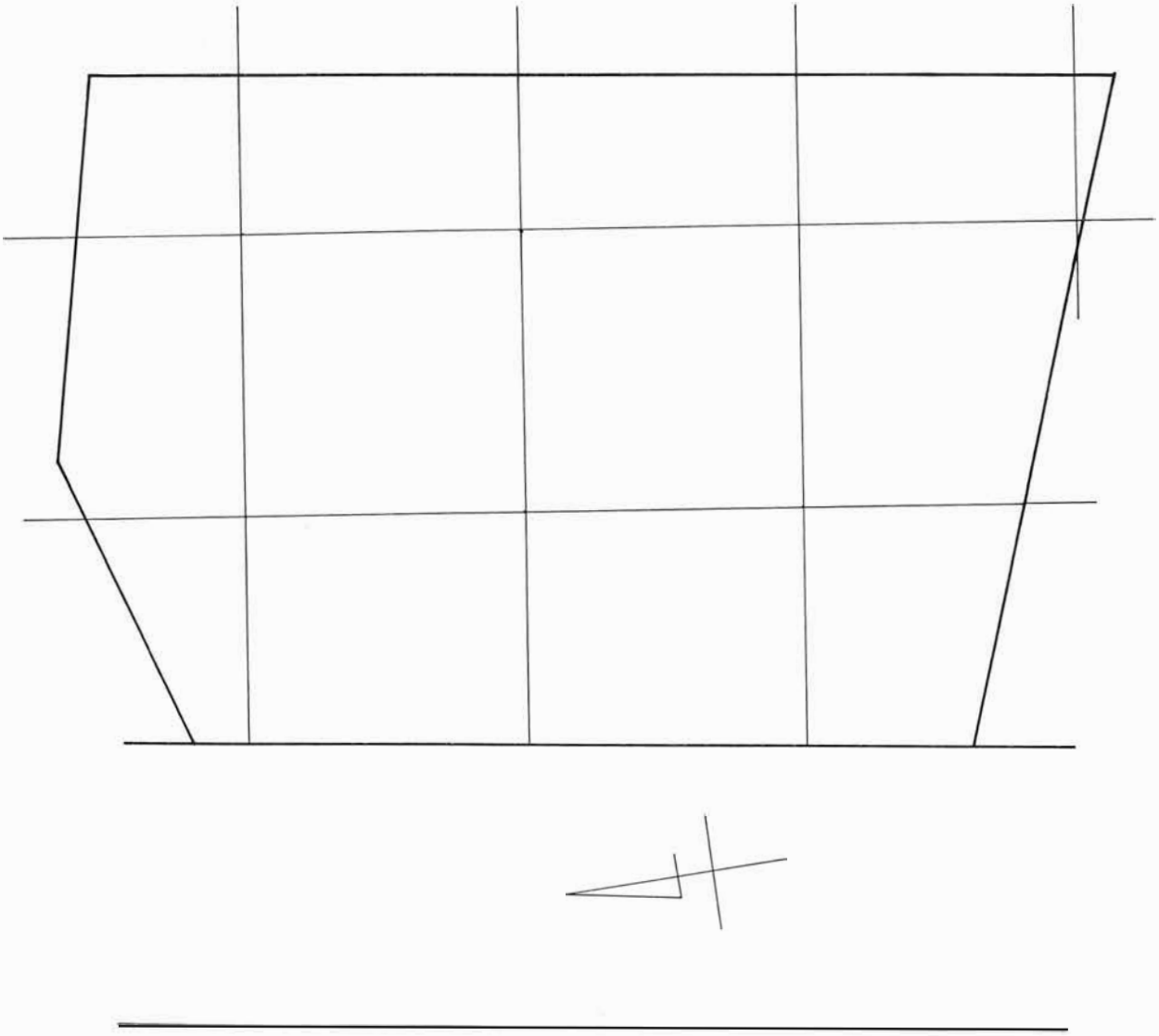


図２　調査地設定図

境内には中心の二階堂、阿弥陀堂、薬師堂の三堂の他、釣殿、鐘楼、多宝塔、惣門、南門、別当坊、僧坊が建ち並んでいたと推定される。本調査地点はこの内の僧坊跡が確認されると推定される地域である。

文献の中から僧坊に関わる記載を抜き出して見ると、「永福寺僧坊」「真言院」「真言院北坊」「松本坊」「亀ヶ渕坊」「石井御坊」「二階堂草庵」等の名前を拾うことが出来る。ただし各坊の位置は特定されていない。

これまでの二階堂字獅子舞613番４外地点、二階堂字杉ヶ谷520番１外地点の調査で僧坊跡と思われる建物跡、井戸、石垣、道路等を確認している。

第２節　調査地の設定

個人住宅の造成に伴う事前調査として行った試掘調査で、地表下約60cmで中世の遺構面（第１面）及び遺物が確認され、造成に伴う切土の深さが約180cmに及ぶために本調査を実施するに至った。この試掘調査の結果を踏まえ、造成される128㎡を対象に７月２日から約２ヶ月の予定で調査を開始した。

調査地は西面が市道路に接し、市４級基準点「Ｂ－108」がすぐ際に設置され、直線上に31.518m離れた位置に設置してある「Ｂ－109」間を基準線とし、「Ｂ－108」から基準線上に７m離れた位置に調査基準点を定め、これを用いて調査区の設定を行った。

本遺跡の緯度は北緯35度19分29秒、東経139度34分16秒である。

第３節　層序

現況の地形は、西面に接する市道の海抜は約26.9m、宅地の地表面は28.2mで、約1.3mの段差がある。調査で検出した井戸の北側は地表下約160cmで岩盤面が露出した。

検出した遺構の面数は３面である。

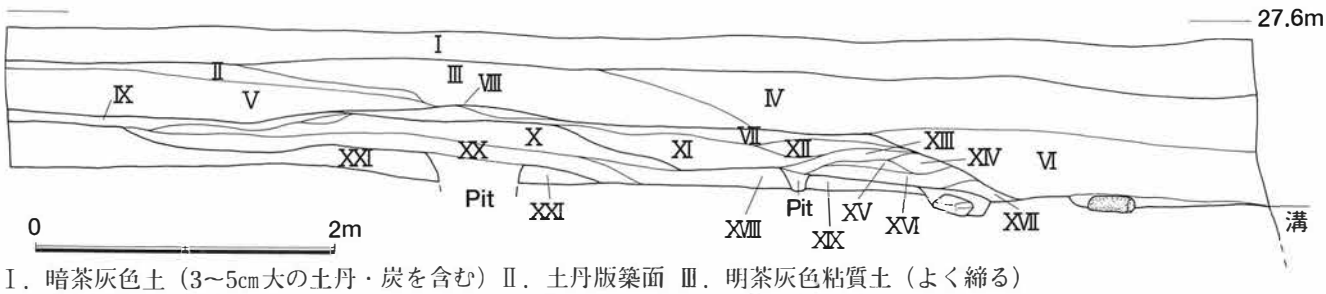
第二章　検出した遺構

第１面

地表下約80cmで第１面を検出した。面は暗茶灰色土層からなり、この土層を切り込んで柱穴１～９と井戸、落ち込みを検出した。

柱穴は規則性が見いだせないところから、建物とは考えにくいものである。

調査地の北東隅で井戸を検出した。検出した井戸の掘方は一辺が約2.60mと大きなものであった。土層は第１面より160cm掘り込んだところで岩盤となり、これより下は岩盤を掘り込んでいた。岩盤に掘り込まれた大きめの方形の穴の四隅にえぐりを設け、直径20～30cm、長さ２～2.5mの材を井桁に組んで土台としていた。第１面の遺構面から井桁の土台まで約160cmの深さである。井戸枠は、井桁に組んだ土台上に組み上げた、160cm×148cmの平面四角形の横桟支柱型ものである。岩盤を掘り込んだ部分に



Ⅰ．暗茶灰色土（3～5cm大の土丹・炭を含む）Ⅱ．土丹版築面 Ⅲ．明茶灰色粘質土（よく締る）
Ⅳ．暗茶灰色土（人頭大の土丹多量に含む）Ⅴ．暗茶粘質土（土丹粒・炭を含む）Ⅵ．茶褐色粘質土（土丹多く含み、締る）
Ⅶ．赤茶色粘土（鉄分が多い）Ⅷ．濁明茶色土 Ⅸ．赤茶色粘土（鉄分が多い）Ⅹ．暗灰色土（炭を多量に含む）
Ⅺ．淡明灰色粘土 Ⅻ．明灰色粘土 ⅩⅢ．炭化層 ⅩⅣ．茶褐色粘土 ⅩⅤ．暗灰色粘土 ⅩⅥ．土丹版築 ⅩⅦ．炭化層
ⅩⅧ．灰色砂質土（土丹を含む）ⅩⅨ．灰色粘土（木を多く含む）ⅩⅩ．灰色土（土丹を含む）ⅩⅩⅠ．灰色弱粘質土

図３　土層断面図

ついて、近接する民家の土台と接近していたため完掘していない。

第2面

第1面の下約25cmで検出した面である。

遺構面上に柱穴1～8と面上に据えられている直径30cm大の礎石、第1面で検出した井戸の脇で南北方向に延びる溝を検出した。

柱穴にはこれといった規則性は見いだせなかった。

溝は幅約60cm、深さ20～30cmの南北方向に延びる溝で、一部井戸の掘方にかかるが井戸の方が新しい。

第3面

第2面の約30cm下で検出した面である。

第3面は調査地西側を南北方向に走る溝に向かって、全体的に西に緩やかに傾斜している。西側の溝より東に約3.5mの幅の中に落ち込み、礎石の入った柱穴、礎板の入った柱穴、溝が第1面で検出した井戸とほぼ同じ方向で検出された。残りの東半分には、ほとんど遺構らしいものは見あたらない。

柱穴

柱穴は計22穴検出した。この内柱穴中に礎石（約45×35cm）を伴うものが4穴、礎板を伴うものが1穴、礎板の代わりに女瓦（永福寺Ⅰ期）を敷いたものが1穴、柱穴を伴わずに面上に置かれた礎板が3点検出された。

検出した礎石を伴う柱穴の内、礎1・礎2・礎3は南北方向に、約150cmの間隔でほぼ直線に溝に平行して2間並び、礎4は礎1の南側約110cmに位置する。4つの礎石はL字状に並んび、他の柱穴や礎板も溝に平行か直交方向に配置され、建物の一部のようである。

溝

溝1は調査地の西辺を南北方向に走る幅推定約1m、深さ50cmの溝である。この溝に沿って柱穴、面上に置かれた礎板・土丹が並ぶ。この溝1に向かって流れ込む溝2・溝3がある。幅約30cm、深さ約30cmの溝で、ほぼ溝1や礎石に平行・直交し、柱穴と共に区画を作っているようである。

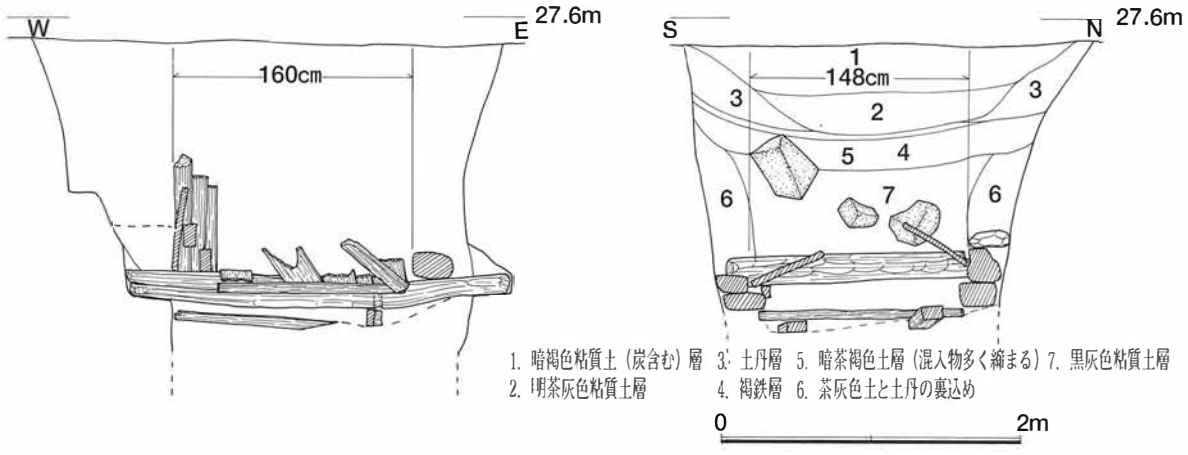


図4　井戸見透し断面図

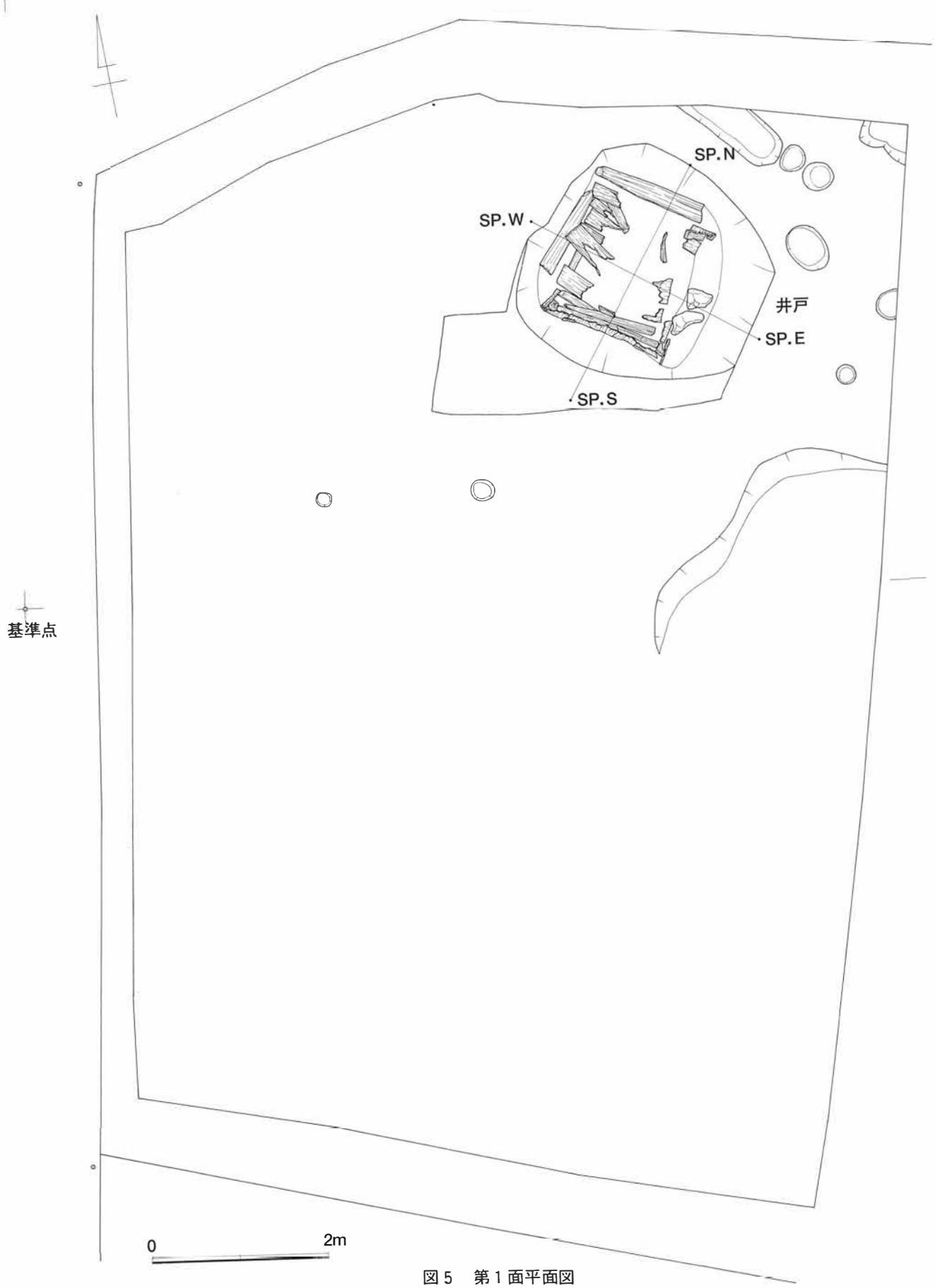


図5　第1面平面図

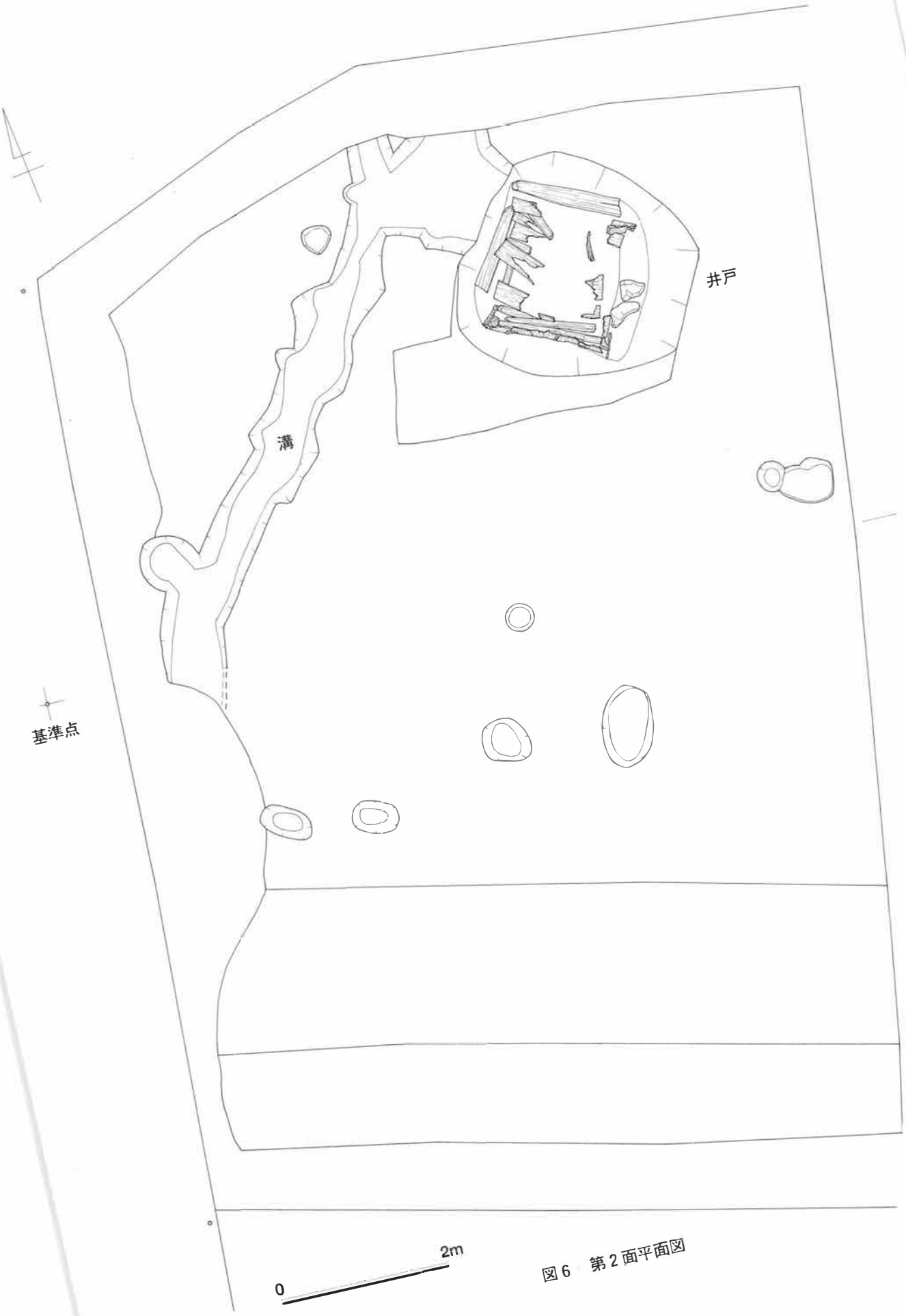


図 6　第 2 面平面図

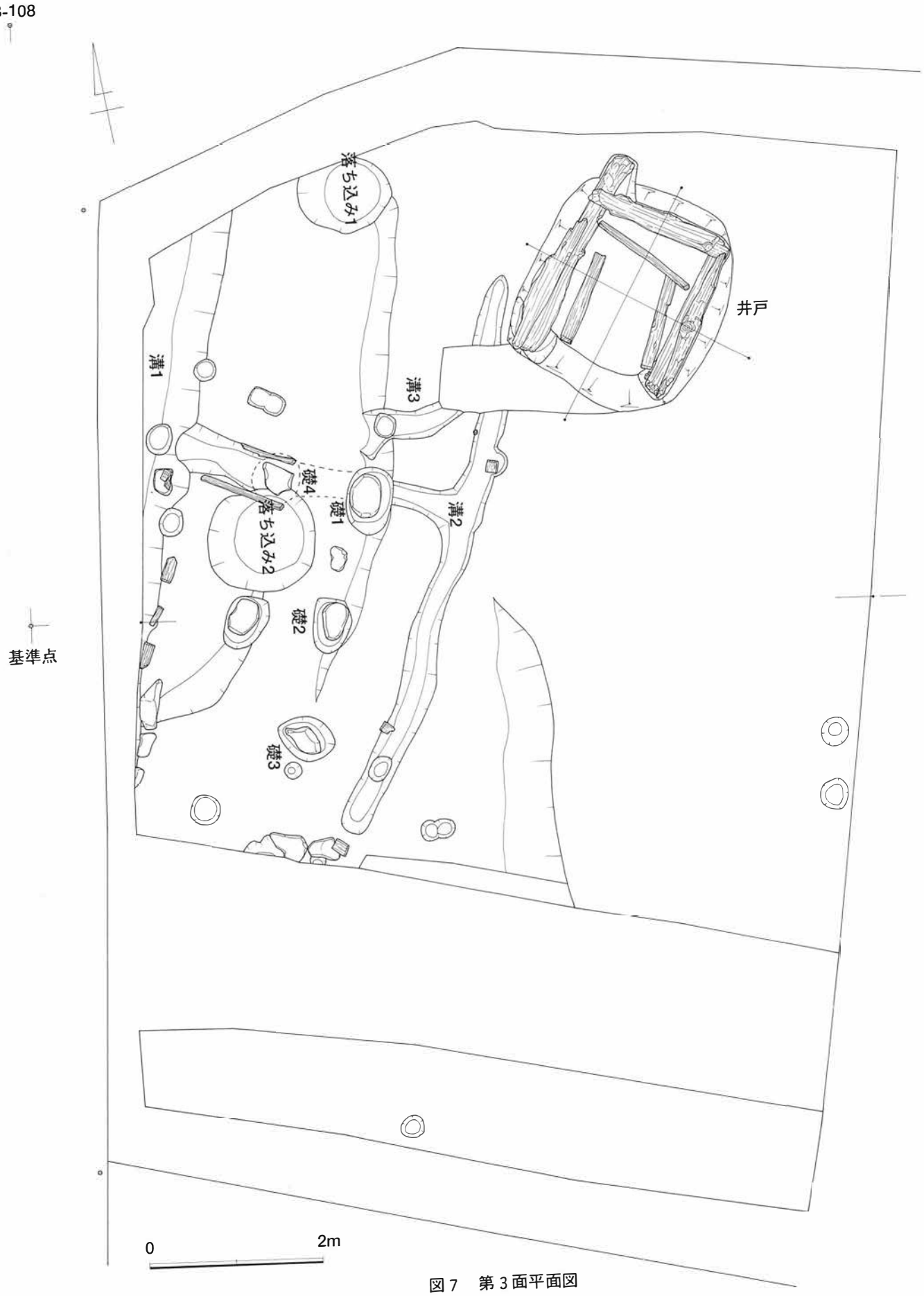


図7　第3面平面図

第三章　出土した遺物

1区第1面井戸出土遺物（図8、図版5）

1区の表土及び第1面包含層からは、ごく少量のかわらけ片等が出土したのみで、年代を示す良好な資料は得られなかった。

図1は第1面で確認した井戸の覆土から出土した遺物である。

1～4はかわらけ。いずれも器壁が均一的な厚みをもち、底径が小さく、体部は丸みを持って立ち上がる器形で、14世紀前葉の製品と思われる。井戸が埋められた第1面の年代はこの時期と考えられよう。

5～8は手焙り。5は菊花文をスタンプで施し、体部全体から口縁部内面にかけて丁寧に研いている。7とは同一個体か。6は鍔の部分の小片で、側面及び上面に菊花文をスタンプで施している。赤灰色を呈し、二次焼成を受けたものか。8は下体部の小片。外体部表面が剥離しており、成形の痕跡が観察できない。

9・10は常滑の捏鉢。9は粗い長石粒を多く含む堅緻な胎土。外体部は口縁部付近を横ナデで成形しており、刷毛ナデの痕跡も認められる。10は精良な胎土から成る。内面は磨滅が著しい。二次焼成を受けたものと見られ、表面は気泡を生じている。

11は瀬戸の鉢。胎土は黄灰色を呈し、やや粗く、しまりが悪い。内底面に灰釉が施されている。

12～16は瓦。12は縄目の叩きで成形された女瓦。胎土は精良で明灰色を呈する。13は男瓦。長石粒を含む砂の多い胎土で、堅緻。東海地方産のもの。14は12と同様の女瓦。15も女瓦であるが、表・裏面とも端部を横方向の板ナデで調整している。16は男瓦。粗い砂粒を含む粗い胎土で、明灰色を呈する。表面は灰黒色。これらの瓦はいずれも本遺跡の南に位置する国指定史跡「永福寺跡」から多く出土する瓦と同種のもので、その編年に従えば、12から15がⅠ期（創建期・1192）に用いられたもの。16がⅡ期（寛元・宝治年間）の改修時に用いられたものと考えられる。

1区第2面・第2面溝履土出土遺物（図9、図版6）

1～5は第2面覆土の遺物。

1はかわらけ。燈明皿として用いられたと見られ、口縁部から内外体部に煤が付着する。2は白かわらけ。3は常滑の捏鉢。口縁部はやや扁平な断面四角形を呈する。粗い長石粒を含む胎土で、ややしまりが悪い。4は瀬戸の卸皿。卸目は比較的細かく刻まれ、内・外面には灰釉が施されている。外面の釉は底面にまで及ぶ。胎土は灰白色を呈し、精良で堅緻。5は鉄製の釘。

6～15は溝覆土より出土した遺物。

6～9はかわらけ。10は手捏ね成形による白かわらけ。底面は丁寧な横ナデで、指頭圧痕がナデ消されている。11は酒会壺の蓋。釉は褐釉で外面全体に厚く施される。線刻によって草花文と思われる文様が描かれている。内面は二次焼成を受け変色が著しい瀬戸の胎土に似る。12・13は瀬戸の鉢。二点とも全体に灰釉が施されているが、二次焼成によりかなり剥落した状態である。14は瀬戸の広口壺。胎土は灰白色を呈し堅緻。灰釉が全体に施されている。15は女瓦。縄目の叩き目をもち、全体に赤灰色を呈し、表・裏面ともに粗い離れ砂が付着する。東海地方産のもので、前述の永福寺のⅠ期の瓦。

溝の遺物は7～9のかわらけが14世紀前葉の製品と考えられるのを下限とする。この時期が溝の埋められた時期と考えられよう。従って、第1面と第2面は比較的短期間に構築されたものと思われる。

1区第3面・炭層出土遺物（図10、図版7）

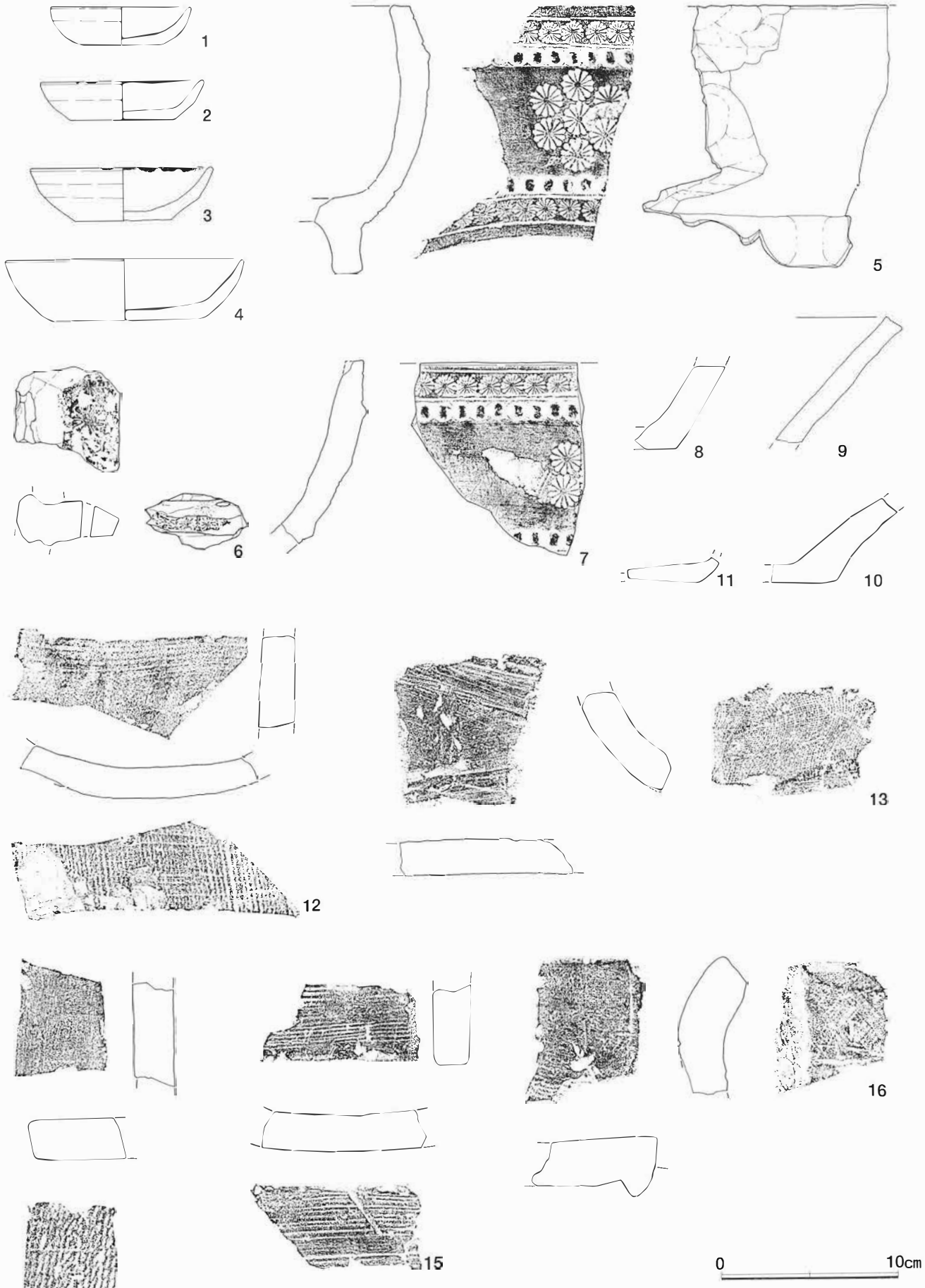


図8　1区第1面井戸出土遺物

1～12は1区第3面の遺物。1～7はかわらけ。この内2・3・5・6は二次焼成を受けて暗灰色を呈する。8は瀬戸の卸皿。胎土は明黄灰色を呈し、ややしまりが悪い。内面及び外体面に灰釉がうすく施されている。9は盤。二次焼成を受けて釉が剥落し、緑釉部分のみが残っているが、本来は二彩か。胎土は明灰色を呈し、砂を含む緻密なもの。10は常滑の甕。粗い長石粒を含む胎土で、ややしまりが悪い。口縁部を縁帯状につくっている。11は火舎。粗い砂を多く含みややしまりが悪い。体部は全体的に弱いナデによって成形されている。12は白磁口兀皿の底部。

13～26は第3面炭層中の遺物。

13～20はかわらけ。1～7と同様に、総じて、底径が比較的小さい深形を呈し、器壁の厚みが均一的、体部は丸みをもって立ち上がるといった特徴をもつものが主で、概ね14世紀前葉のものと思われる。第1面から第3面の時期差もさほど無いと言わねばならない。21は常滑の捏鉢。長石粒を少量含む精良な胎土から成る。外体部には右斜め上にひきあげる板ナデ成形痕が認められる。22～25は常滑の甕。22は23と同一個体か。口縁部をN字状に折り、外周を縁帯状にナデて仕上げている。赤灰色を呈し、胎土は細かい長石粒を含みややしまりが悪い。24はやや外反させた端部を上下にひき出して口縁部をつくっている。胎土は精良で砂粒を多く含み緻密。25は10と同一個体か。26は緑釉の盤の底部片。二次焼成により釉は淡色に変色している。胎土は明灰色を呈し、砂を多く含み緻密。

27・28は土壙1の遺物。27は白磁。水注等の体部か。釉は内・外面に施されており、淡水青色を呈す。28は砥石。黄灰色を呈する泥岩製。表面・裏面ともなめらかに研かれている。

29は土壙2出土のかわらけ。

30・31はPit1出土の女瓦。ともに凸面に縄目の叩き目を有する、永福寺Ⅰ期のもの。

2区第2面まで出土遺物（図11、図版8）

2区では第1面の遺存状態が悪く、最初に検出した構築面は第2面である。

図4は第2面覆土までの遺物。

1～18はかわらけ。やはり14世紀前葉のものがほとんどを占める。

19は瀬戸の皿。黄灰色を呈し、口縁部のみわずかに灰釉が施される。20は常滑の鉢。胎土は精良で緻

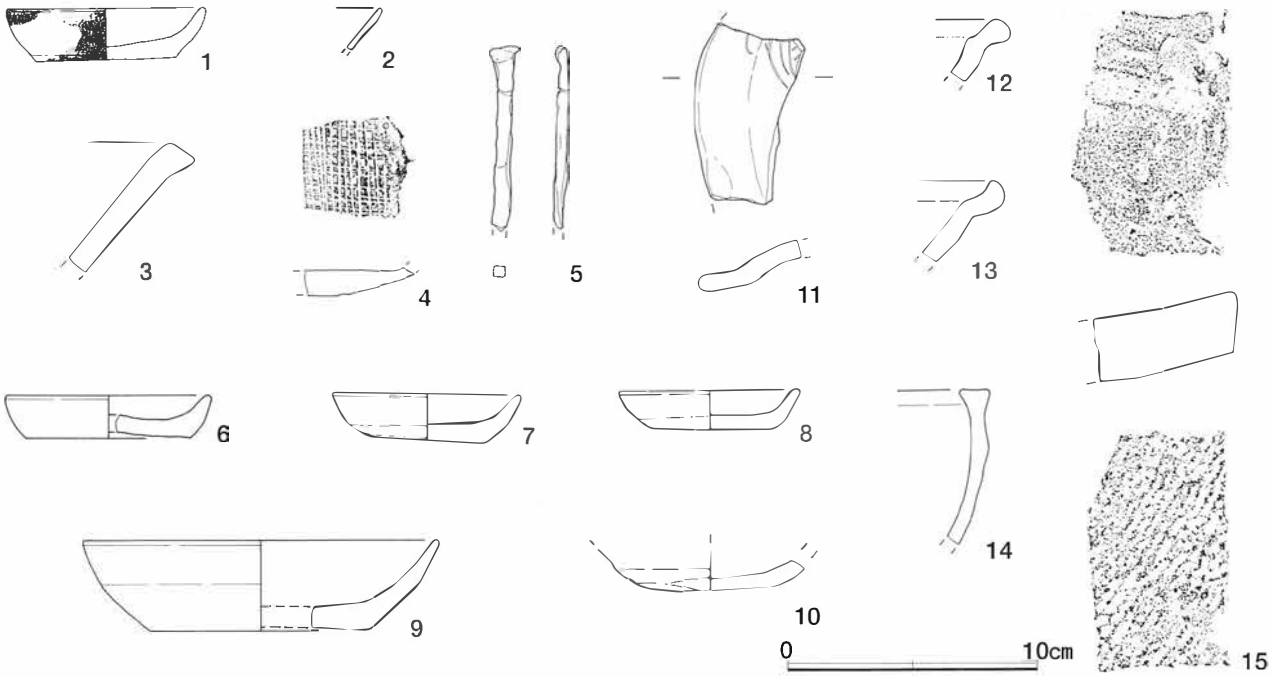


図9　1区第2面・第2面溝覆土出土遺物

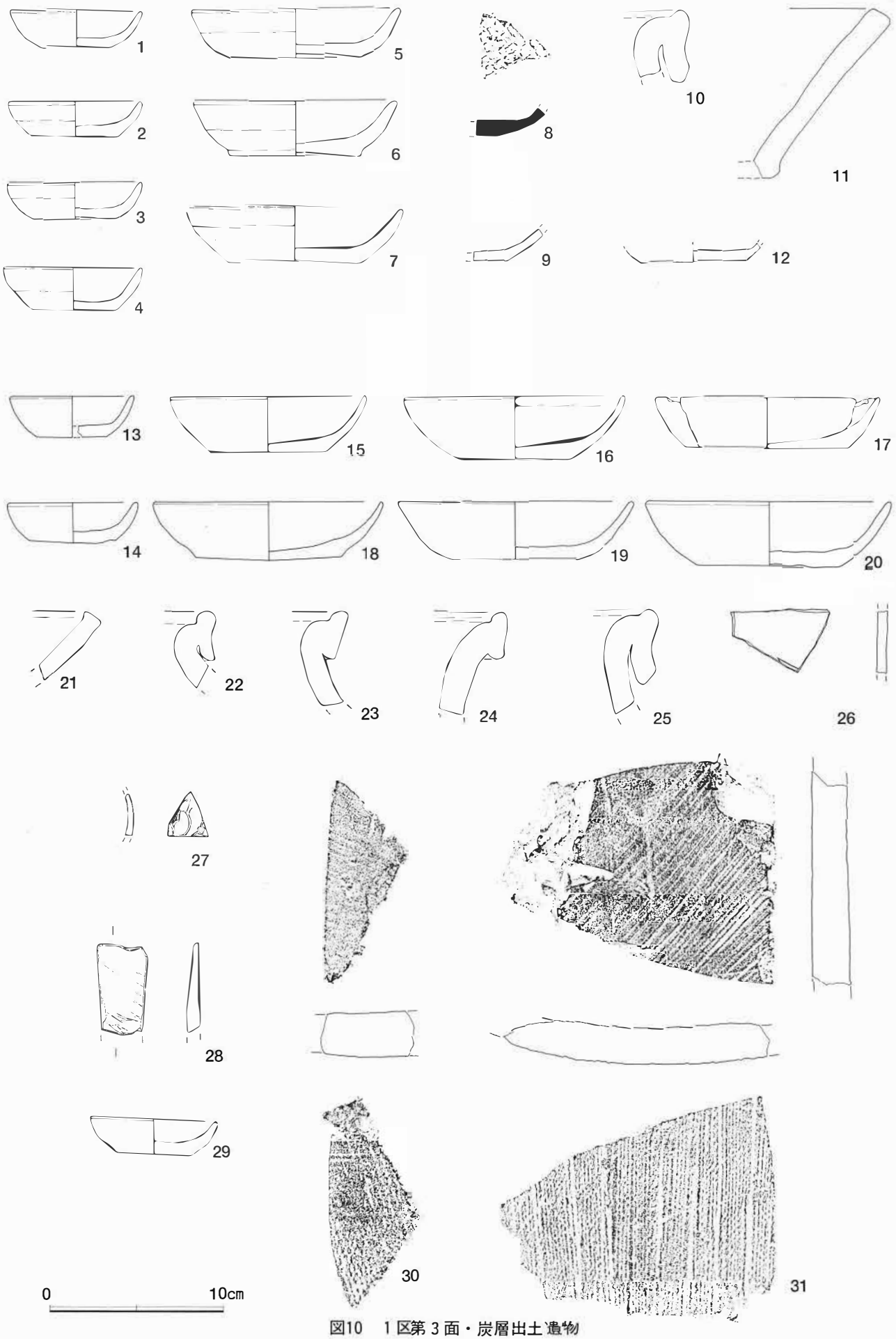


図10　1区第3面・炭層出土遺物

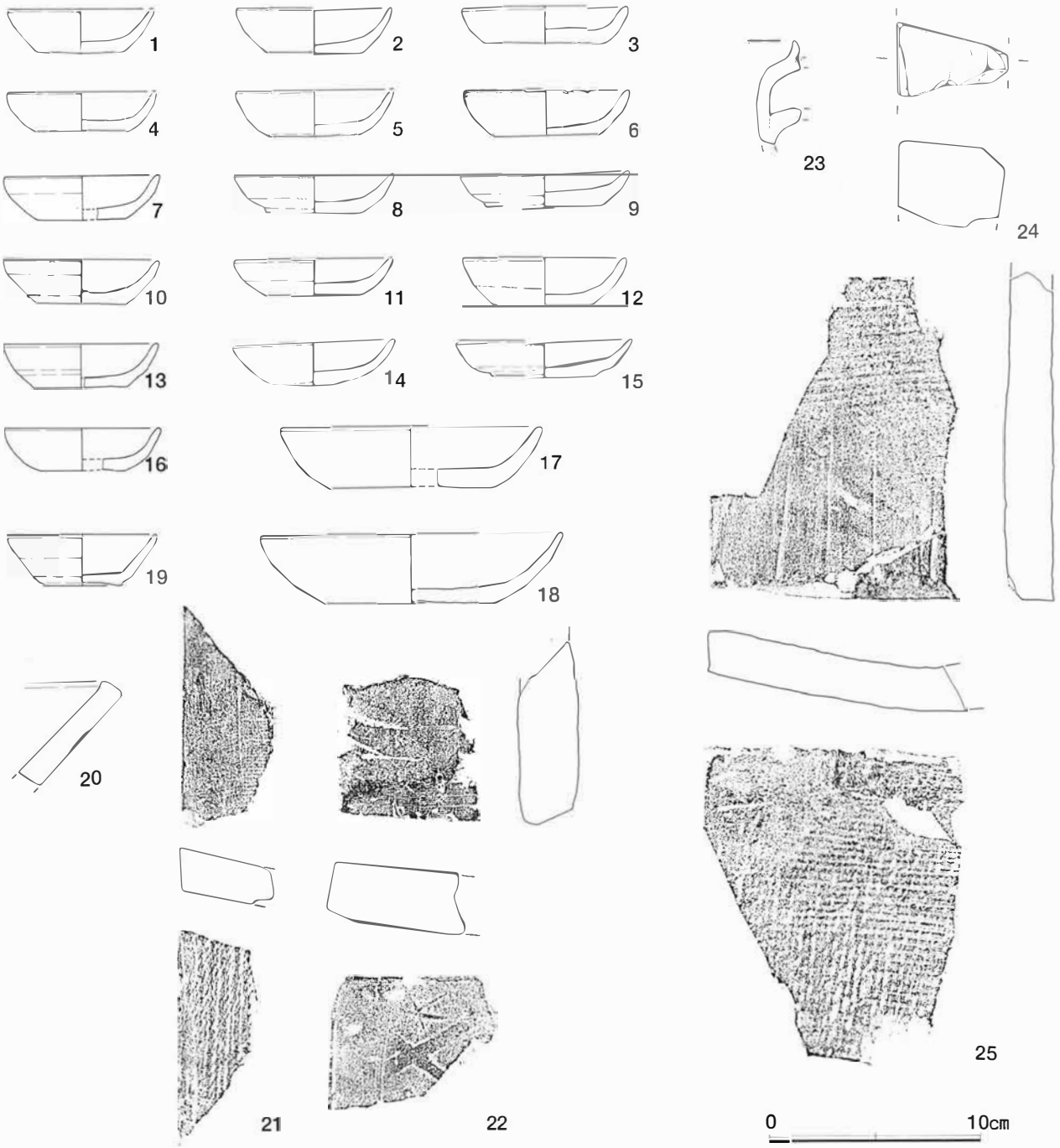


図11　2区第2面まで出土遺物

密。内面は丁寧な横ナデ、外面は口縁部のみをやや強い横ナデで成形している。21・22・25は女瓦。21と25が縄目の叩き目を有するⅠ期のもの。22は斜格子の間に「大」の字状の文様が入った叩き目を有する。埼玉県の水殿瓦窯の産と確認されており、永福寺Ⅱ期のものと考えられている。23は瀬戸の行平鍋。持手の付根部分の破片。胎土は黄灰色を呈し、ややしまりが悪い。内面・外面とも灰釉が施されているが、内面は特に釉を塗る刷毛目が明瞭。24は砥石。砂岩製で荒砥か。本来は四角柱のものと思われるが、欠損部分が多く、二次焼成も受けたと見られる。

2区第3面覆土出土遺物（図12・図13、図版9・10）

図12・図13は2区第3面覆土より出土した遺物である。

図12－1～21はかわらけ。1～6・10・11・13・16は、体部が直線的に立ち上がる13世紀中頃の様相を呈す。その他のものは、素地がきめ細かく、器壁が薄く丸みをもった体部で、14世紀前葉の特徴を備

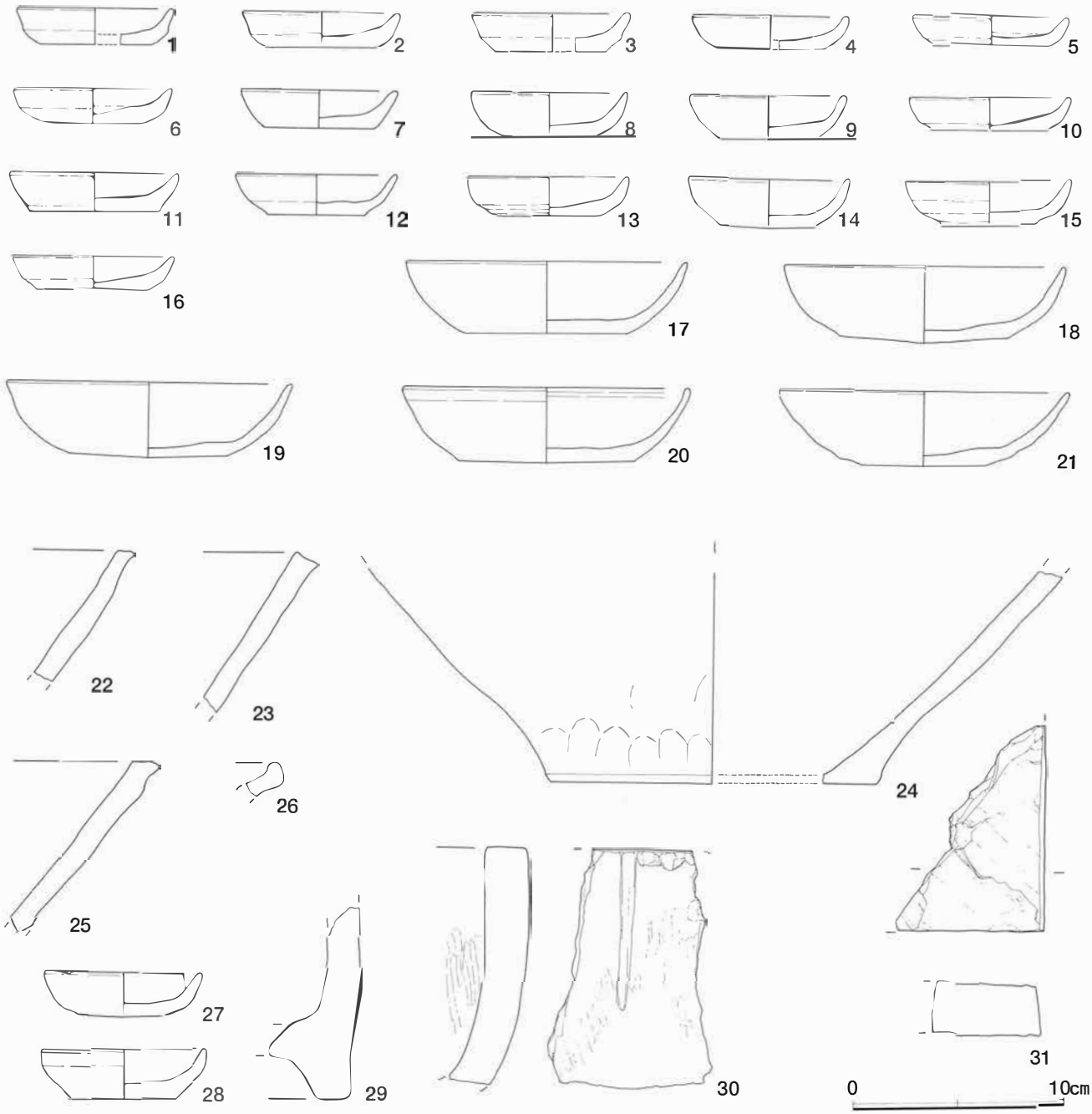


図12　2区第3面覆土出土遺物

えている。

22～25は常滑の捏鉢。体部に指頭調整痕が、外面口縁下部にはやや強い横ナデ痕が認められる。26は瀬戸の折縁鉢。胎土は精良で、緑灰色の灰釉が施される。

27・28は炭下層付近で出土したかわらけ。共に胎土はきめが細かく、形態は14世紀前半の様相を呈する。27は灯明皿として使用されたものか、内面にススが付着する。

29・30は火舎。29は脚部片。瓦質だが、体部を研いていない。30は内・外面とも上下方向に丁寧に研かれている。器形は輪花を呈する。31は硯の未製品と思われるもの。粘盤岩製。側面を切断しており、底面と硯面は未加工の状態である。

図13－1～3は女瓦。いずれもⅠ期のもの。1は東海地方産のもの。表面に粗い長石粒が付着する。2・3は凸面に縄目の叩き目を有する。4は男瓦で、1と同様東海地方産。凸面は横ナデでで成形されている。

2区第3面・第3面遺構出土遺物（図14、図版10）

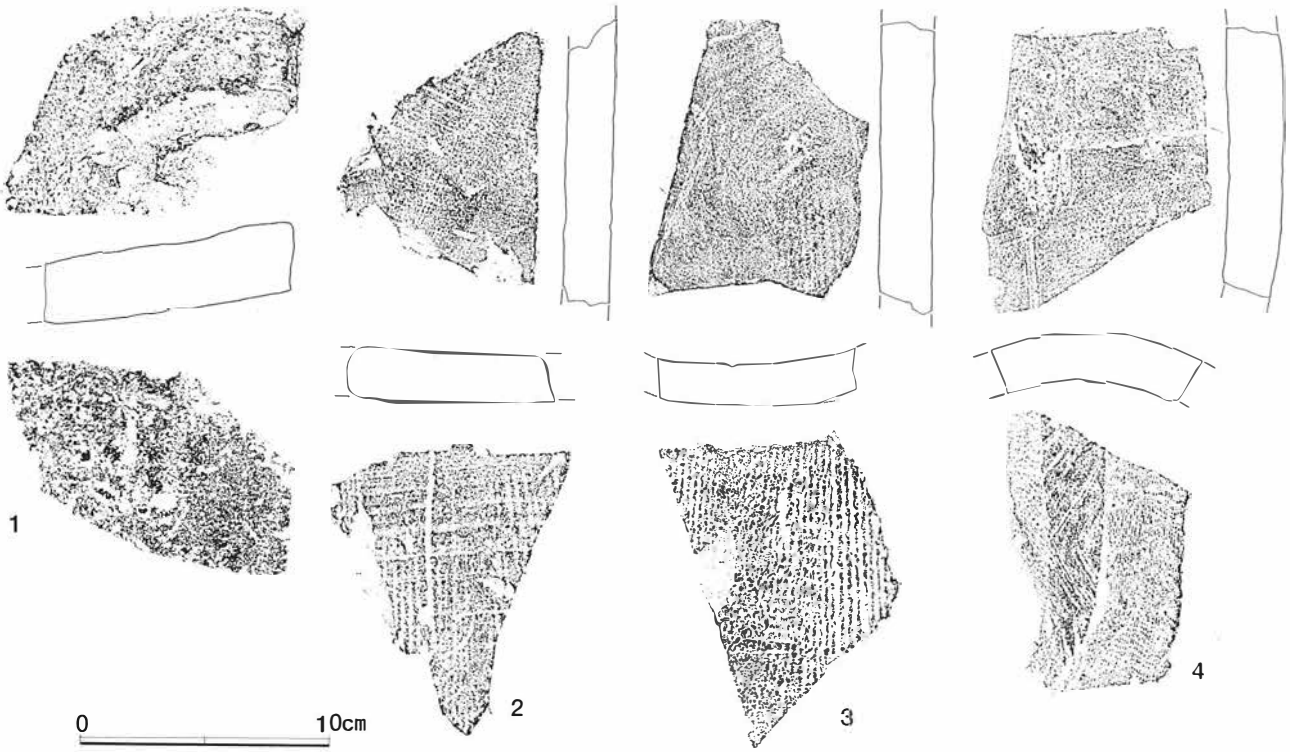


図13　2区第3面覆土出土遺物

1～3は2区3面上で出土したかわらけである。1、3は砂粒を含む似た胎土で、14世紀前葉の製品の形態。

4～9は落ち込み1より出土した遺物。4～6はかわらけ。4は灯明皿として使用されたもので、口縁部にススが付着する。3点ともやはり14世紀前葉の様相を呈する。7は山茶碗窯系捏鉢。胎土は非常にきめ細かく、精良。焼成も良好で堅くしまり、灰色を呈する。8は男瓦。東海地方産で、Ⅰ期のもの。表には横方向の板ナデ痕、裏面には布目痕が残る。9は羽子板状の木製品。10は3面溝1から出土したかわらけ。11は3面pit1より出土した火舎。脚部片。12はトレンチ3面下炭層より出土した漆器の鉢。全体に黒漆を塗り、口縁部と、外体部に刻んだ二条の溝に朱漆を塗っている。内底面には亀甲花菱と思われる文様を朱漆で手描きしている。器形は口縁部が折れ曲がる浅形で、陶磁器の形状を模倣したものと思われる。

第四章　まとめ

調査地点は、国指定史跡「永福寺跡」中心部から北約400mに位置しする。永福寺の中心伽藍より北に延びる杉ヶ谷が、更に二股に分かれる分岐点にあたり、僧坊跡が確認されると推定される地域であるが各坊の位置は特定されていない。

今回、特に注目される遺構は井戸である。井戸枠の組み方は横桟支柱型で、鎌倉市内の調査でよく見られるものであるが、井戸枠一辺の幅が148～160cmと、市内の調査でもあまり確認例がない大きな規模であった。また現地表下160cmで岩盤が検出され、井戸枠はこの岩盤の上面に丸太を井桁に枠を組み、この上に横桟支柱の井戸枠を組み上げていた。この下は岩盤掘り抜きの井戸となり、井戸枠は御神輿のように岩盤上面に渡された井桁の上に乗った形で、側面から観察すると井戸枠は宙に浮いた形になっていた。

二階堂字杉ヶ谷520番1外地点の調査では、母屋と思われる礎石建物と、付属の掘立柱建物、井戸、溝、庭が確認されている。この組み合わせが僧坊と関わり合いがあるならば、今回の調査で一部確認した、礎石、溝、井戸等の遺構の組み合わせはこれと類似している。確認範囲が狭く全体像がつかめないものの、谷戸内に位置していた永福寺僧坊跡の一端を検出したものと考えられよう。

今回の調査で杉ヶ谷内の調査は4地点目になるが、調査例が少ないために、文献から読みとれる僧坊跡の位置が特定されている訳でもない。永福寺の全盛期には、谷戸内を埋め尽くしていたと考えれられる僧坊の今後の調査が待たれる。

最後に連日の猛暑の中、黙々と作業に従事して下さった作業員の方々、各種ご迷惑をかけた近隣のみなさまの暖かい声援で、調査を無事終了することが出来たことを記し、感謝する次第である。

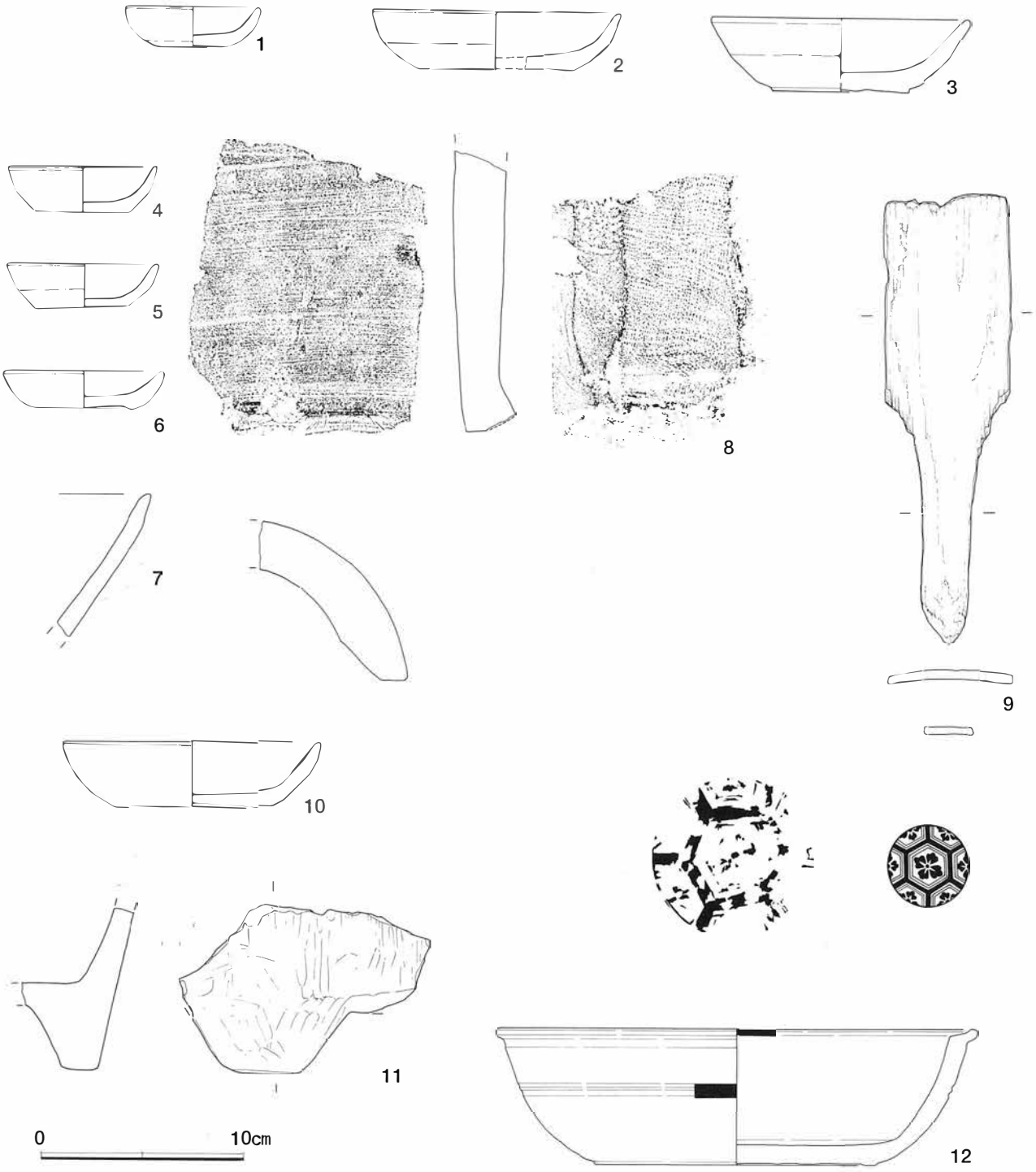


図14　2区第3面・第3面遺構出土遺物

遺物観察表

図8　1区第1面井戸出土遺物　（数字はcm）

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	7.4	4.0	2.2
2	かわらけ	9.2	5.9	2.2
3	かわらけ	10.3	5.5	3.0
4	かわらけ	13.4	8.5	3.5
5	手焙り	体部～脚部片　瓦質。体部外面に珠文・菊花文スタンプ。		
6	手焙り	鍔部片。瓦質か。側面・上面に菊花文スタンプ		
7	手焙り	口縁～体部片。5と同一個体か。		
8	手焙り	下体部片。瓦質。		
9	常滑・捏鉢	口縁部片。粗い長石粒を含む。		
10	常滑・捏鉢	底部片。胎土精良。二次焼成。		
11	瀬戸・鉢	底部片。灰釉。胎土やや粗い。		
12	女瓦	胎土精良、明灰色、縄目の叩きで成形。Ⅰ期。		
13	男瓦	胎土長石粒、砂多く含む。東海地方窯産。Ⅰ期。		
14	女瓦	胎土精良、明灰色、縄目の叩きで成形。Ⅰ期。		
15	女瓦	胎土精良、明灰色、表裏端部板ナデ調整。Ⅰ期。		
16	男瓦	胎土砂粒を含み、明灰色、表面黒色。Ⅱ期。		

図9　1区第2面出土遺物　（数字はcm）

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	7.8	5.6	2.2
2	白かわらけ	口縁部片。胎土精良。		
3	常滑・捏鉢	胎土、長石粒を含みしまり悪い。口縁部片。		
4	瀬戸・卸皿	底部～体部片。灰釉。胎土精良。		
5	鉄釘	残存長7.3cm。		

第2面溝覆土出土遺物

6	かわらけ	8.0	6.6	1.7
7	かわらけ	7.3	4.7	1.9
8	かわらけ	7.0	4.7	1.6
9	かわらけ	14.6	8.7	3.6
10	白かわらけ	底部片。手捏ね。丁寧な横ナデ。		
11	瀬戸・酒会壺・鉢	端部片。褐釉。線刻による描画、内面に二次焼成を受ける。		
12	瀬戸・鉢	口縁部片。灰釉。胎土緻密で二次焼成のため釉剥離。		
13	瀬戸・鉢	口縁部片。灰釉。胎土緻密で外面の釉は二次焼成のため剥離。		
14	瀬戸・広口壺	灰釉。胎土緻密で灰白色。		
15	女瓦	胎土精良。赤灰色。長石を含む離れ砂付着。東海地方産。Ⅰ期。		
ナシ	チャート	淡橙色。1.9×1.9×2.1cm。		

図10　1区第3面出土遺物　（数字はcm）

No.	器種	底径	底径	器高
1	かわらけ	7.4	3.9	2.1
2	かわらけ	7.5	5.1	2.1
3	かわらけ	7.6	4.8	2.1
4	かわらけ	7.8	4.8	2.4
5	かわらけ	11.9	7.4	2.8
6	かわらけ	11.5	7.6	3.2
7	かわらけ	12.3	7.6	3.2
8	瀬戸・卸皿	体部片。胎土は締まり悪く明黄灰色。		
9	盤	底部片。胎土は砂を含み緻密。二彩か。二次焼成で緑釉のみ残存。		
10	常滑・甕	口縁部片。胎土は長石粒を含み、締まり悪い。縁帯状の口縁。		
11	手焙り	体部片。胎土は砂を多く含み締まり悪い。体部に弱いナデ。		
12	白磁・口兀	底部片。底径6.0cm。胎土精良。		

第3面炭層出土遺物

13	かわらけ	6.9	4.0	2.4
		底部中央に径4㎜の孔。灯明皿。		
14	かわらけ	7.2	4.9	2.3
15	かわらけ	11.1	6.6	3.2
16	かわらけ	12.5	6.4	3.7
17	かわらけ	12.7	9.3	2.9燈明皿
18	かわらけ	13.1	8.4	3.4
19	かわらけ	13.3	7.1	3.3
20	かわらけ	13.8	8.2	3.7
21	常滑・捏鉢	口縁部片。胎土はわずかに長石粒を含むが精良。		
22	常滑・甕	口縁部片。胎土は細かい長石粒を含み、締まりやや悪い。		
23	常滑・甕	口縁部片。胎土は細かい長石粒を含み、締まりやや悪い。		
24	常滑・甕	口縁部片。胎土は砂粒を多く含み精良緻密。		
25	常滑・甕	口縁部片。胎土は細かい長石粒を含み、締まりやや悪い。		
26	盤	底部片。緑釉。二次焼成により淡く変色。胎土は砂を含み緻密。		
27	白磁・水注	体部片。水青色の釉。胎土精良。		
28	砥石	残存5.2×3.0×0.8cm。泥岩製。		

第3面土壙2出土遺物

29	かわらけ	7.1	4.4	2.0

第3面柱穴1出土遺物

30	女瓦	胎土精良。凸面に縄目の叩き。Ⅰ期。
31	女瓦	胎土精良。凸面に縄目の叩き。Ⅰ期。

図11　2区第2面まで出土遺物　（数字はcm）

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	6.8	4.1	2.1
2	かわらけ	7.3	4.5	2.1
3	かわらけ	7.7	5.7	1.8
4	かわらけ	6.9	4.5	1.9
5	かわらけ	7.4	4.3	2.2
6	かわらけ	7.8	4.9	2.3燈明皿
7	かわらけ	7.2	4.1	2.0
8	かわらけ	7.4	4.6	1.8
9	かわらけ	7.9	5.7	1.6燈明皿
10	かわらけ	7.4	4.2	2.1
11	かわらけ	7.4	4.5	1.8
12	かわらけ	7.7	4.7	2.3
13	かわらけ	7.2	4.5	2.1
14	かわらけ	7.6	4.0	2.1
15	かわらけ	8.3	5.0	1.7
16	かわらけ	7.3	4.0	2.1
17	かわらけ	12.3	7.7	2.9
18	かわらけ	14.3	8.1	3.4
19	瀬戸・皿	6.9	3.7	2.5
		灰釉。胎土は精良。		
20	常滑・鉢	口縁部。胎土は精良緻密。内面丁寧な横ナデ、口縁部にやや強い横ナデ。		
21	女瓦	胎土は精良。縄目叩き。Ⅰ期。		
22	女瓦	胎土精良。斜格子間に「大」字状の文様が入った叩き目。埼玉県水殿瓦窯産。Ⅱ期。		
23	瀬戸・行平鍋	戸手付根部片。胎土締まりやや悪い。黄灰色。灰釉、内面に釉の刷毛目。		
24	砥石	砂岩、粗砥。3.5×5.3×4.2cm。		
25	女瓦	胎土精良。縄目の叩き目。Ⅰ期。		

図12　2区第3面覆土出土遺物　（数字はcm）

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	7.3	5.3	1.7
2	かわらけ	7.3	5.1	1.7
3	かわらけ	7.3	5.2	1.9
4	かわらけ	7.3	5.2	1.7
5	かわらけ	7.3	5.6	1.4
6	かわらけ	7.4	4.9	1.7
7	かわらけ	7.4	5.2	1.8
8	かわらけ	7.3	4.3	2.1
9	かわらけ	7.3	4.8	2.1
10	かわらけ	7.5	5.6	1.6
11	かわらけ	7.9	6.3	1.9
12	かわらけ	7.6	4.6	2.0
13	かわらけ	7.6	4.6	1.9
14	かわらけ	7.6	4.6	2.6
15	かわらけ	7.8	4.5	2.1
16	かわらけ	7.7	5.4	1.6
17	かわらけ	13.3	7.7	3.5
18	かわらけ	13.1	8.1	3.7
19	かわらけ	13.5	7.6	3.6
20	かわらけ	13.6	8.5	3.6
21	かわらけ	13.9	6.0	3.6
22	常滑・捏鉢	口縁部片。胎土は緻密、灰色。		
23	常滑・捏鉢	口縁部片。胎土は長石粒含み締まりやや悪い。		
24	常滑・捏鉢	底部～体部片。胎土は長石粒多く含みやや粗い。		
25	常滑・捏鉢	口縁部片。胎土、素地はやや粗いが締まり良い。		
26	瀬戸・折縁鉢	口縁部片。灰釉。胎土精良。		
27	かわらけ	7.4	4.3	2.1燈明皿
28	かわらけ	7.8	4.9	2.4
29	手焙り	瓦質。胎土は砂を多く含み灰色。		
30	手焙り	瓦質。胎土は砂を多く含みやや粘質。焼成やや甘く、内外面磨き。		
31	硯・未製品	粘板岩。残存長9.8cm。巾7.2cm。厚み2.5cm。上下両面剥離。		

図13　2区第3面覆土出土遺物

No.	器種	
1	女瓦	長石多く含み締まり良い。東海地方産。離れ砂で長石多く付着。側面には自然釉付着。Ⅰ期。
2	女瓦	胎土は極精良。淡青灰色。縄目の叩き。Ⅰ期。
3	女瓦	胎土は精良。淡青灰色。縄目の叩き。Ⅰ期。
4	男瓦	砂粒、長石粒多く含み、粗いが締まり良い。東海地方産。凸面横ナデ成形。Ⅰ期。

図14　2区第3面・3面遺構出土遺物　（数字はcm）

第3面覆土出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	6.5	3.5	2.0
2	かわらけ	12.1	7.6	2.9
3	かわらけ	12.6	6.7	3.6

第3面落ち込み出土遺物

4	かわらけ	7.2	4.7	2.3燈明皿
5	かわらけ	7.4	4.7	2.1
6	かわらけ	7.6	4.9	1.8
7	山茶碗窯系捏鉢	拓器質。口縁部片。胎土は精良緻密。灰色。		
8	男瓦	長石粒を多く含み、締まり悪い。赤灰色。凸面板ナデ調整、裏面は布目。東海地方産。Ⅰ期。		
9	木製品	羽子板状を呈す。長さ22.2cm、最大幅6.3cm、厚さ0.4cm。		
10	かわらけ	12.2	7.8	3.2

第3面柱穴1出土遺物

11	手焙り	脚部片。胎土は砂粒、石灰質粒を含み粗い。外面磨き痕顕著。

第3面下炭層出土遺物

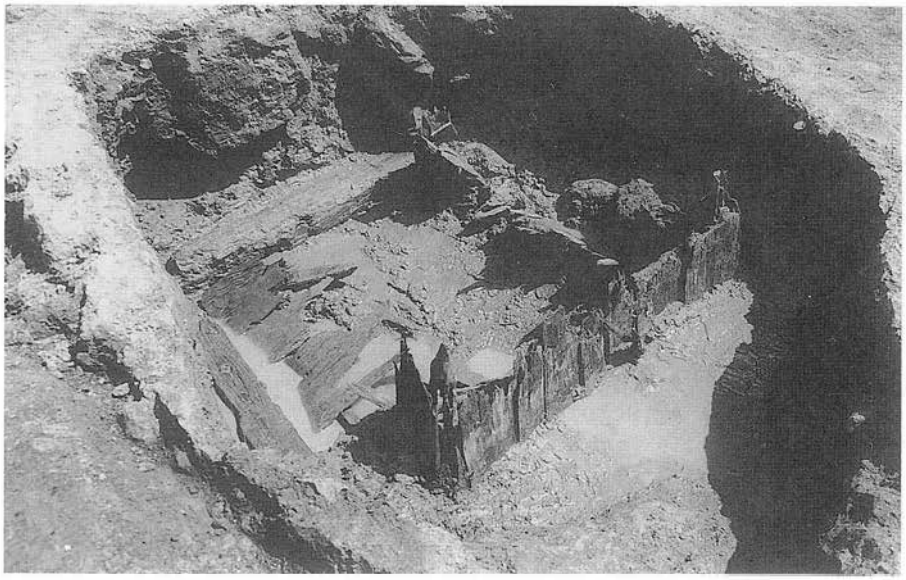
12	漆器・鉢	口縁直径23.4cm。高台径13.9cm。高さ6.6cm。全体に黒漆。朱漆で描画（内底面に亀甲花菱文・外面部2条の線を彫り込み上から6㎜巾の線・口縁部）

写　真　図　版

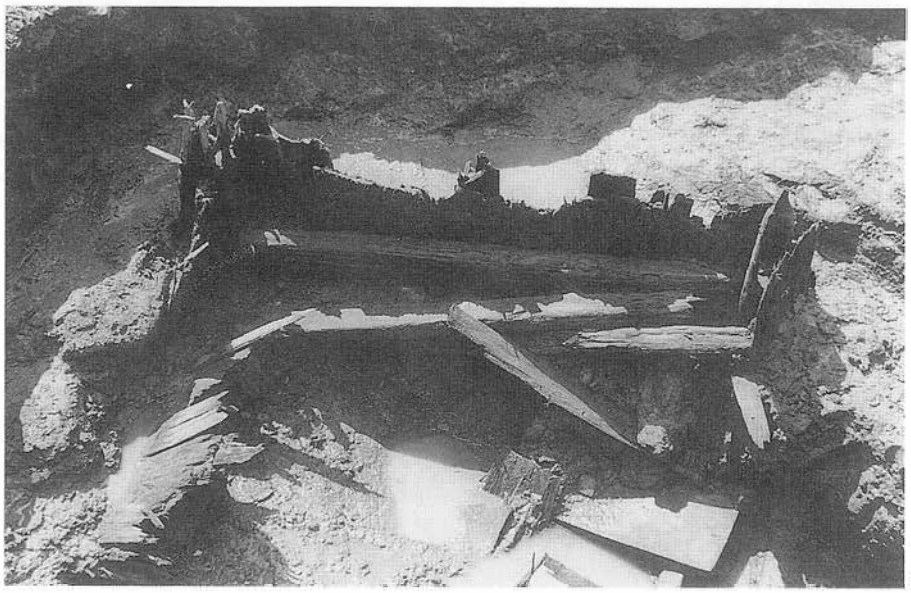
▲1.　1区第2面全景

▼2.　1区第2面溝1

図版2



◀1. 井戸枠検出状況

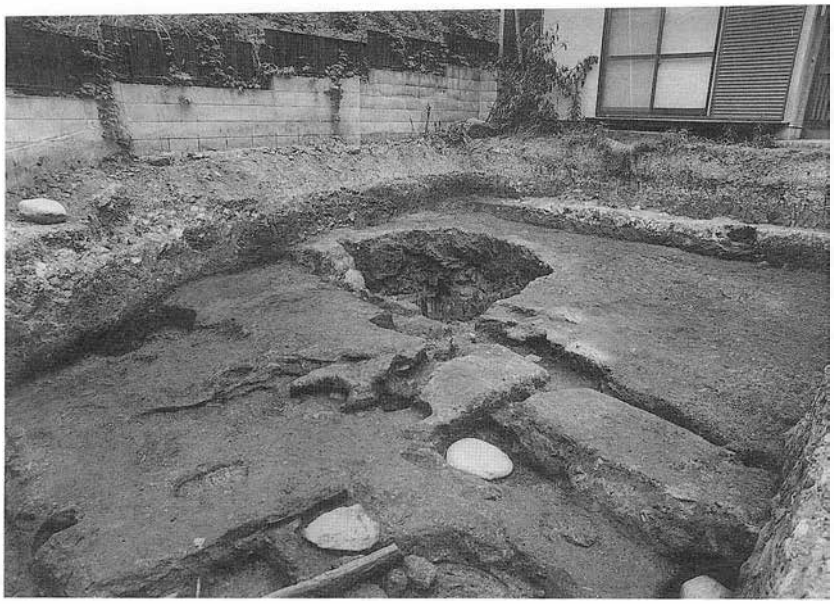


▶2. 井戸枠検出状況

◀3. 井戸枠基礎材検出状況

◀1. 1区第3面全景

▶2. 2区第3面全景

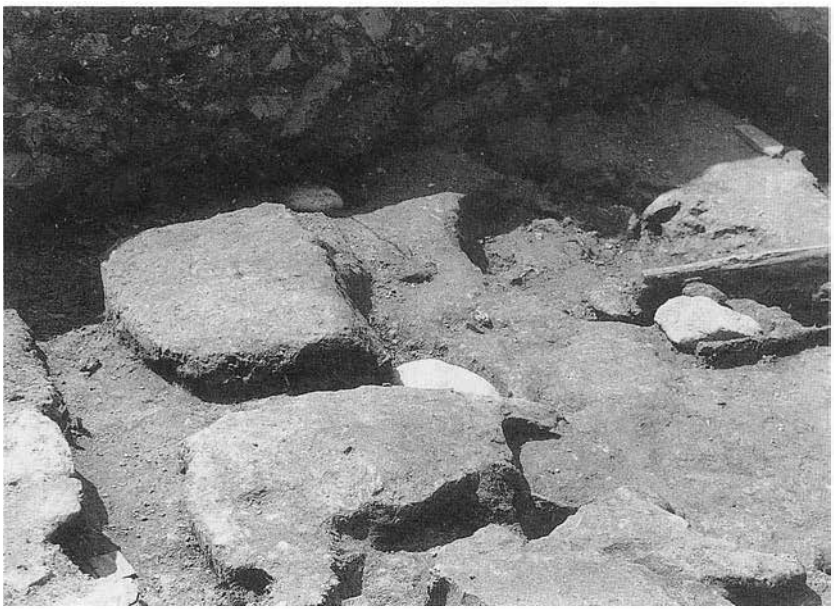


◀3. 1区第3面（西より）

図版4

◀1. 1区第3面礎石検出状況

▶2. 第3面礎石検出状況



◀3. 第3面礎石検出状況

図8－1

図8－2

図8－5

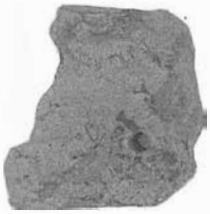


図8－7

図8－6

図8－10

図8－8

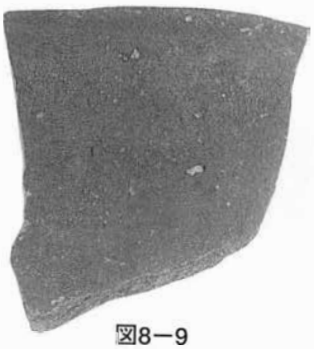


図8－9

図8－11

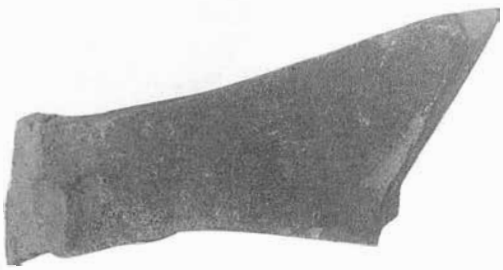


図8－12

図8－13

図8－14

図8－15

図8－16

1区第1面井戸覆土出土遺物

図版6

図9－1

図9－2

図9－3

図9－4

図9－5

図9－6

図9－7

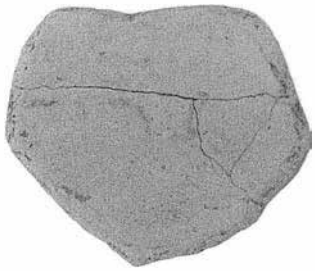


図9－8

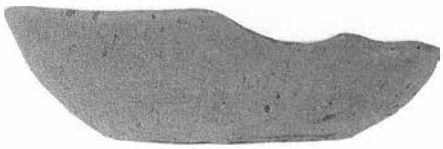


図9－9

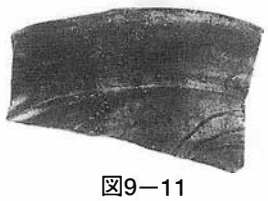


図9－11

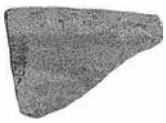


図9－12

図9－10

図9－13

図9－14

図9－15

1区第2面・第2面溝覆土出土遺物

図10－2

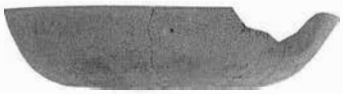


図10－5

図10－8

図10－9

図10－3

図10－6

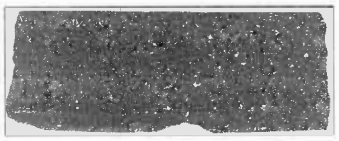


図10－10

図10－4

図10－7

図10－11

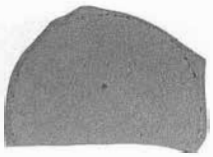


図10－12

図10－13

図10－14

図10－15

図10－16

図10－17

図10－18

図10－19

図10－20

図10－21

図10－22

図10－23

図10－24

図10－25

図10－26

図10－27

図10－28

図10－29

図10－30

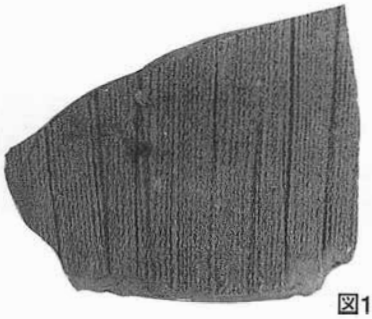


図10－31

図なし　チャート

1区第3面・炭層出土遺物

図版8

図11－1

図11－2

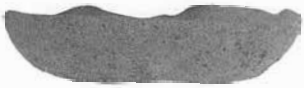


図11－3

図11－4

図11－5

図11－6

図11－7

図11－8

図11－9

図11－10

図11－11

図11－12

図11－13

図11－14

図11－15

図11－16

図11－17

図11－18

図11－19

図11－20

図11－21

図11－22

図11－25

図11－23

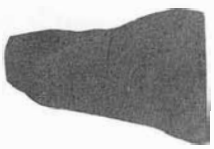


図11－24

2区第2面まで出土遺物

図12－1

図12－2

図12－3

図12－4

図12－5

図12－6

図12－7

図12－8

図12－9

図12－10

図12－11

図12－12

図12－13

図12－15

図12－16

図12－17

図12－18

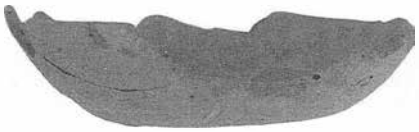


図12－20

図12－21

図12－22

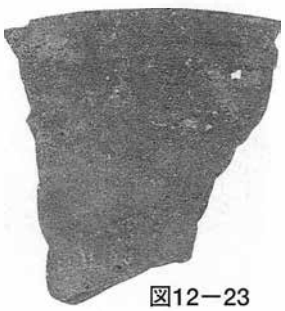


図12－23

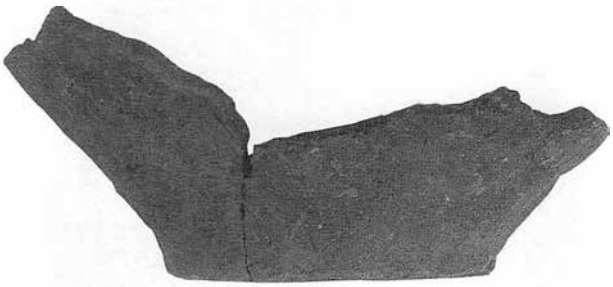


図12－24

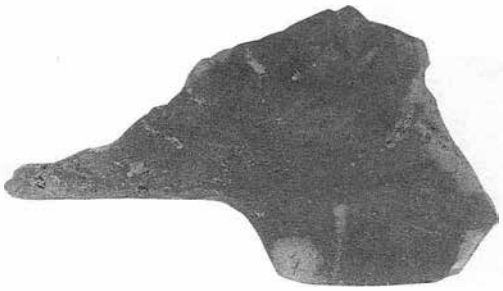


図12－29

図12－26

図12－25

図12－27

図12－28

図12－30

図12－31

2区第3面覆土出土遺物

図版10

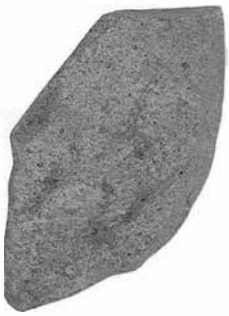


図13－1

図13－2

図13－3

図13－4

図14－1

図14－2

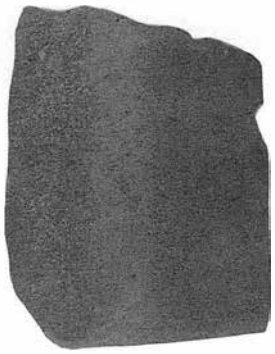
図14－3

図14－7

図14－4

図14－5

図14－6



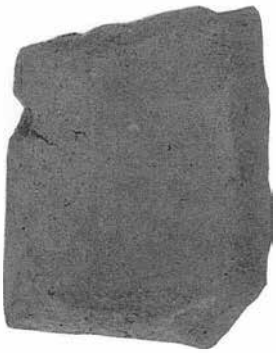


図14－8

図14－12

図14－9

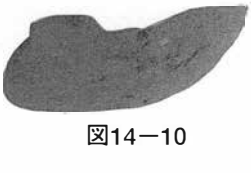
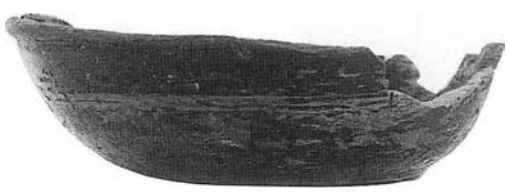


図14－10

図14－11



2区第3面覆土・第3面遺構出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書 名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	12
編 著 者 名	福田 誠、菊川 泉、神山晶子
編 集 機 関	鎌倉市教育委員会
所 在 地	鎌倉市御成町18番10
発 行 年 月 日	西暦1997年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ようふくじあと 永福寺跡	かながわけんかまくらしにかいどう 神奈川県鎌倉市二階堂字獅子舞603番１	14204	61	35度 19分 29秒	139度 34分 16秒	19950707 ～ 19950922	128	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永福寺跡	寺院跡	鎌倉時代 ～ 室町時代	• 井戸 • 柱穴 • 礎石 • 溝 • 土壙	• かわらけ • 陶磁器 • 漆器 • 瓦	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　13

平成８年度　発掘調査報告（第１分冊）

発 行 日　平成９年３月

編　　集
発　　行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　朝日オフセット印刷株式会社